

同情するならチャクラくれ

あしたま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

相談役の孫として産まれた「うたたねヨフネ」♂。才能はあるのにチャクラ量が少ない。持ち上げては落とされる。そんな事でへこたれてたまるか！現代の知識を駆使して強くなるべく、今日も全力で修行中。

そんな主人公が死者を減らす様に努力するお話。

設定やIFストーリーは別小説にしました。

022.	021.	第二部	020.	019.	018.	017.	016.	015.	014.	013.	012.	011.	010.	009.	008.	007.	006.	005.	004.	003.	002.	001.	第一部
家族	担当		幕間	悲劇	暗殺	団扇	修羅	王玉	救出	狛犬	結成	九尾	三尾	邂逅	襲撃	隊長	英雄	師匠	本戦	中忍	修行	卒業	
206	196		183	170	159	146	136	125	114	105	96	89	80	72	62	53	43	36	25	17	9	1	

目次

0 2 7.	0 2 6.	0 2 5.	0 2 4.	0 2 3.
確執	予選	蛇手	橋上	特訓
270	254	242	231	219

第一部

001. 卒業

ふとした瞬間、なんで俺はこんな事になってるんだろうと考えるのだが、いまだ答えは出ない。というよりこの先も出る事はないだろう。俺は有り得ない事を現在進行形で体験している。

いつも通りに起きてみれば赤ん坊となっており、うたたねヨフネ“と言う名前を付けられていた。転生したのだと気付くのに時間はそうかからなかった。普通に忍者が存在しているのだ気づかない方がおかしい。

転生を果たした世界は忍者というキーワードで真っ先に思い浮かんだ世界、NARUTOの世界だった。こんな死亡フラグが乱立する所に来ることになるなら毎週立ち読みで済ますんじゃなく、その都度単行本買うんだったと後悔している。最終巻まで出たら大人買いしようと考えていたから、もう少し待ってくれたら良かったのに。

一応、最終話までは読んでいるが、最終決戦のあたりは話がよく分からなくなつたので、何となくしか読んでいない。それに脇役なんて覚えていいのかも怪しい。

ただ生まれたのが、うちは一族ではないのは助かった。まだ普通にうちは一族がいる事から、まだ原作前という事はは分かっているが、あんな死亡時期がはつきりしている一族で生き残れる自信はない。そこまで俺の神経は太くないんだ。

しかしそうは上手くいかないのが俺なんだ。後から分かったが、うたたね一族というのも中々に厄介事に巻き込まれる一族だったのだ。自分も最初はうたたね？なんだ原作にも出てきていない一般モブか、と思っていた。うちの婆様が上役をやっているのを知るまでは。

「おお、これがお前の孫か。お前に似とるのに、可愛いではないか。とうとうお前も婆じやの！」

「誰がブスじゃ！婆じや！」

「おい、コハルやめろ。顔岩を掘り直さなきゃならん」

「ええい！ホムラ、止めてくれるな！」

火影に上役まで来て、なにやら騒いでいる時に気付かされた。婆様はお団子頭にかんざしを刺し、細い眼は鋭い眼光を放っていた。それは三代目火影・猿飛ヒルゼンの同期にして将来の相談役、うたたねコハル様だったのだ。

ダンゾウからは守ってもらえそうだが、確実に厄介ごとには巻き込まれるだろう。ちなみにうたたね一族は、木の葉の里では取り分け名門ってわけではないのだが、婆様の影響である程度知名度のある一族だ。ちなみに秘伝忍術も有している。

そんな隠れ里に生まれた者ならば、忍者となるのは宿命。両親は先の第二次忍界大戦で死去してしまっているが、生き残るために当然のように俺は忍になる道を歩もうとしていた。婆様もそれを望んだ、というよりも強制させられた。

そんなこんなで、ごく自然にアカデミーに入学したのだが、ここでようやく自分がいつ頃生まれたのかはつきりと把握できた。同級生にあのカカシやガイ、アスマといった主要メンバーがいたのだ。当初はあんな優秀な奴らでも、まだまだ子供だと思ってた俺は正直舐めていた。

アカデミーは基礎的な授業も行うが、あくまで目的は各生徒の適正を見るためのものなのだ。絶対的な集団学習ではなく、それぞれの進捗状況に合わせて、どんどんとレベルが上げられていく。数学だって、最終的には高校一年並みの知識が求められる。

それでもアカデミーの内容なら十分にこなせるが、あまり気は抜けない。ちなみにカカシは、予備知識無しで全科目で一番高いレベルにいる本当の天才だった。

それでもさすがに学業には余裕がある俺は、手裏剣術や体術に打ち込んだ。家に帰っても厳しくも厳しい、婆様との修行を行う。あれ？ 厳しいしかない。

婆様はあの綱手の怪力の師匠とのことで教えを請うにはもってこないのだが、修行で疲れた孫を背負うのが面倒だとおもいつきり放り投げたり、倒れていたら髪を片手で掴まれ無理やり立たされたりす

る。それ以来、髪は短く切ってやった。

まあ、そんな厳しい修行のおかげか、身体強化の基本であるチャクラコントロールは上手くなっていて、アカデミー在学中に木登りや水面歩行はできるようになっている。

その結果分かったのは、どうやら俺には忍としての才能があるらしい。珍しく婆様が褒めた時は思わずオエっと言ってしまい、めっちゃ殴られたが。

だが俺は才能があっても、自分がそれほどの高いポテンシャルは秘めていないことを知ってしまった。

インターネットでよく見ていたNARUTOのオリ主なら、永久万華鏡写輪眼を覚醒して原作改変だ！うちは滅亡回避だ！と無双するんだろうけど俺にはそんな能力は無い。

それに同級生には天才忍者のカカシがいる。いくら第二次忍界大戦中とはいえ通常9歳で卒業のところを僅か5歳で卒業し、大戦が終結した六歳の時には中忍になりやがった。

才能よりもその覚悟が凄いや、つてか怖いよ。父親のサクモさんが英雄とされているからか、早く自分も認められたいのだろう。

普通に考えればあの歳で中忍になって、最前線に出るなんて自殺行為としか思えない。忍界大戦の影響で五大国の統治が揺らいだ結果、国境付近では小国を巻き込んだの小競り合いが続いているのだ。

俺は二度目の人生、手の届く範囲の人は助けたいが、まずは焦らず死なないように鍛えてから卒業するつもりだ。

と考えていたら、あつという間にアカデミーへの入学から時が経ち九歳で卒業することになった。

で、うちの婆様と三代目が忍者学校の玄関前に迎えに来ていたのだが、他の保護者の方々を引き連れていた。しようがないのかもしれないが、なんか嫌だ。

「ヒルゼンよ、不思議なものじゃな」

「ん？一体なにがじゃ」

「アスマはお前の息子。ヨフネはわしの孫」

「……何が言いたい」

「お前さんがビワコとさっさどくつつかないから、こんなことになるんじゃないか。お互いずっと好きじゃったくせに。甲斐性なしめ、アスマが可哀想じゃ」

「ええい！お前は今だにそんな昔のことをぐちぐちと、孫が出来て老けたんじゃないか」

「やかましいわ。そんなことだとアスマまで婚期が遅れるぞ」

さらに二人はまた喧嘩をし始めた。しかも婆様怖いよ、預言者ですかあんだ。アスマも父親そっくりな道を歩みますよ。

「アスマ。大人になっても中身は簡単には変わらないんだな」

「本当に恥ずかしいよ、お互い苦労するな」

アスマとはアカデミーで仲良くなった。親同士が知り合いということもあり、ともに遊ぶ、のではなく修行させられてきたのだ。

「そろそろ止めるか、みんな動いていないしな」

祖父母の人達はまたかと笑っているが、父兄達は顔を引きつらせてオロオロしていた。気分を重くしながら三代目と婆様の元へ向かう。

「おい、馬鹿二人いつまでやってる。さっさと見苦しい喧嘩は止めろ。歳とると話だけじゃなくて喧嘩までも長くなるのか？他の親達が動けないだろうが」

「だーれーがー糞婆じゃボケエー！」

喧嘩が止まったのは良いけど今度は俺が掴まってしまった。捕まるじゃない、掴まるだ。現にいまアイアンクローで絶賛俺の頭蓋骨がメロディーを奏でてるう。

「すびばせん。っでかぞんなこといってない。ほんどぐるじいのゆずじでくらはい。がっ！」

120%で謝ったら解放してくれた。

「ヨフネにアスマ！班割り発表されてるから遊んでないで行くぞ」

スキンヘッドで少し老け顔の少年が駆け寄ってくる。

「イビキ。どう見たら遊んでるように見えるんだよ！虐待の真っ最中ですよ。タスケテ！」

「いつも人を待たせるなど言っておろう！さっさと行かんかい！」
「酷い！誰のせいだ！」

婆様から解放され今しがた俺に声を掛けてきた、森乃イビキを抜いて俺は逃げ出した。

走りついた掲示板では顔の大半を包帯で覆い、目の位置に真新しい額当てをしている男の子と二人の女の子がいた。

「遅いぞ、ヨフネ」

「ごめんごめん、トンボ、シズネ、紅。婆様に頭掴まれてた」

男の子の方は飛竹トンボという感知タイプの忍びだ。小さいころに病で失明したらしいのだから引き換えに感知能力がズバ抜けたように、まるで目が見えているかのように振る舞う。

二人の女の子の方は説明は要らないだろう。綱手様の一番弟子と未来のアスマの嫁だ。もげろアスマ。

元々はガイも同期だったのだが、ほぼ体術のみでカカシの後を追って飛び級していった。さすが珍獣。

「で、班編成はもう見た？」

「ちゃんとあんたが来るまで待ってたわよ」

「さすが紅！良い女！」

「ちよつと私はどうなんですか!？」

「黙れペチャパイ」

「あひい酷い」

いつも通りシズネをイジって落ち着く。いや可愛いんだよ？子供としてなら。むしろ9歳で色気を学びつつある紅が怖い。

「漫才はそのくらいにして、早く見ましよう？ドキドキが止まらない」
「トンボは相変わらず強面な風貌に反してビビリだな。なんだギャツブ萌え狙ってんのか？あれですか、年上キラーですか？でもさすがにギャツプありすぎて逆に引くから止めとけ」

「そこまで、言わなくても……」

あれだな思ってた以上にキャラ濃い世代だな。

「」「お前が言うな!!」「」

おつと心の声が漏れてしまったようだ。

「おい、ヨフネふざけてないで、いい加減見ようぜ」

アスマの一言でようやく、見る事になったが……あまりにもこれは酷くないですか？

「アスマ、紅、イビキが一緒か。担当上忍は秋道チョウザさんだな」

アスマの班はどうやらバランスの良い攻撃班になったようだ。アスマとチョウザさんの前衛に武器を使うイビキに紅の幻術で支援つて所か。

「俺、トンボ、シズネ、担当上忍は油女シビさん。って俺らの班はバランス悪くないっすか?!イジメだ!俺こき使われる!」

そうなのだ。なんだこれ。感知タイプのトンボ、医療忍者のシズネ、遠距離が得意な油女一族。感知できるとはいえ攻撃タイプの俺は盾役じゃん絶対。一応支援タイプの班編成なんだろうけどこれは酷い。主に俺が。

「あ、オビトとリンはカカシと一緒にみたい!しかも担当上忍は黄色い閃光のミナトさんだね」

シズネが原作チームを見つけたようだ。考えてみれば下忍2人プラス中忍と担当上忍という、新人が入るには変則的な組み合わせだな。

「ま、あいつも色々あったからな」

あいつの親父さんは木ノ葉の白い牙と恐れられた天才忍者はたけサクモさんなのだが、任務遂行よりも仲間の命を優先させたため、任務に失敗し里にも大きなダメージを与えてしまったのだ。

その結果、助けた仲間にもまで中傷され、心も体も疲れ果て自ら命を断ってしまったらしい。この出来事の反動からか、あれほどマイペースだった奴が今ではルールに固執する性格になってしまって、今では他の班員とあまり上手くいってないらしい。

「とりあえず、それぞれ集合場所に移動しよ。終わったらみんな団子屋さんに集合ね!」

同期の班編成を確認した後、団子大好き紅が提案してくる。あいつの団子で乾杯って訳のわからないノリ誰か止めさせてくんないかな。

でも特に断る理由もないので、一応集まることにして、それぞれ担

当上忍の元へ移動することになった。

「全員来たな。俺は油女シビ。好きな物は蟲、嫌いなのは無視されること。担当上忍は初めてだ、頼む。では、右から順に自己紹介をしてくれ」

集合場所に着いたが、座っている先生に気付かず待っていたのをまだ気にしているのかな？

「うたたねヨフネです。好きなのは睡眠、嫌いなのは睡眠の邪魔をするやつ。将来の夢は最高の嫁さんを見つけること！以上」

「あ、えつと飛竹トンボです。好きなのは友達、嫌いなのは感知できないもの。将来の目標は目が見えなくても一流の忍になれるって事を証明することです！」

「シズネです。趣味は綱手様の世話で、好きなモノは静かな日。あと、将来の夢は綱手様の様な医療忍者になりたいです。よろしくお願いします！」

俺たちの自己紹介の間も全く表情を変えないよ、この先生。どうも思った以上の真面目さんらしい。あれだシノの性格は遺伝だよ。

「始めに言っておく、戦争は終わっていない。何故なら今だに情勢は不安だからだ。よって下忍だからといって、お前らを甘えさせるようなことはないと思え」

先生の言葉でトンボとシズネの顔が強張る。

「お前らはすでに忍だ。よって、俺はお前らを一人の忍として扱う。ひよつとすると聞いている者もいるかもしれないが、下忍になるためには多くの場合サバイバル演習をして、それに合格する必要がある。……平和ならな。だがこのご時世、残念ながら人手も足りないため、行わない。普段の任務でチームワークを磨くことにする」

シズネは綱手様から、トンボも誰かから聞いていたのだろう、すんなり下忍になれると分かって俺たちは笑顔で顔を見合わせた。

「その代わり、今から任務を行う」

この人まぢか。シズネが悲鳴のような声を上げる。

「い、今からですか？」

「そうだ街中での任務だ。忍具は使わん。と言うよりこんな任務では使うな。行くぞ」

そう言つて、一人歩き出す先生。残された俺たちは顔を見合わせた。

「あひい、紅に怒られる」

「初任務より、紅の心配なんだね」

トンボが呆れたようにシズネに尋ねていた。

「まあ、なんだかんだ言つてもやることは変わらないでしょ。それより早く追いかけないと、あの先生かなり影薄いから見つけられなくなるよ」

「ヨフネ君、それ絶対褒めてないよね？」

「多分、隠遁の達人なんだと思いますよ！」

「シズネちゃん、それ遠回しに認めてるよね？それより本当に早くしないと！ほら、さっさと行くぞ」

トンボが俺ら二人を急かして、先生を慌てて追いかけた。任務内容は定番の猫探し。小一時間で簡単に片がついたが休む間も無く二匹目の猫探し。結局三匹目の猫を捕まえ、解放されたのは日が沈む直前だった。

この国の人達、どんだけ猫逃がしてんだよ。つてかそもそも放し飼いにする動物だろうか。

「任務も片付いたし、今日はこれで解散とする。俺たちは索敵、斥候を目的としたチームだ、今後もこういった任務をこなしていく。明日は九時に火影邸前に集合だ。それでは解散」

「はいー」

俺の忍者としての人生が始まった。

俺達の班は担当上忍のシビ先生の考えで、探査系の任務や行商人の警護など班の特性を生かした任務を中心に行っている。また近場の任務を中心に数をこなしているから、充分に修行の時間も取れるように取り計らってくれているようだ。

修行内容は個人や家の方針に従って行われているが、その異様なまでの気遣いに婆様が何か言ったのではないだろうかと不安になる。

そもそもアカデミーでは座学が中心であり、戦闘に関しては体術、下級忍術、手裏剣術が中心でチャクラのコントロール等についてはほとんど習わない。あくまで基礎教養と適正を測る為の場所ということだろう。あとは各家庭や道場で修行を行うのが普通だ。

俺もご多分に漏れず婆様からしごかれた。一応、我が家にも秘伝忍術があるためだ。じゃないと誰があんな婆様とするか！

我が家の秘伝忍術、それは狐との契約だ。これは口寄せとはまた少し違う形で狐と契約する。いわゆる狐憑きの家系なのだ。どちらかというと油女一族と似ているかもしれない。だが、その事を婆様に言ったらシバかれた。

「それじゃ、うちって油女一族に近いの？」

「今度あんな一族と一緒にしたらクロス！」

「やめて！鼻から何か変な汗出ちゃう。もう言いませんから、ゆるむてくらはいい」

そりやもう憤怒を絵に描いたような婆様が出来たのでコレは禁句となった。でも差別は良くないと思うんです。

ちなみに契約は単純で遺体が契約した狐に喰われるというものである。忍の世界では死体の処分が確実に行われ、情報漏洩を防ぐことも出来るためノースクといっても過言では無いのだが、見返りとして神通力が得られるのだ。

だが俺の悲劇はこの契約から始まった。

五歳になったときに契約するのだが、契約する狐の格は個人の潜在チャクラ量によって決まるらしい。そして契約した狐の格によって神通力の効力が決まるのだが……

「く、管狐じゃと?!」

「婆様だめなの?」

目の前でチヨコンとお座りしている体長20cmほどのクツソ可愛い狐にテンションMAXな俺だったのだが、どうにも婆様の反応が思わしくない。

「ヨフネや、わしは白狐といわれる妖狐と契約しておるのじゃ」

「うん。あの庭でよく寝てる白い狐でしょ。そういえば強いのか?」

一応聞いては見るが、名前からして強いフラグがはためいています。まさか……

「妖狐には階級があり強い順に九尾の天狐、空狐、気狐、野狐とあるのじゃ」

「婆様の白狐は?」

「空狐に当たるかの。じゃがお主の管狐が一番下の野狐の中でもさらに一番下じゃ。いや、一族の中では契約にすら至ることの出来ない者もおつたと聞く。捨てるなんてことはない。だからそんな泣きそうな目をするではない!」

記憶にある中で婆様が一番優しかったのはこの瞬間だと思う。まあ当時の俺はそれどころではなかった。

(えっ! せっかく転生特典といっても良いような能力が手に入りそうと思つたらこの仕打ち!? しかも将来的にもチャクラ量が少ないことまで判明してしまつとるやんけ! 人生ハードモード過ぎんだろ。もうやだ泣きたい)

「この際だから説明してやろう。よいかチャクラ量とはな、生まれて来た時からおおよそ決まつておる、これをわしら一族は潜在チャクラ量と呼んでおる」

まあ、それは何となく分かっていた。千手一族なんかは生まれつき多かつたはずだ。

「そもそも、チャクラとは人体を作っている膨大な数の細胞という物

の一つ一つから取り出す「身体エネルギー」と、修業や経験によって蓄積された「精神エネルギー」の二つをバランス良く練る事で出来るエネルギーじゃ。つまり身体の成長や修業をすることで増やすことはできる」

「おお、ならひたすら修業をすれば俺もナルト並みのチャクラが手に入るのか?!

「だがーそれは主に修業や経験によって増える「精神エネルギー」だけじゃ。「身体エネルギー」は身体の成長の範囲内ではか増えん」

「なら、毎日煮干し食って牛乳飲んで、睡眠をたっぷりとって大きくなれば……」

「そこで出てくるのが潜在チャクラ量じゃ。細胞の一つ一つが持つチャクラの量自体はだいたい生まれつき決まっておる。それが潜在チャクラ量だ。つまりは大きく成長した所で潜在チャクラ量が少なければ、やはりチャクラは少ない」

「えっ? フォローの流れだったじゃん。完全にとどめをさされたんですけど。」

「ただチャクラのコントロールや練り方を訓練すれば、多少消費は抑えられる。結局は修業あるのみじゃ」

「とまあそんなわけで俺は潜在チャクラ量はギリギリ中忍クラス程度らしく一番格の低い管狐としか契約出来なかった。野狐より上になると言葉を話せるようだが管狐はもうペット感覚です。あ、狐の名前はコン平にしました。」

「だが悲劇は終わらない。翌日、コン平と契約したことで出来るようになるという神通力の確認をしたのだ。まずは婆様が岩と言って構わないような庭石を持ち上げた。」

「とまあ、これが念力じゃ。これを使用することで毒が塗ってある物など直接手で触れない物も動かすことが出来る。契約した妖狐に関わらず共通の能力じゃな。契約した妖狐の格により力の強さが異なるがな」

「凄いーそれじゃ僕もやってみる!」

「意気揚々と岩の前に立ち使ってみる。」

……岩の周りの小石が持ち上がりました。

「……………」

検証の結果、念力の範囲は身体の周り1m、何度やっても念力の力は手首の力程度。これでチャンネル取るのに困らないね！……ちよつと泣いた。

「ま、まだじゃ。次は固有能力、妖狐の種族によって異なる能力があるんじゃない！」

「コン平！何かないのか？頼むって！」

「コ、コン！」

「お、何かあるんだな？教えくれ」

言葉が話せないのでコン平の渾身のボディランゲージによるメッセージを解読した結果、なんと指を指した方向に火が出せることが判明した。目に見える範囲なら自由に火を出せるのだ！凄いじゃん！と感心したのも束の間、何度やっても出せるのはマッチの火程度だった、距離に関係なく。

ちなみに白狐と契約した婆様は透視眼と物体をも透過して取り出せる程の念力を使えるらしい。……めっちゃ不公平です。ただ、婆様が油女一族が苦手なのは、うっかり身体の中を見てしまい、彼らの身体の中が蟲だらけで吐いてしまったかららしい。

チャクラは必要としないので、メリットはメリットなんだが使い方がすごく難しい。

ただ能力は使えないかもしれないが、やっぱりコン平は出来る子だった。普段は腰に下げた30cm程の竹筒にコン平は住んでいるのだが、なんと75匹まで分裂出来るため広範囲での索敵が可能なのだ！

ただし分裂した分だけサイズが小さくなるため最大まで分裂すると人差し指程度のサイズになってしまうのだが。ちなみに白狐様は分裂できないけどお空を飛べます。

俺はこの力があるからこそ索敵特化の班編成に組み込まれたのだった。

本当は使役する狐についての修行をするはずだったのだが、その期間が大幅に短縮されたため、アカデミー時代は木登りや水面歩行といったチャクラコントロールを中心に行っていた。

またチャクラコントロールの延長として婆様から身体強化についても教わった。これは本来、体の外に出すことで効果があるチャクラを体内に留めることで肉体を活性させ、さらには必要な箇所チャクラを集める事で怪力が出るのだ。八門遁甲程ではないが通常では考えられない程の力を出せる。

「どおりで馬鹿力なわけだ！」

「そうじゃよ。ほれこの通り、わしの様なれいでいーでも敵の頭を持って持ち上げることが出来るのです」

「敵じゃないから。あんたの可愛い可愛い孫だから！ごめんなさい！本当にごめんなさい！」

ちなみに綱手様にこの術を教えたのはうちの婆様らしい。どおりで二人の折り合いが悪いわけだよ。

ちなみにこの身体強化は体外に放出するわけではない為、普通の術と比較するとチャクラの消費が少なかった。実に俺向きな術だな。

アカデミーの残り一年はこのチャクラの体内移動に特化して行った。今では素手で岩を割ることが出来るようになっていた。

下忍になってからも婆様から修行をつけられたのだが、とうとう性質変化について習うようになった。初めて感応紙を使う時のドキドキ感たまらんね！ちなみにあの有名な水見式をやってみたけど反応はなかった。少しは期待してたのに。

感応紙にチャクラを流した瞬間、皺がより、さらに紙が避けたのでもしや血継限界か！とテンション上がって思わず婆様に話したらバカにされ否定された。一生の不覚。

ただ単に得意な属性が雷と風の二つあるだけだった。血継限界なら五大性質以外の反応が出るらしい。修行次第では、異なる性質の術も扱うことができるらしく、上忍クラスになると二つか三つの性質変化を習得しているのが通例であり、三代目火影たる猿飛ヒルゼンは5

つの性質変化を使うことができるらしい。

「性質変化はイメージ力じゃ。それが理屈っぽい奴より馬鹿な奴の方が習得は早い理由とワシは思つとる。人に言われたイメージのまま使うことも出来るが理屈っぽい奴ほど、自分でイメージを固めた方がチャクラの変換効率が良いぞ。というわけでお前は自分で考えろ」

珍しく婆様の説明に納得してしまったので、まずはイメージを固めることにした。

チャクラを多めに持っていれば気になる程のロスでは無いらしいが、チャクラ量には不安しかない俺はこの方法をとることにした。

雷のイメージはチャクラをバッテリーに見立ててチャクラと反応する事で電気として発現するといった具合だ。

風については自分の経絡系から風が吹き出るイメージで、ホースのように口を絞れば勢いが増すといった具合だ。

雷の性質変化の修行は新聞の折り込みチラシにチャクラを込めて皺くちやに出来るように頑張った。おかげで思春期の男子の部屋のごとくゴミ箱が溢れかえってしまったが。

「まあ、なんじゃ綺麗に洗えよ」

「うっせーよ！まだ精通すら来てないわボケ！」

身体強化については相性も良い為もつと鍛えたかった。効率よく術を使うには身体の知識が必要だと思つて、シズネに綱手様の予定を聞いて暇を見つけては修行をつけてもらっているのだが、いやもう本当に後悔してる。

最初はあるの婆様の姉弟子だから、綱手様とは仲良く出来そうとか思つてました。俺のバカ。

大地が割れるほどの攻撃を紙一重で避けながら怪我したら自分で治せてなんだよ。身体の構造教えてくれるだけなら本でもいいじゃん。

「ハッハッハーあの小煩い婆さん虐められた恨みはらさしておくべきか！」

「えっ！ちよ！た、タンマです！想像してたんと違う！」

おかげで体術のスキルは上がったし、おまけで応急処置程度だが掌仙術まで使えるようになったのは嬉しい誤算。だけど精神疲労を考えるとマイナスです。

さらにはチャクラを使用しない戦闘ということでも木の葉流剣術も習った。これに関してはかなり筋が良いらしく、メキメキと実力をつけることが出来ていた。しかしそうは上手くいかないのが俺なんだ。

身体強化を戦闘で使えるレベルまで鍛えたとき、強化しながら剣術を使ったら刀がもたないことが判明したのだ。そりゃそうだ、素手で岩を砕くような奴が刀使えば当然だ、少し考えればわかりそうなのに。さらに刀を持つより身体強化した方が強いという有様。それでも剣術は続けたけどね！なんかやめるのは悔しいから。

あとせつかくなので木の葉の三忍、自来也様からも教えを受けている。え？大蛇丸？あいつは無理！近づくとか無理ですから！なんて空気を常に出してるんですか。よくあれで慕う人がいるよね。近寄ったことすらない。目を付けられるのも嫌だしね。

しかもあの人はパワータイプ。大技までを器用に牽制に使って、フィニッシュもやつぱり大技。んな効率悪い戦いなんて出来ねーよ。その反面、自来也様は意外とテクニクタイプで封印術や結界術、幻術まで満遍なく効率良く使いこなしている。それでもチャクラ量は馬鹿みたいに多くて力任せな部分もあるから戦闘は参考にならない。なので封印術と結界術を中心に教えて貰っている。

で、やつぱり一番上がったのは隠遁術。覗きに同行させるのが通常運転とか普通に頭は大丈夫か？とか思いながらもこの人が一番まともだったりするのが木の葉の三忍。

あとできるなら使いたかった口寄せの術に関しては管狐のせいで使えない事が判明。他との契約など許してくれないのだ。コン平が嫉妬するとか可愛い過ぎる。

そんなこんなで使えるのに実際は使えないって術が増える毎日で

す。
やっぺらんない。

任務と修行で充実した日々を過ごしていると、あつと言う間に半年が経ち中忍試験の時期となった。中忍試験とは一年に二回行われる昇格試験であり、明確な合格基準がある訳では無いため合格者が出ない年もあるらしい。

今回は原作のように他里と合同で試験を行うのではなく、木の葉だけでの単独開催らしい。戦争が終わったとはいえ、まだまだ何かと騒がしい今の情勢下では、他里に情報を与えるのは得策ではないとどの里も考えたのだろう。

シビ先生は俺達を受かるとはあまり考えてはいないようだが、経験の為にと推薦をしてくれたようだ。

試験日の当日、シビ先生から貰っていた推薦状を提出しにシズネ、トンボとともにアカデミーに向かった。提出場所は三階会議室のため、ひたすら上を目指し歩いていく。

途中、何人かが立ち止まっていたがそれを無視して、ただ黙って上にかかる階段に向かって進む。

「あ、あのヨフネ。何でそっちに行こうとしてるの？」

「それはここが二階だからだよ、シズネ。中忍試験の受付は三階だからね」

「え、ここが三階だよ」

「シズネちゃん、違うよ。ここに止まっている人達は幻術にかかっているんだよ。すでに中忍試験は始まっているみたい。少しの油断もしないようにね」

どうやらトンボも気づいていたようで、シズネにきちんと説明してあげている。このくらいの幻術すら見抜けない奴は中忍になる資格は無い、やはり原作どおり試験官達はそう考えているのだろう。

まあ確かにそれは正しい。階段を進む度になる鈴の音、踊り場にい

たおそらくは変化したであろう中忍。ヒントは出してくれているのだ。むしろシズネは気づかなかったのか。中忍試験大丈夫か？

「おっと、待ちな」

「中忍試験を受けるつもりかい？辞めた方が良いよ、ケツの青い僕達」
「おっと勘違いするなよ、これは俺達の優しさだ。中忍試験は難関だぜ」

「この試験を受験したばかりに忍を辞めた者、再起不能になった者を俺達は何度も目にしている」

「それに中忍といえば部隊の隊長となる事もある。任務の失敗や部下の死亡、それらは全て隊長の責任なんだ」

進もうとした俺達の前に二人の男達が現れて道を塞ぎ、高説を述べてきた。しかしあまりにもみえみえな脅しに思わず笑いそうになってしまった。

「どうやらこの二人は脅し役に選ばれたようだ。こんなことさせられるなんて可哀想すぎる。自分が中忍になっても絶対試験官なんてやらないと心に決めた。」

「脅し役、ご苦労さまです」

「あ、あの頑張って下さい」

「大変ですね、綱手様もあれは罰ゲームだって言っていました」

今度はシズネも気づいていたのだろう。声をかけていた。肩を落とした試験官二人を尻目に俺達は三階の一次試験会場の教室に進んだ。

教室に着くとそこには既に多くの忍が待機していた。その中には同期のアスマ達の班やオビトやリン、そしてガイ達の班の姿もあった。

アスマもこっちに気がついて軽く手を挙げてきた。ただどうやらみんな緊張しているようで、特に会話することなく俺達は教室の後ろの席に座る。

「みんなも受けるみたいだね、中忍試験」

「全員合格できれば良いけど……そうは行かないよね」

「何年も受けてる人も多いらしいぞー。まあ俺らなら何とかなるでしょ」

原作の中忍試験を思い出す限り、この班なら二次試験までは余裕だろうと思う。索敵特化の俺らには有利な内容だった、原作そのままなら。

毎年試験官は変わるようだし、体術中心の試験が出ると負けるかもしれない。

と考えていると、なんの脈絡もなくボンツと爆発音が上がり、煙幕が教室内に発生した。

「これから中忍選抜第一の試験を始める。志願書を順に提出して、代わりに座席番号の札を受け取って指定通りの席に着け。その後、筆記試験の用紙を配る」

「……ペツ、ペーパーテストオオオオオオ!？」

ガイの悲鳴が木霊した。

一次試験はなんと純粋なペーパーテストだった。出題内容は各種任務を行うに当たって必要最低限の知識についてで、原作のように裏の裏を読むような変則的なものではなかった。その分、必要な実力が試されるが。

筆記テストの結果、合格したのは四十八名。ちなみに俺達の班は全員合格。同期のメンバーはアスマに紅、リンだけだった。やはりガイとオビトはダメだったようだ。

一次試験を落ちた者はその場で解散となり、俺達合格者が次に連れてこられた演習場は適度に身を隠すことのできそうな林だった。第二試験官は全員が揃ったのを確認して説明を始めた。

「まず第二の試験を始める前におまえ達にこれを配っておく」

試験官が懐から紙の束を取り出す。

「？」

「これは同意書だ。次に進みたい者はこれにサインをしてもらう。ここから先は死人も出るからそれについて同意をとる」

ニコリともせずそう宣言した試験官。周りを見ると一気に尋常じゃない程の緊張感が漂う。しかし試験官はそんなことはお構いなしに説明を続ける。

「では、第二の試験の説明をする。その説明後にこの同意書にサインするように。サインを済ましたらあそこの小屋に行って提出しろ」

ああ、これは原作の様なサバイバルだな。でも班はバラバラになっているし、どうするのかと思っていると巻物を広げ試験官が説明を始めた。この演習場の地図だ。

「第二試験ではサバイバルに挑んで貰う。演習場は円状に囲まれてて一面が雑木林となっている。お前達は鍵のかかった六個のゲート入口からスタートしてもらおう。広さは直径約1km。この狭く限られた範囲内であるサバイバルプログラムをこなしてもらおう。その内容は各々の忍具や忍術を駆使した、なんでもアリの巻物争奪戦だ！」

「巻物？」

「そうだ。ここには四十八名が存在する。その一人ずつに巻物を渡す」

「それじゃもしかして、こんな狭い範囲で一齐にバトルロワイヤルをやれつてのかわ。合格者は一人なのか?!」

そこまで説明があつて若い男の忍が叫んだ。

いや流石にそれはねーよと、俺は心の中でつつこむ。四十八個もの巻物運びながら戦うとか不可能だよ。つてか入口六個しかないんだから普通に考えてそれはないでしょ。

「まあそう焦るな、最後まで説明を聞け。この試験は合格者を一組六名に分けて各組で制限時間三時間の争奪戦を行う。一番早くにどのゲート入口でも構わないから三つの巻物を持って来た一名だけが合格となる。各組の勝者一名、計八名には次の三次予選に進んでもらう」

そう言うと“人”と書かれた巻物を受験生に見えるように掲げる。

「つまり、四十名は確実に落ちるってことか」

俺の言葉に試験官は深く頷き、人差し指を立てて言葉を進める。
「続いて、失格条件について話す。まず1つ目、一番に巻物を持って来た者以外」

続いて中指を立てる。

「2つ目、制限時間を過ぎても誰一人として巻物を持って来れなかった場合、全員を不合格とする！」

さらに薬指を立てる。

「そして、最後に。巻物の中身は入口が出るまで決して見ぬこと！」

「途中で見たらどうなるんですか？」

「見たらわかるさ」

「？」

「中忍ともなれば、極秘文書を扱うことも出てくる。信頼性を見るためだ」

試験官はトンボの質問を上手くはぐらかす。

「説明は以上！巻物は同意書と引き換えで渡す。その後、降り分けられた演習場の入口まで試験官が案内をする。二時になったら一斉にスタートだ！最後にアドバイスを一言」

試験官が一旦、言葉を止める。

「死ぬな！」

その言葉で受験者一同の顔付きが再度引き締まる。

「ではサインした者から順次、同意書と巻物の交換を行え」

その言葉をきっかけに交換した受験者達が割り振られていく。

俺も受け取りゲートで待っていると、目の前の試験官が時計を確認しながら鍵を外した。

「これより中忍選抜第二の試験……開始！」

俺は開門と同時に跳び込んで行った。

結果から言うとな楽勝でした。管狐の相棒、コン平の能力はこの試験では反則すぎる。実はスタート前に他の受験者をコン平の分身に尾行させたのだ。

コン平は200m圏内に分身が近づくと分身がどこにいるのか把握出来る。そして近づいたことが分かると分身を解除するのだ。さらにだ、影分身と同じように分身の経験はオリジナルへと還元されるのだ。

つまりどこにいるのか、どんなトラップを仕掛けているのかそんな事が丸わかりなのだ！正直、試験内容聞いた瞬間勝ったと思ったね。索敵を元に怪力による一撃必殺で奇襲をかけることで約三十分でクリアした。索敵能力に秀でた人がいなかったのも助かった。

同期で残ったのは俺にアスマ、そして意外なことに紅だった。すでに幻術の才能を開花させたらしい紅にとつてサバイバル形式で行われた二次試験は相性が良かったのだろう。満身創痍になりながらも通過していた。

合格者が全員揃ったのを見計らって試験官が声をかける。

「まずは第二の試験、通過おめでとう」

最初に二次試験の説明を受けた演習場前の広場にはシビ先生などの担当上忍、それに今回の中忍試験の運営をしている試験官達。それらを率いるように中央に三代目火影の猿飛ヒルゼンがいた。

「それでは、これから火影様より『第三の試験』の説明がある。各自心して聞くように！では、火影様お願いします」

「うむ」

三代目は進行していた二次試験官に一つ頷くと重々しく言葉を連ねる。

「ではこれより第三の試験、本戦の説明を行う」

「本戦？」

「そうじゃ、ここまではあくまでも予選。第三の試験こそが本戦なのだ。本戦には周辺諸国の大名方などたくさんゲストがこられる。そうだからだと試合をするわけにもいかないので、二次試験までは八名以下にまで絞るための予選じゃったのだ」

ちなみに、ここ最近の中忍試験は戦時下で試験を受けられていなかった者を引き上げる意図があるようで、地力の差が出るような試験が多かったと説明された。

「それでは本戦の説明をするぞ。本戦は闘技場内でトーナメント方式での一対一となる。試合結果よりも大名方や儂、上忍達が試合内容を見て中忍に推薦できるか確認する。勝ち上がるほどアピールのチャンスが増えると考えよ」

さらには一ヶ月後の本戦を控えた面々は任務を免除され、それぞれ修行漬け出来るようにしてくれるらしい。おいそれと下手な試合を大名達に見せるなどということだろう。

「試合の組み合わせに関しては明日発表する。これは一次試験と二次試験の内容を加味して優秀な者が上がりやすいように組むつもりだ。それでは各々研鑽を怠らず精進するように……解散！」

翌日、組み合わせを確認するとアスマか紅と当たるのは決勝となっていた。

何故かアスマからはアカデミーの頃からライバル視されており、二次試験終了後に決勝で会おう！と宣言されてしまった。

ちなみにシズネとトンボ、イビキは臨時でシビ先生の下、班を組んで任務を行うようだ。

原作組では不知火ゲンマや並足ライドウ、犬塚ツメといった面々が本戦へと駒を進めていた。ちなみに一回戦で対戦することになったのは犬塚ツメさんだ。

正直俺は中・遠距離戦で戦う手段が少ない。二次試験では奇襲をかけることで切り抜けることができたが、見通しの良い場所での一対一ではそれは通用しない。

さらには勝ち上がった後も二回戦はおそらく相手は日向一族となるだろう。近接戦闘だと勝てる気がしない。何としてでもこの期間で中・遠距離の忍術を習得しないと。

風や雷の性質を武器に纏わすだけなら出来るがそのクナイを投げたところで決め手とはなりにくい。しかし威力が欲しいからと千鳥の様にチャクラを垂れ流しにしないといけない術は利用するつもりがない。というよりチャクラ量の少ない俺には利用出来るかどうか

も分からない。

転生してきて他者より有利なのは知識だ。雷遁で電気も扱えるので、何とか科学の知識を生かしたい。チャクラ消費は最小限、もしくは瞬間的なものにして威力のある術………あ、あれならいけるかも！

ようやく雷遁への性質変化もスムーズに行えるようになってきたので、俺は以前から構想を練っていた術を完成させる為、川へと向かった。科学の知識が必要なこの術は人に相談出来ないから一人で修行するしかない。

形態変化からの性質変化はイメージがしっかりしているためか、わりとすんなりと上手くいった。これからは実際に試してみても、あとは長く根気の必要な調整作業を行わないといけない。

一人で過ごす一ヶ月は長い。

一ヶ月という長いぼっち生活が過ぎ、ついに本戦の日となった。俺は何とか製作が間に合った道具を持って準備万端で会場へと向かった。会場までの道では屋台が準備中であと少しすれば、さながら縁日のような光景が広がるだろう。

「まったく人を見世物にしやがって」

思わず道中で毒づいてしまう。

こんな人の見てる前で堂々と術を見せなきゃいけないなんて。でも使わないと日向には勝てないだろうし……

そんな思考に囚われている間に会場に着いてしまった。会場は円形で高い塀の上に観客席、その更に上にお偉方の席がある造りとなっている。

既に会場にはシズネやトンボといった同期達の他にも、シビ先生達の担当上忍組も応援に来てくれている。

「ヨフネ！久しぶりね、まったく一人で籠って修行なんて水臭いじゃない」

「そうだよ、ヨフネ君。アスマくん達の修行には僕らも任務の合間に手伝ったっていうのに」

シズネ、トンボが不満そうな声をあげながら声をかけてくれる。

「……そうだと師匠たる俺にも秘密にしてたんだ……勝てよ」

「すみません、シビ先生。拗ねないでくださいよ」

「拗ねてなどいない。何故なら俺は大人だからな。弟子の意見は尊重するがたまには俺にも……」

「……いや、拗ねてんじゃない」

どうやらシビ先生も不満らしい。まだ何かブツブツ言ってる。そういうえばこの人からは特別に修行をつけてもらったことは少ない。任務中など学べることは多いんだけどね。

「ヨフネ、ようやくくきたか」

「アスマか」

「一人で籠ってたんだって？新術は完成したんだろうな」

「まあ一応はな。まだまだ細かい所はあるが、使えるさ」

「そうか、なら良いさ。決勝で会おう」

「お前こそ、紅に当たっても気を抜くなよ？お前、紅にはなーぜーか甘いからな」

「なっそんなことねーよ」

もうこの時点でアスマと紅はくつついても遅くないのに、あと何年待たせる気だよ。モゲロ、アスマ。

そうこうしている内に観客は満員になりつつあった。ついに本戦が始まる。

第一試合だが観客が熱狂する間も無くすぐに決着がついた、日向の圧勝で。対戦相手も近接戦が専門だったのだから、体内でチャクラが流れる経絡系にダメージを受け行動不能となってしまうた。

「まあ予想通りだな」

予選が終わって組合せが発表された時点で項垂れていた対戦相手を見て予想はついていた。次の審判の案内を待ちながら頭を切り替える。

『それでは続いて第二試合、うたたねヨフネVS犬塚ツメ！両者ここへ！』

スピーカーから流れる審判の案内と同時に俺とツメさんは上から飛び降りた。ツメさんは愛犬の黒丸を連れているが、まだ隻眼とはなっていないかった。

「へっ！分かっちゃいたけど、こんなガキとはね。悪いが速攻で勝たせてもらうよ」

「その無い胸借りさせて頂きますよ。下忍の大先輩！」

煽り耐性？そんなもの持ち合わせておりませぬ。煽られたら煽り返す！

煽られたツメはプルプル震えている。

「それでは、第二試合……始め!!」

合図と同時に相手がクナイを投げつけてきた。

「ぶっ殺す！」

「おお、こわっ。貧乳プラス痲癩持ちですか？」

減らず口を叩きながら、クナイは全部叩き落とす。この戦いに対して対策は練っている。この人意外と上手い戦い方するからな……

「つと起爆札かつ！」

叩き落としたクナイの一つに起爆札が付いているのを見てその場から離脱する。

「通牙！」

「つち！」

避けて着地したところに擬人忍法でツメの姿をした黒丸が攻撃を仕掛けてきたが、これも何とか躲す。コンビネーションは厄介だが、今の攻撃を見て想定していた弱点が確信にかわる。

「よく躲したね。でもこれならどうだい？……擬獣忍法・四脚の術！
そんでもって、牙通牙あつ！」

今度はツメが身体を強化したうえで、黒丸とそれぞれ回転しながら突撃してきた。挟み打ちを狙われるがツメの方は無視して、俺は黒丸の方に走り出す。

「ヨフネ君何考えてるの?!危ないよ！」

観客席から珍しいトンボの大声が聞こえてきた。まあ、見てなつて！ニヤリとしながら右腕にチャクラを集める。

「うらああー！」

俺は叫びながら黒丸の回転の中心を殴り地面に叩きつけた。さらに黒丸のワンバウンドした身体を掴みツメの方へとブン投げた。

「つち！小癩な！」

そう言いながらツメは回転をやめ黒丸を受け止めた。そして離脱するタイミングで広範囲の煙幕玉を投げつけてきた。

犬塚家の通牙は言ってしまうえば回転をつけた体当たりだ。回転をつけることで体当たりの威力が増しているのはもちろんだが、その真価が発揮されるのは相手が避けようとしたときなのだ。

敵は高速の体当たりを嫌って避けようとするが、その際に強化した

爪や脚による側面で攻撃される方が実はダメージが大きいのだ。

最初に黒丸が通牙を使つて来たときに直撃ではなく、削るように攻撃してきた事で確信に変わった。怪力が使用できる俺はあえて突っ込み回転の中心を殴ることで攻撃を止めたのだ。

(それにしても、この煙幕だと何にも見えないな)

とツメ達は俺がそう思っていると考えているだろうが、甘い！俺にはコン平がいるのだ。最初の黒丸の攻撃のタイミングで、コン平の分身を離れた所に放つておいたおかげで、相手のいる方角は分かっている。

(新術を使うつもりじゃなかったんだけど、折角誰からも見えないから使ってみるか。まだ人に使ったことなかったし)

そう考えると俺は印を結び術を発動させた。その瞬間、俺の前方で光がはじけた。

「うわっ！何だ、今の光は？」

「お、おい。あれ見ろよ！忍犬の方が倒れてるぞ」

突然煙幕の中が発光したと思つたら、黒丸が倒れていたのだろう。観客からのどよめきが聞こえてきた。おかげでコン平に確認を取るまでもなく相手に当たつたことが確認出来た。

ツメからの反撃もなく、煙幕が晴れていく。

「お、おい黒丸！どうしたんだよ！無事か?!」

どうやら術の衝撃を受けた黒丸は顔の右側が血に染まっていた。ピクリともしないに愛犬にツメが必死に声をかけていた。が、今は試合中。俺はクナイを手にツメの背後に立った。

「……降参か？」

「するから！降参するから、早く黒丸を」

「……勝者、うたたねヨフネ！」

その言葉を聞いて俺が審判に眼をやると。俺の名前が読み上げられる。何が起きたのか分からない観客からはパラパラとした拍手のみだった。

何となく悪役にされた気分だ。これで原作通りに黒丸は隻眼に

なってしまうかもしれない。彼女らに背を向けて会場をあとにするなか、反対側の出口では黒丸が担架に乗せられて運ばれていった。

後でコン平に術について確認すると、黒丸の右側に術の後があったため、直撃は免れたが衝撃で負傷したようだった。

「やったね、ヨフネ君。楽勝じゃないか！」

「当たり前だ。何故なら俺たちを無視してまで修行していたのだから」

「すみませんってシビ先生」

みんなの元へ行くとトンボ、シビ先生とハイタッチする。シビ先生がまだ拗ねてたけど。

「次はお前だな、アスマ」

「ああ任せろ、俺も勝ってみせるさ。それにしてもさっきの新術はなんなんだ？試験終わったら詳しく見せろよ」

ストレッチしているアスマにも声をかけるが、返すアスマの言葉に周りも頷く。

「次の試合だと使わざるを得ないだろうからな、よく観とくと良いさ」
もともと使うつもりだったので、先に使うと宣言しておく。仲間に隠すようなことでもないしな。

ちなみにアスマの相手は格上だ。何とか勝って欲しいのだが……

「大丈夫か？勝算はあるんだろうな？」

「修行してたのはお前だけではないさ。それに俺には親父から貰ったこれがある」

そう言っで見せてきたのは、原作でも使っていたアイアンナックルに刃をつけた様な忍刀だった。まだこの時点では三代目との親子関係は良好なようで、嬉しそうに見せてきた。

『続いての第三試合、並足ライドウVS猿飛アスマ！』

ーオオオオオオオ！

名前がコールされるだけで歓声が上がった。やはり三代目の子ということもあって注目されているようだ。

『それでは第三試合……始めっ！』

アスマとライドウさんの試合はお互いに武器を使用した接近戦となり、派手さは無いが観る者を熱狂させる何かがあった。

アスマはチャクラ刀に風属性をつけ相手との鏝迫り合いには勝っていた。しかしライドウさんも経験の差で反撃しており、徐々に押し始めた。

それでも中々倒れないアスマ相手に手こずっていたが、ついに蹴りがアスマの腹にはいりダウンを取る。

『勝者、並足ライドウ!』

アスマ、お前の仇はとつてやるさ。負けたとはいえ格上にそれなりのダメージを与えたアスマには観客からの拍手が送られ続いていた。

第四試合は夕日紅と不知火ゲンマの試合だった。この試合は紅が幻術使いと知っていたであろうゲンマさんが試合開始直後に猛攻を仕掛け、ものの一分で終わってしまった。

「紅お疲れさん。アスマはモゲロ」

「つつ?!」

医務室のベッドに仲良く寝かされた二人に対して、気配を消した状態で声をかけると飛び跳ねるように驚いていた。

「なんだよ心配して来てみれば、二人で手まで繋いでさ。何が、まだまだだな俺たちだよ。さっそくイチャついてんじゃねーよ」

「べ、別にイ、イイイチャついてなんかないわよ!」

「馬鹿野郎、これはだな。あれだよ俺たち実力不足だなんて言っただけで」

「はいはい。んじゃまーそういうことにして、俺が仇とつてきてやんよ」

真っ赤になりながら否定する二人の言い訳を背に俺は舞台に向け、医務室をあとにした。

「それでは準決勝第一試合……始めっ!」

審判の声を合図にきつかけにまずは後方へと大きく退いた。

「日向は木の葉にて最強。才能とは生まれた時点で決まっている運命だ。棄権するが良い、俺は手加減などできん」

「うるさいよ、そんなこと自分が一番わかっているさ」

そうだ、そんなことは嫌というほど俺が分かっているのだ。これまでチャクラ量が少ない事でどれだけ苦労してきたと思ってるんだ。修行の成果で習得したのに実戦で使えない。チャクラ量のせいで。それなら最初から習得可能なんて希望持たせるんじゃないよ。持ち上げては落とされる。この気持ちと踏みにじる日向など許さん。

「でもな、才能なくても知識と努力でどうにかなることもあるんだよ」

「そんなものは夢物語だ。ここまでではよく頑張った。だがこのさきには大きな壁があるのさ」

「それがあんただって言うのか？それじゃその壁ブチ抜いてやるよ！」

最初からあの術でこいつを、壁を壊してやる。腰のポーチから特注で作って貰った約1cm程の鉄球を取り出す。もちろんただの鉄球ではなく表面は銅でコーティングされている。それを念力で自分の前に浮かべながら、この一ヶ月練習し続けた印を結ぶ。

「雷遁・電磁砲！」

レール状に形態変化させたチャクラで鉄球を挟み、そのチャクラに電流を流すイメージで一気に性質変化を行う！

そうすると一瞬眩い光を放つと同時に鉄球は日向へと音速をはるかに超えて向かって行く！

俺が選んだ新術はレールガンだった。レールガンとはフレミングの左手の法則を利用し、弾丸を高速で撃ち出すものだ。この世界では使用されていないが火薬式の銃では火薬の爆発によって発生する爆風を利用してという性質上、その爆風以上の速度では弾丸を飛ばすことはできない。それに対しレールガンは音速を遥かに超えることができるのだ。

この術も多くの術と同じ様にチャクラの形態変化と性質変化、二つの変化を同時に起こして発動する技だ。なのに何故、チャクラの消費

量が少ないのか。

正直に言うともまだ把握出来ていないが、一つはチャクラを垂れ流しにしているという事である。

千鳥などは離れた位置で発動させてから相手に当たるまでの間、放電させ続ける必要がある。それに比べレールガンなら発射の際だけ済むのだ。

そして二つめはチャクラという科学では説明出来ない謎物質のおかげである。前世の義務教育で習ったように簡単にいえば電力とは電圧×電流で表すことができる。レールガンには大量の電力が必要とされているが、チャクラは電気そのものに変換してしまうほど電気伝導率、すなわち電流の値が高い。また電圧に関しては何故かチャクラコントロールである程度の操作が可能であった。

そのためチャクラ量をさほど必要とせずに大量の電力が確保できるため、チャクラの消費量は驚くほど少なくなったと考えている。

弾丸が飛んで行った先では、前に出して構えていた左手の小指と薬指が千切れていた。射線上に相手の顔が入らないよう気を使ったため、それだけで済んでいた。

相手はもちろん、撃った本人も眼で追うことが出来ない。それ程の速度ゆえ一瞬理解できていない相手だったが、あまりの激痛におもわず蹲る。

(あくまで術に関しては推測にすぎないんだけど……成功だな)

その隙に背後に回り首筋にクナイをあてて俺はこの術の成功を呟いた。

「し、勝者はうたたねヨフネ！」

堂々と人前で術を見せてしまったが本日二度目の勝利である。さすがに今回は観客も硬直が解けるのが早く、歓声が上がった。

「お疲れ様。ヨフネ凄いよ、まさか日向にまで勝つなんて！あの術はよく見てただけど……分からなかった」

「俺も見ていたがよく分からなかった。何故ならあの術は速すぎる」

今度はシズネとシビ先生が出迎えてくれた。上忍でも使うと分

かっついていても眼では追えないらしい。だいたいマツハ3は出ていたから眼で追える方が怖いのだが上忍はバケモノみたいな人がいっぱいいるからな。

「ま、今はそれよりも次の試合を見ましようよ。対戦相手は観ておきたい」

準決勝の第二試合はガイやエビスさんと同じ班員であるゲンマ、アスマに勝ったライドウの二人の対決となった。接戦が予想されていたがライドウはアスマとの試合で疲労していたのだろう、動きが鈍くあつさりとギブアップした。

この判断の速さも中忍に上がるには必要なことだろう。状況判断の出来ない隊長など足手まといでしかないのだから。

そうして決勝の相手はは不知火ゲンマにきまつた。

「皆さま大変お待たせ致しました。これより中忍試験本戦の決勝を執り行います」

長かった中忍試験もようやく終わりの時を迎えようとしていた。あれだけ騒がしかった会場も今は静まり返り、本人達と同じように審判の合図を待っている。

「決勝戦、うたたねヨフネVS不知火ゲンマ……始めっ!」

oooooooooooo!!

その言葉をきっかけに会場は本日最高の盛り上がりを見せている。ゲンマは俺に印を結ばせる隙を与えまいと合図と同時に猛然と突っ込んでくる。電磁砲が使われれば、戦いが厳しくなると分かっているのだろう。

俺は念力でポーチから鉄球を三つ取り出し身の回りに浮かべる。そして距離を取るために雷遁を纏わせた鉄球を一瞬放電させてから投擲する。

「なにっ!っ!っ!印を結ばなくても発動できるのか?!」

ライドウはそう叫びながら過剰に反応し、常に左右へとフェイントをかけながら大きく後退する。上手いこと電磁砲と勘違いしてくれ

たようだ。

「クソツ、陽動か！」

本当に電磁砲を使っていれば威力、速度ともにこんなものでは済まない。そのことにゲンマも気づいたのか啞えていた千本をこちらに飛ばしながら再度詰めてくる。

俺はその千本を避けながら印を結び、動いているゲンマに対し術を発動させる。

「雷遁・電磁砲！」

狙いはゲンマの予想進路の足元である。動いている相手の上半身に当てられるほど、俺はまだこの術に慣れてはいない。

「ゴォウッ！」

やはり直撃はしなかったが、ゲンマの足は止まった！土埃が舞う中、今度は俺から距離を詰める。

「なにっ!？」

相手は俺がこの試合、常に遠距離戦に持ち込もうと思っていたのだろう。土埃の中から俺が現れた瞬間、顔がひきつっていた。

こっちは一ヶ月前まで怪力をベースにした、バリバリの近距離専門なんだよ。ゲンマが思わずといった具合に顔をガードしていたため、腹部を全力で蹴りつける。

蹴られたゲンマは壁まで水平に飛んで行き、壁に叩きつけられた。俺はすぐに詰め寄り残っていた鉄球をゲンマの目の前に浮かべ、脅しのため発光させる。

「っそこまでだ！勝者、うたたねヨフネ！」

審判とゲンマの担当上忍が慌てたように俺とゲンマの間に入り試合を止める。

何か俺、容赦ない奴みたいになんて扱いはなっていないか？手加減出来るような相手ではなかったけど、殺さないように気を付けて攻撃はしていったんだけど。

中忍試験の合格者

うたたねヨフネ、不知火ゲンマ、並足ライドウ、犬塚ツメ、猿飛ア
スマ

以上、五名

既に中忍となつてゐるカカシに加え、十歳で中忍となる者が三人となり、俺たちは豊作の世代と呼ばれることになる。

俺が中忍になっても基本的には同じ班員で任務にあたっていた。ただ今まではCかDランク任務のみだったが、状況次第でBランクに変化するような任務も受けるようになった。

また、シビ先生が抜けた際には俺が隊長となりスリーマンセルで任務に当たることが増えてきている。

任務は相変わらず探査能力を生かしたものが中心だが、ここ最近各国の国境付近での小競り合いが増加しており、にわか騒がしくなってきたように感じる。

さらには霧隠れのアカデミー卒業試験で、他の忍を皆殺しにした忍びがいるとの情報が入ってきている。これは桃地再不斬が戦闘に出てくる可能性が出て来たということと、血霧の里と呼ばれ始めたことからマダラが戦争の種を仕掛けるという前兆でもある。

先日は二班合同による国境警備にあたっていたのだが、帰還する直前に林の国の般若衆との偶発的な戦闘が発生した。

そこで俺は電磁砲があるため勘違いしていた事を思い知らされた。確かに電磁砲は並みの忍では避けられないが全ての仲間を守るわけではないのだ。

敵の半数を一人で討ち取ることに成功したが、仲間の一人が相手の自爆に巻き込まれ殉職してしまったのだ。今回の任務で初めて組んだ人物だったが、守れなかったことに気落ちしてしまう。

歴史の流れを知っていたとしても、こういった細かい戦闘では役に立たない。もっと、もっと守れる力が欲しい、そう切に思った。

「応援ありがとオー!!」

任務完了の報告をして暗い気持ちで家に帰る途中、能天気な声が聞こえてきた。みんな戦争が近づいているのを感じてか、里全体に重い空気が漂っているというのに、それを打ち破るような明るさだ。

「パパ、あれは応援ではないよ……」

発信源はガイとおそらく父親であろう人物のようだ。ガイも大変な任務だったのか腕に包帯が巻かれている。

つてか間違いない父親だろうな、あの濃さは。ガイの将来より劇濃でしょ。眉毛剃れよ、もみあげまでホルモン来てるぞ。あと全身タイツもやめろ。

「よう、ガイ。何してんだ？あと怪我どうしたんだよ」

しまった。気になってつい声をかけてしまった。

「ん？ヨフネじゃないか。今からパパと修業に行こうとしたんだけど……。怪我は、まあちよつとあつてな。そつちは任務帰りか？」

「まあね。あ、初めましてうたたねヨフネです」

やはり父親か、遺伝子まで濃いな。ああ、この人は確か万年下忍つて言われてたな。多分さつきも他の忍から何か言われたのだろう。お、ちよつと待てよ。確か八門遁甲使えたよな？この縁はチャンス?! 「少年よ青春しているか？俺はマイト・ダイ！いつもガイから話聞いてるぞ天才君」

「天才何かではありませんよ。今回の任務では仲間が一人やられてしまいました。みんなを守るためにもつと強くならなきゃいけないんです！でも俺、チャクラ量が少ないしもつと強くなれるのか不安で」
ヨヨヨと、泣く振りをする。

「うオオ！ヨフネ君！その気持ちは痛いほどよく分かる。だが君の青春は始まったばかりだ！青春に後ろ向きはない。俺のように！」

ダイさんは俺の話聞いて滂沱のごとく涙を流していた。ガイは確実にこの人の子だよ。しかし、ここまでストレートに信じられると罪悪感が生まれそうだ。こんなにあつすぐな人なんてそうはいないからな。

「短所が分かれば長所が光る！君は今から光り出しているのだ！その齢でもう自分の長所に気付けたのだからな！」

確かにチャクラ量が多ければ電磁砲だつて考えなかったかもしれない。その他の部分でそのマイナスを上回れば良いか。

「短所も長所になる！くどいとは丁寧なこと！五月蠅いとは賑やかなこと！頑固とは一途なこと！わがままな人は……猫みたいな人！」

「おい、少しの感動を返せ！なんだよ特に最後のやつ！猫みたいなのって長所なのか?！」

いかん、思わずツツコンでしまった。

「いやーまあ、ようは考え方次第ってことだ！そうだ君も一緒に修業に来るか?！」

「パパ、ヨフネはもう中忍だよ。パパよりも強いんだよ?！」

「ガイ、中忍だから強いってわけでもないさ。ダイさんは是非よろしくお願いします」

よし、結果的に上手くいった。俺は心の中でガッツポーズをする。ダイさんは普段強がっていても、人から頼られるのが嬉しいのだろう、ウキウキしながら森へと案内された。

「下忍の俺が日々修業し、二十年かけてやっと会得した唯一の技だ！つまりはこの技は唯一お前達に教えられる技だ。まずは見せてみよう。禁術・八門遁甲!」

ダイさんが言った瞬間、空間ごと潰されそうになる圧力がかったような気がした。いくつまで開いているのか分からないが、これほど強力な術は見たことがない。

「ここからは少し長くなるがよく聞けよ?今のは体内の経絡系上の中でも特にチャクラ穴の密集した所にある門を開いたのだ。門は頭部から順に開門、休門、生門、傷門、杜門、景門、驚門、死門と八つある。これらは普段チャクラの流量を制御し、身体を保護しているが、門を意図的に解き放つことで強制的に身体能力を高めることを可能とする！しかし本来身体を守るための制限を外すということは、その効果に比例して身体に負担がある。また開門段階が上がるにつれてその反動も大きくなる。そして、死門まで開いた術者は必ず死ぬ」

分かっていたことだが、思わず息を飲んでしまう。

「よって開門を伴う技は全て禁術として扱われている。また術者の資質を問う難度の高い能力でもあり、使用者は極めて少ない。今この里で使えるのは俺だけだ!」

やはりそう簡単には会得出来そうにもないか。

「修業を始める前に一つ言っておく。お前達がこの技をマスターして

もだ、使用するには一つの厳しい条件をつける！それが自分ルールだ！」

ガイの自分ルールはここから来てるのか。

「それはな……自分の大切なものを死んでも守り抜くと決めた時だ！」

その言葉に込められた意志が心に届き、何となく直感してしまった。多分、俺にマスターするのは無理だと。

潜在能力の解放という技の性格上、その質は術者に大きく左右される。体術以外の全てを捨て、ただひたすらに一つのことを突き詰めるこの親子と俺とでは、覚悟や意識といった部分で差がある気がしたのだ。

八門遁甲は火事場の馬鹿力のように発動させるには条件や覚悟を自分に課すことによつて、窮地に立たせる必要があるのかもしれない。そして、そのルールや覚悟の重さがきつと普通の忍よりも強いのだと思う。

でも、やる前から諦めることもないか。あくまで八門全てマスター出来るかどうかの話だし。

「では、まず修業だが、自分の体内にある門を感じる必要があるだ。体内でしつかりとチャクラを練るんだ！その時にこう、なんとなく……ポカポカする部分を感じない？」

おい、いきなりアバウトになったな。でも身体強化の要領で頭に集中することで、一つはハッキリと感することが出来た。

「はい、頭の部分はなんとなく感することが出来ます」

「えっ！もう？僕はまださっぱりです」

「俺は婆様との修業で似たようなことさせられてたからな。二年くらいかかったけど」

アカデミーに入学した頃から毎日やらされていたのだ、そう簡単に追いつかれてたまるか。

「さすがコハル先生。だが焦るなガイ！こう気合いをゴオーっといれるんだ！熱い青春を感じるだろう！」

「そんな説明でわかるか！」

「なるほど！一、二、三……八つ。これかな？」

「お前も分かるんかい！しかも全部感じてるし。俺は一個しか分かんねーよ！」

この人達との修業は精神疲労が凄そうだ。それに、やはり八門遁甲には適性というものがあるのかもしれない。

「八つ全てを感じることが出来たら、その全てのエネルギーを一つに集めて、ドバツとすれば解放すれば出来るぞ。ガイは集めてみる！ヨフネ君は全部を同時に感じられるようになるところからだな」

「……はい」

「そう、落ち込むな！一朝一夕で出来るものでもない。日々修業だ！ハツハツハー」

その日は解散となったが、少しでも時間が合えばガイやダイさんと一緒に修業を繰り返した。こういつては何だがダイさんが下忍で助かった。時間の融通が効くのだ、俺よりも。

ガイとは今までよりも仲良くなった。父親を馬鹿にしない中忍というのが嬉しかったのか、俺に勝っているのが嬉しいのかはわからないが。

半年が経った頃にはガイは生門を解放出来ていた。それに対し、俺が感じることが出来るのは未だ頭部にある開門と休門だけで、八門を同時に感じることは出来ていなかった。

新たな目標も見つかり修業だけをしたいのだが、中々そうはいかない。感知タイプと医療が出来るメンバーがいるうちの班はかなり扱いやすいのか、あちこちに飛ばされる。

今は同盟国の波の国に来ていた。実は波の国から少し離れたいくつかの無人島で霧の忍の目撃情報が入ったのだ。最近、霧隠れの忍との間では領土を巡って小競り合いが起きているため、すぐに俺たちが派遣された。

敵からすれば木の葉への前線基地ともなり得る場所のため、俺たちを含めた四小隊、つまり一個中隊が送られた。波の国の外海側に到着

した俺たちはまずは手分けをして、最も近い四つの無人島を偵察することになった。

俺たちの班は一番南の無人島へ近づき、周辺に敵がいないことを確認して崖の下の部分に上陸する。そこから俺はコン平をシビ先生は蟲を放ち、トンボは印を結んで感知に専念している。

シズネは周囲に敵のトラップがないか探索している。シズネは暗器やトラップに高い適性があり、それらの見破に磨きをかけてきていた。

「飛竹、何かチャクラの反応はあるか？」

「すみません、僕の方は何も分かりません」

「ヨフネお前はどうか？」

「まだコン平からの連絡はないですね、シビ先生はどうです？」

「蟲たちが相手の足跡は発見したようだが、敵自体は発見できていない。こうなると敵は移動した可能性が高いな。何故ならば俺たち三人の目を掻い潜るなど不可能だからだ」

確かに、それぞれ違う方法で感知する俺たちのどれにも引つかからないということは、敵はいないと見ていいだろう。

「一旦、詳しく探索しますか？」

「そうだな……シズネ、敵のトラップは？」

「うーん、どうやらなさそうですね」

「よし、では足跡があった位置まで行ってみよう」

しかしシビ先生が見つけた足跡まで行ってみたものの足跡以外にはなく、トラップの痕跡も見られなかった。しかし俺は何かが見つかる、こういう違和感の正体が理由が分からない時は、だいたい良いことがない。

「先生、どうしますか？」

「一旦後退して他の小隊と情報交換するぞ」

先生も違和感には気付いたのでだろうがその正体までは分からぬまま、一旦波の国の港まで戻った。他の小隊も戻って来ていたので、情報を共有してみると漸くその違和感に気付くことができた。先生も気付いたのでだろう、全員に話し始めた。

「今回、どの班も足跡は見つけることが出来たが、その他の痕跡や姿は確認出来ていない。これは陽動ではないかと俺は思う」

「それはどうゆうことでしょうか？」

「今思えば、そもそも敵の目撃情報からおかしい。何故、敵が霧隠れと断定されていたのか。林の般若衆や雲隠れの可能性だつてあるはずだ」

「なるほど」

「……確かに」

どうやらみんな不信に思い始めたようだ。

「さらには敵の痕跡だ。足跡は残っているのに、偵察などをするために必要な拠点の痕跡は一切なし。これには恣意的なものを感じる」

「なるほど、これら全ては我々を足止めするための物とシビ先生は言いたいんですね？」

「そうだ。痕跡や目撃情報があった以上、無視はできない。そう思わせることが目的なのかもしれない」

「となると、敵の目的は木の葉の戦力の分散と時間稼ぎ。そうする理由は……」

「そうだ、敵は茶の国に攻め入るつもりだ」

俺たちはあれからすぐに行動した。まず木の葉と渦隠れの里への連絡。そして二班をそのまま渦の国に残し、俺たちを含む二班は警告と増援をかねて茶の国へ向かうことにした。

木の葉は現在、隠れ里を保有していない波の国、茶の国等の同盟国に加え、渦の国の渦潮隠れの里とも同盟を結んでいる。渦潮隠れの里からもそう遠くはない為、一応の警告である。

茶の国では木の葉が波の国に対して戦力を割いているため、現在感知タイプの人手が足りていない。既に戦闘が行われている場合でも、追跡にしろ撤退にしろ俺たちの力が必要と考えられた。

海路を利用し茶の国に向かっていたのだが、到着する寸前に陸地で戦闘が始まったようだ。かなり大きな爆発があつたのか土煙りが竹林の奥の方から上がっている。

「今、この辺りにあんな派手な戦闘が出来る部隊ってありましたっけ？」

「俺が把握している限りはないな。中忍と下忍が中心のはずだ」

シビ先生に確認しても把握していないということは霧隠れの仕業か。ということはかなりマズい状況かもしれない。

「どうします、すぐに援軍に向かいますか？それともここで様子を見ますか？」

「あれが敵ならマズいが、どうやらそうではなさそうだ。何故ならば戦闘が徐々に海の国側に移動しているからだ」

たしかに徐々にではあるが戦闘地域が、東側へと移動していた。あちら側には海の国の諸島の一つがあつたはずだ。まだ内陸部までは攻め込まれていないのであれば、敵の待ち伏せもないだろう。

「では敵の側面をつけるように進軍し、邪魔にならない程度まで近づきましょう。俺たちなら離れた状況からでも戦況は確認できます」

「そうだな、しかし陸地にいる他の隊の状況も分からない。……よし、

俺たちの班は戦闘地域に向かい、もう一班は茶の国にいる他の隊と合流するんだ。何故ならば他の隊をまとめて攻勢に出る必要もあるからだ」

正直この場で人員を割くことには反対だが、今はシビ先生が中隊長だ。判断には従うしかない。

「了解しました！では我々は内陸部にむかいます。無理しないで下さいね」

そういつて他の班は船を降り、海を走って行った。

「先生、私たちも早く向かいましょう。負傷者がいれば一刻も早い方が！」

シズネは医療忍者としても才能を開花させている。少しでも救いたいのだろう。

「そうだな……飛竹！海中に敵の気配はあるか？」

「いえ、進行方向に敵の気配はありません」

「敵は少数精鋭で切り込んで来た可能性もあるな。であれば一刻も早く押し返し防衛体制を整える必要があるな」

「だとすると海の国側に敵が集結している可能性が高いですね。深追いは避けないと」

「よし、すぐに向かうぞ！」

「はいっ！」

それを合図に俺たちも船を降り海面を走り出し、竹林の中に入って行った。

隊列は縦一列で前方の警戒をシビ先生、シズネと俺で左右を、トンボが後方といういつものフォーメーションだ。

「全員止まれ！」

竹林に入って少しすると先生が全体を止める。どうやら戦闘がこちらに向かって来ているようだ。音が近づいて来ている。

「どうしますか？」

「ここからは歩くぞ。敵が少数で背後をつけるようなら戦闘に入る。各自準備しておけ」

俺は鉄球を取り出し、念力で身体の周りに十個ほど浮かべ、印を結び何時でも発射できるように準備した。

電磁砲は中忍試験が終わった後も改良を繰り返し、スタンバイと発射と二段階に分けること成功した。利点は連射が可能なことと、準備することで発射までの時間短縮が可能な点である。ただし現在では十個が限界であった。

「敵がこちらに来るぞ！」

「敵は……四人です！どうやら傷を負っているメンバーがいるようです」

それぞれが歩きながら準備していると、先生とトンボが感知したように声を出す。それと同時に先ほどまで聞こえていた戦闘音が止む。どうやら敵の撤退ルートと被ってしまったようだ。

「飛竹は周辺の警戒だ、敵に増援がないか確認しろ。ここで待ち伏せるぞ、敵が少なければ奇襲をしかける。秘術・蟲邪民具！」

戦闘は避けられそうもない。ならばこちらの方が優れているであろう探知範囲を有効に活かすため、待ち伏せという形をとったのだ。さらに先生が感知を邪魔する蟲をばら撒き、俺たちを感知されにくくしてくれる。

「トンボ、敵がヨフネの射程に入ればすぐに撃たせろ。続けて援護する」

「はい」

「俺は撃ち尽くして構いませんか？」

「いや、一応数発は残しておけ」

「分かりました」

戦術を確認し終わってからは息を殺し、待ち伏せる。俺の感知外のためトンボの指示通りの方向に向けて構える。そしてハンドシングナルでのカウントダウンが始まった。

1ー1ー5、4、3、2、

「避けろっ！」

トンボの叫び声で後ろに飛び退きながら俺も撃つ。それと同時に先ほどまでいた所に雷撃が直撃した。どうやら敵にはこちら以上の

感知タイプがいるようだ。

「構えろ！」

現れた三人の姿を見て固まる。というよりも持っている物を見て固まった。

「霧の忍刀七人衆か!？」

「本当に俺たちも有名になったもんだな」

「それよりも早く退くぞ。こいつら程度、雷牙お前一人で充分だろ。満月と刀は俺が持つて行く。お前も早く海まで来い」

「おう」

こいつら舐めやがって。敵の前でベラベラと会話してんじゃねえよ。でも、どうやら予想通り海の国に本隊が入るのだろう。ということとはすぐには敵に援軍は来ないということだ。

七人衆でも有名な西瓜山河豚鬼が大刀「鮫肌」と断刀「首切り包丁」を背負い、鬼灯満月に肩を貸していた。双刀「ヒラメカレイ」は満月が背負って撤退していった。

攻撃に参加してこないということは、それだけ深手を負ったのだろうが深追いする必要はない。しかし問題は目の前の男である。

雷牙と呼ばれた男は何となく雷をイメージさせられる変わった短刀を二本持っていた。おそらくあれが雷刀「牙」だろう。そして電気を鎧の様にして身に纏っていた。そして、ふと思いつく。

「そういうえば敵は四人だったはずだ！トンボ、もう一人はどこにいった?!」

「あいつが背負ってる包みの中に反応があるよ。多分子供だよ」

「クソっ誘拐かよ」

「違う、チガウ！蘭丸は、俺の相棒だア！」

いきなり怒った雷牙はこちらに突っ込んで刀を振り下ろして来た。全員が避け射線上にいないことを確認して反撃に出る。

「雷遁・電磁砲、三連！」

バチイツと音がして敵が後ろに飛ばされるのが見えた。

「ヨフネ、ナイスだ！やったか？」

「まだです！信じられない、ヨフネ君の攻撃は全部命中したはずなの

に」

雷牙が土埃の向こうで立ち上がる。

「あーいてて、蘭丸大丈夫か？」

「うん、僕は少し擦りむいただけだよ。大丈夫、ありがとう雷牙」

「擦りむいただって?! 大変じゃないか、後で絶対治してやるから死ぬんじゃないぞ。お、おお前ら許さん！」

いまいち精神が不安定なのかもしれない。可哀想だが後ろの子供を狙って隙を作るか。でも、どうする。この班で一番威力のある電磁砲が弾かれたとなると何か考えないと。しかし、なぜ弾かれたんだ？

「雷球！」

雷牙が俺に向かって雷撃を飛ばしてきた。最初に撃ってきた術もこれだろう。躲しきれないと思い、当たる瞬間前方に雷遁を展開して耐える。

「うらアッ！」

雷牙の気合いと共に奴が纏っていた雷が強くなる。そして一瞬にして間合い詰められた。

「ちいっ！早くなった?!」

雷で神経を活性化させているのか、先ほどよりも速度が上がっていた。そして俺は思いつき蹴飛ばされ、打ち付けられてしまう。

「ヨフネー！クソっ！秘術・蟲玉！」

先生は敵めがけて蟲を一気に集約させるが、バチィッ！っと、またあの音がして蟲たちが地面に落ちていった。それと同時に雷牙は雷球を先生に放ち感電させてしまう。

「お前らは殺してやる。まずはうじゃうじゃと気持ち悪いお前から！」

そして雷牙は先生の元へ間合いを詰めようとするが、二人一緒にいたトンボとシズネが阻止しようと手裏剣を飛ばすが、それらはあつさり撃ち落とされる。

「お前ら……面倒くさいい！雷葬・雷の宴！」

雷牙は雷刀を地面に突き刺すと、地面に電撃を走らせた。電撃は分散して襲いかかり、三人はビクツと体を引き攣らせながら気絶させら

れてしまった。

まずい、まずいまずい。身体が震える。このままだと三人が殺されてしまう。何か奴にダメージを与えられる方法はないか？考えろ！何のための知識だ！

慌てて周りを見渡す。何か、何か使える物はないのか………あつ、あるじゃないか！こんなにいっぱい！

俺は手元にあつた折れた竹を手に取り、クナイで先端を尖らせて竹槍を作る。しかし、既に雷牙は三人へと迫っていた。

このままじゃ間に合わない！

——自分の大切なものを死んでも守り抜くと決めた時だ！

そうだ、今使わなくていつ使う！全門解放出来るとは思わない。だけどせめて、せめて……八門遁甲、第一開門……開！

瞬間、普段よりも圧倒的に早いスピードを手に入れ、一気に雷牙の元まで行く。

「雷牙、危ない！さっきの一人が来るよ！」

どうやら後ろの包みに入った子供が感知タイプだったようだ。しかし、もうここまで来れば関係ない！俺は竹槍を雷牙に対し突き出した！

「そんなもんでこの鎧が破れるかよ！」

雷牙は雷を強めてガードしながら叫ぶが、そんなもんじゃこいつは防げない！

ドスッ！

雷の鎧だけではなく、後ろの子供まで一緒に貫通させるために胸におもいつきり竹槍を突き立てた。

「な、なんでこんな竹ごとときで」

「竹は絶縁体といってな電気を通さない。さらにただの竹槍じゃないぜ。俺は使えるのは雷遁だけじゃなくてね、風遁で強化させたのさ」「それだけのことで……」

そこまで言って雷牙が黙ったので、しっかりと死亡を確認する。後ろの子供も確認したが竹槍に貫かれており即死だったようだ。

急いで三人も確認するが、ただ気絶していただけだった。ほっと胸

を撫で下ろして、まずはシズネを掌仙術で回復させる。

「んん〜ヨフネか。ヨフネ！あいつは?!」

「そんないきなり起き上がんなよ。雷牙とかいうあいつは殺したよ」

「えっ!?よくできたわね」

「それよりも二人を回復させてよ。二人も感電して気絶してるから」

「わかった、ありがとうね」

シズネに気にすんな、とひらひら手を振りながら立ち上がろうとすると筋肉痛が襲って来た。

ヤバいな八門遁甲。あれだけの一瞬だったのにもう筋肉が悲鳴をあげるのか。それよりも八門全部を感知できなくても開くじやないですかダイさん。でも、ありがとうございます。おかげでみんなを守れました。

ダイさんに感謝しながら再度、雷牙の元へと行き雷刀“牙”を拾い上げる。思わぬ所で良い拾い物をした。相性は良いはずだと思い、左の腰にバンテージで二本とも固定する。帰ったら色々試そう。

「よし！ヨフネ、みんな起きたわよ」

シズネが二人を起こし、教えてくれる。シズ先生とトンボもまだ若干の痺れが残っているようだが大事無いようだ、シズネの医療忍術は凄い。

「ヨフネすまない。上忍ともあろうものが、ああも簡単にやられてしまった」

「しやうがないですよ。相性最悪だったんですから」

正直、蟲がまとめて落とされるのを見たときは、夏のコンビニの外で紫外線ライトに落とされる虫を思い出してしまった。

「とにかく、よくやってくれた。それと早速だが元の作戦に戻って、戦闘があつた所まで行くぞ」

先生の言葉で林のさらに奥に進んで行く。一步進むごとに酷い筋肉痛が襲うが、みんなには気取られないよう振舞う。どうせ無茶したと怒られる。なんでそんなことしたのかわつて言われても恥ずかしくて言えないしね。

進んで行くと突然そこだけ、隕石でも落ちたかのように開けてい

た。中心には見覚えのある緑の全身タイツがいた。

「っ！ダイさん！」

（ガイを守るために死ぬ事は分かっていたけど、まさかこんなに早く！）

思わず中心に向かって飛び降りた。胸に耳を当てると、まだわずかにだか息がある！

「シズネ！早く来てくれ！まだかすかに息がある！」

そこまで叫んで、ダイさんが手を出してきた。

「……ヨ、ヨフネ君。もう無理だ。死門まで開いた」

「なんでそんなこと！」

「自分の大切なもの、ガイを死んでも守り抜くと決めた時が来たのさ」

「そう、貴方もですか。ダイさん、いや師匠。俺も開門を開けましたよ。おかげで仲間を守れました。ありがとうございます」

「後悔のなく生きろ、初めてにして唯一の弟子よ」

「……はい」

「ヨフネ、残念けどもう……」

あの人にとって息子ではなく、純粋な弟子は俺だけだった。その意思は受け継ぎます。師匠の笑顔に向かって俺は誓った。

「シビ先生、マイト・ダイが命と引き換えの術を使って、忍刀七人衆を退けたようです。それとどうやら撤退させた部隊がいるようです」

「わかった、すぐに合流しよう！」

「先生！近くに忍刀七人衆の遺体があれば何か情報が得られるかもしれません。少し探してみたいのですが」

「おい、一人でか？危険だ！」

「俺なら大丈夫です。それにシビ先生達はまだ痺れが完全には取れないじゃないですか。敵が来ても俺一人の方が逃げやすいです。三十分だけです」

「……わかった。約束だぞ」

「すみません」

「よし、この人は俺が運ぶ。二人とも行くぞ」

そう言うとう先生はダイさんを担いで行った。トンボとシズネもチ

ラチラとこつちを見ていたが、シツシツと手振ったら先生を追いかけていった。

時間も無いため、コン平にフルに分身してもらい搜索するとすぐに見つかった。

遺体は四体。通草野餌人、栗霰串丸、無梨甚八、琵琶十蔵の四名だ。それに目的の物も見つかった。鈍刀「兜割」、長刀「縫い針」、爆刀「飛沫」の三丁だ。

後々の大戦で多くの戦死者を出すこの三丁、俺は巻物に封印しベストのポケットにしまった。

使いにくいのはかりあってもね。河豚鬼、首切り包丁だけ回収しやがって、あれが一番欲しかったのに。怪力に耐えられる刀なんてあれぐらいだぞ。鮫肌はいらなくてか持たせてくれない気がする。

「クオン！」

そこでコン平が人が近づいて来たことを知らせてくれた。すぐに警戒するがやって来たのは木の葉の有名人だった。

「ねえ、貴方。ここで何があったのかしら？」

やって来たのは大蛇丸でした。なるほど原作だとここで死体と忍刀を回収して、これ以降は忍刀は行方不明となったのだろう。

とりあえずは波の国からここでダイを看取ったことまでを話した。下手に嘘はつかないほうが良さそうだ。敵よりも嫌な空気を感じる。「そうだったのね。ところで死体はあるけど忍刀七人衆というなら刀はどこかしら？」

やっぱり聞いて来るのか。ボカすしかないな。

「私が戦闘し一丁は戦利品として確保しました。他の刀は戦闘の前に西瓜山河豚鬼が複数持っていたのを確認しています」

「貴方が勝ち取った刀はなに？」

「……雷刀「牙」です」

「そう、私が欲しかったのは大刀「鮫肌」だったんだけど残念ね」

何この人、鮫肌やったら奪うつもりやったのか。とりあえず、雷刀は取られずに済みそうだ。

「あの、何故ここにいらしたのですか？」

「極秘よ」

はあ、そうですか。なんと言うか……やっぱ嫌いだ、この人。

「貴方、死体の処理はしといてあげるから仲間と合流しなさい」

「はい、ありがとうございます。では！」

感謝したふりをして逃げ出した。何がやつといてあげるだ。邪魔
だっただけじゃないか、変態め。

最後の大蛇丸が一番精神的に疲れた。

茶の国から戻った俺たちは、直接三代目に連絡することになった。帰ってすぐだが嫌とは言えない。

「シビよ、ご苦労じやった。よくあの霧の忍刀七人衆を退けた」

「ありがとうございます。しかしそれについてはヨフネとマイト・ダイ両名の功績が大きいかと」

「ヨフネはまだしもマイト・ダイじゃと?」

「はい、ここからは俺が」

ダイさんのことは俺が答えるべきだと思い、一步前に出て説明する。

「あの人は忍術が使えない代わりに体術を極め、八門遁甲を使うことが出来ました。あの場にいた息子であるガイを守るため、死門まで開き忍刀七人衆の内、四名を倒しました」

「なに?八門遁甲じゃと?あれは全盛期の儂でも全ては習得できんかった」

「やっぱり凄いや、ダイさん。教授と言われる火影をも凌ぐなんて。」

「あの人が他の七人衆にも手傷を負わせてくれ、また俺に八門遁甲を教えてくれたおかげでもう一人、雷牙と呼ばれていた男を倒せたんです」

「お主も使えるのか?!」

「とはいっても開門だけですけど」

それを聞いたヒルゼン様の眼光が鋭くなる。

「……リスクは知っておろうの?」

「はい、全てを開くつもりはありません。というよりも無理そうです。忍術全てを捨てる覚悟で修業すれば別かもしれませんが」

「誰も全てとは言っておらん!開門だけでもかなりの痛みだったはずじゃー!」

みんなのいるところで言わないで欲しい。今度は横からの眼光も鋭くもなってきた。

「俺としても無闇矢鱈に使う気はありませんよ。まだ体も出来てないですし、今回は仲間がやられそうになる中、初めて使えたんですから。それにあの人もキツク言われてますしね」

お、少し横からの眼光が減った！

「良いじやろう。だがコハルには言うぞ」

「待つつつて下さい！それだけは！八門遁甲使う前に死んじやう！」

「諦めろ、どうせすぐにバレるんじや。早い方が良からう」

嫌だ、家に帰りたくない。確かにあの婆様のことだ。帰ったらすぐにバレるだろう。しょうがないけど……あー帰りたくない。あ、そう
だ。

「それとダイさんの息子のガイも使えますよ。俺よりもよっぽど、あの術の才能はあります」

「そうか、あやつにも落ち着いたら釘を刺しておくかの」

ガイすまん、兄弟弟子なんだから一蓮托生だ。

「ところでヨフネよ、敵からの情報は何か手に入れられたか？」

「いえ、死体を探していたら大蛇丸様が来られ、情報収集は任せろと言われたので逃げました」

「あの近くに大蛇丸がおったのか。……まだ報告は入っておらんが、さすればすぐに詳しい情報が得られるだろう」

あいつめ、報告してないか。蛇でも使つてサツサと報告しろよ。あと本当に極秘すぎるだろう。火影も知らないなんて。

「最後にじゃ、忍刀はどうした？」

「俺が倒した男からは雷刀「牙」を奪いました。他の刀については敵が撤退する際に持って行ったようです」

嘘と真実を織り交せて話す。他の三丁にしてもこちらで確保しておきたかった。とりあえずは左の腰に差していた雷刀を見せた。

「そうか、それはお主が使うと良い。雷遁使いであるし、これも運命だろうて」

「良かった。ありがとうございます」

本当に良かった。こいつがどんな能力を持っているのか、詳しく調べたかったのだ。でも体が回復してからだな。

「ところで霧隠れの里で最近何か有ったのですか？妙に好戦的になっている気がするのですが。今回の件にしても、むやみに戦線を広げて。元々奴らは渦の国を狙っていたはずです」

「うむ。それは儂らも気にしておるが、あそこは初代水影の時より閉鎖的な里で、情報がほとんど入ってこんのじゃ」

マダラは次の四代目に関しては操っていたが、今の段階で暗躍しているのだろうか。分かったところで止める方法はないのだが。

「しかし、これからは雨隠れに加え、霧の動向にもより一層注視していかねばならん。お前に頼ることも増えるじやろう。頼むぞ」

「はい！」

「……はい」

「ここで酷使宣告来ました。もうちよつと感知タイプの忍を増やして欲しい。労働基準を作りやがれ、馬鹿野郎、この野郎。」

「……バアンツ！」

「火影様！」

火影室から出て行こうとしたタイミングで、伝令文を持った忍が飛び込んで来た。

「なにごとじゃ！騒々しい」

「それが、かねてより不審な動きのあった砂隠れの里ですが、監視班からの連絡によると風影が行方不明らしいのです！」

「なんじゃと!?三代目風影は磁遁を以って歴代最強と謳われる忍じゃぞ」

「はい、ですので国内をくまなく搜索するために人員を割いているようですよ」

「なるほどそれが原因じゃったか」

「それに石隠れや岩隠れ、それに雨隠れまでもが情報を掴んだようで、現在風の国周辺は大変な事態となっております」

「すぐに上忍会議を行う。招集せよ！」

「はっ！」

突然の出来事に俺たちは固まってしまっていた。ただどうやら、今後の主戦場は雨隠れ、砂隠れの里となるだろう。

そしてこの隙を逃すような雲隠れや霧隠れではない。当然、木の葉としては東側も警戒しなければならぬ。少なくとも二つ以上で戦闘を行うことになるだろう。

三大国に囲まれ激戦必至の雨隠れには半蔵がおり、大国も手を焼いている。他里とのパイプを強化して和平を図ろうとする三代目としては、彼と上手くやりたいのだろうがそう上手くはいかないだろう。戦争を乗り切るには三代目はあまりに優しい。初めてダンゾウの気持ちがあったかもしれない。

様々な要因があったにせよ、直接的には風影失踪をきっかけとして、第三次忍界大戦は始まってしまった。

おかげさまで俺も大忙しである。あつちで索敵し、こつちでも索敵し、毎日何かを探している。今なら間違い探しなんて余裕だ。

そうやって毎日働かされ、殺し殺されしていると時が経つのも早く、いつの間にか開戦から一年半が経とうとしている。

戦争による人手不足が深刻化する中、アカデミーの卒業が繰上げられ、臨時に中忍試験も開催された。戦時下においても戦争以外の任務は発生する。それに充てる人材をそれらによりカバーし、戦闘員を増やすつもりなのだろう。

トンボやシズネはもちろん、他の同期メンバーも今回の中忍試験に臨み、皆中忍となった。後で聞けば試験内容は筆記試験とサバイバル演習、試験官との戦闘と犠牲者が少なくなるよう設定されていたようだ。

その結果、普段よりも甘い判断基準により能力に疑問のある者を含め、多くの下忍が引き上げられ、完全に総力戦の様相を呈してきている。原作を知っていてもまだ不安になるほどに。

同期のメンバーも無事に中忍となっており、筆記が心配されたオビトやガイも中忍となれたようだ。合格が分かったとき、二人は暑苦しく泣きながら抱き合っていた。

「やったぞー！どうとうぼくはパパをぶこえれだあ」

「ガイやめろ、その鼻水垂らした顔で俺に寄るな」

そんな中、カカシと俺は上忍となった。十二歳で上忍になっても、隊員が命令に従ってくれるかが心配だ。

ちなみに上忍への昇格は、担当上忍をしていた上忍に加え、上忍三名以上の推薦が必要となる。俺の場合は婆様に加え、三代目とホムラの爺様という豪華な顔ぶれだった。カカシも三代目と婆様から推薦されたらしい。驚きだったのがダンゾウも推薦したということだ。こんなに早くから目をつけているとは思わなかった。

しかしカカシが上忍になったということは、オビトがマダラに連れて行かれるということである。もちろん助けたいのだが、任務が一緒でなければそうすることも出来ない。

いや、自分にそう言い聞かせているだけなのかもしれない。彼を生かしたところで、他のうちには犠牲となるだけだ。それなら先の読んでいるオビトで手を打つべきなのだ。

俺は流石に全ての人を救えるとは考えていない。しかしより多くの人を救う為にはオビトがマダラとなることが重要なのだ。

それが分かっていたからこそ、俺は初めからオビトと必要以上に接触しないようにしてきたのだ。

(未来を知っている俺が何とかするしかないんだ。すまん、俺は、お前を……見捨てる。)

次に俺が配属されたのは、敵に囲まれて標的にされやすい為、感知タイプが最も必要な渦の国となった。それも小隊長としてである。シズ先生は探索班の隊長、シズネは医療忍者として、それぞれ前線に向かうことになったからだ。

それで新しい小隊なんだがトンボは良い、残り二人が日向ホヘトと犬塚ツメだったのだ。日向一族からは中忍試験でのことで遠回しに批判されている。しかしホヘトは歳下だし、本人に何かしたわけではない。問題なのはツメだ、試験では黒丸の右眼を潰してしまっている。班構成を告げられた時から気まずくてしょうがない。

「今回小隊長に任じられた、うたたねヨフネです。よろしく」

下手に出すぎず、丁寧な挨拶を考えたらこれだけになってしまった。

「ヨフネ隊長と一緒に組んできた、飛竹トンボです」

「日向分家のホヘトです。ヨフネ隊長、中忍試験の件では一族が迷惑をかけてすみませんでした。ちよつとプライドが高くて」

ホヘトは自己紹介の時にこちらが気にしているのを見抜いたのだろう、突然そんなことを言い出した。

（自分は関係ないのに代わりに謝れるとか、ホヘトめつちや良い子や。こいつとならあの技を試せるかもしれないな）

「さて、次はツメさん。よろしくお願いします」

「私にも気を使わなくても構いやしないよ！犬塚ツメだ。よろしく」

「黒丸だ。頼むぞ」

ツメさんにしても、これまた事情があるようで、あの後黒丸を診てくれた獣医と結婚して既に子供までいるそうだ。ある意味キューピッドらしい。

「お子さんは大丈夫なんですか？」

「もう産まれて一年半たつし、乳離れのいい機会だろうよ。こんな状況じゃ仕方ないさ」

そんな訳で若手の班編成となったが、思った以上に上手くいきそうなメンバーとなった。

さて、俺たちの任務地となった渦の国は細長い島国である。中央に北東部には渦の国があり山脈を越えた南西部が渦潮隠れの里となっている。

渦隠れの里の中核をなすうずまき一族は高い生命力を持ち、また封印術に長けているため九尾の人柱力となるものが多い。

人柱力としても、その封印術にしても他里も欲しがらるだろう。俺たちは北東部に駐留し、時折やってくる雲隠れの偵察部隊を追い返す毎日を過ごしていた。

「ヨフネ隊長、忍鳥で伝令が来ました。渦潮隠れの里から封印の書が盗まれた模様。内部の犯行のようで、雲隠れに持ち出すつもりでこちらに向かつて来ているようです」

幾度か目の雲隠れの偵察を撃退したころ、ホヘトが伝令文を持ってきた。こちらが警戒していることを察しているのか内部を使ってきたようだ。

「それで本隊は何と言ってきている?」

「追跡部隊と挟み撃ちして奪還せよ、とのことです」

「これがただ内部の者が雲隠れに寝返るつもりで奪っただけなら、それでも良いけどな。雲隠れが手引きしていると考えるのが普通だろう」

今、俺たちがいなくなれば奴らは攻めて来るだろな。逐一報告をあげているのに分かってないのか?」

「よし!こうなれば人員を割くしか無いだろう。ホヘトは俺と巻物の確保、ツメさんとトンボは二人で監視を続けて欲しい。内部で動きがあったか探るために再度偵察部隊を送ってくる可能性もある。トランプを警戒パターンから攻撃パターンへ変更を」

「ヨフネ君達二人だけで大丈夫?」

「大丈夫だよ、トンボ。二人でやる術の精度も上がってきてるだろ?」
「分かったよ、気をつけてね」

実はこの任務についた時からホヘトの白眼を使用させ狙撃の練習していた。定期的に雲隠れの皆さんが的になりにやって来てくれるので、精度が上がってきている。

雷刀「牙」を手に入れて気づいたのだが、雷遁の増幅機能があったのである。普通に使っても雷遁を纏わせれば斬れ味が増すので重宝するのだが。

それよりも雷刀を銃身にするので、ずつとやりたかった電磁砲による狙撃が可能となった。電磁砲の射程距離と速度を上げるためには、長い銃身が必要となるため、普通にやると倍以上のチャクラが必要となってしまう。俺のチャクラ量でそれをやるのは不安だったのだ。とはいっても十発も打つとチャクラがほとんど無くなってしま

うのだが。

ちなみに遮蔽物の多い場所が主戦場の忍にとつては使える場面は限られている。だがホヘトが白眼を使用し照準を合わせることで、木などの遮蔽物を気にせず撃てるようになった。

当然弾も特別製だ。今までのように、相手に見られ狙いがばれてしまう可能性がないため、円錐形の銃弾を作ってもらった。装填する際に風遁を纏わせることで貫通力もケタ違いとなった。

また弾が超高速のため風などの外乱の影響も受けにくく、素人でも狙撃しやすいとんでも兵器となってしまうた。

俺達は巻物を持った敵の予想進行ルートに前もってコン平を配置している。ホヘトが一点に集中した時の有効視界距離は約1.5 km。そのため2 km先にコン平が展開しており、敵の方角を教えにくれるのだ。

着弾までは約0.6秒で敵の数は四人。いくら慣れてきたとはいえ確実に当てることができるわけではない。しかし、掠っただけでダメージを与えられるため、一人に二発必要だとして八発で終わる。

俺たちは忍の世界には似ても似つかぬ兵器を準備し待つこと一時間、とうとうコン平からの合図が来た。

「二時の方向、数は報告通り四、街道を進行中」

「了解」

「合図の後、一秒ごとに発射されるように設定。計八発」

「……捕捉……発射」

その瞬間、雷刀が強く発光する。弾の一部が電気抵抗による発熱に耐えられず、蒸発を通り越して一瞬でプラズマ化する。そのため貫通した木は焦げてしまっていた。

始まってしまえばホヘトさんから停止の合図があるまで、俺は一秒ごとに弾を発射するだけである。

「目標沈黙。任務終了」

「うっし、お疲れさん。上手くいったみたいだな。まさか六発で終わるとは思わなかった」

「エヘへ、だいぶ慣れてきたみたいですよ」

「そいつは良かった。これ使いこなせるようになれば、ほとんどの忍を倒せるからな。さて巻物回収に行きますか。監視を二人に押し付けちゃったからね」

「ですね、早く戻ってあげましょう」

そう言つて雷刀を腰に差す。雷遁を使用した後も発熱しないのもありがたい。おかげで連射が可能だ。やっぱ使えるなど確信しながら巻物を回収し、追跡部隊に渡した。

「よ、よくお二人だけで。しかもここは何があつたのです?」

「すみません、秘密です」

追跡部隊の人が吃りながら聞いてくるのも無理はない。胴体が吹き飛ばされ下半身が消えている者や右半身、頭部と何処かしら消えていたからだ。つてかヘッドショットやったんだね、ホヘト。

威力が有りすぎてひどい惨状である。巻物が回収出来て良かった。巻物ごと消し飛んでいたら面倒だった。いやあ回収出来て良かった。回収は出来て良かった。

「……巻物から血がずっと滴り落ちてますけど、読めますよね?」

「本当におたくら、なにやったの」

巻物の奪還も無事に終わり、俺とホヘトは北東部の陣へと戻ったが、何やら慌ただしい。自分の準備が終わったのか、俺たちの荷物までまとめているトンボに声をかける。

「何かあったのか？」

「やつと帰って来た！渦潮隠れの里が襲撃されてるみたいなんだ！衣類や食糧、丸薬や医療パックまで全部まとめといたから、忍具の準備だけ早くして。あと、そこに軽食作ってあるから食べといて」

「お、おう」

そういうと他にも準備などするのだろう、飛び出して行った。

「あいつ、良い嫁さんになるな」

「男ですけどね」

それから急いで、また俺たちは渦潮隠れの里へと向かっていた。どうやら巻物強奪でさえ困ったのか、犯人を倒して程なく襲撃されたようだ。こうなると霧隠れと雲隠れの連中は共同戦線を張ったのだろうか。不確定要素が多く雲隠れの連中にも警戒しなければならぬいかもしれないが、里を落とされてはどうにもならない。

渦潮隠れもそう判断して援軍を求めたのだろう、他の沿岸部の警戒にあたっていた班も続々と里に向かっていているようだ。

「よし、ここで他の班と合流する。揃うまでの間に戦場の情報を探るぞ」

「すぐに向かわなくても良いの？」

「俺たち一班で出来ることには限りがある。個別で主戦場へ援軍に行くよりも、まとまって行動した方が作戦に幅が出る」

「わかった。しかし揃うまで何もしないのは、時間がもったいないな」
「ええ、ですからツメさんとホヘトで偵察してきて下さい。この先に高くなって箇所がいくつもありそうなので、そこから戦況の把握をお願いします。黒丸も頼むぞ、後で特製干し肉あげるから」

「ふん、そんな物無くても行くさ。ほれさつさと行くぞ」

黒丸は格好をつけて走って行った、けど今度から尻尾と涎を抑えてから言うんだぞ。

ホヘトさん達が偵察から帰って来たタイミングで、ちようど全ての監視班四小隊が揃った。俺たちのすぐ後に来た二班は、中忍二名に下忍二名。最後に来た班は俺たちと同じ上忍一名に中忍三名の構成。これなら充分に戦えそうだ。

渦潮隠れの里は海からほど近い丘の窪地、いわゆるカルデラの中心にある。そのため外縁部は小高くなっており、そこに防衛ラインを張って交戦しているらしい。

「ホヘト、詳しく説明してくれ」

「里を中心に今、俺たちがいるのは二時の位置です。敵は五時から九時の位置に展開していて、こちらはその敵に呼応する形で防衛しています。先ほどから、こちらの別動隊が準備をしているようでした。おそらく敵の手薄な十時の位置から側面を突こうと行動するつもりだろう」

「よっしーそれだけ分かってりや充分さ、さつさと俺らもその別動隊に合流しようぜ。俺が敵を蹴散らしてやるさー！」

最後に来た班の上忍がそう言い、飛び出して行くこうとする。俺が説明する度に嫌そうな顔をしていたから予感はしていた。

「待てー我々は観測地点に一班残したうえで、他の三班で四時の位置から敵に奇襲をかける。敵の両側に奇襲をかければ、包囲出来るかもしれない。仮に包囲出来なくても合流して味方をフォローできる」

「は？コネと運に恵まれて成り上がった小僧が、偉そうに言ってるじゃねえよー！」

あまりにも早い上忍への昇格への反発、恐れていたことが最悪のタイミングで起きてしまった。推薦上忍が相談役と火影でありコネなのは間違いない、例え名のある首を討ち取ったとしても周りはそうは見ない。

まったく、こんな馬鹿が上忍になれるなんて。戦争するのは嫌だ。

ま、俺も戦争中じやなきや無理か。

「待て！あんな遠いところまで行っても到着した頃には奇襲は終わってる！別動隊も本隊と合流しているぞ。それよりも……」

「分かった分かった。貴様はそうやって調子に乗って講釈たれてろ。そんで一人で勝手に死んでろ、俺を巻き込むんじゃねえよ。まともな奴は俺についてこい！」

上忍は俺の言葉を聞かず、俺の班以外を連れて別動隊の方に向かって行った。

「坊ちゃんが調子乗りやがって」

「ほんと家柄だけの奴って嫌だよな」

「ここで俺らも手柄上げれば上忍になれるかもな」

「おう、したらあつという間に火影になってお前らをこき使ってるさ」

「おうおう、勝手に言ってる」

去り際にあの上忍の班にいた中忍が、口々に何かを言っているが、そんなことに腹を立てている場合ではなかった。

「ヨフネ君、どうする？」

「一班だけになったからな……よし、最初の観測地点まではみんなで行こう。移動しながら作戦案を伝える」

俺たちも行動を開始した。観測地点も確認しておきたかった。

「まずは俺が一人で最初の観測地点に残るから、ホヘトをリーダーにして他にも観測地点となりえる場所が無いか探して欲しい。あればトンボに結界法陣を張らせて下さい」

「分かりました、隊長はどうするんです？」

「観測地点なんだから見通しは良いんだろ？何とか一人で狙撃してから合流する。俺も結界法陣は張れるしね」

「敵に遭遇したら殲滅で良いよな？」

「そうですね、敵の感知はツメさんと黒丸、トンボに任せます」

「なら、俺は観測地点の発見ですね。っと着きました」

そこは岩場で身を隠すことは出来ないが、手前の戦場と里内部までが見えた。ここならば狙撃可能だ。

「それじゃ、敵斥候部隊の殲滅、及び観測地点の確保をよろしく。無理はしなくて良いです。コン平の分身を一体預けるからすぐに呼んで下さい」

俺がそう言うとコン平の分身が、ホヘトの胸ポケットに潜り込んだため、不自然に膨らんでしまっていた。

「狭いところが好きだから、入れてやってくれ。では頼んだぞ」

「「おう」」

みんなが行くとすぐに俺も準備をする。一人での狙撃は初めてだがやるしかない。岩場に伏せて雷刀を両手に持ち腕を突き出し、念力で望遠鏡を目の位置に固定する。距離は直線距離で2km、弾を考えるところが最大射程だ。まずは一発撃ってみる。

しかし、狙いよりもだいぶ手前へずれた位置に着弾する。おかげで敵からの攻撃と警戒され、こちらの方角からも身を隠していた。

だが、隠れている位置が分かればそれごと撃ち抜けば良い。弾丸に風のチャクラを纏わせ、敵の遠距離部隊を狙う。巻物奪還から少し時間がたってチャクラが回復したとはいえ、あの時に六発ほど撃っているから、これからの戦闘で近距離戦のみ行うとしても後三発が限界だ。

先程のズレを考慮して照準を合わせ、一発、二発、三発と弾が音を置き去りにして飛んでいく。一発で確実に当てて倒せるほどの技量は無いため、全て撃ち尽くした。

望遠鏡で確認すると、さすがに遠距離部隊を壊滅させてはいないが、見えない攻撃に警戒して攻撃の手が緩んでいた。これで五時の位置の戦場はこちらが多少は有利となるだろう。

その後、起爆札を四枚取り出して今いる地点を囲むように四方に設置し、結界法陣を張った。結界法陣とは四方に貼られた起爆札のエリア内に敵が入り込むと起動する、時限トラップのことだ。

最後の起爆札を設置し、結界法陣を張る。その後で枝を利用し味方に分かるように枝を地面に刺してサインを作った。そこまでしてようやくコン平のナビの元、ホヘト達の元へと向かった。

「おかえりなさい、一人でやる狙撃はどうでした？」

ホヘトがニヤニヤしながら聞いてきた。そんなに失敗した話が聞きたいのか？どうせお前ほどのセンスはないですよ。

「思ったよりも難しいな。四発撃って何とか敵の遠距離部隊にダメージを与える事が出来た」

「えっ、そんなに撃ったんですか？ということは」

「そうだ。これから先は近接戦闘しか出来そうにない」

雷刀を持っているからといって無理をしすぎたかもしれない。ただ身体強化を使えばそれなりに戦えるし、身体強化が使えなくなっても俺には剣術もある。

「ならホヘトとヨフネのツートップだね。あたしと黒丸に中距離は任せな」

「はい、トンボは後方からの支援を頼む」

「分かったよ」

ツメさんが即座に提案してくれ陣形が固まった。あとは観測地点の様子を確認して作戦を詰めなくては。

「そちらはどうでした？」

「観測地点は三箇所、それぞれにトンボが罠を仕掛けた。敵との遭遇は無かったぞ」

「了解です。既に味方の別働隊が十時の位置から攻撃を始めたところです。こちらの方向に敵が流れてくる前に奇襲をかけます」

上手く味方も呼応すれば、左右から敵が退き中央部分は混乱するだろう。まあ、そう上手くいくとは思えないが。

作戦通り四時の位置の近くまで来てみると、上から見るとの違い予想以上に苦戦していた。相手が死に物狂いなのだ。狙撃の後からこちらが押しているのに、なかなか押し切れぬ。

「マズいな、早めに敵の隙を作らないと。トンボ、派手な土遁を敵にやってくれ。その後は外縁部にいる味方に包囲するよう伝えてくれ。あとどこかに塹壕を作ってくれていると助かる」

「分かった！いくよ、土遁・土石筒！」

トンボが印を結び地面に手をつくくと、敵の足下から筒のような岩が

無数に出現し、何人かを貫いた。それを合図に俺たちは飛び出す。

俺は距離をつめてトンボが作った岩を思い切り殴りつけ砕いた。それをこれまた思い切り蹴り飛ばす！

「ぐアッ！クソがアなめるなよ！」

耐えた敵の一人が俺に向かってくるが、ホヘトが敵のこめかみ目掛けて上から切り落とすかのように掌底で撃ち抜き、敵を地面に叩きつけた。

突っ込んで来る他の敵から逃げるように飛び退き、敵が突出してくるのを誘う。

「犬塚流・人獣混合変化・双頭狼！」

そうすると、ツメさんと黒丸が巨大な二つ首の狼へと変化した。突如現れた巨大な狼に敵が戸惑っている。

「驚くのはまだ早いよ、行くよ！獣人体術奥義・牙狼牙！」

そう言う二人？二匹？いや一匹は体を高速回転させて敵に突進して行く。この術は本来、あまりに速い回転をするため、術者自身の視界が奪われるため相手にマーキングする必要があるのだが、これだけ敵が多いと位置なんて関係ない。また回転中は真空を生むため、避けた敵に直接触れないにも関わらず裂傷を負わせていた。

ひとしきり暴れたツメさん達が戻って来たタイミングで、一先ずは奇襲は成功かと思いきや、すぐに持ち直してこちらへの攻勢を強めてきた。数の上では圧倒的に不利なこちらは本隊との合流をしたいのだが、そのルートを断とうと攻撃が集中している。

トンボを早めに伝令に向かわせたのがせめてもの救いだ。援軍がやってくるまでは耐えるか敵の集中放火を掻い潜るしかない。

「囲まれるのだけは避けたいな。ヨフネ隊長どうするよ、留まるか集中放火を抜けるか」

「足を止めたら、こちらの良さはなくなる。突破しよう！」

「そうこなくちゃな！あたしらが本隊へのルートに牽制している連中に突っ込む！その間にあんたらは移動しな」

「だが、それでは！」

「安心しな、突っ込むだけじゃなくて、あんたらの匂い辿って牙狼牙で

戻ってくるから」

「え、っ、それって」

「ちゃんとあんたらは避けるよ。子供もいるんだ生きて帰るさ」

「分かった。頼む」

「よっしゃ！行くぞ、牙狼牙！」

巨大な双頭の狼が敵に突っ込むのに合わせて、トンボが作ってくれていた塹壕に向かって、ホヘトさんに続き俺も走り出す。

しかし敵もこちらの狙いが分かっているのだろう、ツメさん達の攻撃で討ち漏らした数人が水弾を放ってくる。攻撃は見えるがどうやら避けきれそうにはない。

水弾の幾つかが直撃し、体が軋む音をあげながら俺は地面に叩きつけられた。やっぱりあの距離は一番苦手だ。

「ヨフネ隊長、大丈夫ですか?!」

「やばいかも、左腕が折れたっばい。それより早く塹壕まで！敵とツメさんが迫ってくるぞ！」

「では、ツメさんと敵を挟んで一直線になるように移動しましょう」

「そうだな、戻って来るツメさんに敵をやってもらおうとするか」

折れた腕を庇いつつ、必死に走ってツメさんを誘導するが、俺のせいで敵の接近の方が早くて間に合いそうにはない。俺は丸薬を飲み、折れた左手を念力で動かして印を結ぶ。

「雷遁・電磁砲二連！」

全身ボロボロの俺からの反撃に敵とホヘトの驚く顔が見えたのを最後に俺は気を失った。

「……知らない顔だ」

「まだじつとしいてください」

天井がなかったが、とりあえず言ってみる。寝かされて医療忍者の女の子から手当を受けているということは、どうやら無事だったようだ。しかし、少し術使っただけでこれだ。

「戦況はどうなりました？仲間は何？」

「貴方達が敵を引きつけてくれたおかげで敵を分断して、今は四時と十時の位置で戦闘が激しくなっています。お仲間さんは傷を負ってはいますが、全員あなたよりは無事です」

「そうか。あ、ところで俺ってどんな状態？」

「順番が違います。もうそつちが先でしょ。左腕の骨折と打撲、それにチャクラ切れ。寝てたらすぐに動くことは出来るようになるので……」

「ヨフネ君！」

医療忍者の話を遮り、凄い勢いでトンボが飛び込んできた。これが美人な女性なら嬉しいんだけどな。

「コン平が目が覚めたって教えてくれたんだよ」

「クオン！」

コン平が手に顔を擦りつけて来るので、頭を撫でてやる。

「そうか、トンボの呼んでくれた味方が間に合ったんだな」

「遅れてごめんね」

「お前のせいじゃないさ。あの腹立つ上忍が言ってた通り俺が調子に乗ってたのさ」

「それでもあの人たちがいたら！」

「……関係ないさ。いなくなっただのに決行したのは俺だ。観測地点の防衛に専念すべきだった」

いや本当に調子乗ってたわ。超電磁砲もあんなポンポン撃って。中距離で手数が多い術や大規模な術に弱いとは分かっていたけど、ただの水弾にやられるとか。

「ところでヨフネ君は気付いた？敵の首に鎖が着いてたの」

「ああ、ほとんどの奴らが着けてたな」

「あれね、行動を縛る呪印が刻んであったみたい。たぶん死を恐れないうようにする呪印みたいだって言ってた」

「それであんなに死に物狂いだっただったのか」

「どうやら反対側の敵もつけてるみたい」

「……だとすると、マズいかもしいない」

敵の両側の奴らが捨て駒扱いということ、敵本隊はまだ温存され

てるってことだ。何か仕掛けるつもりだろう。

「早く呪印を解除して、情報を聞き出さないと」

「鎖は本人のチャクラを使って強化されてるみたいで、気絶する位にチャクラを使い切るか、死なないと解除も切ることは出来ないみたい」

全くタチが悪い。味方も本隊の不気味さには気付いてるはずだ。これしか打つ手はないのか？

「本隊も流石に気付いてるだろう？何か手があるのか？」

「よく分かんないけど、どんな攻撃でも防げるって自信があるみたい」
何か嫌なフラグ建てたかな？里内部で治療受けるより、ここにいた方が安全かもな。

未だに戦闘は続いているようで、絶え間なく金属音が聞こえてくる。ふと遠くの空を見ると竜巻でも起こったかのように、二箇所海水が巻き上げられていた。それと同時に里の上空に暗雲が立ち込める。

「マズい、奴ら高域術式を使うつもりだ！全てはそのための陽動か、仲間を犠牲にして」

高域術式とは発動に八名ほど忍者を必要とする忍術のことだ。あらかじめ数年かけチャクラを封印した巨大な巻物が必要となるが、状況に合わせて忍術の選択が可能である。しかし射程距離が短く、発動にも時間がかかる上、発動術者は難しいチャクラコントロールが必要など制限もあるが、発動してしまえば並みの術では防げない。

さらに海面が盛り上がり、それが二匹の巨大な龍を形取る。龍は上空へと昇り里を目掛け落ち始めた。

すると、里から上空に向けて結界が張られた。なるほど、確かにかなり強力な結界なのだろうが、二匹の龍に対するにはあまり小さい。い。

oooooooooooooooo

まるでスコールのように里に海水が降りかかる。あれでは中心部は水没してしまっただろう。しかも、それだけではなかった。里の上空に立ち込めていた暗雲から紫色の閃光が走ったのだ。

ーードオゴオオン

自然発生の雷よりもはるかに太い雷が里へ落ちた。水龍はこの雷での被害を増やすためのものだろう。里のいたる所から煙が立ち上り始めた。

「……完全にやられた」

「……敵の攻勢が強まるだろうね。僕も前線に出るよ。ヨフネはここに
いること！今は役立たずだからね」

トンボにしつかり釘を刺されてしまった。……悔しい。この状況で何もできないなんて。医療班は徐々に島の北東部の方向へと撤退していく。

里が壊滅した後、渦隠れの部隊に徹底的に攻撃を加え、捨て身の攻撃をされては敵わないと考えたのか、敵はすんなりと撤退していった。ここからは国同士の話となるだろう。

渦隠れの里は事実上消滅したのだから。

渦潮隠れの里は壊滅状態となったが、それでも心が折れなかった渦潮隠れの忍による必死の攻勢により、霧隠れの忍たちを撤退させることに成功した。彼らは不利になったと理解した途端、例の呪印に囚われた忍たちを殿として利用し、あつさりと撤退して行った。

こちらの被害は言うまでもなく甚大で、特に防御結界を張るために里に残っていた、うずまき一族を始めとする忍たちはほぼ全滅してしまった。俺たちも生き残った木の葉の忍を集め被害状況の確認を急いでいた。

「そうか、監視班の生き残りは俺たちの班とお前だけか、サンタ」

「はい、僕たちが到着した頃には、ヨフネ隊長の仰っていた通り奇襲は成功し、さらには本隊とも合流していて、こちらが戦況を優位に進めているところでした」

「やっぱりそうだったか。でもどうして、その状況で君以外は死んだんだ？」

「戦況が膠着し始めた頃、自分たちでこの状況を打破すると言って、周りの制止も聞かずにみんなは飛び出したんです。僕も反対したんですが臆病者はそこで怯えてると言われて……その後、敵に混戦に持ち込まれてしまいました。それから他の隊長たちは見ていません」

他の監視班の戦いは、生き残った忍から聞けば聞くほど酷いものだった。監視班は普段は戦場では手柄をあげにくい為か功を焦ったのだろう。同情は出来なくは無いが、それにしたって戦況に混乱をもたらしただけとは同じ木の葉として恥ずかしい。

結果、生き残ったのは反対した山中一族の下忍、山中サンタだけだったようだ。子供にも分かることをあの上忍は気付かず、多くの死傷者を出すきつかけとなってしまうた。

「サンタ、お前が気にすることじゃないさ。いいか、立場が上になったからといって全員が視野が広くなるとは限らないんだ。逆に視野が狭くなる人間だっている。本来の目的を言い訳にしてね」

「……でもヨフネ隊長やカカシ先輩は僕と三つしか違わないのに立派に上忍をやっています」

「今はね。でも長くやっていると駄目になる人だっているんだ。木の葉の為に自分も強くなるというのと、自分が強くなれば木の葉が強くなるというのは、似ているようで違うんだ」

「それは……なんとなくわかります」

「そのことを覚えていれば、あの人たちのようにはならないさ」

とりあえずサンタは俺たちの班に組み込む事にして、次に渦隠れの里に駐留していた部隊の被害を確認した。こちらは負傷者はいるものの、どうやら全員無事だったようだ。

しかし、これらのことにより渦潮隠れの忍は木の葉に対して不信感を抱いたようだ。そもそも、その下地はあったのだ。初代火影はどうか知らないが、うずまき一族は人柱力が死ぬたびに一族から一人を木の葉に身売りすることで、同盟を維持してきた事実は変わらない。

そんな中、渦潮隠れの危機にも関わらず、彼らからしてみればたった二個中隊しか寄こさず、主戦力は被害無し。しかも被害が出た部隊は戦場を混乱させたただけだ。しかも厄介なことに死体が見つからないのだ、これでは逃亡も疑われてしまう。馬鹿は死んで尚、迷惑をかけてくれていた。

おかげで居心地が悪いったらありやしない。流石に霧隠れを手引きしたと思っている人は殆どいないだろうが、俺たちが積極的に助ける気がない、見捨てる気だと考えている人は多いみたいだ。

その為、この居心地の悪さから逃げるために俺たちは夜間の見張り役を買って出ることにした。俺も倒れてから一日以上経っており、チャクラはある程度回復している為、腕は折れているものとりあえず動けるので、コン平と見張りをすることにした。

「まったく、碌に休めやしない。あそこにいるよかマシなんだけど……」

思わず、愚痴も出るってもんだ。今の俺は戦闘があんまり出来ないってのに、こんな事でもしないと何休んでんだって目で見る奴もい

る。コン平頼みだけど外で寝ていた方がまだマシな気がした。

「クウォーン！」

「コン平さん、まじっすか」

最悪だよ。何でこんな時に敵なんて見つけるかね。上手く隠れとけよ、全く。

「ん？敵は俺と変わらない子供一人か」

それならばどうにかなるかな？縛ったうえで尋問して最悪の場合、敵意剥き出しの相手なら殺せば良いか。

「なんだ、コン平？」

「キュー、コンクオン」

「そうか、鎖による呪印を付けられた女の子がいるのか……掴まっても碌なことにはならんよなあ」

忍って凄いやね。いつの間にかコン平の言いたい事が伝わるようになってる。人語話せないから他の人には伝わらないけど。

「ま、とりあえず行ってみるかね」

どうやら崖の下にある小さな洞窟の中で傷を癒しているらしい。トラップを張る余裕も無かったのだろう、コン平からは何も報告はない。

奥に進んで行くと同年代の茶髪の女の子が岩陰で気絶していた。まずは縄で縛って拘束する……ロリコンちゃうからな！

右眼に傷を負っているようで、雑に包帯が巻かれていた。取り外すと眼球には傷は無いが、右眼周辺に火傷をしていた。

「あとは右手と腹部か。結構酷いな、チャクラも弱まっている」

気絶していたので一旦縄を解き、服を脱がしてから、ロリコンじゃないと自分に言い聞かせながら再度縄を後手に縛った。呪印にチャクラを吸われ過ぎたせいで気絶しているようだ。止血だけして、とりあえず解呪することにした。

「コン平頼むぞ……狐式・五芒星解印！」

コン平を五角形の頂点に配置し印を結ぶ。すると少女を中心に地面に五芒星が描かれ始めた。これは自来也様から教えてもらった五

行封印を基にしている。あれは片手の五指に五行のチャクラを込め、対象に打ち付ける形で封印の術式を刻み込む超高等忍術だ。

俺は雷と風に強い適性を持つが、その他は水に若干の適性が有るのみだった。その他は修行したところで習得出来そうにない。水に關してだって俺は水場でようやく1ℓを操れる程度だった。

そこで前世での陰陽師をイメージして五芒星の頂点に俺のチャクラを纏わせたコン平を配置することで、ただのチャクラでも発動が可能となるように改良したのだ。

封印に関しては五行封印程の拘束力はないが、その反面、五芒星解印では弱まった呪印程度なら解除できる等、汎用性が高くなった。

「……パキッ！」

「よし！鎖が壊れた！初めて実戦で使ったから不安だったんだけど……」

「……う、ううん……ん？」

鎖が壊れると少女は目を覚ましたようだ。縄を解かなくて正解だな。

「良かった、目を覚ましたか」

「っちー誰ですっ……くっ！」

俺が声をかけると飛び退いたが、すぐに膝をついてしまった。

「はいはい、お約束の反応ありがとう。怪我してんだから無理すんな」

「お約束？」

「気にすんな。ってかそれより身体隠すとかしなくて良いのか？」

「なっ、ななな何をしたんです！変態！」

「ロリコンちやうわ！子供相手に興奮するかボケ！手当てしただけだよ！」

そういうと俺から前を隠すように凄い勢いで後ろを向いた。念のため身体を確認していたようだったが、すぐに首元から鎖が無くなっていることに気付いた。

「……無い、鎖が無くなってる」

「ある意味ラッキーだったね。気絶する程度までチャクラ吸われてたから、壊すのは割りと簡単だったよ」

「貴方が？」

「まあね。まだ止血しかしてないから横になってよ」

そう言うとうまく素直になってくれたようだが、やはり恥ずかしいのだろうと思い、胸元を服で隠して横にさせた。

「貴方、木の葉の忍ですよ？なぜ敵の私に優しくしてくれるんですか？何が目的です」

「うーん、まずは鎖が解除出来るのか試したかったのが一つ。次に情報を少しでも喋ってくれないかという期待かな。あとは……まあ女の子をこのまま見殺しにするのは目覚めが悪いからってのが理由かな」

「そうですか。素直なんですね」

そう言いながら、はにかむ少女は可愛かった。

「ありがとうございます。そういえば君の名前は？あー下の名前だけでも良いから教えてよ。なんて呼べば良いか分からない」

「別に私が苗字を言ったところで、鬼灯一族みたいな名門ではないから困りませんよ。私は照美メイ。遅くなりましたが、助けて頂いてありがとうございます」

「えっ」

思わず変な声が出てしまった。俺って本当についてないよな。こいつって五代目の水影でしょ？って事は俺が手出ししなくても助かったんじゃない……捕虜として突き出すわけにもいかないから、逃亡の手助けするしかないじゃん。

「き、気にすんなよ。俺はうたたねヨフネだ、よろしくな。答えられる範囲で構わないから、良かったら質問に答えて」

「分かりました」

「まず、あの鎖だけど死の恐怖を強制的に失くさせた上で、命令を守らせるってことで間違いないよな？」

「そうです。三代目水影様に対して批判的な立場を取る者に対して、死を恐れぬただの駒として動くよう命令されていました」

効果は予想通りだ。それにしても三代目水影か……四代目やぐらに対してマダラが写輪眼で操っていたのは分かっていたが、三代目も

やっぱり……

「なあ、三代目水影様ってそんなに反対の立場取る忍多かつたの?」
「大戦の始まる数年程前から多くなつたみたいです。育てた下忍候補を殺し合わせていた時点で反対する者が増えたいのですが、ある年の卒業試験で桃地再不斬という忍が同級生を皆殺しにしたのです。その時からかなり増加してます」

となると、再不斬もある意味マダラの犠牲者か。このタイミングでマダラが暗躍しているとなると、四代目が完璧な人柱力と呼ばれるのも写輪眼で三尾をコントロールしていたからかもしれないな。

「そうか、ならメイも卒業試験がきつかけで反対に?」

「はい、今回の襲撃に関しても渦の国は水の国からはあまりに遠く対したメリットもないのですが、里にいる者は女子供関係なく皆殺しと言われていました。理由も分かりません」

となると、やはり人柱力候補の撲滅が目的なのだろう。

「クーデターとかはまだ起きそうにないの?」

「水影は里で一番強い者がなる習わし、そうそう叛逆はできません」
それでも何年か後にこの子はやるんだよな。

「なら、君がやれば良い。何年先になるかは分からないけど、仲間を集めて力をつけるんだ」

「え?でも、私は今から……その、捕虜になるのでは?」

「俺が逃がしてあげるさ」

こうなれば、逃すしか俺に道はないからね!

「どうして私にそこまで優しく?」

貴方は水影になる人です。平和のためにも霧隠れの里に戻って下さいってか?そんな本当の事なんて言えるか!

「こ、こんな可愛い子を殺すなんて俺には無理だよ。戻ったからといって無事とは分からないけど」

「か、可愛い?!私が?!」

メイは顔を真っ赤にして、あたふたし始めた。あまり耐性がないのか?今は煽てとくに限るな。

「そうだよ!どうせなら霧隠れに革命も起こしてほしいな。そうすれ

ば平和になって、また君と会えるかも！」

何故か頭が爆発するような音が聞こえた気がする。あーこれ、ひよっとするとやってしまったのかな？煽てすぎたかも。なんとなく気まずい雰囲気になりつつあったので、治療に専念する。

「はい、これで応急処置は終了。右眼の辺りの火傷の跡は多分残らないと思うよ。より詳しい治療は専門の人から受けてね」

「ありがとうございます。でもヨフネさんは医療忍者ではないのですか？」

「俺はどちらかという感知タイプの忍だよ、多分」

そういえば改めて、自分の事を考えるとどのタイプに分類されるのかわからなかった。感知が出来て、電磁砲による遠距離、身体強化を利用した接近戦、応急処置程度の医療忍術……器用貧乏になりそうな気がしてきた。

「どうしたのです?!いきなり項垂れてしまって」

「いや、ちよつと現実的な未来を想像してしまって。それより脱出方法なんだけど、何か海を渡れる方法とか有る？」

「鯨の口寄せ獣と契約しています。まだ呼び出せるのは小さいですが、きつと里までは運んでくれると思います」

「わかった。なら警戒区域の図を描くからそれを避けるように脱出して。あと三時間で交代の時間だからそのタイミングでね」

「いろいろとありがとうございます」

「感謝は脱出できてからで良いよ。俺はそろそろ戻らないとマズいから行くよ」

そう言つて立ち上がり、洞窟の出口へと向かおうとすると、背後から声をかけられた。

「例え失敗しても感謝の気持ちは変わりません。また貴方に会えるように私も頑張ります。頑張りますから貴方も死なないで下さいね」

俺はヒラヒラと後ろに手振って出て行った。

持ち場に戻り、交代要員が来たところで沖の方から鯨の潮噴きが見えた。どうか無事に生き残って、霧隠れの里を平和にしてくれよ。

「ヨフネ君、木の葉は集まらって駐留部隊の人から連絡があつたよ」
俺が打算ありありの心でメイを見送っていると、トンボが呼びに来た。おそらく里からの交代要員とすぐにでも入れ替わるよう、俺たちも撤退の準備に取り掛かるのだろう。この状況下で退くことにより、不信心は決定的な物になるかもしれないが、それが里の決定なら従う他ない。

こうして俺たちの渦の国での任務は終わった。

俺達は失意の中、渦の国から里に帰り報告を済ませた。壊滅の報を聞いていた三代目と婆様、ホムラの爺様も驚いたらしい。ダンゾウは顔をまったく変えずに話を聞いていただけなので、どう思ってるのか分からないが、どうせ駒が一つ消えた程度にしか思っていないだろう。

そういうダンゾウはともかく、正反対に渦潮隠れを友好的な同盟と感じている三代目も相変わらず、うずまき一族には申し訳ないと口にしながらも犠牲を求め続けていた。そういつた行動が不信感を生み出していることに気づかなければ、これから先も火種は生まれ続けるだろう。

よく言うが現場に居なければ感じる事が出来ない事は多いのだ。渦潮隠れの生き残った人々は可能な限り木の葉に招くようだが、果たしていくらほどの忍が来ることやら。

「ヨフネー！今帰って来たのか？」

そんな懸念を抱きながら帰っていると、背後から深刻そうな面持ちのアスマから声をかけられた。しかも喪服を着ている。これは……

「どうしたんだ？」

察しはついてしまっていたが、俺はそれを出すわけにはいかない。

「オビトが……死んだ」

「……そうか」

やはりだ。渦隠れの件で忘れることが出来ていたが、現実はそのもいかないらしい。

「それで今から葬儀なんだ。渦隠れもかなり激戦だったらしいが、トンボも帰って来たんだよな？」

「ああ、俺たちは無事だ」

「良かった。情報が入って来てから、ずっと心配してたんだ。シズネなんかは見えていられないくらい動揺してたんだぜ。あいつも葬儀に来るから準備して顔出せよ。トンボには俺から伝えとくから」

「ああ、分かったよ」

そう言い残すとトンボの家の方にアスマは飛んで行った。正直、どんな顔をして行けば良いか分からないから行きたくはない。

俺も喪服へと着替え、足取りを重くしながら葬儀場へと向かった。葬儀には同期だけではなく担当上忍のミナト先生や一期下のシスイ等うちは一族の面々が参列していた。近くに居たりんやカカシは声さえ聞こそ出していないが、その涙は止まることを知らなそうだと。そんなカカシに対し、うちは一族から批難の視線が浴びせられていた。

「眼を奪う時間があるなら、何故助けられなかったんだ」

「あのサクモの息子ですもの」

「そもそも、あんな年の子供に上忍なんて任すから」

「白い牙の息子に相談役の孫。我ら、うちはとは扱いが違うのさ」

そんな憎悪が向けられながらも言い返す事もなく、ただ涙を流すカシの様子を見て尚更やりきれない気持ちちが溢れてくる。

オビトはマダラの所に向かつて貫わなくちやならない。俺がそう選択したからこそこの状況だ。例えば教えたところで何が出来たかは分からない。それでも里へと帰ってくる可能性を上げることは出来たが俺はそうはしなかった。

卑劣と呼ばれても構わない、俺は小を殺し大をとると決めたのだ。

自責の念しか浮かばない葬儀は長かった。

悪い出来事というのは戦争の続く限り簡単には終わりはない。オビトの葬儀から半年が経った頃、俺は茶の国で霧隠れに対する防衛線に参加していた。

俺とカカシはそれぞれ小隊を率いて偵察に出たのだが、その際に敵の部隊と交戦になった。しかも俺達が敵を倒してカカシと合流した時にはリンは攫われてしまっていた。

「俺とヨフネ以外はここに残れ」

「隊長！増援を待ちましょう」

「時間はない、霧隠れはリンを何かの実験体に使おうとして攫ったんだ。血霧の里まで連れて行かれたら、もう助けることは不可能だ」

「しかし二人では無理です」

「二人じゃない……口寄せの術！」

「ーボフンツ」

音とともに現れたのはパツクンを始めとする忍犬たちだった。それよりも何でお前ら勝手に俺を頭数に入れちゃってんだよ。

「リンの匂いは？」

「覚えておる、任せろ」

もう決定事項なのか？俺の意見は何も言っただろ。しかし匂いを覚えてるって変態くさいな。

「増援が来たら伝える。俺たちはリンを追って先行したと」

「分かりました」

「ヨフネ隊長もこっちの心配はしないで行ってきて下さい」

おお、心優しい俺の班員たち……お前らもか。俺はカカシやオビトにトラウマを作りたく無いんだけどな。

「カカシお前変わったな。前までは掟やルールに縛られていたじゃないか」

「そうだ、忍の世界において掟やルールを守れない奴はクズ扱いされる。でもな、オビトが教えてくれたんだ、仲間を守れない奴はそれ以上のクズだってな！」

はあ、人間こころも変わるのかね。この世界の忍は周りの意見に流され易すぎる。

「まったく……それにオビトのように人の話を聞かなくなったよな」

「そうか？」

「自覚ないのが一番タチ悪いわ！」

ここでオビトにマダラの元に戻ってもらい、マダラには自殺してもらわないといけないのに、どうするか……

そもそもオビトはもう少しはマダラを疑えよな。いくら霧隠れが非人道的な実験を繰り返しているとはいえ、その実験体がリンである必要が何処にあるんだ。

それに今回の実験の目的は三尾を人の体に封印するというものだ。人柱力を作り出す為の実験の成功率はこの里でも限りなく低いが、代々封印に成功している木の葉に持ち帰らせて、支配下に置かれたらどうするつもりだよ。新しい人柱力が誕生する可能性という馬鹿でかいリスクがあるんだ。作戦の穴に気付けよ。

……あつ！まさかそのための渦潮隠れの里の襲撃なのか!? 九尾は生命力が高く、封印術に長けたうずまき一族が必要だ。その為に次世代の芽を摘む為かと思っていたが、まさか三尾まで絡んでいるのか？ それは置いておくとしても、白ゼツが偶然にも顔も知らないカカシを見つけて、偶然駆けつけたタイミングでリンの死亡を目撃する。さらに偶然にも出て行く前にマダラが自分の意思で戻って来ると宣言しているんだ。そんな偶然あるかよ。計画だけ利用すれば良かったものを……

カブトさえ余計な事をしなければ、マダラが生き返る事は無いのか？ オビトがどうするつもりだったのかは分からないが、今回の俺の役割はカカシの生存率を少しでも上げてやるのが先決だな。

と別の事を考えていて、カカシにハンドシグナルで止まるように促されると、条件反射で止まることができた。習慣ってのは凄いな。

「あの、洞窟の中じゃ」

パツクンの言う通り、確かに荒野の中に洞窟があった。そしてその周囲を霧隠れの追忍たちが警戒している。あそこにリンが居ると見て間違いないだろう。

「しかし、思ったよりも敵が多いな」

「そうだな、忍犬達だけじゃ囿は難しいだろう。俺も一緒に敵を引き付けておいてやるから、お前は土遁で横穴でも掘って救出しろ」

「すまない」

「この位置から電磁砲を連射すれば、多少は数も誤魔化せるだろ。お前は早く行け」

「分かった」

カカシが俺から離れたのを確認して印を結び準備し、残された忍犬四匹にも指示を出す。

「お前達はカカシとは反対方向への逃走ルートの確認と罠の設置を頼む。一匹は俺と一緒にしてくれ」

「「「分かった」」」

忍犬達が逃走ルートの確認に向かう間、俺は見張りの位置を確認する。

「よし、見張りの八人を確認した……行くぞ、雷遁・電磁砲四連！」

術の発動と同時に入り口から離れた所にいる四人を正確に撃ち抜く。

「木の葉だ！木の葉の忍だ！」

「四人が一瞬でやられたぞ！どうなってやがる！」

「敵は最低でも小隊規模だろう気をつけろ！」

「いたぞ！あつちだ、追え！」

よし、食いついた。俺もさっさと移動するかな。洞窟から続々と敵が出て来ているしな。

「よし、このまま敵を引き付けるぞ」

忍犬の誘導に従って逃走を始めるが、流石に霧隠れのエリート、追忍部隊だ。そう簡単には罠にかかってはくれない。しかし、進行速度を落とすことは出来た。

「相手の人数は確認できたか？」

「ああ、少なくとも一個中隊が追って来ている」

忍犬に数を確認すると、想像以上に食いついてしまったらしい。これはマズい。

「拙者ら忍犬は戦闘タイプではないからの」

「分かっているさ、陽動と足止めをメインでやってもらうつもりだ。ヤバくなったら逃げろよ」

「追い詰められたら退散するまでよ。おまごそ気をつけろよ」

口寄せ獣は羨ましいな、まったく。なら遠慮なく陽動してもらおうとするか。

「俺は隠遁を使って待機して、背後から奇襲をかける」

「大丈夫なんだろうな？」

「俺の術を食らえば、生きてはいられないだろうし、避けられるもので

もないさ。作戦を説明するぞ、先ずはお前らで逃げてくれ。だがあまり洞窟から離れるなよ。離れ始めたら大きく左回りに迂回して洞窟に戻るように逃げてくれ。逃げる途中で敵の気配が消えたら一旦足を止めて、再度進むんだ。余裕があれば罫の設置を頼む。分かったか？」

「おう！」

「それじゃ、散！」

忍犬達が行くのと同時に俺は隠遁で隠れることにする。

「木の葉の奴ら速いぞ」

「だが我ら追忍部隊から逃げれると思うなよ。犬を連れているのか、ゲロ以下の匂いがプンプンするぜ！」

先導している追忍は犬嫌いなのか迷言を残して追って行ってくれ。後続の奴らから順に倒すか。隠遁を解除し印を結ぶ。

「雷遁・電磁砲四連！」

手で眩い光を一瞬輝かせた時には、後続の連中は悲鳴をあげる事もなく倒れた。後ろでの光に気付いたとは思わないが、再度隠遁を使い身を潜める。

「糞っ！まただ、いきなり後続の奴らがやられたぞ！敵はどんな術を使ってやがる」

「だが、連中の足も止まったようだ。どうやら術を使用する際には足を止めねばならぬようだ。三小隊に分かれて追うぞ。お前らは左右から追うんだ」

「はっ！」

よし、うまい具合に分散してくれた。戦術の基本は各個撃破、戦力の分散は邪道だぞ。せっかく背後から奇襲できるんだ遠慮なく新しい術を試させてもらう。

俺は胸のポケットから拳大の球体を四個出して身の回りに浮かべた。新しく作ってもらったカラクリだ。渦潮隠れの一件で自分が対多数戦闘に有効な手段を持っていない事を痛感して考えた結果、傀儡の術に興味を持ったのだ。

木の葉に傀儡使いはいないが砂隠れの下忍向けの教本を入手する

ことが出来たのだ。チャクラ糸自体は大して難しいものではなかった。ただチャクラ糸で傀儡を宙に浮かすにはチャクラが必要とされるし、操作する本人は慣れるまでは満足に動く事すらできないらしい。俺にとつては死活問題である。

そんな俺には念力という力がある。この力で身の回りに傀儡玉を浮かべるようにしたのだ。こうすれば仕込みを発動させる糸一本で済むため、最大で十個まで同時に扱うことができるのだ。といっても今はまだ四個が限界なのだが。

傀儡玉には毒千本が仕込んである。糸を引くことでそれが勢いよく飛び出すという簡単な仕組みである。これで中距離の手数を増やす事が出来る。まずは右方向の敵からだな。

「お前で最後だ」

「うわアっ何なんだよ。俺に何をしたんだよ!」

「ま、言った所で理解はできないでしょ」

パニックになっている最後の敵の背後に立ち、喉を搔つ切つてやる。電磁砲で一人殺してから仕込み千本で体を麻痺させてから背後から一撃を与える。あまりに上手くいきすぎて単純作業と化してしまった。

しかし、この戦闘でかなり時間を取られてしまった。少し色んなパターンを試しすぎたかな?でも単独行動する時には非常に有効だと実感できた。

「お主、本当にやりきったのか」

「まったく、仲間のことは信じとけよな。でも怪我はないけどチャクラがギリギリだ」

敵の気配が無くなり忍犬達が引き返してきた。

「走れるようならカカシの所へ急ごう。匂いはかなり遠くなっているが、まだ感知できる」

「頼んだ」

これでカカシを死なせてしまえば、将来オビトに勝つのは不可能になつてしまう。急ぐ他ないだろう。

「こ、これは……?」

「どうした? カカシに何かあったのか?」

まっすぐにカカシの匂いを辿って進んでいると、いきなり忍犬達が足を止めた。

「いや、分からないが血の匂いが急速に広がっている。マズいかもしれんぞ」

「でもお前らがいるってことは、まだカカシは生きてるよな?」

「そ、そうじゃな。じゃが急ごう!」

そのまま血の匂いを辿って行くと、この世の物とは思えない光景が広がっていた。忍の体からは冬虫夏草の如く木が生え、それらがさらに他の忍を貫きながら振れるようにして聳え立っていたのだ。しかも木の根元は滴り落ちてくる血や肉で池が出来ていた。

俺はその木を抜けて、池の中央に倒れているカカシとリンの元へと駆け寄った。

「許してくれ、リン」

リンの遺体の胸には大きな風穴が開き、顔は苦痛に歪んでいた。やはりカカシの千鳥によって胸を貫かれたのだろう。自分から覚悟を決めて飛び込んだなら、せめて最後まで笑い顔でいてやって欲しかった。

続いて血の池のせいで重症に見えるカカシの頬を叩き目を覚まさせる。

「おい、起きろ!」

「……………ん、ヨフネ……………リンは?!……………いや、そうだ俺が……………俺が殺したんだ」

「落ち着けよ、一体何があったんだ?」

流石に酷く動揺している。それもしょうがないけど少しは俺の無事確かめろよな。とりあえず忍犬達もいるし事情を聴くか。

「もう一度聞くぞ、一体何があったんだ?」

「ああ、上手くリンを奴らから取り戻したんだけど、奴らはリンに何かを封印したみたいなんだ。リンはいきなり里には帰れない、殺してと

言い出し初めて……それでも必死に敵から逃げたんだが、逃げきれずに俺が敵と交戦になった最中に、リンが俺の千鳥に突っ込んで死んだ……殺したんだ」

「そうか、なら敵は全部お前が？」

「はっ！ そうだ敵はどうしたんだ!？」

「周りを見てみろよ」

そう言ってカカシを抱き起こして周りに広がる地獄を見せてやる。

「誰が、誰が敵を！」

「俺らが着いた時には既にこうなっていたんだ。お前が分からないなら俺も分からない」

話終わるとカカシはリンの元へ這いずり寄り、抱きしめたまま泣き崩れてしまった。今こいつは何を思っているのだろう。援軍が到着するまでカカシが泣き止むことはなかった。

歴史は今のところ原作通りに歩みを進めていた。

長かった戦争もようやく終わりを迎えた。長らく情勢が不安定だった砂隠れの里が、第二次忍界大戦の中期に四代目風影を擁立したことにより、安定の兆しを見せ始めたことが一つの要因だった。

その砂からの呼びかけにより、木の葉との間に同盟が結ばれたのだ。またそれに追従する形で岩との間にも平和条約が結ばれることとなった。ただこの岩との条約については木の葉で物議を醸し出す事となった。

岩隠れが里の命運を賭け約千名を投入した草の国への侵攻作戦、それを神無毘橋の戦いで『黄色い閃光』が只一人で補給路を断ち、侵攻を食い止める事に成功していたのだ。それにより終盤は木の葉にとって戦況が良くなっていた。

それにも関わらず、結ばれた条約の内容は火の国と風の国以外での岩の活動を認めたくえ、賠償請求権の放棄というもので一部からは戦争に負けたも同然だとの声が上がっているそうだ。特にダンゾウは多くの盟友を犬死にさせたのだと猛反対したらしい。

一般の忍達も里の決定には従ってはいるものの、色々思うところはあるようだ。

「聞いたか、今度岩隠れと平和条約が締結されるんだってさ」

「さてね、紙切れ一枚にどんだけ効力があるのやら」

同年代の奴らと団子屋に來ていると、自然とライドウがその話題を口にした。どうやらゲンマは平和条約そのものを疑問視しているようだ。

「んーそれは言えるな」

「お前達も三代目様の苦勞を考えろって」

意外な事に正義一直線のガイも疑問に思っているようだ。珍獣は頭が良いのか悪いのかよく分からん。

「とにかく、長かった戦争もこれで終わりだ」

「ま、長かった戦争に辟易している人は多いでしょ。永遠ならざる平

和でもそれを望む人は多いみたいだぜ。ただ婆様達も岩との交渉をもっとするべきだよな、こつちが有利だったんだから」

「でもこれ以上の戦争継続は疲弊しきった木の葉にとつても致命的っと思う人が大多数だったので、親父も条約の締結を急いだんだろうよ」

素直じゃないファザコン君ことアスマも俺と同じで多少の話は聞いているのだろう、三代目の父親を庇っている。

「でも、今回の戦争の責任を取る形で三代目様が火影を辞めるんですよ？アスマは大丈夫なの？」

最近美少女っぷりに磨きがかかってきた紅は、アスマの隣に座り心配していた。何故これだけ親密で結婚まであと十年以上かかるのか分からん。

なにせよ、忍世界は一先ずの平和を得ることになった。

三代目の辞任から一週間後、婆様から四代目火影が決まったと教えられた。四代目に推薦されたのは大蛇丸にミナト先生の二人だったらしい。しかし大蛇丸の人望の無さ故、火の国の大名や相談役、上役筆頭の奈良シカクが推挙したことによりミナト先生の四代目火影への就任が決まったようだ。

これについては里からは若過ぎるといった声もあるが、*“黄色い閃光”*の異名や戦争での功績、三代目の弟子筋にあたるといったことから大した反対もなかった。

そんな四代目の就任から間もないある日、カカシが任務で倒れたと聞いて俺は見舞いに来ていた。

「お前どんな本読んでんだ？」

「べ、別に何だっつかまわないだろ」

カカシが本を読んでいたの、何気なしに表紙を見ようとすると枕の下に隠してしまった。

「まあ俺らも十五になるんだ、男子同士なんだからエロ本くらい隠すなよ」

「エ、エロッ！違うぞ！そんなもんじゃない、これだよ！」

そうやって投げつけられたのは殺伐とした表紙の本だった。タイトルは『忍はいかにして死すべきか』とある。

「そんな暗くなるような本読んだって別に構わないけどよ、せめて病院で読むのは止めた方が良いと思うぞ?」

「ま、確かにそうだよな……でも過激な表紙とタイトルだけど、中身はかなりマトモだぞ。俺らより一回り上の『ぬまのナマズ』って医療忍者が第二次、第三次忍界大戦を通して様々な人の死を見てきた上で、人が最後に何を思っていたのか、その人がどう思われていたのかをまとめた本だよ」

「む、そう言われるとちよつと興味あるな」

「タイトルだけで買ったんだけど中々面白くてな……でもリンはどういう死に様だったんだろうって考えるけどな」

それって結果的にかなり暗い思考だよな。こいつ将来もイチャイチャパラダイスとか恥ずかしげもなく読むし、遅くなったけど今度上忍祝いにブックカバーでもプレゼントしてやるか。

「うわっ」

「ミナト先生……いや四代目」

カーテンがふわつとなびいたかと思うと、四代目が隣に立っていた。忍には階段なんていらんじゃいかと、最近つくづく感じている。窓は出入口ではありません。

「今まで通りの呼び名で良いよ。だいたい俺が相応しい人材なのか、里の中でも反対の立場の者もいるしね」

そりゃ四代目だって気にするよな。話によるとダンゾウは露骨に傀儡政権だと批判しているみたいだし。

「今日ここに来たのは、君達に火影直属の暗部への配属を命じるためだ」

「は?」

「何故俺なんかを」

「俺の両腕となって支えて欲しい」

「カカシはともかく俺もですか?かなり予想外なんですけど」

「……分かりました」

「そうか、やってくれるか」

「あの、二人とも無視しないで貰えますか？」

この師弟いい性格してやがる。だが俺は負けるわけにはいかない、やりたい事があるんだ。ちょうど四代目が来たんだ、話をさせて貰おう。

「あの！四代目、少し屋上でお話良いですか？」

「……分かった行こうか」

この戦争を通して今まで通りの方法だけではダメなんだとはつきりと分かった。俺の考えを伝えるには良い機会だろう。

「それで、話ってなんだい？」

屋上に着くと四代目はフェンスに寄りかかり、こちらを見ずに聞いてきたが俺は膝をつき畏まって話すことにした。

「まず四代目は先ほど支えて欲しいと言われましたが、それは四代目をですか？それともカカシをですか？」

「それは、両方だよ」

「見捨てるわけではありませんが、カカシは自分の力で乗り切るべきです」

今までの戦争でカカシが初めてのケースとは思えない。自分の弟子だからと甘やかしすぎだ。

「それに自分と一緒に居たところでリンの事を思い出すばかりです」

「君は暗部入りを断りたいのかい？」

「そうです、その上で少し検討して頂きたい事があります」

「話してみなさい」

「俺は固定された中隊を編成し、連携をより深める事で生存率を上げるべきだと考えてます」

初めて大戦を経験して思ったのが、小隊で連携が完成しているため中隊規模となると途端に動きの悪くなる班が多かった。

俺は今まで多くの人を自分一人でどうにかしようとして来た。仲間がいれば全てを、俺が転生者という事をいざれ話さなければならなくなると思っていたからだ。

しかし多くの人を守るには、あまりに力が不足している。俺が信頼

できてある程度行動の自由が利く部隊が必要なのだが、その事はとてもじゃないが説明出来ない。とりあえず建前の理由を話すしかない。「今までの戦闘ではいくら忍が集まろうと、結局は四代目の様な優秀な忍び一人に打破されてしまう程度の連携しか取れていません。任務ごとに小隊や中隊を頻繁に変える。確かに効率的に忍を派遣することは出来るでしょう。しかしそれでは信頼関係や連携を育む事は出来ません」

「渦潮隠れの件は聞いているよ。連携が取れない仲間が……邪魔なのかい」

四代目の眼光が鋭くなった。これは少し癪に障ったかな？しかし、ここで引くわけにはいかない。それに忍は個々の戦闘力が高い割に、というよりも高いが故、連携が不足しがちなのだ。

猪鹿蝶のコンビネーションは確かに有効かもしれないが、他の忍にだってもつとやりようはある。彼らが勇名を馳せている事が、他の忍の連携が拙いという証拠でもあると考えている。渦潮隠れの件のようにプライドばかり高い忍が多いのもその一因である。

「そうです。任務の達成率を上げるには、ただ反発心だけで動くような忍は他の小隊にとって必要ありません」

「でも敵意ある者は受け入れないというのでは、成長は難しいよ」

「それは……そうかもしれないませんが、それによって仲間が犠牲になるのは耐えられません」

「まずは反対する者に認めさせる努力をするべきだと俺は思うよ」

「では……その機会すら無く去って行く者にはどうすれば良いんですか」

あいつら相手にそんな時間は無かった。それに見捨てたいんじゃない、あんな奴らでも殺されて良いとは思っていない。

「けど、まあ色々厳しい事は言っただけど、中隊規模での連携強化というアイディア自体は悪くないと思うよ」

「え？」

「でもね、やっぱり君にとっても里にとってもまだ時期が早いかな。君はこれから様々な人と組んで、もっと多くの経験を積むべきだ。そ

れに里としてもまだ中隊を固定させれるほど人員再編は進んでいないしね。里として準備が出来て、尚且つその時に君が相応しい人材なら僕は反対しないよ。とりあえず暗部の話は無かった事にするよ」「申し訳ありませんでした。そして四代目、ありがとうございます」

そうして俺はただの上忍として任務を遂行する毎日を一年近くすごした。多くの忍と接してきたが、共に戦うほどに認めてくれる忍の数は増えていつている。

確かにあの時の俺は焦りすぎていたのかもしれない。年下の上司と分かっても、まだ成人もしていない子供に自分の命は預けられないという忍は、性格に関わらず予想以上に多かったのだ。

俺がより多くの忍と組めるように、四代目は極力違う忍とは組めるよう編成を考えてくれ、チャンスをくれた。そして俺もその期待に応えようと頑張っているつもりだ。

そんなある日、任務を終えて里へ帰ると目の前に広がっていたのは中心部が無惨にも破壊された里だった。開けた場所には死体が袋に入れられて、丁寧に並べられている様子も見える。

とうとう危惧していた九尾事件が起きてしまったらしい。

俺は初めて自分の意思で大きく原作を変えようと行動したにも関わらず、事件は起きてしまった。この事件は大勢が殺されてしまう一つ目の事件だ。そしてこの事件はオビトの今後の行動に影響を及ぼす物ではない為、阻止しようと動いたのだ。

といってもできる対策は限られていて、とりあえずはカカシに墓の前での独り言は辞めるように忠告し、墓参りにも出来るだけ同行した。しかしカカシが喋る喋らないは関係無かったようだ。クシナさんのお腹が大きくなっている姿は俺でも見かけたのだ。ゼツの調査能力を持ってすれば、その程度の情報は簡単に手に入ったのだろう。

その他にも手は打ったつもりだった。結局うずまき一族が木の葉の里には来なかつた為に廃棄された、里の外れにある能面堂で残っている文献を漁り封印について調べたのだ。

四代目にもその内容を伝え、妊娠により封印が弱まるという名目で警告はしたが、三代目直属の暗部が出産の際には全力で警護すると言われてしまえば、それ以上に警戒を促すことは難しかった。

だいたいの出産予定日については四代目から聞いていたが、現代日本でだって出産日が前後する事はよくある話だ。俺個人が任務に就きながら警戒するのには限界があったのだ。

滅亡の経緯が分からないながらも、ただ守る為に戦い変えることの出来なかった、うずまき一族の滅亡。何も手を打たなかったが故、死んでいったオビト。積極的では無いにしろ原作に関わったが変わらなかった、リンの死。そして、明確に原作を変えようと動いたが変わらず起きてしまった、九尾事件。

思っている以上に俺が原作に与えられる影響というのは大きく無いのかもしれない。だが逆に考えれば、俺が主要人物達を殺すなど決定的な動きをしない限りは原作を変える心配はしなくて良いのかもしれない。

この世界に住む人は主要なキャラだけではない。多くの人が生きているのだ。今回の事件では数多くの死者が出してしまった。俺は原作を改善し主要キャラに限らず最も犠牲の少ない方法を選んでみせる。

壊滅した里を見下ろしながら俺は誓った。

四代目が亡くなり、やはり三代目が復歸することになった。それからしばらくして、里が復興し始めた頃に俺は三代目に呼び出された。

「よく来たの、ヨフネや」

「いえ、で一体何の用でしょう?」

「お主がミナトに相談しておった件じゃ。何でも中隊以上を固定して連携を高めるべきだと進言しておったそうじゃの」

「はい、まだ俺が未熟だったのと戦争のすぐ後だったという事もあって先送りになりましたけど」

「うむ、それについては俺も奴から相談を受けておったのじゃが、どうだやってみぬか」

何か厄介事かと警戒していたので驚いた。正直、九尾事件からまだ間もないこのタイミングで言い出されるとは思わなかった。

「ハッハッハ、驚いておるようじゃの。実はもう九尾が襲来した際も各小隊規模での散発的な抵抗が目立ってしまったとおった。そういつた今までの考えを改善する為にも、一度お主が中隊長となりその班を編成するが良い」

「ありがとうございます」

「但しじゃ、条件がある。上忍はお主のみで他は中忍と下忍で編成し尚且つ下忍は八名以上含む事、そして二十五歳未満で編成する事の二つつじゃ」

お、思ったより条件が厳しい。狸親父め、これは先を見越しての編成にしろという事なのだろう。

「では聞きたいんですが、基本的にその条件さえ満たしていれば、こちらの人員の要望は通ると思っても?」

「そうじゃの、よほどの人材でない限りは認めよう。まず小隊長の候補がおるなら聞いておこう」

「では日向ホヘトは是非お願いします。それに一期上で四代目の護衛小隊にいた不知火ゲンマも出来れば欲しいですね」

ホヘトとは渦の国以降も仲良くしていて、既に中隊の構想も話している。超電磁砲の使用を含め個人的に欠かすことは出来ないと考えている。

不知火ゲンマは一期上ではあるが、ガイと同じ班員であった為、それなりに親交もある。中忍試験では俺の電磁砲を警戒して接近戦を挑んで来たが、強力な火遁も使える。護衛小隊に所属していたぐらいなので実力も折り紙付きだ。

「日向ホヘトに関してはこちらでも予想しておったから大丈夫じゃ。しかしゲンマか、お主も良い人材を選ぶの」

「ゲンマは難しそうですか？」

「なにあやつも九尾事件では何もできずに悔しい思いをしておる。良いきっかけとなるじやろう。許可しよう」

とりあえずここまででは要望が通ったが、ここからが一番の山場だ。

「あと希望なのですが、うちは一族の者を一人は入れてもらえませんか？」

「ほう、うちはとな。彼らは基本的に警務部隊に所属しておるからの、そう外に出せる人材は多くないのじやが」

「九尾事件からうちはと里との関係が急速に悪化しているのは知っています。その状況下で連携を重視した班が編成される以上、余計な軋轢を生まぬためにも、うちはの者を入れておくに越したことはないと思います。それに他の有名な一族についても若手を入れたいと思っているので」

「ふむ、その考えには儂も同感じゃ。そちらも手配しておこう。して他の一族とはどこじや？」

「奈良家、山中家、秋道家、油女家この辺りですね。本当はアスマも考えたんですが、俺の下には付きたがらないでしょう」

「本当に有名所は入れるつもりなんじやな。お主の事じゃ、ただ能力というだけじゃなく、里の結束を高める事も考えておるのじやろう」

「はい」

三代目の言う通りだ。それにうちはに関しては滅亡が阻止出来なかったとしても、一人くらいは里外に連れ出す機会を作って生存者を

増やしておきたかった。生き残りはサスケ一人ではなく、他にもいた方が良いに違いない。

「各小隊の人員に関してはお隊長が決まりしだい、彼らと相談したいと思っています。ただ俺の小隊についてはある程度決まっています」「そうか、聞いておこう」

「まずは山中一族から山中サンタをそれに医療忍術と封印術の使えるスクイという下忍のくノ一を考えてます」

「なるほどの……お主の小隊は支援部隊とするつもりか」

「そのつもりです。ただ経験のある若手の医療忍者なんて知らないので、それだけは紹介して下さい」

「ふむ、そういう事なら心当たりがない事もない。本人の意思次第じゃがの」

「ではお任せします。ちなみに他の小隊は近・中・遠距離それぞれの攻撃に特化した班を考えています」

「なるほどの。あとは小隊長が決まり次第、お主が直接各一族に話を通すがよい」

こうして部隊編成へ一歩踏み出した。

あれから三日後、決まった小隊長達と初顔合わせとなった。集合場所待っているとホヘトと相変わらずバンダナを前後逆に巻いて千本を咥えたゲンマがやってきた。

「ヨフネ隊長、今回はどんな任務なんです?」

「もう一人来るからその時説明するよ」

「おいおい勘弁してくれよ。この三人でも駄目なんて厄介な任務じゃないだろうな」

「厄介っちゃ厄介なのかな?もうちょい待ってよ」

ホヘトはどうやら気付いたようだが、三代目からは何も聞いていないみたいだ。さほど待たずにもう一人が到着した。

「あれ、お待たせしちやいましたか?うちはシスイです」

「いいや、みんな今来たところだ。俺は隊長のうたたねヨフネだ」「不知火ゲンマだ」

「残り一人が同期でトップだったシスイとはね。凄いメンバーが揃いましたね、ヨフネ隊長」

「そうだな、うちはを希望したがまさかシスイが来るとはね」

一応それぞれ軽く自己紹介したが、本当に驚かされた。うちはを希望したのは滅亡阻止に失敗しても生き残る忍を増やしたかったからなんだが、まさかキーマンとなるシスイがくるとは。しかしこれで滅亡阻止にまた一歩近づけた。とりあえずはこの中隊について説明するか。

「実は忍界大戦が終わってから中隊以上の連携を深めるよう進言してただけど、ようやく認められたんだ。なのでこれからは基本的に中隊で任務にあたることになる。小隊で任務に当たらなければならぬ場合、その時も中隊の人員から小隊を編成することになる。つまりどんな任務でもある程度対応出来る部隊を作る必要があるんだ」

「なら今ここにいるメンバーは小隊長ってことですか?」

「そうだ、ちなみに俺が中隊長となる。シスイは中距離と奇襲に特化した小隊を作ってくれ」

「班員は自分に任せて貰えるんですか?」

「一応みんなで相談したうえで、三代目をお願いする形になると思う」
「分かりました。推薦とかありますか?」

「そうだな、奈良家の者は入れて欲しい。この小隊のもう一つの目的は、木の葉が一枚岩であると敵はもちろんだが、里にもアピールすることにあるんだ」

俺は小隊長のみんなにはとりあえずの目的だけを話しておく事にした。シスイが来たという事はうちは滅亡回避の大きなチャンスだ。いざとなれば本当の目的も話すつもりでいる。

「なら俺はどんな小隊にするんだ?」

「ゲンマは遠距離部隊を率いてくれ。あと風遁使いを一人は入れて欲しいのと油女一族を入れて欲しい」

「ん、まあ問題ないだろう」

木の葉には少ない風遁使いだがないわけではない。多い火遁使いとの相性も良いから必ず役に立ってくれるだろう。油女一族は攻

撃よりも部隊の中で探索と敵感知タイプの妨害として役に立つてくれる筈である。

「ヨフネ隊長、俺は近距離ですかね？」

「ああ、ホヘトには前線を任せる」

「ええ、分かりました」

ホヘトにはあらかじめ話をしてあるので特に説明はしなかった。ちなみにこの小隊には秋道一族を入れるつもりだ。

「ちなみに俺の部隊は、結界や封印、医療忍術といったサポートがメインとなる。あと山中一族を加えて心伝身の術を使つて指揮をとることにもなる。あ、言い忘れていたけど小隊の編成には条件があつて下忍を二名は含むのと、歳は二十五歳未満の忍で構成しないとイケないから。あともちろんだけど上忍は無しで」

「本当ですか?！」

「うわ、やっぱり面倒ごとじゃねえか」

「はあ、三代目から条件を付けられましたか」

「まあこれは三代目が若い世代に希望を持つてることだと信じてる……というか信じたい。今からみんなにはお互いに班員候補の情報交換をして欲しい」

「ヨフネ、お前はどうすんだ？」

「俺は各名家に行つて人を出してもらえるよう話をしてくる」

そうしてみんなが素案を練っている間に俺は奈良家に来ていた。ここには奈良家との繋がりが深い山中家と秋道家の当主にも集まつてもらっている。

「どうも、うたたねヨフネです。今日お三方に集まつて頂いたのは、今度作られる部隊にそちらの若手を出して頂きたくお願いしにあげりました」

当主はすでにシカクさんにチョウザさん、いのいちさんへと変わつていた。俺はなるべく誤解を与えないよう部隊について説明する。

「なるほど、そういうことなら奈良家からは人を出そう。二人はどうする」

「俺も異存はない。というよりも俺はサンタから先に話を少し聞いていたんだけどな。普段から世話になっっているようだし、あいつを出す」

「奈良家からは日向やうちはの小隊長と同期のダエンを出そう」

「二人が賛成なら秋道家からはシトウを出そう。棒術の才能があるからそう役立たずとはならないだろう」

「ありがとうございます」

「こちらは構えていたのだが、話せばすんなりと許可を出してもらえた。しかしサンタ以外は二人とも中忍との事だからホヘトやシスイには早く伝えてやらないといけないな。」

「ところでお前さん将棋は打てるかい？」

「得意ではないですがそれなりに」

「よし、それならちよつと一局相手してくれ」

早く帰ったのだが、何故かシカクさんが将棋を持ち出して相手をすることになった。とても勝てるはずもないが、対局することで俺の事を知ろうとしているのだろう。

パチツと駒が盤上を打つ音だけが響く。チョウザさんやいのいちゃんも将棋盤を囲むようにして座り、時々唸りながら対局を眺めている。しかし二人は唸っているが終始押されていて、俺は躲すので必死だ。ここらで仕掛けないともうチャンスもない気がする。

「棒銀か、お前さんは『玉』とはなんだと思う」

ずっと黙っていたシカクが唐突に口を開いた。そういえば原作でアスマとシカマルの時もこんな話をしてたな。

「そうですね、この盤面が世界を現すのだとしたら、里や子供達ですかね」

「なるほど、お前さんはいくつになる？」

「今年で十六になります」

「そうか、若けえのにしっかりしてる」

「ありがとうございます。でも俺は将棋が現すのは一戦場にすぎないと考えています。そうになると『玉』は任務でしょうね」

「部隊長ではなく任務か」

棒銀もどうやら通りそうにない。というよりも誘われたのかもしれない。既に局面は終盤へと差し掛かっている。

「そうです。どうやら俺は勝てそうにありませんが、こうするとどうでしょう」

そう言つて俺は勝利を度外視して駒を進める。

「ふむ、そういうことか。お前さんが負けようとその後ろも戦いは続く。その上で相手の全滅を匂わせるか」

「そうです。将棋では撤退という選択肢はありませんが、実戦なら相手にそう思わせることも重要です」

「ルールは完全に無視してるがな」

「どうも、ただ負けるのが悔しいもんで」

「そうか、これからも上手くやれよ。それとたまには打ちに來い」

「ありがとうございます、是非」

どうやらシカクさんには認められたらしい。その結果、俺はたまに相手をさせられ次回以降は完璧な勝ち方をされるようになってしまふのはまた別のお話。

こうして部隊の編成は着々と進んでいった。俺の小隊にはサンタに加えて、封印術も使える医療忍者の下忍のくノ一であるスクイを加えた。戦闘面では期待できないが有望な若手だ。実は彼女は渦の国で倒れた俺を介抱してくれたくノ一だ。あれから任務で一緒になることがあり、信用出来ると判断し今回スカウトした。

そこで三代目に相談して紹介してもらったのは、タシという元暗部のくノ一だった。医療忍術はもとより結界忍術も使えると紹介状には書いてある。

「うたたねヨフネです、よろしく」

「タシと申します。このような機会を頂きありがとうございます」

「……固いですね。もっとフランクな感じでも大丈夫ですよ？」

「いえ、これで慣れているので。それに先の九尾事件の時に私は何者かに背後から気絶させられ、クシナ様をお守りする事が出来ませんでした。あの時、三代目様の直轄暗部といえど組織だつての反撃は出來

ませんでした。そこにヨフネ様が中隊規模での常時編成を進言されていたと三代目様より教えて頂いたのです。そのお歳でこの様な事を考えられるとは、このタシ感激した次第です。さらに聞けば出産に際し警備の必要性を説いて強化させたと言うではありませんか。あの場にいた者の生き残りは私だけとなつてしまいました。貴方のおかげで私は生き残ることが出来たのです。直轄暗部としては事件の責任を取る意味も込め抜けさせて頂いたうえで、この部隊に所属させて頂いけるよう三代目様に逆にお願ひしたのです。それなのに何故フランクに話せましょうか、無理です」

「……お、おう」

あまりの怒涛の喋りに思わずたじろいでしまう。この人は忠誠心がMAXで暴走するタイプな気がしてきた。

それにしてもあの事件の時に俺が人を救えていたという事は嬉しかった。しかしその反面警備にあたっていた人が増員された事により死者も増えたということである。自分の行動次第で生者の数も死者の数も変化することを改めて思い知らされる。

何はともあれ俺にサンタ、タシとスクイ、これが俺の小隊となつた。どうやら他の小隊も上手い具合に班編成が出来たようだ。

ホヘトは秋道シトウを含む近距離タイプに武器を使う中遠距離タイプの忍の小隊。索敵はホヘトが担つてくれるだろう。

シスイは奈良ダエンや索敵が出来る中距離タイプを含む三名を揃えた。今はまだ「瞬身のシスイ」とは呼ばれていないが、得意の瞬身ですぐにでもその異名は広がるだろう。

ゲンマは結局、火・水・風と得意属性がバラバラとなるように編成したようだ。お互いに得意属性でフォローしあえるだろうし、協力する事でより術の威力を上げる事が出来るだろう。これにまだ下忍になつて一年の油女ムタを加えた小隊となつた。ムタはシビ先生に相談し配属して貰った。女の子の様な容姿をしているが、油女一族から期待されている子らしい。

これで中隊全てのメンバーは揃つた。

「お前は味方を殺したいのか！今更味方を攻撃するようなミスをするんじゃない！弛んでるぞ！」

「ハイ！」

「攻撃する時にいつも声を掛けれると思うな！スイッチする時のハンドシグナルを忘れたのか！」

「イイエ！」

「忘れてないなら何故出来ない！口答えするな！」

「ハイ！」

「全員！この馬鹿が失敗したせいで最初からやり直すぞ、持ち場につけ！」

「ハイ！」「ハイ！」

中隊の連携訓練は現実の海兵隊訓練を彷彿とさせる様な厳しさで行っている。忍の世界でここまでやっている所は無いと自分でも思うが、こうでもしないと連携なんて生まれやしないのだ。

元々、全員が信頼関係を築けているような組織ではない。他にも方法はあったかもしれないが、中隊長を頂点としたヒエラルキーを形成するのが一番早かった。おかげで中隊の連携は余りにも酷かった当初に比べ、格段にそのクオリティを上げていた。

ここまで来るのは、本当に長い道程だった。最初に通常の小隊で連携を確認した時には、普段から小隊を基本に動いていて慣れているからかそれなりにスムーズに動いていた。

しかしその後、中隊で連携をしようとするとかく機能しない。おそらく普段から得意な能力毎に特化した小隊を組んでいる為か、不得意な距離でも味方に任せるのではなく、出来る範囲で戦おうとして結局味方の足を引っ張ってしまうのだ。

そこで、まずは各小隊の人員を再編成する事にした。第一から第四小隊のメンバーを一名ずつを入れた小隊を編成する事で、小隊規模で中隊を再現し連携の強化を図ったのだ。

その目論見はあたり、ある程度その小隊で連携を強化し、再度通常の小隊に戻して中隊の連携練習することで、それなりに見える様になった。

そうやって試行錯誤を繰り返し、今では中々の連携をする事が可能となった。忍が個人主義だっただけで元々の能力は高い為、手ごたえを感じ始めてからは早い。

あと自分が最も納得がいていなかった掛け声を辞めさせるのにも苦労した。攻撃を仕掛ける際に声を発するなんて何のために気配を殺しているのか分からない。何が死につながるか分からないのが忍だ。それを養成するには民主主義なんてクソ食らえという考えで徹底的に扱いて、身体に染み込ませるように躡けた。

体罰？この世界にそんなものは無い。

それに合わせてハンドシグナルについてもかなり詳細に設定した。今までは停止や突入、警戒、方向などだけだったが、今では作戦行動中の会話はハンドシグナルのみでも行える。

無線もあるが楽な事は最後で良いと思っている。細かい指示が必要な時はサンタの心伝身の術を利用している。この心伝身の術は中隊以上の規模で動くとなると必須じゃないかと思わせられるくらい優秀だ。術者の思考や術者が触れた者の思考を仲間にのみ飛ばす事の出来るこの忍術は、最も偉大な術の一つだと思っている。

そう訓練ばかりもやっていられないが、成果を試す実践の機会にも事欠かない。みんなが忍から兵士にクラスチェンジした頃から国境警備の任務を中心に任務を割り当てられているのだ。小隊規模以上の敵がやって来るこの任務は実に効率良く連携を鍛えてくれる。そして今は雷の国方面の警戒任務に来ていた。

出動回数は既に十回を超えているが未だに死者は出していない。忍による軍隊というのは非常に強力だと実感したせい、たまに気が緩んで失敗する奴がいるが許容範囲内だ。もちろん後でみっちり扱くが。

最近では他里から猟犬部隊とか言われている。みんなは猟犬部隊

という二つ名が付いたことが気に入ったようで、今では自分達からその名乗っている。そのせいで里内にもこの名前が定着してしまった。どうも犬と聞くと俺は良いイメージがないが、こういった二つ名は敵に対して牽制になると言い聞かせている。

ここ数日、通常小隊で四方面を警備していたのだが、北東方面を警戒しているゲンマ率いる第三小隊からムタの蟲が飛んで来た。どうやら一個中隊の敵を補足したらしい。

「第三小隊から敵発見の連絡だ。サンタ、第三小隊付近の集合地点に全隊集合するように伝えろ」

「ハイ！」

指示を出してから実行までのスピードも実践をこなす事で早くなっていく。これも意思統一が出来ている証拠だと思いたい。一足先に到着した俺たち第四小隊がゲンマから敵の情報を聞き終えた頃には、全員が到着したので作戦を伝える事が出来た。

「……以上の作戦で行う。と言ってもいつも通りだ。お前達なら問題ないが気を引き締めろ。それと今回は外から来る敵だ。分かっていると思うが無理に全滅させる必要はない。無理に殲滅しようとすれば敵は犠牲を覚悟で戦う事になるかもしれない。良いか、俺達の任務は敵の殲滅ではなく排除だ。その事を忘れるな！」

「二！ハイ！二！」

木の葉に所属している以上、防衛の為に死人を出す事はもちろん割り切っている。しかし俺は双方に無駄な死人を出す気もなかった。深追いで余計な被害を出す気もなければ、一人二人逃しても俺達の名前を広めてくれればそれで良いと思っっている。

要は敵に厄介な相手がいると思わせる事も重要な防衛方法なのだ。いずれ戦わずして勝つ事が出来る様になればそれに越した事はない。四代目の「黄色い閃光」なんかはその典型だろう。

味方が作戦開始位置についてから間もなく、敵が超電磁砲による狙撃の射程距離に入ってきた。この狙撃が俺達の作戦開始の合図だ。

「目標確認、無風、遮蔽物多数、距離1.6 km」

「風遁を使用する、弾数は三発まで許可」

「了解、カウントダウンを開始……5. 4. 3. 2. 1. ファイア！」
背の高い木の枝に立ったホヘトは、俺が浮かした銃身となる雷刀を持ってカウントダウンの後に狙撃を開始した。そして三発はすぐに撃ち終わった。渦潮隠れの一件以来、俺は極力この術の多用を避けている為、弾数は少ないかもしれないが三発が通常となっている。そもそもホヘトの狙撃率が向上している今となつては、三発だけでも充分に敵を混乱させる事が出来る。

「着弾を確認、敵三名を射殺」

「分かった、第一小隊は予定地点で待機。サンタは五分後にシスイに繋げろ」

「ハイ」

狙撃で敵が倒れたのを見て、先行していたシスイ隊はすぐに混乱する敵に奇襲を仕掛けた。そして心伝身の術をもつて常に戦況は俺の元に伝えられる。

『敵は一個中隊、狙撃で三名の死亡を確認。我々の奇襲と合わせ計六名の死亡を確認、一名は捕虜としました』

『了解した。そろそろ敵が引き始めるだろう、タイミングを見計らつてホヘト隊とスイッチしろ。本隊へ合流した後で情報を聞き出せ』
『了解しました！』

そして敵はヒットアンドアウェイを繰り返していた、シスイ率いる第二小隊を相手に徐々に後退し始める。しかしそこで待ち受けているのは第三小隊による火遁などの遠距離攻撃だ。彼らは小隊を二つに分け、第二小隊を避ける様に両サイドから回り込んでいたのだ。そうとは知らない敵は、まんまとクロスファイアポイントに誘い込まれる。

そして次に考えうる可能性はシスイ隊方面の突破だ。一撃離脱を繰り返している事から防御が苦手と推測するだろう。それは間違っていないのだが既にそこにいるのは近距離専門のホヘト隊である。

『ゲンマ隊、戦果の報告を』

『新たに敵五名の死亡を確認、残り四名。こちらに死傷者は無し』

『了解した。敵は前進し間もなくホヘト隊と戦闘となる。射線から味

方を外して攻撃しつつ、ホヘト隊と合流し、更に援護せよ』
『了解』

ここまでは被害無く状況を有利に進める事が出来ている。しかし思った以上に相手を削る事は出来なかった。忍というのは厄介な事に小隊以下の人数にならないと、任務の失敗を認めない傾向にある。それまでは死に物狂いで攻撃ないしは反撃のチャンスを探っているのだ。いくら第三小隊からの援護が有るとはいえ、相手と同数ではホヘトの第一小隊にも被害が出るかもしれない。

「サンタ、心伝身の術はあと何回いける？」

「すみません、あと二回が限界です」

「謝るな、成長すれば使用回数も増える。とりあえず今は問題は無いだろう。全員に繋げ」

そう言うのと俺は胡座をかいて集中しているサンタの前に膝をつき、サンタは俺の頭に手をあてた。

『これより俺の第四小隊も第三小隊と合流する。第一小隊は負傷者が出たらすぐに後退させる。こちらから交代要員を出す。第二小隊は現在の本隊の位置に到着次第、捕虜から情報を聞き出し、その後合流せよ』

『『了解』』

第三小隊は俺からすれば大技が必然的に多くなる為、そう長時間の戦闘は行えない。今は牽制程度の攻撃をしつつ、第一小隊の方へと向かっているだろう。

こちらの数的優位は変わらないのだが、相手の指揮官が生き残っているのか小隊規模では統率がとれており、中々決めきれずにいる。そんな時、感知タイプのサンタから負傷の連絡が入る。

「ヨフネ隊長！シトウが負傷した様です！」

「分かった。タシ、お前は俺と一緒に前線まで行ってシトウを回収し治療にあたれ。俺はシトウの穴を埋める」

「かしこまりました」

タシはビワコ様の弟子だっただけあって、かなり優秀な医療忍者だ。スクイも彼女に実戦の中で教わる事でメキメキと実力をつけて

きている。そんなタシを引き連れすぐに第一小隊の後方に到着する。「ヨフネ隊長、すみません。動けない程ではありませんが、戦闘は難しいかと」

「分かった。無理はしなくていいから、タシと一緒に下がっている。俺が代わりに前線に出る」

「ハイ」

二人が後退していくのと同時に俺は前線に踊り出た。ホヘトは現在、白眼の広い視野を生かして二人を同時に相手していたが、流石に押され初めていた。

「ホヘト下がれ！」

俺の声で飛び下がった瞬間に電磁砲で一人を仕留める。敵は何が起きたか分からず、分かりやすく狼狽していた。それもそうだろう、風を感じたと思ったら隣の仲間が倒れているのだから。

「クソっ “死神” まで前線に出てきやがった！」

（オイ！なんだその二つ名は。俺の知らない間に物騒な名前をつけるなよ……そういえば前線で電磁砲使ったのは初めてかも）

俺からすると不名誉な二つ名に嘆いているとサンタから心伝身の術で連絡が来た。

『ヨフネさん、シスイです』

『どうした？心伝身の術はこれが最後なんだぞ』

『すみません。しかし捕虜を幻術にかけて面白させた内容なんです。こいつらは読み通り偵察部隊でした。しかし木の葉の何かを狙っていたようで、増援部隊もいるようです。それで今そちらに凄い速度で敵が二人向かって来ています』

『分かった、よく知らせてくれた。全員、撤退するぞ！』

「ヨフネ隊長、間に合いません！白眼で視認しました。すぐにこちらに来ます！」

「なんだと?!全員警戒態勢をと……」

「ーードウゴオオン！」

指示を出すや否や地面が爆ぜる様な音がして、土埃が舞い視界を遮ってしまった。しかしすぐに攻撃して来ないところを見ると、何か

目的があるようだ。

土煙から現れたのは、雷の国特有の浅黒い肌に白髪をたずさえた二つの巨体だった。一人は法被のようなものを着て、手には小手をつけている。もう一人はサングラスをして小太刀を多く背中にさしていた。

(まぢか、こいつらはひよつとして……)

「新しく雷影になったエーだ。一体これはどういう事か説明して貰おうか、木の葉の忍」

「答えろう、馬鹿野郎、この野郎♪」

想像通り不遜な態度を崩さず突っかかって来たのが雷影、ウザいラップをしているのがビーのようだ。この二人の様子にイラつとさせられるが、ここはキレた方が負けである。部隊を手で制して俺が答える。

「そちらこそ無断で国境を越えるとは、ご説明頂けますか？」

「無断ではないわ！ 会談の席を設けるため木の葉には書状を送っておる！」

「そうですか、では我が里からは何と？」

「そんな事、一忍のお主には関係なからう！」

……この無意味に挑発的な反応は、おそらく前任の雷影、もしくは雲隠れでは上役にあたる忍頭が何かの目的を持ち、今の雷影の与り知らぬ所で行動を起こしたのだろう。おそらく書状は送っているがまだ返答は届いていないと見た。それにこちらは半日毎に定期報告をしているのだ、一日も経たずに会談が設定されるはずもない。

何よりこちらは捕虜を捕らえ、何らかの作戦があつた事は掴んでいなのだ。そう簡単にカマにはかかるはずもない。ここは捕虜と一緒にお帰り願おう。

何処からか見ているであろうシスイに捕虜を連れて来させ、後手に縛った忍の首すじを掴み立ち上がらせる。

「そうですね。しかし雷影様おかしいですね、こちらが掴んだ情報とはどうも異なるようです」

「貴様！ 人質とは卑劣な！」

「何か勘違いなされているようですね？私どもはこの方を『保護』しただけですよ」

「……………どうやらお互いに情報伝達に不備があつたようだな」

「我々は分かりませんが、そちらで行き違いがあつた事は確かなようですね」

「クッ、とりあえず保護して貰っていた忍は連れて帰るぞ」

「ええ、勿論そうなさって下さい」

そう言つて捕虜の縄を解き、雷影の方へ軽く押してやった。そんなに強く押したつもりはないが、捕虜はよろめきながら雷影の元へと小走りで逃げて行つた。シスイはどんな幻術にかけたんだよ。

しかし、とりあえずはこれでお引き取り願えるだろう。外交の都合上、弱味は見せれないとはいえイライラはしてしまう。冷静に、冷静に……

「ではワシらは一旦、里に帰る。後日また使者を送らせてもらうぞー」

「猛犬、俺らもう帰るけん♪」

「誰が猛犬だ！というか、なんでいきなり訛つた！」

条件反射で、ついツツコンでしまった。

あの後、俺は一旦里へと戻つて三代目に確認を取つたところ、どうやら本当に雲隠れは同盟を結ぶつもりらしく、二週間後には正式な使者が到着する事になっていた。

報告を受けた三代目からは、使者を護衛と称して監視するようにとの命令を受けた為、このタイミングで起こるヒナタ誘拐事件の防止に動く機会を貰えた。

目的を知っている俺が隊長となつた事で重要拠点の周辺、特に日向一族の土地と念の為にうちは一族の土地を警備させた。すると原作通りに日向一族の土地に近づいた忍頭に声を掛ける事であつけなく誘拐事件そのものを防ぐ事が出来た。

全体で見れば小さな出来事かもしれないが、初めて原作を変える事が出来たのだった。

ここ最近、紅の元気が無い。二十歳になってからは団子屋に誘われる事は無くなったが、代わりに暇な同期を見つけては居酒屋に入り浸っているようだ。ただ、紅が酒豪という事もあってか、一緒に飲むと泥酔してしまう為、そんな誘いも徐々に断られているようだ。

こうなってしまった原因はハッキリしている。アスマが守護忍十二士になると言って、里から離れてしまったからだ。とはいえ、もう一年が経とうとしている、そろそろ落ち着いて欲しいんだが……

実は今日の相手をしているのは俺なのだ。アスマが里を離れた頃には、既に猟犬部隊を任されていたから、どうにも機会が無くて俺は誘われずに済んでいた。しかし流石に一回も相手しないのは可哀想なので渋々付き合うことにした結果、クダを巻く紅が出来上がった。

「ヨフネわあ凄いよねえ。なんて言うか……自分を持つてるっていうか、信念？を持つて行動してるように見えるう。そーれーにー比べアスマは……」

「はいはい、ありがとう。本当にアスマの事が好きだな」

「だ、誰があんな私を捨てて行った奴なんかあーあいつなんか、優柔不断で照れ屋だし、そのくせプライド高いわ、ファザゴンだわ良い所なんてえ……まあ気遣いとかは凄くしてくるんだけどね。それになあんで言うかほっとけないっていうか……」

前世で鍛えた接待術のおかげで、どうにか俺は泥酔だけは逃れている。焼酎の水割りセットを持って来てもらい、二人の酒を作るフリをしつつ紅には濃い目の物を飲ませ、俺はほぼ水のような物を飲んでいるのだ。もちろん紅のグラスを空にするような事はしていない。

しかし、おかげで先に酔いが回った紅の話が長いことこの上ない。まあおっさんの愚痴を聞かされるよりはよっぽどマシだけど。

「ていうか二人は付き合ってたの？さっき捨てられたって言ったけど」

「えつと付き合っつては無かったんだけど……あいつが出て行く時に一緒にいてよつて言つたんだよね。でもあいつはそれを無視して……」
「あーそうだったのか、辛かったな」

アスマが出て行つたのは父親の三代目との確執が原因だが、その確執にはどうにも俺も無関係ではないらしい。俺がいなくてもアスマは守護忍十二士になっていた筈だから、責任を感じてはいないが。

アスマは出て行く少し前に大名の護衛任務を隊長として受けていたのだが、そこで激しい戦闘が行われ三分の一が死亡、更に三分の一は重症という多大な犠牲を払う事となつたのだ。

アスマとしては、そんな厳しい任務をやり遂げたと思つて、意気揚々と三代目に報告しようだ。しかし任務を達成しても、そんな犠牲を払う事となつたアスマを三代目は認めはしなかつた。里長の立場からすれば当然だ。

しかし、どうもアスマは部隊を任されている俺や暗部にいるカカシの方が、三代目からの信頼が厚く感じて、嫉妬していたようだ。中々自分が父親から認められない現状に不満が溜まつていた時、大名からは先の護衛任務の功績を認められ守護忍として指名されたのだ。

ようやく認められたアスマは当然それに飛びついた。出て行く前には、大名中心の国づくりがどうかと理想を語つてはいたが、結局はただの反抗期だと俺は思っている。

「色々聞いてくれてありがとう、ヨフネ」

正直、話半分に聞いていたのだが、どうやら紅は満足してくれたようだ。

「別に構わないさ、ただみんなに酒で絡むのは辞めろよ。お前の為にもならないぞ」

「ふふふ、優しいのね」

「美人には優しくすると決めてるんでね」

「もう！いつもそんな事ばかり言つて……からかわないでよ……」

紅はアルコールのせいで赤くなった頬をさらに染めて顔をそらした。アスマもこんな良い女を置いて行くなんて馬鹿だよな。

「さて店も閉まるし、そろそろ出るか」

「そうね……つとー」

会計を済ませ立ち上がりとうとした紅だったが、足元がおぼつかない様子で転けそうになったので、腰に手を回し支えてやる。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。家まで送るよ」

「うん！」

翌朝、目を覚ますと見覚えのない天井が見える。そして隣には未だあどけない表情で寝ている紅。なんとなしに紅の頭を撫でながら、自分の心を落ち着かせる。

何とか落ち着いたタイミングで、紅を起こさないようにベッドから抜け出し、なんとなく気まずい思いで紅の家から出た。今日は部隊で必要な道具を受け取りに行かなければならなかった。

(なんだろうな、この間男みたいな行動。はあ、しかしあんな事になるとは……)

せっかく待ちわびていた道具の受け取りだというのに、テンションが全然上がらない。

部隊の里での評判はみんなの頑張りもあつて上々だ。決して慢心する事がないように扱っている事もあり、士気も練度も高い状態を維持できている。しかし、訓練のマナーリ化を打破する為にも新しい訓練も始めるつもりだった。

それは人質奪還の訓練という今までの忍では、決して特化してやる事の無かった分野だ。建物内へ侵攻する為の訓練は行われているが、忍は死して黙すべきという思想があるこの世界では、ある意味タブー視されている訓練だ。

そうは言っても単騎潜入などの任務もある忍にとって、人質となる機会は少なくない。そのため思想はあっても、実際には救出任務も数多く存在しているのが実情だ。

しかし当然任務の難易度はグンと上がる。人質を殺しては何の意味もない為、突入の際には細心の注意を払う必要があるからだ。それ

を実現するために音響閃光弾を特注してもらっており、今日がその受取日なのだ。

作って貰うのには、予想よりも時間がかかった。なにせ、この世界に光玉はあるが音を発する物は無い。こういう時に薬学等に詳しい綱手様を頼りたかったのだが、彼女も大蛇丸の里抜け後、シズネを連れて里から離れてしまっている。自来也様も大蛇丸を調査する為に里から離れており、今は木の葉の三忍は一人としていない。

そこで電磁砲用の弾丸製作で世話になっている街の老舗武具店“満点堂”に頼む事にしたのだ。少し偏屈なおっさんだが、新しい物を作るのが好きで嫌がらずに受けてくれる。すんなり完成とはいかなかったが、数回の試作を繰り返し、何とか今回完成に至ったのだ。

落ちていた気分を奮い立たせ、古びて立て付けの悪くなった引戸を思い切って開ける。

「おやっさん、来ましたよ！もう出来上がってます？」

「五月蠅い！もう少し静かに入って来やがれ！毎度毎度、馬鹿力で開けやがって、余計に立て付けが悪くなるだろうが！」

「ごめんごめん。で、どうです？」

「まったく……ほれ、お前さんの要望通りに仕上げたぞ」

そう言うとおやっさんはカウンターの後ろの壁に積み上げられた引き出しから、箱を取り出しカウンターに置いた。俺は待ちきれずに蓋を開けると、そこには筒状の手榴弾の様な形をした音響閃光弾が入っていた。

「へえー結局、こういう形になるもんなんだな」

「ん？まあ、ちよつと見慣れない形にはなったが、お前さんの要望通りに仕上げたぞ。ピンを抜いてから約二秒後に閃光と爆音が発生。相手は少しの間だが身動きが取れなくなるだろうよ。あと一番よくわかんねえ要望だった、爆発して破片が飛び散らないようにするのが意外と大変だったぞ」

「ありがと、裏で試しに使ってみても良いか？」

「いつもなら良いって言うところだが、こいつは駄目だ。試しに作った時に裏で使ったら母ちゃんにえれえ怒られちゃった。今度使っ

たら殺されちゃうよ。試すなら演習場でやんな」

「どうやら、その反応を見る限り成功したと見ていいだろう。何も知らない部隊のみんなに使ったら流石に怒るかな？」

「ただ大丈夫か？使ってみて分かったが、これを使うときはこっちも完全防備にしなくちゃならん。当然こっちも音が聞こえないから、意思疎通が出来なくなるぞ？」

「その点は大丈夫だよ。俺らの猟犬部隊は言葉に出さなくても行動できる」

「さすが噂に名高い猟犬だな。改良して欲しい所があれば言ってくれ」

「あいよ。ありがとね、おやっさん」

この後、早速演習場で試してみるとおやっさんの言葉通り、こちらの要望にキチンと答えてくれていた。まだコストがかかるが三代目に報告の上、予算をもぎとれば問題ないだろう。

あれから二週間、紅の任務などもあり会う機会のないまま訓練を続けていたが、救出作戦を実践する機会が訪れてしまった。担当上忍が中忍試験に落ちた下忍を騙して、秘伝の巻物を盗んでいったらしいのだ。

主犯の担当上忍は緑青アオイ、騙された下忍は森乃イダテ。名前から分かるようにイビキの弟だ。イビキは弟を抜け忍としない為にも追跡したらしいが、同行していた暗部と共に捕らえられたようだ。巻物の解読の為には解析班のイビキの知識が必要だったらしい。

イビキの頭にはまだ拷問の跡はない。原作で見た時は衝撃的だったあの傷を残さない為にも、早くに助けてやりたい。

この事態を知らせて来たのは弟のイダテとイビキによって逃げ出す事の出来た暗部の一名だった。共に行動していたもう一人の暗部はまだ捕まったままだらしい。

「そんなわけで、暗部から俺の小隊も一緒に参加させてもらおうよ」

そう言ってひよっこりやって来たのは、同世代のエース、カカシだった。

「わざわざ暗部の若きエースがお出ましかよ」

「いや正直言うとお捕まってるのは俺の部下なんだわ。俺と逃げる事が出来た部下、それにもう一人加えたこのスリーマンセルで参加させて欲しい」

最近も冷血カカシやら何やら言われているが、やはり仲間は大事にしているらしい。リンを殺した傷はまだ癒えてはいないらしい。

「良いけど条件がある。まず一緒に行動する以上、俺の指示は絶対だ。それと暗部として行動させるつもりもないから、その面も取れ。最低限の信頼を皆には見せて欲しい」

「ああ、俺はそれで構わないよ。ほらテンゾウ達も面を取れ」

カカシがそう言うとお、逃げ出して来た忍ともう一人も面をとって素顔を見せた。連れていたもう一人は大きすぎる黒目をした無表情な顔にフェイスガードをしていた。名前を聞いた時に薄れ始めた記憶に引っかかる物があつたが、彼は間違いなく後のヤマト隊長だろう。「よろしく、テンゾウ」

「暗部でも噂されている猟犬部隊の隊長が、カカシ先輩の同期だなんて知りませんでした。勉強させて貰います」

二人と握手を交わした後、俺達はすぐに雨の国との国境付近にある、最初に監禁されていたという小屋に向かった。

案内に従い着いた小屋は既に全焼しており、既に周囲に人の気配などない。ただ、少なくとも二人は負傷したのか、その先の森に向かって僅かだが点々と血痕が残されていた。

「カカシ出番だぞ」

さすがにカカシは長い付き合いなだけあって、俺の言葉で亥、戌、酉、申、未と素早く印を結んでいく。こうやって肩を並べて任務をするのは久しぶりだが、印を結ぶ早さ一つとっても自分と同等以上に成長しているように見える。

「口寄せの術ー!」

印を結んだカカシが焦げた地面に手をつくすと、ボフンツという音と共にフレンチブルドッグのパツクンを始めとする忍犬達が姿を現し

た。

「よ！久しぶりじやのヨフネ」

「久しぶりで悪いんだけど、早速この血の匂いを追ってくれない？」

「任せておけ！それに焦げた匂いも同じ方向に進んでおる。すぐに見つけてやるわい」

パツクンのその言葉通り、追跡はすぐに開始され、連れてこられた先には二階建ての木造小屋があった。先ほどの場所から人質を抱えてだと約半日といった距離だろう。

「ホヘト、内部の様子を調べてくれ」

すぐに隣に控えていたホヘトに白眼で透視させる。人質や内部構造を白眼で確認しない事には作戦を立てることが出来ない。ホヘトに声をかけると同時に、俺とホヘト、タシにスクイを除いた隊員にハンドシグナルで指示を出し散開させた。サインに反応できず、暗部組の三人はぼつんと立ち尽くしていた。

「……カカシ先輩、ヨフネさんが出した今の合図はなんなんでしょう？」

「さあ正直俺にも分からない。でもまあ、見張りを確認しに行つたつてとこでしょ」

「でもあれだけのサインですか？斥候するにしても隊列だとか場所なんかの指示までは出たようには見えなかったんですが」

「それはあらかじめ一定のパターンは決めていて、後は現場で判断できるように訓練してるからだよ、テンゾウ」

後ろでコソコソと小声で話しているので、俺から説明してやった。普段は閉鎖的な環境でやっているから、他の忍からはどう見えているのか少し気になっていたのだ。今度、合同で模擬戦でもやろうかな。

『ヨフネ隊長、敵の見張りを確認しました。数は一個小隊です』

『よし、全員一旦戻って来い』

『『了解』』』

サンタからの連絡で監視の数は判明した。急に黙った俺に不審な目を向けているカカシ達に振り返り口頭で説明してやる。

「今山中一族の者から心伝身の術で報告があった。また後で説明する

が、お前達は見張りを倒してくれ。その後は小屋の表側に回って、出て来た敵を捕らえて欲しい。もし無理なら殺しても構わない」

「待ってよ、そこは俺達も突入組でしょ。こっちは仲間を人質に取られてるんだ！」

「……今回は人質の救出がメインだ。確実に助けたいなら、さつきみたいにサイン一つで全員が動かなきゃいけないし、それにお前達は装備も持っていない」

「装備なんて！そんなの最初に言ってくれば良いじゃないか！つまりお前は最初から……」

耳栓はまだしも、対閃光ゴーグルなんてすぐに準備出来る物じゃない。カカシ達の準備を待ってはいられなかったから、しょうがないじゃないか。

「最初にヨフネ隊長が仰いましたよね？この隊においてヨフネ隊長の命令は絶対です。装備だって貴方達に言った所で揃えられる物じゃないんです」

「……タシやめろ」

「すみません、出過ぎたことを。しかし私を信じろとは言いませんが、我々の隊の事は信じて下さい」

相変わらず俺を盲信してくれているタシが堪らずといった具合にカカシ達に反論するので窘める。その様子を見て、カカシ達は渋々ではあるが納得してくれたようだ。

話がついたところで隊員達が戻って来た。ホヘトの方も中の確認は終わっているようだ。

「よし、敵の監視はどうだ」

「はい、サンタが報告した通り数は一個小隊。小屋を中心にして東西南北の位置で見張っています」

「次、ホヘト頼む」

「人質は見張りの二人と共に二階の西側の部屋にいます。その向かい側の部屋にも二人。一階は居間に四人、奥にある二部屋にそれぞれ二人がいます」

周囲を見て来た班からの報告によると出入口は玄関と裏口の二

つ。各部屋には窓が一つあるようだ。作戦を成功させるには十分のようだ。

「分かった。カカシ班は入口のある南側、第二小隊は東側、第三小隊は北側、第四小隊は西側の見張りを倒せ。見張りを倒したら第三小隊とカカシ班で小屋を包囲しろ。一人として敵を逃がすな」

「はい」

「分かった」

「見張りを倒したら第一小隊は入口、第二小隊は二階の東側の部屋、第四小隊は人質がいる部屋に突入出来るよう準備しろ。二階に突入した三秒後に第一小隊は突入だ。音響閃光玉を使用して人質は必ず生きたまま確保するぞ」

「はい」

「散！」

テンゾウは作戦に何か言いたいことがありそうな顔をしていたが、流石に黙っていた。

(まあ見ている二人とも助けてやるから)

配置についた俺達、第四小隊の前方には敵が真面目に見張りを続けていたが、石を投げて一瞬注意をそちらにズラす。その隙に背後に回り怪力をもって首の骨をへし折った。

その様子を見ていたタシ達と共に小屋に近づいて、二階の窓近くの壁にチャクラを吸着させて貼り付いた。全員がゴーグルと耳栓を装着したのを確認し、全体に連絡を取る。

『第四小隊準備完了』

『第一小隊準備完了』

『第二小隊準備完了』

『了解。カウントダウンを開始……5. 4. 3. 2. 1 GO!!』

合図を出すと同時に窓から音響閃光弾を投げ入れる。次の瞬間、閃光が瞬き、轟音が肌を震わした。訓練で分かっていたが十分すぎる威力だ。

中に飛び込むと主犯のアオイともう一人の敵は耳を抑えて蹲っていた。イビキ達も苦しそうに顔を顰めているが、それくらいは仕方が

ない。すぐにタシとスクイに人質を連れ出させ、俺はアオイを殴りつけ拘束、サンタは心転身の術で敵を拘束していた。

サンタが敵を拘束した次の瞬間、ホヘト達が入り込んだのか建物が揺れるのを感じた。つまりここまで時間にして約五秒である。

一階の敵は二階が攻撃されたと思い、迎撃態勢を整える為、一階に留まざるを得ない。そんな時にホヘト達を突入させることにより、挟撃を演出する事ができるのだ。

俺も素早くサンタに乗り移られた敵を拘束し、敵二人を連れて窓から飛び降りた。サンタも心転身を解いてすぐに付いて来た。二階からの攻撃はシスイ達が担ってくれる。

『人質を救出、首謀者ともう一名も確保した。残りは殺して構わん』
今は心伝身の術でそれだけ伝え、イビキの元へと向かう。

「イビキ大丈夫だったか？」

「ああん!!?なんだあれは!!おかげで今はまだ耳が聞こえん!!!」

耳鳴りのせいとは言え、イビキの野太い声で叫ばれるとビックリしてしまう。手当をしているタシに確認する方が良さそうだ。

「タシ、二人の怪我はどうだ？」

「二人とも身体に酷い傷を負っています。おそらく拷問されたのでしょうが、命に別状はありません」

「そうか、良かった」

見た所、頭部も無事なようだ。身体や顔の一部に切り傷が出来ているが、まださほど時間が経っていないから、タシの医療忍術で跡も残らず治るだろう。

「ヨフネ隊長、こちらでも終わりました」

突入開始から五分、ホヘト達も敵を殲滅出来たようだ。初めての実践にしたら上出来すぎる結果だ。盗まれた巻物に関しても無事に回収出来ている。雨隠れにはまだ持ち込まれていなかったようであった。さて残るは後処理だ。

『第三小隊、作戦完了だ。小屋と中にある遺体の痕跡も残らないように破壊しろ』

『了解』

すぐに炎が小屋を包み込む。忍は死して遺体を残さず、が原則である。裏切ったとはいえ元は木の葉の忍、敵に情報が渡るのは避けなくてはいけない。

「カカシ、作戦終了だ。満足出来る結果だったか？」

「正直、此処までとは思ってなかったよ。すまなかったな」

「別に気にしちやいないさ」

俺も今回の結果にはかなり満足している。後は里に戻ってアオイから経緯を聞き出せば終わりとなるだろう。尋問はイビキが頑張ってくれるはずだ。

ちなみに弟のイダテだが、現在は里で拘束されている。あくまで騙された立場であり、尚且つ救援を呼んだ点を考えると、甘い三代目の事だ、そう悪いようにはされないだろう。

しかし里に戻った俺達に知らされた報せは、そんな浮かれ気分を吹き飛ばした。

守護忍十二士にクーデターの動き有り

守護忍十二士にクーデターの動きあり。その報告が入って来たのは俺が三代目に救出作戦の顛末を説明し、予算をもぎ取ろうとした時だった。

ここに報告しに来ると、よく何かに巻き込まれている気がする。

「ヨフネ、聞いておった通りじゃ。大名には護衛が必要じゃろう。それもまとまった数の忍がじゃ」

「つまり俺達に行けど？」

「大名から認められれば、予算の増額も可能かもしれんぞ？それに書状には猟犬部隊を指名してある」

「はあ、それじゃ断れないじゃないですか。分かりました、すぐに準備します」

そう言つて出て行こうとした俺の背中に三代目からの言葉が投げかけられる。

「それと……すまんが、アスマを頼む」

特S級任務を受ける事になった為、身体を休めていた隊員を集め、状況を説明しなければならなくなった。

「みんな早速次の任務が入った。どうも三代目からの信頼が厚いらしい」

俺の皮肉が伝わったのか、みんな苦笑してくれた。

「……ちよつと待て、タシ目付きが怖すぎるぞ」

どうやら伝わりすぎたメンバーもいたようだ。慌てて宥めてから、状況を説明する。

「大名専任の護衛隊、守護忍十二士の事は知っているな？その中に木の葉を解体し、大名主導の武力組織を作ろうとクーデターを画策しているメンバーがいるそうだ」

どうやって情報が漏れたのかは分からないが、事が事だけに看過出

来る物ではない。隊員達も思わず騒めく。

「俺達の任務は守護忍達が強引な手段に打って出ない為の護衛という事になる。皮肉な事に大名側からすれば誰が野望を抱いているか分からない守護忍より、奴らの思想とは相容れない俺達の方が信用出来るらしい」

そもそも火の国には木の葉という忍里があるが、それだけが唯一の武力というわけではない。大名に仕えるという形をとっている一族や独自の武力を持つ火ノ寺には忍僧と呼ばれる者達もいる。

「火の国を守るのは木の葉」という俺達にとつての矜持は、逆に木の葉に属していない一族からすれば、巨大な権力を与えられている木の葉の傲慢だと悪感情を持たれる事もある。

それを和らげる為、守護忍十二士は国を守るには、まずその頂点である大名を守る必要があるという考えを前提に集められた組織で、木の葉以外の忍から多く選別されている。

彼らを守護忍とする事で不満を抑え込もうとしたのだが、今回の事の発端はそういった実力のある不穏分子を集めたデメリットが表面化してしまったのだろう。

ちなみに木の葉から参加したアスマは守護忍の中では異色と言っている存在だ。ただでさえ木の葉から参加するというのが珍しいのに、今代の火影の息子なのだ。

もっともそれは周りから見たら話で、アスマはそんな色眼鏡で見られるのは嫌だっただろうが。しかし今の大名と火影の関係性は決して悪くなかったと思っていたのだが、何かあったのだろうか。

火の国の大名は基本的にのんびりした性格でよくいえば部下を信頼して、各分野の専門家に任せようえで決断を下すというタイプである。……そうか、部下か。おそらく側近の中に今回の件で木の葉を解体する様に大名の説得を試みた人物がいるはずだ。まずはその人物を特定して、情報を集める必要があるな。

火の国の中央部にある大名の城へと到着した俺達は嚴重な警備の中すぐに大名の元へと通された。やはりそこには守護忍の姿は無い。

おそらく城の警備を任せているのだろう。一応気配を消して秘密通路から入城したのだが、城内では敵意の籠った視線を感じていた。

俺達を通された奥まった一室には重厚な長テーブルのみが置いてあり、上座には既に大名が座っていた。

「よく来たのお。お主があのコハルの孫かえ？」

「はい、お初にお目にかかります。獵犬部隊の隊長をしております、うたたねヨフネでございます」

全員が膝をつき代表して俺が自己紹介をする。会談の間でもあり、少し大袈裟かもしれないが、ここで好印象を与えておくに越したことはない。

「おお、そうかえそうかえ。なんでも結成以来目覚ましい活躍をしておるようじゃの。ワシの耳にも届いておるぞ」

「ありがとうございます」

部下達は嬉しいのか、大名の言葉でピクリと反応したのが分かった。タシ以外だが。ひとまず席を勧められた俺達は小隊長以上が部屋に残った。

「早速ですが、任務内容の確認をさせて頂いても宜しいでしょうか？」

「うむ、その点に関してはダンゴウが一番詳しいじやろう。何せワシに奴らの話を持ってきた本人じやからの」

この殿様、馬鹿なのか？本来なら隠すべき内容をあつさりバラすなんて。探ろうとしていた俺が馬鹿みたいだ。……いや、仮にも一国の王なのだ、此方を懐柔する為に最初に懐を開いて見せたのか？……読めない人だ。

「火の国の財政を担当しておるダンゴウだ。初めに言っておくが、ワシが大名様に奴らの提案を話したのは、忍里はこの平時においても莫大な予算を必要としている。それを改革すべきというワシの基本方針と通ずる所があつたからじゃ」

まあ彼の立場ではそれを考えるのも当然かもしれない。火の国がいくら自然にあふれ、尚且つ穀倉地帯を持っている事で裕福とはいえ、国を運営していく上で金等いくらあっても足りることはないだろう。その点からすると納得はしないが理解はできる。

「全ては言い訳となってしまうが、ワシは木の葉を解体しようとしてまで考えていたわけではない。勿論、他国への戦争等もつての外だ。確実に勝てる戦争以外は一銭の得にもならん。そして今回の任務の内容だが、大名の護衛とクーデターの阻止だ」

彼が国の為に金を求めているのだとしたら信頼できるかもしれない。それよりも守護忍十二士が戦争まで企てているとは、予想以上に事態は深刻なのかもしれない。

「貴方の立場は重々理解しております。任務の内容についても了解しました。それで現在判明している不穏分子、または反対の立場を取っている者は誰でしょうか？」

まずそこをハッキリさせなければ、こちらの仲間を引き込む事などできない。

「ハッキリと分かっているのは首謀者はカズマ、それに反対の立場を取っている者は地陸という者という事だけだ。言いにくいだが、猿飛アスマは改革派に近いと思われる」

その言葉を聞いて思わず天を仰いでしまった。……何やってんだよアスマ!!

「そうですね、致し方ないですね。ちなみに守護忍十二士の処罰はどうなさるおつもりですか？」

ここをハッキリしてもらわなければ、こちらが勝手に殺したと因縁をつけられてはかなわない。

「そうじゃのお、これまではみんな良くやってくれておった。改革派の死罪は止むを得ないが、その他の者まで罪を及ぼすつもりは余にはないぞえ」

大名のその言葉を聞いて安心した。アスマに限ってそんな事は無いとは信じたいが、早めにこちらに引つ張りこみたい。

「分かりました。まずはその地陸なる人物に会わせて頂けますか？」
「分かった、早急に話を聞く席を用意しよう」

この後、俺達が大名周辺を警護する事が決まり、ひとまずは御開きとなった。

その日の夜には、希望していた地陸と面談をする事が出来た。地陸は凛々しい眉毛に眉間に深い皺の入った坊主だった。まずは彼からの情報を精査する事が最優先だ。

「さて地陸殿、今回の件について貴方が知っている事、経緯も含めて全てを教えて下さい」

「そもそも私は火の国を戦火から守る為、その命を投げ出さんとする意志を持って、火ノ寺を離れ守護忍十二士となりました」

ちなみに火ノ寺とは「火の国に火ノ寺あり」と謳われる程の名利である。その寺で修行を積んだ忍僧の一部は「仙族の才」と呼ばれる特別な力を持つと言われている。

「今代の十二士となつてからも、その意思自体は変わってはおりません。しかし今回の中心人物たるカズマが、大名を中心とした国づくりをしようとする主張を始めた頃から、火の国を護りたいという思いが先鋭化し、過激な考えを持つ者達が守護忍十二士の中に広がっていったのです」

経緯は納得出来たので、頷いて地陸に視線で話を続きを促す。

「彼等の言葉を借りるなら、火の国を生温い木の葉に任せてはおけない、と言う事らしいです。木の葉の里は解体し、大名を中心に軍事を強化した国に再編する。それが彼らの計画です」

「なるほど、彼等のプランは現実に大名を動かすところまで来ていたと聞いていますが？」

「はい、先ほど述べた事までは大名の側近、ダンゴウ殿も大筋で賛成しておられたようです。しかし彼らは同時に他国への戦も準備していたのです。五大国間の微妙なバランスで築いた平和を良しとせず、火の国が世界を統一し、完全なる平和を実現するのだと大義を掲げて……どんなに立派な御託を並べても、戦は戦。流星に大名側も彼らの行き過ぎた考えに気付き、木の葉に救援を求めたようです」

何処で聞かれているか分からない為、口には出せないが、やはり彼らを助長させた大名側の責任は重い様に感じる。

「それで地陸殿はどうされるおつもりですか？」

「私は最初に申しました通り、火の国に戦火を及ぼさない為に守護忍

となりました。彼らの考えに賛同出来る筈もありません！」

地陸はそう口調を強めハッキリと否定した。ダンゴウの言葉と合わせて考えると、どうやらこの人は信用しても良いかもしれない。

「貴方の考えは分かりました。しかし他の守護忍達はどちらの立場をとっているんでしょうか？」

ここからが本題だ。反乱勢力の規模を知る事が出来なければ対策の取りようもない。

「私の他には、雷遁四人衆と呼ばれているキタネ、セイト、ナウマ、トウウらは反対の立場を取る事を確認しています」

「……アスマは革命側についている可能性がある」と聞いていますが、実際どうなのでしょう？」

三代目から頼まれたからとかは関係なく、友達として最も気になっている。ここで地陸からも改革派と見なされれば、俺はアスマを見捨てる決意をしなければならない。

「確かに首謀者のカズマと最も仲が良いのはアスマです。しかし、カズマの掲げる計画に火影は不要、つまり暗殺したがつているのです。……貴方の話によくアスマからライバルと聞いていました。そんな貴方なら分かるはずです、アスマが父親殺しを容認出来るような人間ではない事が」

なるほど、確かにアスマが父親たる三代目火影・ヒルゼンを殺す事はありません。二人の間に確執は有っても、それはアスマが父親に認められたいと思っているからであって、憎しみがあるわけではない。

むしろ死んでしまったては困るのだ。そうしてしまえば、アスマは一生認められる事は無くなってしまふ。俺は地陸の言葉に深く頷いた。「確かに、言う通りです。しかし先ほど反対の立場を取る守護忍の中に貴方はアスマを挙げませんでした。それは何故ですか？」

「あいつは知っての通り情に厚い男です。立場が違うからといって簡単に仲間を裏切れないのです。この件が表面化してからも、変わらない距離で奴らと接してします。おそらく説得を試みているのでしょう」

だから側から見ているダンゴウは改革派に挙げたのか。そして地

陸からしても明確な反対の立場とは言えないのだろう。黒と決まったわけではないが、あいつの立場は極めて不安定だ。

「あと最後に外部の協力者はいますか？」

「彼らの出身である一族にはそれとなく伝えていようです。しかし事を起こした後でなければ味方に着く事はないでしょう」

「なるほど、早い段階での参戦はリスクが大き過ぎますからね。失敗すれば一族郎党壊滅という事もあり得る」

「こうなれば、事を起こす前の早い段階で食い止める事が重要だな。戦うのは最後の手段としたい。ここでは謀略を仕掛けるのが最も犠牲が少なく済みそうだ。」

地陸から得られた内容を基にして、俺は計画を小隊長達と共に夜通し練ることにした。明日にはダンゴウを通じて大名へと提案出来るだろう。

「隊長、有無を言わず改革派を皆殺しにするのは下作じゃないか？一人くらいは見せしめとして、一族の前で殺すべきだ」

「いやいやゲンマ、お前の考えの方は過激過ぎるだろ！一族という新たな危険分子を生みかねないぞ」

「俺とシスイからすれば、二人とも十分に過激ですよ」

「俺の別天神を使えば全てを平和に解決できますが」

「それはダメだ」

シスイの別天神は瞳力の宿った目を見た対象者を、幻術に掛けられたと自覚することなく操る事の出来る最強の幻術だ。ただし、一度発動させれば、再発動まで年単位のサイクルが掛かる為に多用はできない。

猟犬部隊に配属となつてからも、一度として使わせてはいない。九尾事件以降、うちは一族と里の関係が悪化の一途を辿っている今、シスイにはうちは一族滅亡を回避する為にも、使わずにどうにか出来るうなこんな事で使わせる気はなかった。

「ヨフネ隊長、大変です!!」

議論が紛糾している中、サンタが俺達が打ち合わせしている部屋に

飛び込んで来た。

「どうした!？」

「守護忍十二士の改革派にダンゴウ殿が人質に取られました!大名との謁見を求めているようです」

「なんだと?!」

報告を聞いた俺達は部屋を飛び出した。途中、他のメンバーは大名の警戒にあたり、決して交渉には応じさせないようにサンタに指示を出した。

「サンタ、あと一つ頼みたい事がある。反対の立場を取る他の守護忍達は城の外に待機させて、逃亡を阻止するように地陸に伝えて欲しい」

「……了解しました」

サンタは何故寝室ではなく、外なのか訝しんだようだが、すぐに了承し走り去って行った。俺達は議論の中で守護忍十二士の一切を信用しないことを決めていた。意図せずとも作戦の邪魔をされる可能性だつてあつたからだ。

俺達は大名の寝室とは反対側にあるダンゴウの寝室へと急いだ。

俺達を迎え入れた事が何処かから漏れ、暴発を招いたのかもしれない。本来なら大名を狙う所だろうが、猟犬部隊が警護していた為、手が出せなかつたのだろう。

「ヨフネ隊長、寝室には改革派と見られる六名にダンゴウ殿……それにアスマさんがいるようです」

「この後に及んで何やってんだか」

「まあゲンマそう言うなよ。アスマが説得してくれたら一番楽だろう」

「隊長……本当にそう思ってるんすか?」

「すまん、思っていない」

無駄話を止めて部屋の前に着いた俺達は目配せをしてから、引戸を開け、手を挙げた状態で室内に入った。火影の執務室より広いとはいえ、俺達も入るとだいたい手狭に感じる。

「つヨフネー!お前、なんでここに?!」

「ヨフネ……って事は、やっぱり獵犬部隊かよ」

アスマが余計な言葉に反応したのはバンダナを巻いた大男だった。その手には武器とするには少し変わった錫杖を持っていた。どうやらこいつが主犯のカズマなのだろう。それにどうやらこいつは俺達がいる事を予測出来ていたようだ。入城する際に感じた敵意はこいつのだろう。

「ヨフネ殿、すまない」

人質となつているダンゴウは後手に縛られ捕らえられているが、年の功か随分と落ち着いているように見える。

「さてカズマとやら、一応聞くが大人しく投降する気は？」

「はあ？木の葉に飼われた犬の言うことなんぞ、俺が聞くはずねーだろうが！」

「だよな……おいアスマ、お前はもうどうしたいんだ？」

事態に着いて来れていないアスマだったが、問いかけられて我に返り、俯いて少し考える素振りを見せた。そして決意したようにカズマへと視線を向けた。

「俺は……俺は確かに改革を望んだ。しかしこんなやり方は望んじやない。カズマ、素直に捕まるんだ」

ふう。流石にアスマもこの場面で改革派を名乗るほどの馬鹿じゃなくて良かった。俺が来たことで三代目が絡んでいることは分かっただろうから、反発しないかと不安だったのだ。

「という訳だ、カズマ殿。大人しく捕まってくれない？」

「人質がいるし、こつちの方が一人多いつていうのに調子乗ってんじゃねーぞ、この犬っころが！」

「……残念です」

俺はその言葉と共に、念力で背後に浮かしていた音響閃光弾を部屋の中央に栓を抜いて投げた。

キュイイイイン！

俺達は爆発する瞬間、耳を塞ぎ、目を瞑って下を向いて防御した。耳栓ではない為、完全には音を防ぎ切れず若干の耳鳴りがするが、俺達は動く事が出来る。しかし敵とダンゴウにアスマは耳を抑えて身

動きを封じる事が出来ている。

それを見てシスイは得意の瞬身の術で、素早くダンゴウを取り戻し部屋から飛び出して行った。これで残った俺達三人は心置きなく戦える。

俺は雷遁を纏わせた雷刀を手に取り、耳を抑えていたカズマの手ごと首を撥ね、すぐに隣に立っている男の胸目掛けて雷刀を投げつけた。

ホヘトは柔拳を心臓に叩き込んで、二人を倒していた。ゲンマは啞え千本を吹き出したのだろう、敵の一人は眼球から千本が生えていた。

一瞬にして五人を倒したが、一人はゲンマのクナイを逃れ、窓を突き破って外へと逃げ出した。

それを追って俺達が飛び降りた時、敵は何かにかん全身が押し潰され絶命していた。どうやら地陸の術によるものらしい。これが仙族の才と呼ばれる力なのだろう。

「これで全て終わりましたね」

「はい、ご迷惑をおかけしました。彼らはせめて私が火ノ寺で供養しあげたいと思います。守護忍十二士はおそらく解散となるでしょうから」

地陸の言うように、おそらく解散となるだろう。これだけの事件を起こしたのだ、なんらかの形で噂は広まってしまう可能性は高い。外間を考えれば致し方ない。

飛び出して来てしまったダンゴウの寝室に戻ると、アスマがカズマの遺体の前で項垂れていた。

「アスマ……」

「……こんな奴でも、仲間だったんだ」

そう言つてアスマは泣き崩れた。

全て終わったが、俺はこの時大事な事を忘れていた。守護忍十二士

が解散となれば、アスマが里へ帰って来るという事を。

守護忍十二士のクーデターに伴い大名の警護とクーデターの阻止の任務にあたった俺達は、その過程の中で木の葉の財政を担当しているダンゴウを救う事も出来た。おかげで予算は増額だ。

そもそも木の葉の里の収入は、大きく分けると収入が多い順に任務料、火の国からの予算、里内からの税收といった三つである。

任務料の多くはそのまま忍達の給料となり、一部は里に収められている。その収められた金額で上役や退役した忍の給与、支給される忍具の購入資金に充てられている。ちなみに国境警備は国からの依頼という形をとっている。

里内の税收はそのまま里の運営にあてられているが、当然これらのお金だけでは木の葉はやっていけない。そうした不足分を火の国からの予算に頼っているのだ。

暗部についても、その予算から費用が賄われているらしい。だからこそ暗部は主に火影の直轄にあるとも言えるのかもしれない。

そして今回、「狛犬」が正式名称となった俺達の部隊は、給与は従来の任務料体制のままだが、装備品などの費用については国からの直接支給される事となった。ダンゴウ様々である。

音響閃光弾や特別製のゴーグル、さらには俺のレールガンの弾についてもこの予算から捻出する事が可能だ。さらには国から認められた正式な部隊となった事で服装を揃える事も認められた。

本当はそれぞれの戦場に適応した迷彩服が欲しかったのだが、流石にそれ程の予算を費やす事は出来ない。なので基本は木の葉従来の服装のまま、ベストを濃いグレーとする事にした。

ちなみにこのベストの肩の所には白いラインが入っている。第一小隊はラインが一本、第二小隊はラインが二本と一本ずつ増えている。第四小隊はラインが無しとなっている。また中隊長の俺は左腕にグレーの腕章を巻く事になった。あとは目立つ渦巻きマークの着用をやめたぐらいである。

統一された服装で全員が初めて集合した時は、自分達が認められたのだと実感することが出来た。やはり服装は人を高揚させる効果があるらしい。

しかし認められたからといって、仕事が少なくなるという事は無い。先日までも俺達にとつては、通常任務となってきたいる国境警備にあたっていた。停戦条約がまだ結ばれていない水の国方面への警戒だ。

哨戒任務というのは長期任務となりやすく、三週間ぶりに里へ帰って来た。ちなみにあのクーデター未遂からは既に一ヶ月が経っている。働き詰めだった俺達には二週間の休暇が与えられた為、久しぶりに平穩を満喫するつもりだ。

しかしその目論見は三日目にして崩れ去ってしまった。昨日任務に出ていた紅から里に戻ったと連絡を受け、俺は紅の家に向かった。すると守護忍十二士に代わる護衛の目処が経ち、里へ帰って来ていたアスマと鉢合わせしてしまったのだ。帰って来ている事は知っていたが、避けていたのに会ってしまった。紅の家の前で。

「……ヨフネ」

仕方ないとはいえ、こいつの友人を殺して気不味いというのに、最悪な場所で会ってしまった。流星にまだあの事は知らないだろうが……嫌だ。

「お前、こんな所で何やってんだ？」

ど直球にアスマからの質問がやって来た。もう見逃し三振でも良いから逃げ出したい。

「まあ、昨日紅に呼ばれてな」

だが、そういうわけにもいかず過去最高の冷や汗をかきながら正直に答えた。

「そうか、なら今日はあいつ家にいるんだな」

「えっ？知らなかったのか？」

「……悪いかよ」

(ギャアアア！俺ひよつとして地雷踏んだ?)

しかし、この相当に気不味い空気をぶち壊せる人物がやって来た。俺達とも顔馴染みの能天気な後輩、アンコである。さあこの空気をぶち壊してくれ!

「あれ? ヨフネさんにアスマさんじゃん! 二人とも里に帰って来て早々、紅さんを巡って修羅場ですか?」

待てエエエ! そんなぶち壊し方は望んじやいないんだよ! むしろ悪化したわ!

「ど、どどういう事だ? アンコ」

「えっ? だってヨフネさんと紅さんって付き合ってるんじゃないの? 前に団子屋の新作が出る日に朝早くから並ぼうとしてたら、ヨフネさんが紅さんの部屋から出てくるのを見たんすよ。あ、大丈夫ですよ! 誰にも言つてないですから」

おいしいいい、一番マズい相手に言ってるんじゃないか! ……まさか、あんなに早い時間に見られているとは思ひもなかった。アスマはというと、俯いて拳を握り締めプルプルと震えている。

「ひよつとしてやらかしちゃいました? ……あ! うち是用事があるんで、これで!」

シユタツと敬礼をかまして、アンコは逃げ去って行った。残されたのは二人と重たい空気だけである。

「ヨフネ」

「ハイ!」

「今から俺と決闘しろ!」

「ハイ?」

それから二時間後、俺は第三演習場にいた。何故かこういう時に限って、揃いも揃って暇をしていた同期達も演習場に集まっている。ってホヘトやシスイまでいるじゃないか。

「なんでお前達までいる?」

「アンコから話を聞いたガイさんがゲンマさんに。ゲンマさんから僕達だけ教えてもらいました」

人の口に戸は立てられぬとはよく言ったものだ。って広げ過ぎだ

ろ、アンコオ！あいつあの後も覗いてたな。

「ヨフネ、シズネが聞いたら悲しむよ？」

待って待ってトンボ、このタイミングでそんな気になる情報をぶっこんでくるな！

「ヨフネ、準備は良いか？」

既に殺気を漲らせたアスマはチャクラ刀を構えている。お前殺し合いでもするつもりなのか？

「良いけどさ、これって何の為の決闘なんだよ」

「まだしらばっくれるつもりか！」

そう言つてアスマが突っ込んで来た。190cmの巨体だが、かなり早い！しかし俺が身長が低いとはいえ、パワーで負けることはない。雷刀を構えて鏢迫り合いに持ち込んだ後、思い切り弾きかえす。

「お前、決闘で紅の事を解決しようとも思ってたのか？」

「それ以外の何がある！」

アスマは再度構えて、今にも飛び掛かって来そうな勢いで叫んだ。「そうか……気が変わった。本気で相手してやるよ、反抗期の糞餓鬼！」

八門遁甲・開門……開！

俺は自分の中のリミッターを外す。さらに脚にチャクラを集中させ、その場に土埃を残し、瞬時にアスマの後方に移動する。

「早い！」

観客の誰かが声をあげたが、それを無視して腰の辺りに蹴りを入れる。アスマは咄嗟に反応して前方に転がったが威力は殺しきれなかったようだ。

「お前は紅の事を物だとも思ってるのか？こんな決闘であいつの心をどうにかしようなんざ、甘すぎんだよオっ！」

転がったままの状態のアスマに更に追撃をしようとする、いきなり起き上がり手裏剣を投げつけて来る。

（四つ……こんなもんで俺がやられるとでも……いや、これは！）

「手裏剣影分身の術！」

手に持った雷刀で捌こうとしていた手裏剣が目の前で分裂するよ

うに増えていく。その数は既に二十を超えている。最初から飛んで来たのなら、その程度は問題無いのだが、飛びながら増える手裏剣の全てや叩き落すのは難しい。

「ヨフネー」

紅がこの場面で俺の名前を呼び、火に油注いだ。開門を開いたままだった俺は捌くの諦め、横に大きく飛んで避ける事にした。

「火遁・豪火球の術！」

すぐにそれを追撃するように、これまた派手な術が飛んで来るが、それは地面に向けて拳を放ち、岩を捲れ上がらせ防いだ。

電磁砲を使えばあつと言う間に決着が付くのだが、あれは手加減出来るような術ではないから、アスマに使うわけにはいかない。だが俺はガイほど八門遁甲を使える訳ではない為、開門が開いている時間は約一分だけだ。その間に決着をつけなければならぬ。

もう一度、脚にチャクラを集中させ、今度はアスマに正面から突っ込む。同時に腰に下げた水筒に右手を伸ばし、チャクラで水を掌に吸着させ、その手でアスマの口と鼻を覆うように顔を掴んで地面に叩きつけた。

「ゴハッ！」

アスマは息が出来ずもがくが、俺の怪力はそう簡単に振りほどく事は出来ない。人はコップ一杯の水で溺れてしまうのだ。チャクラが少ない俺なりに考えた、力技の水牢の術である。

最初はもがいていたアスマだったが、力を振り絞って右手の刀で俺を斬り付けようとして来た。仕方なく手を離して刀を躲し、アスマを木に向かって蹴って一旦距離をとる。

アスマは木にぶつかった衝撃か、溺れそうになったせいかわからないが咳き込みながら、こちらの方を睨んでいる。

「……なんでお前はいつも俺の前にいるんだ」

息を整えたアスマが語りかけてきた。伸びた無精髭、ボロボロになった服のせいで、まるで浮浪者の様だというのに、その鋭い眼光は未だ心が折れそうにもない。

「そんな少ないチャクラしかないのに実力をつけて、親父や里からも

信頼されて、ましてや紅まで！なんで俺が欲しい物を全て手に入れるんだよオ！」

アスマはそう叫ぶと何かを引くような仕草を見せた……ワイヤーか！先ほど飛ばした手裏剣影分身で使われた手裏剣が飛んで来ると思い振り返ると、そこには何もなかった。

「ガハッ！」

後ろに気を取られた隙を狙われ、アスマに顔面を殴り飛ばされてしまった。クソっ騙された。

「へっ！一発喰らわせてやったぜ」

「……ふざけんじゃねえよ」

俺はそう呟きながら、口元の血を手の甲で拭って、アスマと再び対峙する。

「ふざけんじゃねえぞ、アスマア！話を聞いてみればグチグチと女々しい事ばかり言いやがって！」

「良い顔になったじゃないか。ムカついてたんだよ、お前のいつも余裕そうな顔が！」

なんで俺がこんな面倒な事に巻き込まれなきゃいけないんだよ。顔がムカつくだ？知るかそんな事！必死な顔を見せる事が頑張っているとは限らないんだろ。それにこつち電磁砲無しで相手してやってんの、バカス力術使いやがって。

「隊長、それはいけません！アスマさんが死んでしまいます！」

頭にきた俺は無意識に鉄球を身の回りに浮かべていたようだ。スイイの声で我に帰り、鉄球をポーチに納める。スツと深呼吸して、再度話かけることにした。

「お前、自分が何やってきたか分かってんのか？」

「何のことだ」

アスマは本当に分からないのか、訝しんだ声をあげる。これだけ感が悪かったら、紅もそりや苦勞するわな。

「そもそもお前はなんで里を出て行ったんだ？」

「俺は認めてくれる人の所へ行ったただけだ。お前には分からないだろうがな」

「ああ分からねえな。相手には認めて欲しいクセに、その相手を認められないようなお前の考えなんざ、分からねえよ！」

せつかく心を整えたというのに、またイライラしてきた。この際だから全てブチまけてやる。

「認めてくれる大名の所へ行つてどうなった？お前は木の葉を裏切る寸前だったじゃないか。三代目に認めて欲しくて結果だけを追い求めた結果がそれだ！お前も少しは三代目の立場になって考えてみる！任務にしたって味方の過半数を戦闘不能にした隊長を褒めてやるはずがないだろ！火影だぞ。里のミライを護らなきゃいけないだ。いい加減、親離れしやがれ！」

演習場が静まり返った。聞かされた内容についてかもしれないが、俺がここまで熱く話している姿が珍しいのかもしれない。

「お前はただ逃げただけだ。いや、守護忍になれば認めてくれるとも思っただのか？」

「黙れ黙れ黙れ！」

アスマが聞きたくないという風な様子を見せているが、容赦なく畳み掛ける。

「それに里から出て行く時、お前は紅に何て言われた？」

「それは……」

「思い出せないなら教えてやるよ。お前は紅の告白を振り切つて出て行つたんだよオ！」

そう言つて今度は俺がアスマの頬を殴つてやった。アスマは殴られた勢いで膝をついた。

「紅がどれだけ悲しんだかお前は知ってるのか？少なくともここにいる同期の方が、お前よりは知っている」

アスマはダメージのせいかな、話を受け止めたせいかわからないが、膝をついて黙つたままだ。

「そんな紅を俺達が見捨てるわけないだろ！それなのに勝手に出て行つた奴が、戻つて来た途端に掻き乱しやがって！何でも思い通りにならないと気が済まないのか！」

「全てが思い通りのお前には言われたくねえよ！」

アスマが右足で俺にローキックをして来た。俺はそれをガードして、右足でアスマの側頭部を狙う。反応して腕を上げてガードするが、俺の力はそんな事では止まらない。ガードした腕ごと吹き飛ばす勢いで足を振り抜いた。

「……確かにお前から見れば上手くいっているように見えるかもしれない。だが俺の思い通りに全てがなるなら、オビトやリン、四代目が死ぬ事は無かったよ!」

こつちがどれだけ悩んで、努力して今の状態になる事が出来たのか、みんなは知らない。だがそれらを勝手に否定する事は絶対許さ

ん。
「……確かに俺はお前を妬んでるだけだ。変わる事も必要かもしれない……だけど、それでも俺は紅を諦める事だけはできない!俺は紅が好きなんだ!」

「……だってよ紅」

「……へ?」

俺のあつさりとした言葉でみんなが一瞬あつげにとられながらも、泣き腫らした目と頬を林檎の様に真っ赤にした紅に視線が集中する。

アスマが頭に血が上り過ぎて紅がいる事忘れ、みんなの前であるなこつぱずかしい告白までしたのだ。恥ずかしがり屋の紅からすれば当然かもしれない。

紅は涙を拭い、アスマの前に行った。

「あ、あああんた、どんだけみんなに迷惑かけたか分かってんの?」

「スマン」

「謝るのは私に対してじゃないでしょ!ま、いいわ。そ、それであんたはどうしたいのよ」

良くねえよ。まずはしっかりと謝らせんかい。気丈なように振舞っていたがやはり動揺は隠せないらしい。

「でもヨフネは……」

「人の事を気にしない!あんたはどうしたいの!」

「紅……俺と結婚してくれ!」

「……え?」

「嫌よ」

「「「え!」」」

アスマいきなりぶっ飛び過ぎだ!そこは付き合ってくれの間違いだろ。それで紅もどういうつもりだ。この流れだと答えはハイじゃないのか?」

「でも、付き合うって事なら考えてあげても良いわよ。結婚なんて……二人の将来像はハッキリしてないし、収入だって……」

ああ、結婚に対しての返事なのね。紛らわしい奴らだな。まだみんなは事態についていけない様なので、俺が声を掛けてやろう。

「おめでどう紅」

「ありがとうヨフネ」

「「「え?!」」」

こいつらはまた揃いも揃って同じ反応しやがって、打ち合わせでもやってたのかよ。

「なるほど、そういう事か」

「おい、イビキどうなってるんだ?俺にはさっぱり理解できんだ、教えてくれ!」

流石は拷問部隊員と言うべきか、イビキは真っ先に理解したようだ。逆に珍獣はどこから理解出来ているのかも分からん。

「どういう事も何も、俺は最初から紅とアスマをくつつける気だよ。ここに来る前から、こうなる様に仕組んだのさ」

「なに格好つけてるのさ、途中は完全に頭に血が上ってたでしょ」

……トンボよ、水を差してくれるな。

「ま、これだけみんなが集まるとは、流石に予想してなかったけどな。本当は二人で決闘して、アスマが告白したら紅が出てくる予定だったんだけどな……アニコ」

「ヤバッ!」

アニコが隠れて見ているのは分かっていた。逃げ出そうとしたようだが、ハンドシグナルで合図を出して、すぐにゲンマとシスイに捕まえられていた。

「すまんアニコ。条件反射で動いちゃった」

「アンコ、心配しなくても大丈夫ですよ。いくら隊長でも殺しはしないし、嫌でも強くしてくれます」

「ごめんなさいいい」

こういう迷惑な奴はきつちりと躰けてやらないとな。

この後、一応アスマから形だけの謝罪はされた。気持ちがかもつていたかどうかは分からない。今は時間が解決してくれる事をただ願うばかりだ。

その場は解散となるはずだったが、久しぶりに全員が揃ったからと、みんなに謝った後に何処かに行ってしまった紅とアスマを除いてみんなで飲みに行くことになった。

「ねね、ヨフネさんやい」

「なんだいカカシさんよ」

「結局さ……お前って紅としたの？」

「さあね」

碌に休む事の出来なかった休日はずぐに終わり、俺達はまた水の国方面の国境警備についていた。今は小隊長以上で集って情報交換を兼ねた会議中だ。

「最近、敵の進行も鈍くなって来ましたね」

「そうだな、数も少ないし斥候ばかりだ」

ホヘトとゲンマが指摘した通り、今までの苛烈さも身を潜めている。うちは一族の動向がキナ臭くなってきたし、オビトも霧隠ればかりに構ってはいられなくなったのかもしれない。

「クオン！」

その時、周囲に放っていたコン平から霧隠れの忍が来たと知らせが来た。先日倒した敵の遺体でも奪いに来たのか？

「ホヘト、白眼で南東の方角を見てくれ」

「白眼……見つけました。あれはおそらく霧隠れの暗部ですね。数は六」

暗部が出てきたということは、やはり敵の目的は遺体の回収だろう。やはりここで攻め入って来ないという事は、進行を一旦中断するつもりかもしれない。

「それなら狙撃とシスイの幻術だけで追い払えるな。たまには俺達だけでやるか」

「とは言っても、その作戦だと俺のやることは無いんだけどな」

ゲンマの文句に皆が苦笑しつつ、俺とホヘトは狙撃の準備に入る。シスイは瞬身の術の準備、ゲンマは敵との中間地点に配置させバックアップ体制を取らせた。

「ホヘト、一発だけだ。決めろよ」

「任せて下さい。組んでから一体何年経つと思ってるんです」

渦潮隠れの里での任務からだから、もう長いもので八年近い付き合いだ。お互いの癖や戦闘スタイルも含め知り尽くしている。おかげで今もホヘトの発射合図と俺が術を発動させるタイミングは、ほぼ同

時だった。

「敵一名死亡。ちゃんと一発で決めましたよ」

「流石だよ。後はシスイに任せよう。ホヘトは敵を確認しておいてくれ」

念の為、ホヘトにシスイを確認させていたが、どうやら瞬時に敵二名に幻術をかけたようだ。

「なにー！」

「どうした？」

しかしホヘトが驚いた様な声を上げた。いつも穏やかなホヘトにしては珍しい。敵が退かずに突っ込んで来たのか？

「敵の一人が……白眼を持っていました」

霧隠れの白眼使いとなると心当たりは一人しかいない。四代目水影になるメイの側近で、確か名を青といったはずだ。

「どうしますか？追いますか？」

奴には現水影の幻術を解いて貰わないといけない。ここで殺してしまつては困る。

「敵は撤退を始めたのか？」

「はい」

「なら止めておこう。追撃するにしても今は俺達しかいないんだ。人数が足りな過ぎる」

同族の眼という事で追いたがるホヘトを窘めた頃にはシスイ達も戻って来た。

「幻術で少しだけ相手の頭を覗きました。しばらく霧隠れは大人しくなるでしょう」

任務に就いてから間も無く三週間が経つ。そろそろ交代要員が来るが、これならば他の忍に警備を任せておいても、一時は大丈夫だろう。

ホヘトに敵の撤退ルートを確認して、シスイの第二小隊にいる棘糸テツセンにトラップを張らせた。

そして二日後に来た交代要員と入れ替わり、俺達は久々に里へと戻った。

「猟犬部隊任務完了。帰還しました」

小隊長以上で揃って三代目に報告をする為、俺達は任務の受付所に来た。今日は御意見番、つまり婆様とホムラの爺様もいる。

「そうか。長期の任務ご苦労であったな」

「ハイハイ、で次の任務はなんですか」

三代目が甘い言葉を言う時は要注意だ。今までの経験上、碌な事が無い。

「まあそう慌てるでない。しばし休暇を取るが良い」

これは本格的に何か面倒事があるに違いない。一週間とかでは無く、しばしだと？婆様もニヤニヤしているし、余程の事に違いない。

「どうしたんです。柄にもないこと言ってます」

「お前のお節介のおかげでアスマが落ち着いたからの、ヒルゼンからのご褒美じゃろうて」

尚も警戒していた俺に婆様が説明してくれた。二人はどうやら仲良くやっている様だ。

「はあ、なんだ。ただの親バカかよ」

「うるさいわい」

ただあれについては俺もかなり苦労したし、くれるというものを返す義理もない。ありがたく貰っておくでしょう。

「すみません三代目、ヨフネ隊長。それでしたらお願いがあります」

珍しくそう切り出したシスイに軽く驚きながら、三代目と俺は火影様邸の屋上に連れてこられた。するとシスイは俺達の目の前で膝をついた。

「うちはと里の不信感に心を痛めております」

「うむワシもじゃ」

とうとう、うちのクーデターが現実の物になり始めたようだ。

「一族と里を再び信頼で繋ぐことが出来ればと思っています。その任務を俺に授けては貰えないでしょうか」

「通常任務から外して欲しいという事か」

俺を呼んだのもどうやらその為らしい。三代目から許可を貰えば

済む話だが、猟犬の隊長である俺にもキチンと話を通しておきたかったのだろう。

「はい。それに加えて、俺にある程度の権限を与えて下さい」

「分かった。お前にはワシから極秘の調査任務を出したということにする。何か不備が生じた時はワシの名前を出せ。責任は全てワシが取る」

「ありがとうございます」

三代目のこういう所は素直に感心する。部下を信じて権限を与え、尚且つ責任を自分で取ると言える人間は少ない。

「ヨフネよ。お主もそれで良いな？」

「ダメです」

「え？」

しかし感心するのは俺が納得するのは別の話だ。この事はうちのだけの問題では無い。素直に、はい任せましたとはさせない。

「この問題、シスイ一人に押し付ける気はありません。三代目、猟犬部隊にその任務を授けて下さい。第一小隊をバックアップに回して、各種工事は俺とシスイでやります」

「隊長……」

死者を一人でも少なくさせる為の猟犬部隊だ。それにシスイ一人が頑張っても失敗する事は俺には分かっているのだ。退く気はない。

「そもそも俺がシスイをこの隊に入れた理由をお忘れですか？」

「……そうであったな。よかろう。お主に一任しよう」

「困った時は遠慮なく三代目の名前は使わせてもらいますんで」

そもそも三代目の甘さが招いた事態だ。それを自分で分かってダシゾウに汚れ仕事をさせているのだから、御す事の出来ない必要悪はただの害悪だ。火影の名前は大いに利用させて貰おう。

「好きにするがよい。しかしお主達を見ておると、かつてのワシの友うちはカガミと若き日のコハルを思い出す」

「まだまだ及びません」

「それだけはやめて下さい」

三代目から任せられた俺達は、シスイの提案に従う形でキーマンの一人であるイタチと接触をする事にした。

イタチが里から抜けなければ、サスケが強くなる事は無かったのか？という懸念があるが、俺はサスケの才能にかけてみる事にした。

それにイタチが里から抜けなければ大蛇丸もカブトも殺すことが出来るだろう。穢土転生の術式自体は切り札として入手したいが、敵に使わせる必要はない。

そうすればオビトを殺すだけで戦争は終わる。もしオビト殺害に失敗しても、マダラ達を殺す為に必要なのはナルトやサスケだ。だが彼等を確保していても、うちはこの保険は欲しかった。

間も無くシスイがイタチを里の郊外にある、この溪谷まで連れてくる事になっているが、一先ず俺は隠遁を使い隠れておく。万に一つでもイタチが一族の側につく気ならば、姿を見せる事は出来ない。

「昔よくここで遊んだな」

「……戻っていたのか」

シスイに少し遅れてイタチもやって来たようだ。まずはイタチの真意を聞き出してもらおうとしよう。

「ああ、ようやく霧隠れを追っ払えたよ」

「そうか。で要件は？」

「お前の率直な意見を聞きたい。フガクさんはどこまで本気だと思う？」

「本気とは？」

「クーデターだ」

クーデターと聞いた瞬間、イタチの気配が変わった。向こうもこの質問に対しては、親友とはいえ疑ってかかるしかないのだろう。彼等一族の中では少数派なのだから。イタチは慎重に言葉を選びながら答える。

「うちでは里に対する不満が高まっている。里がこのままなら、うちも我慢の限界を超えるだろう」

「里が変わればうちも変わるか」

「だがうちはが変わらなければ里は変わらない。双方に不信感がある以上、事態は悪化するだけだ」

「俺はその不信を払いたい」

「できると思うか？」

「さあ、だがやらねばならない。うちはがクーデターを起こせば、それは双方に不幸な結果しかもたらさない。お前はどう思っている？」

「その質問に答える前に……そこにいる奴、出て来い」

まじか、自来也様仕込みの隠遁だったのに気付かれるとは思ってなかった。まだ決定的な事は言っていないが、ここまでの会話からするとイタチはこちらと志を同じくする者のように思える。シスイを見ると同意見のようで頷いている。ここは大人しく出るしかないだろう。

俺は身を隠していた木から飛び降り、姿をさらした。

「凄いな、噂にたがわぬ才能をもっているようだな。シスイがキーマンに挙げるだけの事はある」

「貴方だったのでかヨフネさん。私なんて貴方と比べれば霞んでしまいますよ」

「流石にそれはない」

手を横にぶんぶん振りながら答える。どう頑張っても、イタチに才能で勝てる気なんてしない。それはさておき、まずは俺もこの件に關しての立場を明確にしないといけないだろう。

「俺もうちはにクーデターを起こさせる気は無いし、なるべく血を流さずに解決させたいとも思っている」

「良かった。……俺もクーデターには反対です。しかし阻止するには余程のことをしなければ」

俺の言葉に反応してか、イタチは自ら一族の厳しい現状を突き付けてきた。もしかすると、この時点でイタチは一族の滅亡についても考えているのかもしれない。

「それも分かっている。だが諦めるつもりもない。俺とシスイ、それにお前が協力すれば可能だと思っている。まだ詳細は知らせていないが、猟犬の第一小隊にもバックアップはさせるつもりだ」

厳しい現状が分かっても、俺はシスイの別天神による作戦を成

功させたい。

「あと協力しようとは言ったが、お前はまだ直接動かない方が良い」

「何故です?」

「警務部隊の一部がお前を疑っているらしい。シスイにお前の監視を命じて来たようだ」

イタチは疑われている事にショックを受けたのか、俯いてしまう。

「俺とシスイは三代目から任命されて動いているが、お前は誰の意思で動いている?」

「俺は俺の意思で動いています……ですがダンゾウ様と一族の二重スパイという立場です」

「つまりだ、俺達はこの件に対して異なる立場を取る三組の中心にいる事になる」

「待って下さい隊長。それはどういう事ですか?」

そうか、シスイは知らないのか。だからダンゾウに呼ばれてノコノコとついて行き、右眼を奪われたのだろう。

「ダンゾウ様はうちは一族は排除すべきだと考えている」

「そんな!」

「そうだろ? イタチ」

イタチはそんなダンゾウの指示で動いているのが後ろめたいのか、気まずそうな顔をしつつ頷いて認める。

「……そんな」

「だがイタチだってそんな結末は望んでいないさ」

「もちろんです」

「だったら、これからは俺が里の情報、シスイは一族のイタチはダンゾウの情報を集めて、この三人で共有するんだ」

今回は政治工作も重要となって来る。そして政治工作するには最も情報が必要だが、俺達が各陣営の中心にいる以上、最も得られる情報は多くなる。それぞれに与える情報をこちらでコントロールしてしまえば、優位に立てる。

「分かりました。しかし三代目には流さないのですか?」

「あの人は優しすぎる。人としては美徳だが、今回はそれが邪魔にな

る可能性もある。それに火影が否とさえ、俺達は動けない。三代目とは目的が一致しているんだ、裏切ることはないさ」

この協力体制がなければ、考えている作戦は上手く行かないだろう。そして一族やダンゾウはもちろん、三代目にも邪魔はさせない。「分かりました。俺は隊長を信じます」

「俺達で里の未来を守りましょう。それで何か作戦はあるのですか？」

「もちろん考えてあるさ。と言ってもシスイがフガクさんに別天神を使い、里との融和を考えて貰うってだけだがな」

「父さんに……それで里と一族を守れるのなら俺に依存はありません」

「フガクさんは決して早まった事をする人ではないと思っっている。今はもう望めないが、待遇について里側から譲歩して来れば、話し合いに応じていただろう」

もつとも自分達から先に譲歩する気は無かっただろうが。

「俺は少しでも歩み寄りの姿勢を見せる事が出来ればとずっと思っていた。九尾事件以降、不信感が高まっていた時に猟犬は結成された。その時に俺は、日向にうちは、その他の名家を隊員とする事で里一丸となる事をアピールしたかったんだ」

それが全てと言うわけではないが、そう願っていたのは確かだ。

「そんなに前から考えていたのですか？」

「結果として、止める事は出来なかったがな」

里に住む全員の意識を変えることなんて早々できやしないのだ。シスイを隊に入れてみたが、シスイの評価が上がるだけにすぎなかった。

「最悪の場合として今回の事も頭にはあった。その為にお前には別天神は使わせなかった。そして今こそが使うべき時だと思っっている」

この話し合いでとりあえず、この作戦に二人も同意してくれた。そして別天神の件だけは三代目に伝えておくことになった。

「明後日、南賀ノ神社で会合がある事はダンゾウは知っているのか？」

「はい、既に伝えてあります」

「なら明日にもダンゾウが三代目と面会するだろう。おそらく俺とシスイも呼ばれることになるだろうが、その時はシスイお前一人で行け」

「隊長が行った方がよろしいのでは？」

「俺が介入しているという事は、まだダンゾウには知られたくない」

「分かりました」

話し合いは夜遅くまで続いた。

三代目には解散した後で俺が作戦を伝え、予想通り翌日の会議に呼ばれたシスイは、別天神を使い改心して貰う事をダンゾウの前で説明してくれた。

そしてついに今日が会合の日だ。イタチも何かあつた時の為に会合に参加させる事にした。しかし不必要にシスイとの繋がりを見せる事は得策でない為、イタチは先に南賀ノ神社に行かせている。

そして俺はというと猟犬部隊の建物から神社までシスイの警護をしていた。ちなみにこの建物というのは、予算が増やされてから購入した拠点である。それからは完全休暇でもない限りは、全員ここで待機するようにしたのだ。

「シスイ殿、ダンゾウ様がお呼びです」

南賀ノ神社に向かう途中、やはりシスイはダンゾウに呼び出された。会合の始まる二十分前である。

「こんなタイミングでか？」

「はい、至急の用との事です」

「分かった」

暗部の根の者に案内されるシスイに俺も付いて行く。周囲にコン平を放っているが、道中に気配は無い。ただこの先の寺にはダンゾウだけでなく、少なくとも一個小隊は待機している様だ。

「何でしょうかダンゾウ様、そろそろ会合の時間なのですが」

寺でダンゾウと向き合ったシスイは、急かすように口火を切った。

「フガクに懂術をかけ、うちはをまとめたとして、里が変わらなければどうする？」

「火影様が変わってくれると約束してくれました」

「三代目が説得しても里の者の不信はそうそう消えぬぞ」

「ですが、時間をかけていけば」

「それにだ。ワシのように疑り深い者はそう簡単には考えを変えぬ。その時はどうする」

「しかし、ダンゾウ様……」

話がキナ臭くなってきた。それに巧妙に話をすり替えようとしている。今問題となっていてるのは、うちへの待遇についてなのだ。ダンゾウの様な少数派をどうするのかは、多数派をまとめてからでも遅くはない。

「その時には、このワシにも別天神とやらを使うのか？」

「俺は……」

「その写輪眼、わしが預かる！」

「御免！」

ダンゾウは会話を遮るようにシスイに手を伸ばした。しかし流石に警戒していたシスイは咄嗟に左手を掴んで防ぎ、幻術までかけたようた。

「ただの幻術です。じきに覚めるでしょう」

シスイが周りにいるダンゾウの護衛にも聞こえるように声を掛け、南賀ノ神社に向おうと背を向けた瞬間、シスイの腹部にダンゾウの攻撃が決まっていた。先ほどまでのダンゾウの姿は霞み、消えていく。

ダンゾウは老人とは思えないスピードで追撃を与える。しかし目を突いたタイミングで、シスイは煙となり消えた。

実は建物から出た時点で、既にイタチの影分身がシスイに変化していた。何故シスイでなくイタチなのかというと、シスイは別天神を使う為に余計なチャクラを使わせたくなかったのと、イタチにダンゾウの思惑を見せたかったからである。

一族の会合には既にシスイが出席しているだろう。無事にフガクに幻術をかけられれば良いのだが……

そして影分身が解けた事で、オリジナルのイタチにもこの情報は届いただろう。

ダンゾウの独断専行を一先ずは食い止める事ができた。早くこれを三代目に伝えて何かしらの処分を下させよう。

もうこの場に用はないので退散するとしようとすると、ダンゾウが言い放った。

「やはりお前も動いていたか、ヨフネよ」

どうやら退散しようとした事で、バレてしまったようだ。イタチといいダンゾウといい、どうしてこうも鋭いかね。俺はしようがなく姿を現わした。

「どうやらお主は邪魔のようじゃ」

「そうですか。私にとっては貴方の方こそ邪魔なんですがね」

「ほう、ワシを前にしてよく言い切った。しかし逃すわけにはいかん」
そう言う根の部隊、二個小隊が現れた。しかしこちらも一人で動いているわけではない。敵に呼応する様に俺の側には、バックアップの為に待機させていた第一小隊が現れる。

こちらは六人で相手は九人。普通なら部は悪いが、俺達なら撤退する事は可能だろう。

「俺達とやり合おうって言うんですか？」

「それもよからう」

「水遁・水弾の術」

一斉にこちらに向けて発射されて来る。弾幕を張るつもりなのだろうが、俺たちから見ればまだまだ連携が甘い。横一列に揃ってはいないし、射線が重なっている所だっている。

「先に手を出してきたのはそっちだからな」

「土遁・土流壁」

こっちは壁を作って水弾を防ぎ距離を取った。しかもまだダンゾウは動いていない！チャンスだ。

「雷遁・電磁砲」

慣れ親しんだ術を發動させ、あっさりダンゾウの頭を撃ち抜いた。やった、これでこの先の出来事がどう変わるのかは分からないが、悪化する事は無いだろう。

根の者達にも動揺が広がっている。長居する必要は無い。この隙

に退散しようとして踵を返した。

「どこへ行く」

「なに?！」

振り返ると目の前には、何故かダンゾウがいた。

「風遁・真空連波」

虚をつかれ、身体が硬直した隙をダンゾウは見逃しはしない。息を吸い込むと口から複数のカマイタチを吹き出して来た。

「――倍化の術」

しかし、いち早く反応したシトウが術を使い、腕を巨大化させカマイタチを防ぐ。

「シトウ、助かった」

ダンゾウを見れば異様に白い右手が服から出ている。しかもよく見れば手の平に何か球体の物が埋め込まれている。

(クソっ写輪眼は一つじゃなかったのか!)

「防がれるとはな。しかし逃す訳にはいかん」

当たり前の話だが、人の目は二つあるのだ。何故二つ所持しているという可能性に思い当たらなかつたんだ。大蛇丸とダンゾウが裏で繋がっている事はわかつていた。そして大蛇丸は柱間細胞を入手し研究していた。その結果、テンゾウは木遁を使う事ができるのだ。

大蛇丸は里から抜けているが、ダンゾウはテンゾウを基に大蛇丸の研究を引き継いで既に柱間細胞が埋め込んでいたようだ。そうして右手に仕込んであった写輪眼でまたイザナギを使われたらしい。

「全員ここで死んでもらう」

「そうはさせない」

ホヘトを除く第一小隊の面々がダンゾウとの間に立ち塞がった。

「ヨフネ隊長!あなたはこんなところで死んで良い様な人じゃありませんよ」

「そうです。いずれ火影にだってなれる人だと信じてます。此処は俺達に任せて下さい」

「何て顔をしてんです。早く三代目の所へ!ホヘト隊長、ヨフネ隊長を頼みます」

「……分かった」

三人は笑顔で振り返って俺に先に行くように促す。隣にいるホへトもだ。

「あいつらの意志を汲んでやって下さい」

「……すまない」

俺は何としても、この世界の被害を最小限にしたいんだ。ここで死ぬ訳にはいかない。

(だがダンゾウ、貴様は許さん。いずれ俺が仇をとってやる)

その決意を胸に俺は三代目の所へ向かった。

「取るに足らん連中だ。さっさと片付けて奴らを追え！」

「「舐めるな！」」

「「吾らは木の葉の死神に率いられし獵犬なり！己が矜持にかけ何人も通させはせん！」」

三代目の所へ向おうとする俺達の後方から閃光が瞬き、爆音が鳴り響くのを感じた。おそらく音響閃光弾を使ったのだろう。あれを使えば数的に不利であっても、いくらかは優位に戦闘を進められる。無理はせず退き際さえ見逃さなければ生存の確率は上がるはずだ。

隣を走るホヘトを見ると歯をくいしばりながらも白眼で後方を警戒してくれているようだ。俺はこいつらの期待に応えなければならぬ。

無事に火影邸に着き、執務室の扉を開ければ三代目以外の姿は無かった。イタチとシスイはまだ会合の最中だろうが、根の者がいないか気がかりだったのだ。三代目が警備している暗部を下らせようとするのを止めさせ、話し始める。

「三代目、報告したい事があります」

「なんじや、まだ会合の最中であろう」

「ダンゾウに襲われたんです。この地点にすぐ増援を送って下さい！」

俺とホヘトだけでここへ来た事を不審がる三代目の言葉に対して食い気味に答え、地図を書いた紙を渡す。三代目はすぐに直轄の暗部を手配してくれた。

慌しくなった室内が落ち着くと、俺達が囮を使った事など三代目に報告していなかった部分を含め、ダンゾウの行動を説明した。

「ダンゾウ、あやつめ……」

ダンゾウについては三代目も疑っているようだが、木の葉の為に動く男だと信頼もしているのだろう。それ以上は何も言わなかった。シトウ達については俺達が行くとまた狙われる可能性もあったので、暗部を手配してくれて助かった。

「ところでお主はシスイが狙われる事を知っておったのか？」

「知りはしませんが、可能性の一つとしては考えておりました。俺はダンゾウを信用などしていません」

三代目は目を伏せたまま黙って聞いている。うちはと里の不信感だけでなく、里内部の不信感も大きくなっている事に心を痛めているのかもしれない。しかしこちらは黙ってはいられない。

「実際にその不安は当たりました。改善しようとする三代目を妨害したんですよ？ましてやシスイの目を奪おうとまで！さらに言えば何故ダンゾウが写輪眼を持っているのです？」

「何故あやつが写輪眼を持っているのかはワシにもわからん。しかしその様な行動に出た以上、処罰はするつもりじゃ」

ここで三代目がどんな罰を下すにせよ、死罪にはならないだろう。しかし力を持ち過ぎたダンゾウの力を削ぐ事くらいは出来るだろう。

「報告します」

そうしていると暗部の一人が音も無く室内に入ってきた。カカシだ。俺をちらりと見て報告するのを躊躇ったのだろうが、三代目が頷くのを見て報告する。

「指示があった地点に向かったところ、確かに戦闘が行われた痕跡がありました。それに……猟犬のベストを着た遺体を三体確認しました」

「クソが……」

「交戦した相手ですが、残された血痕から見るに四名以上は死亡している様なんです。遺体は何処にもありませんでした」

カカシから齎された報せは最悪の物だった。シトウ達が死んだ、俺を守る為に。その事実を受けて知らず知らずの内に拳を強く握り締め、手からは血が流れていた。

「カカシ、部下を丁重に運んでやってくれ、頼む」

このまま野晒しにしておくわけにはいかない。仮面を着けた暗部相手に名前で呼んでしまったが、カカシは黙って頷くと部屋から出て行った。部下の死はこの件が解決するまで発表出来ないだろう。余計な疑念を招くわけにはいかないのだ。

部屋の空気が淀み、誰も言葉を発する事もなく夜も更けて来た頃、シスイとイタチが火影邸へとやって来た。

「三代目、ヨフネ隊長、作戦は成功です。フガクさんは里が変わるなら

和解も止むなし、うちには犠牲を出すわけにはいかないとみんなに説明しました。当然反発も有り、まだまだ時間は掛かるでしょうが、とりあえずクーデターを免れることが出来ました」

「そうか、それは何よりじゃ」

満面の笑みのシスイだったが、俺達の暗い顔を見て何か有ったのだと察したようだ。イタチはシスイの動揺を誘わない為にもまだ話していないらしい。やはりシトウ達の事は俺から言うべきだろう。

「シスイ、イタチの影分身に付けていた護衛の第一小隊だが、ホヘトを除いて全滅した」

「え？」

「ダンゾウがお前の別天神を狙って襲撃を仕掛けて来たんだ。それで俺を逃がす為にあいつらは……」

「そんな……」

明るかったシスイの顔がみるみる暗くなっていく。五年以上任務に出ている死者は無かったというのに、まさか里内でのトラブルで出す事になるとは思わなかったのだろう。それも一度に三名も。だがここでずつと黙っているわけにはいかない。

「これからだ、シスイとイタチには継続して会合には出席して貰う。何かあればすぐ三代目と俺に報告してくれ。あいつらの犠牲を無駄にしない為にも何としてでも食い止めるぞ」

ここで挫けている場合では無いのだ。悲しむのは成功した後、三人の墓前に報告してからで良い。そうでないと顔向け出来ない。

「もうすぐダンゾウがここへ来る。イタチよお主は一先ず帰るんだ」

二人を待っている間、三代目がダンゾウを問い質す為執務室へ呼び出していた。そろそろ来る頃合いだ。まだイタチとの繋がりを見せるには早い。シスイと同様に狙われる可能性だつてある。イタチは俺達に頭を垂れるとすぐに姿を消した。

イタチが部屋を出て行って間も無く、暗部に連れられてダンゾウが入って来た。そのあまりに堂々とした立ち振る舞いからは何の罪悪感を感じ取る事が出来ず、思わず怒りが込み上げてくる。

「ダンゾウ様、どういふつもりです！」

普段は温厚なホヘトもダンゾウの様子を受け、俺より先に切れていた。だがそれも当然である、彼らはホヘト直轄の部下だったのだ。俺よりも長い時間を共にすごしている分、感情を抑えきれなかったのだろう。

「そう吠えるな。それに今はこんな所で議論している場合ではなからう」

「惚けるな！貴方は木の葉の同胞を殺したんですよ！」

「そんな証拠が何処にある？」

俺とホヘトという証人を目の前にして、よくもそうぬけぬけと言う事が出来るもんだな。腹芸もここに極まるというものだ。こいつの必要性や合理的な考えを全否定するつもりはない。それこそ人目につかぬ功績も多いだろう。だが、絶対に俺はこいつを認めてはやらない。

「それにだ、言った筈だ。こんな所で議論している場合ではないと」

その不遜な物言いに俺達がまだ掴んでいない情報を入力している事を悟った。そして、とんでもない情報をダンゾウは告げる。

「先ほど、うちはフガクが何者かに被害されたとの情報が入った」

淡々と告げられたその内容はこのタイミングで最悪の報せだった。俺達が僅かに固まっていると、それを嘲笑うかのように話し始めた。「警務部隊を見張らせておったワシの部下からの報告だ。どうやらお主達の作戦は結果的に失敗したようだ。おそらく和解を模索し始めたフガクに対し、過激派が詰め寄って殺してしまったという処だろう」

「貴様……どうあつてもうちはを滅ぼしたいのか！」

これには思わず俺がキレた。まだ会合が終わって数刻しか経っていない段階で、そして自分が呼び出されたタイミングでこの情報を持って来られては疑わざるを得ない。

「何を勘違いしておる。ワシではない、あやつらが自分達で滅びの道を歩もうとしておるだけだ」

「貴様が手を下したのではないと申すか」

「そうだヒルゼン。しかし、万全を期す為に慎重に行動していたフガ

クが殺されたとなると、奴らが暴発するのも時間の問題だろう」

ダンゾウはいつも通りの無表情だが、どこか嬉しそうに聞こえるのは気のせいだろうか。それに事態の急変で紛らわそうとしているのかもしれないが、看過出来ない事が残っている。

「その前にお前には答えるべき質問が残っている。俺達を襲ったのは何故だ」

「お主も聞いておっただろう。ワシは疑り深い性格でな、今まではシスイを信じておったが、今回の事で別天神とやらがいつ木の葉に向くかも分からなくなった。シスイとはいえ、うちはだ。危険は早い段階で摘んでおくに越したことはない」

結局はこいつの前で別天神の作戦を伝えた俺の判断ミスという事か。おそらく今の言葉は真意だろう。だが俺からすれば別天神以上にダンゾウの方が信用ならない。

「なら……何故奪おうとした」

「ワシならばより効果的に扱えると思ったまでよ」

「何様のつもりだ！」

思わず俺とホヘトは声を荒げた。ダンゾウが別天神を木の葉に対して使わないという保障もない。人は駄目でも自分は良いだと？そんな我が儘を聞いてられるか！そう俺が言おうとすると三代目に手で制された。

「もはやお主の独断専行を許してはおけぬ。根は本日をもって解散、相談役の任も解く。お主は処分が決まるまで謹慎しておれ」

「なっ！」

三代目もかなり頭に来ていたようだ。この決断を自ら下した事に俺達もダンゾウも驚いている。だが当たり前の話なのだ、ここまですて処罰が無いと思える方がおかしい。

この場合はダンゾウの謹慎とフガクの件の捜査を火影直轄の暗部にも行わせる事だけが決まり、一旦解散する事になった。

ダンゾウに処罰が下されたからといって、うちはこの溝が埋まる訳ではない。むしろ一族をまとめていたフガクが殺された事によって、

今後の動向が全く分からなくなった。

フガクが殺された翌々日、俺は葬儀に参列していた。シスイが配属された時から何度か会った事があり、殺された原因を作ったのが俺達であるとの罪悪感からである。しかし一族以外の参列者に対する視線は冷たい。これでオビトの時と合わせて、うちのは葬儀は二度目だが毎回居心地が悪い思いをしている。特に今回は里との緊張が高まっている状況でフガクは殺されたのだ。うちが里側に犯人がいると考えても不思議ではない。

葬儀が終わり不自然じゃない程度にイタチ達家族に挨拶を済ませる。サスケは訳も分からずただただ泣き続けていた。妻であるミコトさんは気丈に喪主としての役目を務めていた。どうやら事件当日は夫より先に家に帰る事で難を逃れたらしい。

俺は居た堪れない気持ちで葬儀を後にし、火影邸へと向かった。そこで三代目とシスイが集めた情報を交換する事になっていた。部屋に入ると既に全員が揃っていた。イタチは一族から尚も疑われている為、当分の間は直接火影邸に近づかないよう決めており、この場には不参加だ。

「これで揃ったの、うちの様子はどうじゃ？」

「一族では里に対する不信感がこれまで以上に渦巻いています」

「やはりそうか」

「フガクさんの遺体からは右眼がくり抜かれていました。一族にとって誇りである写輪眼をくり抜くなど一族の者ではあり得ない。和解しようと考え始めていたのに里は暗殺を執行した、多くの者がそう考えているようです。しかし事件の夜から姿をくらましている一族の者がいるのも確かです」

「それは誰だ？」

「若手武闘派の中心人物、うちはイナビです。俺が不肖ながら一族の若手の中核を担っているんですが、それが気に食わないのか衝突する事も有りました」

その名前は確か要注意人物のリストに上がっていた。となるとダンゾウの言う通り、うちのは跳ねっ返りが事を起こしたとも言える

だろうか。

「ふむ、警務部隊からもそう聞いて、暗部の方でも全力で捜索しておるが、手掛かりすら掴めておらん。その警務部隊じゃが、新しい部隊長をうちはヤシロにするとの申請が来ておる」

「どんな人物です？」

若手で実力もあるとはいえ、この二日間何の手掛かりも無いとなると共謀者がいる可能性もある。ヤシロなる人物についても気になって聞くと、シスイが説明してくれた。

「フガクさんも認める切れ者でタカ派の代表です。しかしフガクさんのカリスマ性は有りません」

ヤシロが一族を纏め上げる事が出来れば良いが、それも難しそうだ。また姿を消したのが急進的な若手武闘派、新しく隊長となったのもタカ派の中心人物となると内部の自作自演の可能性も高い。結果的に彼らの立場はより強固な物となっている。

だが結局はイナビを見つけない事には真相が分かる事は無い。継続して捜索すると共にクーデターの危機については、遅過ぎたかもしれないが話し合いによる解決を図るといふ事になった。さしあたっては、うちは内の勢力図を鮮明にする事が先決だ。何も収穫の無いまま、イタチとの集合時間となり解散となった。

「シスイ、ところで瞳力はどうだ？」

執務室を出てる寸前、シスイに確認をする。こいつも自身の能力を、また使えるようになるとはいえ犠牲にしている。それにこの力には分からない事が多過ぎる。

「右眼は使ったばかりなので、まだまだ元には戻りませんね。左眼は第三次忍界大戦で使ったので八年は経っているんですが、やはりまだ戻りそうもありません。別天神を開眼した者は少ないので、文献も僅かしか有りませんが、どうやら十数年は必要な様です」

「そうか、結果として無駄に使わせてしまったな」

「隊長の所為ではありませんよ。こんな事になるなんて俺も予想していませんでした」

そう言いながら出口に近付いたので、スツとシスイが離れた。獵犬

部隊という事もあり、一緒に居てもおかしくはないが、警戒するに越した事はない。外では極力人目を気にして行動する様にしていた。

「じゃあ俺は一足先に例の場所に向かうぞ」

「では一旦施設に寄って、後から行きます」

下に南賀ノ川が流れる谷に着くと既にイタチが来ていた。父親が殺されたばかりだというのに、まだ十三歳とはとても思えない程しっかりしている。冷静に事実を受け止め、その影響を考えているようだ。

「父を殺した犯人が判明したとしても、クーデターは止めるのは難しくなりましたね」

「そうだな、今はあくまで先延ばしになっているだけだ。もう話し合いによる解決しか残されていないだろう」

「……険しい道のりですね」

イタチの言う通り、話し合いが解決する見通しはない。だがやらないう事には始まらない。話し合いの中からより効果的な解決方法を模索するしか無いというのが、全員の共通認識だった。

「里側が何処まで譲歩出来るのが鍵だな。あとお前とシスイにはやってもらいたい事がある」

「なんででしょうか？」

「クーデターの反対派のリストを作って欲しい。手元にはフガクさんが居なくなる前の物しかない。今の情報が知りたいんだ。全否定の者、武力行使には反対の者の二つに分けて欲しい」

「なるほど、父の影響力を見る事でヤシロさんの統率力を測り、尚且つ一族の反対派を纏めるつもりですね」

「それしかないだろう」

交渉は一方からだけするのではなく、多面的に行った方が効果的はずだ。しかしリストを作れと言っただけで、すぐにそこまで推測できるとはさすがイタチである。そのままお互いに案を絞り出しながら検討を続けた。

「しかしシスイは遅いですね」

「そうだな少し探してくる。イタチは待っていてくれ」

時間を空けて来るとはいえ時間が経ち過ぎている。どうも嫌な予感がする。シスイが辿りそうな迂回ルートを急いで逆走しながら探す。

「ヨフネ隊長……」

「どうしたシスイ?!」

人の気配を感じて立ち止まると、木の影からシスイが出てきた。しかし服はボロボロとなり、閉じられた右眼からは血を流していた。

「ダンゾウに……根の者に右眼を奪われました」

「何だ?! 監視している暗部は何やってる!」

「それよりも早くイタチの所へ!」

「おい、何を考えている?」

俺は知っている。この状況になったシスイが何をしようとしているのか。だがそんな事は認められない。認めてやるものか!

「参ったな、隊長は何もかもお見通しですか」

「さあな弱気なお前の考えなど知らん!」

「聞いて下さい。万華鏡写輪眼の開眼には一つの条件があります。それは……最も親しい友を殺す事です」

「何を言ってるんだ!」

そんな事は知っている。知っているからこそ認められない。お前が死んだってクーデターを止める事は出来ないんだ。

「俺をイタチに殺させる事で万華鏡写輪眼を開眼させるつもりです。イタチが別天神を開眼する可能性もあります」

「そんな可能性は無い! それにまだお前は助かるじゃないか。諦めるな!」

「いくら隊長だって、そんな事言い切れないでしょ。今の状況を考えてるところこれが最善です」

「……………分かった。とりあえずイタチの所へ急ぐぞ。但しだ! 条件を飲んでもらうぞ」

「“条件”ですか?」

「シスイ?!何があつた?」

俺が肩を貸して谷まで連れて行くとイタチが駆け寄って来た。ここまで焦った顔を見るのは初めてだ。

「ここへ来る途中、うちはイナビと会った。奴は嵌められたと言つたよ」

「二人で行つたのか?」

「いいから聞け。奴は会合の帰り道、ダンゾウがうちはを潰そうとしている事、写輪眼を持っている事をヨフネ隊長から聞いたと言つていた」

「そんな事あるはずがない。だってあの時、ヨフネさんは三代目の所に居たんだぞ」

「そう、あるはずがないんだ。しかしイナビはヨフネ隊長とダンゾウが対立している事を知っていた。その上でヨフネ隊長に扮した何者かがイナビにダンゾウを襲わせようと画策したらしい。イナビはダンゾウが会合の夜、前回俺達が襲われた寺に現れると聞いて待ち伏せをした。そして情報通りそこに現れたダンゾウを背後から襲つて右眼をくり抜いたんだ。だが気付けば自分の足元に居たのはフガクさんだつたと言つていた」

おそらくは幻術にかけられ、フガクさんをダンゾウと認識させられていたんだろう。フガクさんは裏切る筈のない若手に対して、あまり警戒していなかったのだろう。しかしフガクさんは何故あそこにしたのだろう。

「奴が幻術に気づいた時には、根の者達に囲まれていたらしい。くり抜いた右眼は奪われたが、あの寺の奥に見える山まで逃げて潜伏していたそうだ。しかし今日になって山狩りが始まり追われるようにして出てきた所へ、偶然、俺がいたらしい」

「あの山は確か根の管轄下の筈。どうりで暗部も見つけられないわけだ。こうなると父さんの殺害は実行犯がイナビで、黒幕はやはりダンゾウか。ではお前の右眼もやはり根か?」

「そうだイナビすらも罠だつた。ダンゾウはあえて泳がせて俺の元へ

誘導したんだろう。二人で話している時に根の者に襲撃され、右眼を奪われてしまった。奴はなりふり構わず自分のやり方で里を守るつもりだ。おそらく左眼も狙われる。その前にこの眼をお前に渡す」

そう言うときスライは自分の左眼を指を入れて取り出した。俺は思わず顔を背けてしまったが、イタチはしっかりと見届けたようだ。手渡された左眼は口寄せしたカラスに持たせようだ。

「確かに受け取ったぞ。それでおまえはどうする？」

「今のままでは、うちのクーデターは止められそうもない。もしクーデターが起きれば他国が必ず戦争を仕掛けて来るだろう。だが俺が死ねばいくつか状況が変わるだろう。遺書も置いて来た。ただ俺を殺すのはお前だ、イタチ。そうすればお前も万華鏡写輪眼を開眼できる」

「な、なにを言っている」

「万華鏡写輪眼を開眼するには親しい者を殺さなければならぬ。今なら俺を突き落とすだけで良い」

そう言いつてスライはイタチの手を取りつつ、崖の淵に立った。

「ほらしっかりしろ」

スライはイタチの右手を自分の胸に押し当てた。

「やめてくれ……」

「じゃあなイタチ。一族の名誉と里を守ってくれ」

「……スライ」

スライはそう言い残し、イタチに無理やり自分を押しさせて崖の下へと消えて行った。

イタチはシスイの思惑通りに万華鏡写輪眼を開眼したが、やはり別天神ではなかった。シスイについては遺体は見つかっていないが、直前の行動などを改竄し自殺と判断されるように既に手配している。

口封じの為に殺されたイナビの死体も本来であれば利用したかったのだが、根はダンゾウが謹慎処分を受けて解散させられており、今はこれ以上人目に着くような行動は出来なかったのだろう、完全に証拠を消す事を決めたらしい。

しかしダンゾウはどこまでも足を引っ張ってくれる。これだけ動いても結局は原作通り、というよりもあいつは自分の思惑通りに事が進んでいると感じているだろう。三代目には報告したが証人の二人が話せなくてはとうする事も出来ない。事態が収束するまでは、暗部による監視の強化しか処分も下せないだろう。

だが思惑に簡単に乗る訳にはいかない。俺も色々と手を打っている。シスイが懐に入れていた遺書もイタチの元へ連れて行く前にシスイに少し修正させている。

争いに疲れた

これ以上”道”に背くことは出来ない

このままではうちには未来は無い

そして、オレにも……

いかにもシスイらしい端的な文章だ。最初に直接見せてもらった時には、曖昧でどうとでも取れたので少し直接的にうちは批判に捉えられるように訂正させたのだ。

これを見た警務部隊はシスイが一族のクーデターに疲れた結果、自殺したと判断するだろう。しかしフガクさんが殺された後でもある。他殺の線を消し去る事は出来ないだろうが、おそらくイタチに容疑の目が向く可能性は少なくなる。ここでイタチに監視がつけば動きにくくなる為、それは避けたかった。

シスイの跡を継いで若手の中核を担うようになったのは、ヤクミと

いう人物だ。彼は若いながらもフガクさんの側近として働いていた為、シスイいなくなつた後、その座に座る事になった。ただシスイが穏健派だったのに対して彼はタカ派であり、今後より一層クーデターに近づく可能性がある。

そんな中、三代目の上役筆頭のシカクさんに警務部隊と交渉を持つよう進言し実行された。もちろん名目上は待遇についての意見交換という形である。ただ里側としては一定の譲歩を見せたのだが、話し合いは平行線で交わる事はなさそうだった。うちはからの要望はこちらの予想を大きく上回る物であつたからだ。

一、警務部隊の主要ポストは継続して、うちは一族を充てる事
二、九尾事件の真相究明及び、事件発生時の対応についての総括を公表する事

三、うちは一族から上役筆頭、もしくは相談役への就任
四、居住の自由化

この四つの要求をして来た。もちろん理解出来る物もあるが、九尾事件の真相究明など不可能な事から、上役筆頭への就任など里内からの反発が予想される物まである。しかもこれが最低条件と言っているらしい。

交渉の仕方がなっていないとシカクさんも呆れていた。通常交渉とは最初に大きく出て、折衝により落とし所を探る物である。そればかりか一族の要望を纏められていないという事で要望が減るところが増える可能性すらあるらしい。もし真相究明して、犯人がオビトだと分かつたらどうするつもりなのだろう。いつその事バラしてやりたくなる。

ただし里側から譲歩の姿勢を見せた事で穏健派は揺れているようだ。不満が全て解消されなくとも人が死ぬよりかはマシという考えを持つてもおかしくない。そんな穏健派をまとめてもらおうと、俺はフガクさんの妻であるミコトさんと会う事にした。

「お忙しいところすみません」

「いえ、それより主人の件で何か新しい事が分かつたのですか？」

こうして初めて面と向かつて話すのは初めてだが、うちはらしい黒

髪の美人だった。葬儀の時もそうだったが、今もしつかりとこちらを見返す事の出来る強い女性でもあるようだ。

「今日は別件です……単刀直入に申し上げます。私はうちは一族にクーデターは起こさせたくないんです。私に協力して貰えませんか？」

ミコトさんが息を飲むのが分かった。夫を殺されたばかりの人にこういった事を頼むのは無神経だと言われるかもしれない。しかしいつの世も同情されるといふ事は武器になり得るのだ。夫や父親が亡くなってその意志を継ぐ、そういつて出て来る政治家は後を絶たないのもその為だ。ぜひ揺れている穏健派の中心人物になつてもらいたい。その思いを胸に俺は畳み掛けるように説得する。

「フガクさんは亡くなられる前の会合で里と融和する方針に切り替えていたそうじゃないですか。私はそれに反対する勢力に殺されたのではないかと考えています」

「……それで何が仰りたいのかしら」

「ご主人が亡くなられた事で今迄と比べ、より過激な考えを持つタカ派の人々が台頭してきていると聞いています。このままでは里と双方にとって不幸な出来事となりかねません。その一方で里側が歩み寄る姿勢を見せた事で穏健派人々も増えてきます。しかし彼らには中心となる人物がいません。その役目を貴女にやつて頂きたいのです」

ミコトさんは夫やまだ幼い子の事を思い浮かべているのか目を閉じてじつとしていた。やがて考えがまとまったのだろう、口を開いた。

「貴方の考えは双方にとって有益かもしれませんが……でも私には不思議でしょうがないんです。あれだけ頑固なあの人が唐突に融和を打ち出すなんて……寡黙な人でしたが、何かに悩んだら必ず私にだけは相談してくれていました。だからどうにも私にはあれが、あの人の本当の意思とは思えないんです」

鋭いな、流石は夫婦といったところか。別天神の事を知らなくても、脅迫でもされたのではないかと考えたのかもしれない。

「それはご協力頂けないという事でしようか？」

「……今日は主人に焼香して下さり、ありがとうございます」

もう帰れと暗に言われてしまっただけは仕方がない。彼女はおそらく俺の訪問の事も話すつもりはないのだろう。穏健派の中核を担える人はこの人しかいないと思っていたのだが……これ以上説得をした所で無駄となる可能性は高い。

俺はちようどアカデミーから帰って来たサスケに挨拶だけして、その場を後にした。

結局は元々穏健派で今は忍を引退している、煎餅屋の亭主であるテヤキさんにまとめ役をお願いした。優しく一族のタカ派からも信頼されている人物だが、人をまとめられる程の力が有るわけではなかったらしく、多数工作は期待したほど上手くはいっていない。

それにどうやら時間もないらしい。最近、うちは一族の者が頻繁に空区へ出入りしているのを国境警備中の猟犬部隊が確認している。またそんな里が警戒を続ける中、昨晚にうちはがフガクの死後初めてとなる会合を行ったのだ。

ただ一族全体という訳ではなく働き盛りの男衆を中心としたタカ派の人物のみだが、どうやらミコトさんも参加したとの事である。もちろんイタチも参加しており、その報告の為に三代目に相談役の二人に俺、そして監視役を伴ってはいるが何故かダンゾウまで来ていた。「謹慎中の方が来られているようですが」

「里の一大事だ。そんな事も言っておれんだろう」

(……自分で言うなよ)

謹慎しているとはいえ情報を得て指示を出す程度はわけないだろう。自分の思い通りにいっている為か、ダンゾウは尚も余裕の表情を崩さない。全員が揃った事を確認してイタチの報告が始まった。

「うちは一族は木の葉に革命を起こす決意です。明日の夜、決起集會が行われます」

「なんじゃと?！」

最後にイタチが放った言葉により部屋の空気が一気に重くなった

が、やはり一番最初に動いたのはダンゾウだった。三代目に向かって言い放つ。

「うちにはクーデターは起こさせん、その思いだけは儂もお主も同じはずだ」

「うむ……」

三代目が頷いたのを確認してダンゾウが立ち上がった。どうも素直に謹慎先の自宅に帰るわけではなさそう。三代目もそれを感じ取ったのかダンゾウを引き止める。

「待てダンゾウ、まだ結論は出ておらん」

「うちは一族が準備している以上、儂らも準備せねばなるまい」

「……良いな、準備だけじゃぞダンゾウ」

おい三代目、何言ってるんだよ。謹慎中ということをおぼれたのか？それにこの局面で自由に動かれては俺の計画が崩れてしまう。何としても止めないといけない。

「待って下さい。謹慎中の者に権限を与えるなんて何を考えているんです。ルールは偉いからといって破って良いものではありません。ダンゾウ様には大人しくしておいて貰いましょう」

上層部は例外を作り過ぎている。それも例外は極一部の者達、すなわちここにいるメンバーに対してのみである。民主主義を導入しろとは言わないが、反発ばかり招くやり方は間違っている。

「ヨフネよ、そう熱くなるな。この状況じゃ仕方あるまい」

「……ダンゾウの処罰について減刑を望むというのですか？」

ダンゾウから何か言ってくるかと思ったが、意外な事に婆様がダンゾウを擁護してきた。だが婆様とて容赦はせん。

「そうじゃ、こやつは野心家で疑り深い性格をしておるが、常に里の事を考えておる。表をヒルゼン、裏をダンゾウこの状況が一番上手くいっておる」

「上手くいっていないからこそ今でしょう」

上手くいってなければ、こんな状況にはなっていないのだ。そもそも九尾事件の際にダンゾウが三代目に対し、うちは一族を防衛の任から外すようにさせたのが引き金なのだ。

「ではダンゾウがフガクの下手人との証拠はあるのか？」

思った以上に婆様は現状を理解できていない。確かにフガクさんが殺されていなければ、ここまで急速に悪化する事はなかっただろう。しかし殺されなかったとしても、うちは一族との禍根が全て無くなったとは限らないのだ。そもそも俺は相互不信を解決するのが目的ではないのだ。あくまでイタチによる一族全滅を解決できれば良いと思っていたのだ。そんな思いは表に出していないから伝わるはずもないのだが……

とりあえず今はダンゾウを自由にさせるわけにはいかないのだ。

「それ以前に俺は殺されそうになった」

「……知っておる」

「知っていて尚庇うのか?!」

「みんながお前のように割り切れる性格ではないのだ！」

「その部分を婆様がホムラの爺様と二人で担えば良いじゃないですか！」

己の孫であっても、そう割り切れるなら婆様は担えると思うが、あくまで責任は取りたくないとも言うのだろうか。婆様の事は尊敬しているのだが、一旦距離を置いたほうが良いかもしれない。木の葉全体を見れるようになってから、よく意見が対立してしまっているのだ。

「待て、身内同士でそう熱くなるな」

ホムラの爺様が熱くなる俺達を止めてくれた。ここで言い争っても何にもならないのは確かだ。

「……分かりました。私はあくまで今回の件に深く関わっているだけの一忍です。だけどこれで最後です。次何かあれば投獄も止むなしという事で良いですね？」

「致し方あるまい」

とりあえず暗部には準備させ、イタチは今夜の会合に参加し何か異変があればすぐに連絡を寄越す事となった。俺は里に残っているホへとタシを引き連れて三代目と行動を共にすることとなった。

夜になり会合が始まってしばらくすると、第一級警備体制を知らせる鳶の鳴き声が鳴り響いた。火影の執務室に待機していた俺達も慌ただしくなる。

「すぐに自治区に暗部を派遣し、直ちにうちは一族を拘束ないしは暗殺せねばなるまい」

「ダンゾウよ待て、一族郎等処分する必要があるまい。こちらにはタカ派の人物のリストがある。そ奴らさえ確保すればよい！暗部は全て俺が指揮する。貴様も一緒に来い！」

ダンゾウは嫌でもうちは一族を壊滅させたいらしいが、最終的には三代目に従う素振りを見せた。実際はイタチをけしかけて暗殺を命じているのだろう。しかし余裕の表情ではなかった。イタチが一族を討ち漏らす事を心配しているのかもしれない。

予め待機させていた暗部は出動するにあたって警務本部へと向かう部隊と会合が行われている南賀ノ神社へ向かう部隊、そしてタカ派としてリストに名前が載っている者の家に向かう部隊の3つに分けられた。俺は三代目が自ら率いている南賀ノ神社に向かう部隊に同行した。夜遅くという事もあり街中には人の姿は見えない。

神社の境内に入ると床板が一部剥がされていた。おそらくこの下に例の石碑があるのだろう。しかしそんなことよりも全員が気になっっている事があった。境内に入った時から異常なほど死の香りが充満しているのだ。暗部が警戒しながら下へと潜っていき、すぐに安全が確認され俺達も降りていく。

「酷い……いったい何が」

暗部の一人がそう呟くのも無理はない。室中には百名余りのうちは一族が織り成すように死んでいた。ある者は頭部が割れ、またある者は腕を失くしていた。そして最も多いのは焼死体であった。

「生存者の確認を急げ！また遺体は全て回収せよ。よいか全てじゃ！」

三代目はそう指示を出したが、生存者は絶望的であろう。俺達も一人一人死亡を確認していく中、胸を刺されたミコトさんの遺体も発見した。最後の表情は笑っていた。一体何を思って殺されていたの

だろう。

「待て、止まるんだ！」

虚しさしか残らない遺体の確認をしている中、上にある境内がなにやら騒がしくなってきた思っている、どうやったのか上にいた忍をすり抜けてサスケが階段を駆け下りて来た。おそらく帰りが遅い母親を迎えに来たのだろう。この場の光景を目に焼き付けるよう呆然とした表情を見せている。しかしその目に母親の姿が映ったようだ。

「母さん……う・なんで、なんで母さんが死んでるの？ねえ！誰がなんでこんな事したの?!誰か何か言つてよ!!」

「お前の兄、うちはイタチがやった。奴は己の一族を嫌い憎んでいた。そこで自分の父親である、うちはフガクを殺しその目を奪い、うちの同胞と争い事を引き起こした。そしてとうとうこの凶行に及んだのだ」

母親の死体を見てパニックになっているサスケに対しダンゾウが無慈悲な宣告をする。そしてこの言葉は全員に対して言われたものでもあった。その動機が嘘である事は三代目も分かっていただろうが、犯人がイタチであるという事も同時に理解したのだろう否定はしなかった。

「なんで兄さんがそんな事するんだよ！兄さんじゃない！兄さんじゃないに決まってる!!」

「誰かその子を木の葉病院に連れて行ってやりなさい」

三代目の言葉に従い、暗部の一人がサスケを連れ出した。その事により再び静寂が戻ってきた。おそらく全員が詳しく話を聞きたいのだろうが、流石は暗部というべきか黙々と作業を進めていた。そして作業が終わると俺と三代目とダンゾウを残して、他の部隊の応援に出て行った。

「これで全てとは言わんが、一先ずは解決したな」

誰にも聞かれる恐れがなくなるとダンゾウが一安心とでも言うように三代目に言葉をかけた。しかしそれを見過ごせるような俺達ではない。

「何が解決だ。ワシらの喉元に太い骨が突き刺さったという事が分か

らんのか！」

「なに、ほんの小骨よ」

おそらくここにいる遺体の家族も同様に殺されている事だろう。その数を合わせれば二百人は超えるだろうというのに小骨と表現できるダンゾウを俺は睨みつけた。それは三代目も同じだったようだ。

「ダンゾウよ、もはやお主の独断専行はワシでもかばいきれん」

「三代目……約束通りダンゾウ様は投獄という事で構いませんね？」

「致し方あるまい」

この為に今日の昼に予め全員の前で次に何かあれば投獄も止む無しと了承させておいたのだ。ダンゾウはこの状況にに焦ったのか弁明を始める。

「しかしワシは木の葉の為を思えば」

「里の為というのであれば、うちはも里の者であった」

しかしその言葉を遮って三代目が言葉を重ねた。とりあえずはこれで大人しくなってくれるだろう。ダンゾウの排除という目標は達成する事ができた。

事件の被害は予想していた通りイタチに作らせていたタカ派のリストに載っている者とその家族だけであった。そして家族の方は遺体が消えているものがいくつかあったらしい。おそらく集会所はイタチが襲い、それぞれの家庭を襲ったのはオビトなのだろう。

写輪眼は強力であるがゆえに争いの種となりやすい。生き残ったのはほとんど戦闘力の無い一族の者ばかりだが、ここで血を途絶えさせる事だけは避けられた。この悲しみによって新たに写輪眼を開眼する者もいるかもしれないが、これから相互努力していけば衝突を避けられるはずだ。

事件から一夜明け、俺は三代目に呼び出されていた。呼び出された場所は教えられなければ分からないビルの谷間とでも言うべき所だった。そしてそこには既にイタチ待っていた。

「何か言いたい事があるのだろう。人払をしておいた、この話を聞いておるのは三人だけじゃ」

「ご配慮感謝します」

どうやらイタチとの最後の会話としてこの場を設けたのだろう。そして三代目は何もかも話すつもりらしい。

「まずは礼を言う。これで木の葉は内戦を免れた、里の平和は守られたのだ。しかし他の手段はなかったものかと今も残念に思っておる」
「申し訳ありません」

「謝るのは儂だ。これから里はお前を一族殺しの抜け忍としてビンゴブックに載せ、生死を問わず搜索することとなる」

結果として重荷を背負わせる事になってしまったイタチに対して酷い仕打ちだが、里としてはこうする他ないのだ。イタチも当然ですと答えた。これで十三歳とは恐れ入る。

「これからどうする」

「暁と名乗る組織の手を借りました。その者が約束を違えぬよう側に身を置くことにします」

「暁に入るといふのか」

「サスケの命を守る為に三代目もその事を確約願えますか」

やはりこれがイタチの目的だったのだろう、その言葉には力が籠っていた。イタチのその願いはこちらとしても言われるまでもなく、そうするつもりだった。

「お前の弟はこれまで同様、他の子と同じ様にアカデミーに通い、木の葉の忍びとして育つであろう。何一つ不自由はさせぬが、お前への憎しみまでは取り除く事は出来ん」

「その憎しみを背負う覚悟は出来ています」

強い少年である。三代目と目配せしてイタチに隠している事を白状する。

「イタチ、お前にはもう一つ謝らないといけない事がある、シスイの事だ」

イタチは訝しげな表情をしている。それもそうだろう、自分が殺したと思っていた親友について切り出されたのだから。

「あの激流に飲まれたから遺体が見つからないんじゃない。実はあれは俺とシスイの芝居だったんだ。シスイは生きている」

「は？」

俺がイタチの表情を確認するとポカンとして口を開けていた。まだ固まっているが詳しく説明してやる。

「お前との待ち合わせ場所に来る前のシスイは確かに死ぬ気だった。自分が死ぬことで別天神がお前に発現すれば良いと思っていたようだ。だが俺もあいつは治療すれば治す事が出来たから殺したくはなかった。そこで一つ条件を出したんだ。それが川へ身投げする事だ。そうすれば下に待機させていた部下にシスイを回収させて治療をする事が出来た。今は猟犬の施設で治療を受けている」

川に飛び込むという条件にシスイは分からないという表情をしながらも了承してくれた。川からタシに引き上げられる事は伝えてはいなかった。生きて治療を受けていることに気づいたシスイは訳が分からないといった具合だった。

「お前の事だ、もう気づいているかもしれないが万華鏡写輪眼の開眼条件は大切な人を自分で殺す事だ。その為にシスイは自分の命を顧みずあんな事をしたんだ。正直フガクさんが殺された時点でうちは一族の全員を救う事を俺は諦めていたんだが、シスイが死んだタイミングを利用して里側から譲歩を示す事で穏健派に多数工作を仕掛けられれば、一部の者だけでもを救うことができると思った。そして穏健派の中心人物として俺はミコトさんを選んだんだ。断られてしまったけどな。ちなみにこの事は三代目にも事後報告にはなってしまったが知らせていた」

ネタばらしというわけではないが、イタチが里を出る前に全てを知らせておきたかった。といってもイタチが暗殺を執行するのを知っていて利用した事までは言う事ができないが。あえてシスイが死んだ後モリストをイタチに作らせたのは、穏健派を生き延びさせるためだったのだ。

「だから母さんは最後にあんな事を……母は俺に殺される前に『私も少しは役に立てたかしら』と言っていたんです。その意味がようやく分かりました。きつと母は父が殺された後も自分が会合に参加する事で潜在的なタカ派までも纏めたかったのでしょう。後顧の憂いを

断つ為に」

笑顔で死んでいったのはそういうことだったのか。今回の事件で俺は自分の事を冷酷な奴と思っていたが、どうやらそうでもなかったらしい。俺にはそこまで冷酷な手を打つ事は出来なかった。俺は自分が今回の件の主導権を握っていると思っていたが、結局はミコトさんの掌の上での事だったのか。

「ヨフネさん、シスイの眼を返しておいて下さい」

そう言つてカラスを呼び出そうとしたイタチを手で制す。

「シスイからの伝言だ。『お前が里を出ても道を踏み外さないか、俺が見てやる。一緒に連れて行つてくれ』だそうだ。それに奴の眼には他にも心当たりがあるしな。ダンゾウからシスイ自身の眼とフガクさんの眼を取り戻して移植させるつもりだ。構わないか？」

「はい、父の眼をあの人が持っている事は許せませんし」

それもそうだ。その言葉に頷いてから、懐からお金が入った袋を投げてやる。

「俺からの餞別だ。現金で悪いがあつて困る物じゃないはずだ。猟犬の予算から出しといたから遠慮なく使え」

「もう行くがよい。里を包む結界の術式はそのままにしておく。サスケのことが心配なら、いつでも忍び込んで参れ」

「貴方達のその優しさをうちは一族が理解しなかったことが残念です」

「なに俺はただ甘いだけよ。それゆえにこの悲劇を生んだのだ」

イタチは俺達に礼をして姿を消した。俺はまた会う機会があるだろうか。今はただあいつの無事を祈つてやる事しかできない。そう思っているとき三代目が急に俺の方を向いた。

「ダンゾウがいなくなった今、俺はお前にこれからもつと頼る事となるじやろう。警務部隊の再編と暗部の再編をやらなければならない。いずれにしても国境警備や極秘任務など人手が足りなくなるだろう。そこでじゃ……今後は猟犬を連隊規模とするがよい」

「はー。」

契りの里

「メイ様、各地の制圧が完了しました」

「では、これでようやく……」

部下の青からの報告を聞いて、自分がようやく五代目水影になるのだと実感して来た。この里では一番強い者が水影になるのだ。そして今の里では私が一番強い。あとは大名に信任を得るだけである。

「これであろうやくあの人の約束が果たせた」

「あの人は？」

思わず口に出していたようで青に聞かれてしまった。今まで誰にも話した事がなかったのだが、彼のおかげでクーデターが成功したと言っても過言ではない。最も信頼している部下の一人でもある。クーデターが成功した今、話してあげても良いかもしれない。

「第三次忍界大戦の時、私は奴隷兵として渦潮隠れの里襲撃に参加していました」

「死を恐れないよう呪印を施された、あの奴隷だったのですか?!しかも渦潮隠れ襲撃はかなりの激戦だったと聞いています」

あの激戦で生き残る事のできた奴隷兵はほぼいない。生き残った者にしてもその後も続いた戦闘で相次いで亡くなっている。自分が生き残れたのは血継限界を二つ持っていたのとあの人に呪印を解放してもらったからである。

「私はその時の戦闘で負傷し敵地に取り残されてしまいました。しかしそこに一人の木の葉の忍がやって来て治療をしてくれたばかりか、呪印の解放までしてくれたのです」

「それは……なんとも木の葉らしい甘い人ですね」

今では冷酷無情とか言われているが、少なくとも私にとっては優しい人だった。あの人は呪印の効果が知りたい等と色々理由を言っていたが、それだけならば自陣に連れ帰って人体実験されていた筈なの

だ。治療も行う必要はない。不審に思つて尋ねるとあの人は私の事をか、かか可愛い等と言つてくれた！

「水影様？顔が赤いですが大丈夫ですか？」

「大丈夫よ！それでその人は治療してくれた後に逃走ルートまで教えて逃がしてくれたの。革命を起こして霧隠れの里に平和もたらして欲しいと言つてね」

それに平和になればまた会えると言つてくれた。今は二人とも立場があるが、いずれ国交が結ばれば会う事ができる筈だ。

「なるほどそういう約束だったのですね。それでその人は誰なんです？この里にとつても恩人ではないですか」

「貴方もよく知っている人よ。木の葉のうたたねヨフネよ」

「猟犬連隊を率いるあの死神ですか?!連隊規模でありながら一人の死者も出さずに小国を落としたというあの！恩人である事には変わりないかもしれませんが、奴は信用できるような人間ではありません！」

「黙れ、殺すぞ」

「ひい」

青は確か猟犬に何度も煮え湯を飲まされていた筈だ。だがあの人を侮辱することは許さん！青はこっそりと白眼を私に使っているが幻術に操られたりはしていない。この想いに気づいた時に真っ先に自分で調べたんだから。

「私達の里も木の葉のように平和にしたいわね」

「はい、私もそう願つてはいますが血霧の里といったイメージはそう簡単に覆るものではありません……」

三代目水影から続いた血霧の里という名称はあまりに広く知れ渡ってしまった。何か新しい俗称を付けられたなら良いのだが……

「そうね、自分達の結束を示す為にも『契りの里』というのはどうかしら」

「なるほど、良いかもしれませんね」

青に文字で書いて見せてあげると賛同してくれた。ヨフネ、私は貴方との契りを守りましたよ。いつか会える時まで私はこの里を立派

にしてみせます。

「まずは悪名高いアカデミーを改革するわよ！」

学び舎の日常

「なあそろそろ卒業試験だけだよ、シカマルは卒業したら行きたい部隊とかあんのか？」

朝からキバを中心に何を騒いでるかと思えばそんな事かよ。こつちは朝が苦手だつていうのに面倒くせえ。

「んなもんねえよ。忙しくなくて生きていけるだけの金が貰えりやそれでもいい。間違っても猟犬連隊なんかにははいりたくねえよ」

「なんだとテメえ！ 猟犬連隊格好良いじゃねえかよ！」

少し言っただけなのにすぐにこれだ。そういやキバはあそこに入りたいんだつたっけ？

「悪い悪い、でもよ一族にダエンさんって人がいるんだけどよ、元々忙しかったつてのに中隊長になってからなんて過労死するんじゃないかってくらい働いてるぜ。俺はごめんだね」

「おまえ知り合いに猟犬の中隊長がいんのかよ!? 上げえな！」

「お、おい俺の話聞いてたか？」

つたく自分に都合のいい話しか聞きやしない。そりやさ小隊規模が中心のこの世界で連隊規模で活躍すりゃ話題にもなるし憧れるつても分からなくはねえ。ただ俺もポリシーには反するんだよな。

「なあ、みんなは猟犬に知り合いいんのか？」

「秋道家からはマルテンさんって人が中隊長だった筈だよ。確かイノん所にも中隊長がいたと思うよ」

「油女家からはムタさんが出ている。なぜなら俺の一族は遠距離攻撃に優れた秘伝忍術を持つ一族だからだ」

「なんだよ、みんな知り合いがいるんじゃないやねえか。なんで俺の姉ちゃん連隊入りを断ったんだよ！ 獣医よりよっぽど夢があんだろうが」

なんだ結構周りに関係者がいるんじゃないやねえか。でも一番憧れてるキバの周りにいなくてのは皮肉だな。

「なんの話してんだってばよ」

また騒がしいヤツが増えやがった。ナルトとキバが揃うと静かになつた試しがねえ。

「なんだナルトか。獵犬に知り合いがいるかどうかって話だよ」

「それってなんだってばよ」

思わず全員こけそうになる。こいつは馬鹿だとは思っていたが、そんなことも知らねえのかよ。

「いいか、獵犬ってのはだな十三歳で上忍になつた、うたたねヨフネって人が作り上げた部隊で連戦連勝の木ノ葉最強の連隊なんだぜ！ま、獵犬を知らないおめえに知り合いがいるとは思えねえな」

「うげ、ヨフネの兄ちゃんそんな凄え人だつたなんて知らなかつたってばよ」

ナルトの言葉に驚かされた。まさか獵犬のトップを知ってるなんて誰も思つてなかつたはずだ。つてかヨフネさん知つてて獵犬の事を知らないなんてどこまで馬鹿なんだよ。ただキバはそれどころじゃなさそうだ。

「おまえヨフネ連隊長の事知つてんのかよ?!」

「ん？だつてさだつてさ俺の事たまに面倒見てくれるタシ姉ちゃんって人がいるんだけどさ、よく一緒にいるから俺も会つた事があるんだってばよ。あの人にイタズラやつて殺されかけたけど」

「おいしいいいい！てめえ何やつてんだよ！それにタシつていや、連隊長の補佐役だろ？なんでお前なんかの面倒みてくれんだよ！」

「俺なんかつてなんだよ！母ちゃんの知り合いで出産にも立ち会つたからつて、たまに飯作りに来てくれんだってばよ」

「なあ……姉ちゃんつて聞いてたけど俺らが生まれた時にその場にい たつて事はいくつなんだよ？」

「キバー！それ絶対姉ちゃんの前で言つたらダメだつてばよ！死ぬつてばよー！」

ナルト……おまえはどんだけ獵犬の上層部に殺されかけてんだ？

あいかわらずわけわかんねえヤツだな。

「くそーみんなばっかり狡いぞ！俺は卒業したら獵犬に入ってやる！
こうしちやいらねえ、今から火影様ん所に行つて直談判してやる
！」

「キバ！待てつてばよ」

意外なことにキバを止めたのはナルトだった。なんだかんだ卒業
も近付いたし落ち着いてくれたなら……

「そっちから行くと途中で捕まっちゃうつてばよ！爺ちゃんの部屋に
入り込むならこつちが近道だつてばよ！」

思わず頭を抱えてしまう。どうせそんなこつたらろうと思つたぜ！
少しでも期待した俺が間違つてたよ！そんな時、教室の扉が開いてイ
ルカ先生が入つて来た。

「コラー……お前達どこに行こうとしてんだ！さっさと席に着け
!!!」

……静かな部隊に入れるよう火影様に頼めねえかな

井戸端会議

ナルトにも困つたものじゃ。唆されたとはいえ秘伝の書を盗むと
は。まあ里外に持ち出される事はなかったのだから、今回も大目に見
てやるしかあるまい。それにあやつが合格した事で卒業生は二十七
名じゃ、ちやうど九班作れるのじゃから悪い事ばかりでもない。

「ヒルゼン入るぞ」

そう言つて我が物顔で入ってきたのはホムラとコハルじゃつた。
せめてノックくらいして欲しいものじゃがまあ良い。それに呼んだ
のは儂なのだからの。

「今日呼んだのは今度アカデミーを卒業する下忍の班編成とその担当
上忍について意見を聞こうと思つての」

「早いの、もうそんな時期か」

「それで今年の卒業生はどんな面子なんだ？」

ホムラに聞かれたので手元にある書類を差し出してやる。こやつらも興味を持つに違いない。

「そうか九尾の人柱力にイタチの弟、日向の本家に御三家の本家筋の者までいるのか」

「という事であれば担当上忍を選ぶのに慎重となるのも無理はないの」

なぜか優秀な年というのは出てくるものである。弟子筋にあたるカカシに今年こそ弟子を取ってもらいたいものだ。

「そこでじゃ第一班から第六班までの編成と担当はこうして……あとは第七班にはナルトにサスケ、そして座学で優秀な成績を残している春野サクラとしようと考えておる。第八班には日向や油女に犬塚を入れた感知タイプをいれ、第十班は御三家の三人とする」

「班編成に異論はない、だがやはりナルトを里の外に出すには反対じゃ」

「そうだヒルゼン、いい加減考え直さぬか？」

里とすればそれが正しい選択なのかもしれない。その事は重々承知しておるが儂としてはナルトにも外の世界というものを見せてやりたい。それにあやつが成長するには仲間という存在が必要であろう。

「お前達もいい加減諦めてはくれぬか？儂はこの事について考えを変えぬ気はない」

「ではせめて優秀な担当上忍をつけることが条件じゃ」

「それについては考えておる。はたけカカシに任せてみようと思っておる」

カカシは今はいなくなってしまうた写輪眼を使える忍だ。写輪眼を用いれば九尾をコントロールする事も出来ると言われている。シスイも考えたが儂の信頼でいえばカカシであった。

「ふむ、それであればリスクも小さくなるやもしれんの」

とりあえず一番揉めそうだった七班の担当上忍はこれで決まった。残る班の担当を誰にするかじゃが……

「第十班は……アスマにやらせてみようと思っておる。今はガイの奴

も担当上忍をやっておるし、あの世代に任せてみようかなと」

「御三家と繋がり深い猿飛一族であるし問題ないのではないか？お前が息子だからといって選んだのではない事くらいは分かる」

結婚しても相変わらず世話のかかる息子じゃが、儂に似ず体格に恵まれ体術も上手い。それに守護忍十二士として働いたのも決してマインスではなかったようで、戦況の把握や技の豊富さで既に担当上忍としても高い評価を残していた。どうやらこれも問題ないようじゃの。

「第八班なんじゃが夕日紅はどうかの？」

「ふむ……担当上忍はまだやった事がないのだろうか？それに優れた幻術使いではあるが、感知タイプの班は難しいのではないか？今までなら心構えや基礎を学ばせる事が目的じゃったが、猟犬の功績を考えると早い内に連携や専門分野について造詣が深い者に教わった方が圧倒的に成長が早いしの」

一番これといった上忍が見つからなかった班でもある。儂の迷いを感じたのかホムラは反対らしい。

「この年代の感知タイプで優秀な忍といえば、飛竹トンボがおるではないか」

「あやつはまだ特別上忍になったばかりじゃ。日向の事を考えると担当上忍は任せられん」

「となると残りは……」

どうやらコハルも気づいたようじゃの。この年代で感知に優れておる優秀な忍はヨフネしかおらんのだ。

「しかしあやつは連隊長。連隊長となり現場に出る回数が減ったとはいえ、動かせばまた怒鳴り込んでくるぞ」

「あやつめ、手のかかる孫よ」

元々一人暮らしをしていたヨフネじゃったが、うちは一族の事件以降コハルとはほとんど口を聞いていないらしい。もう二人しかいない一族なのだから早く仲を直して欲しいものじゃ。二人とも頑固だからそうは上手くいかぬだろうが。

「となると夕日家の娘しかおらんじやろう」

「そうだな、家系にも問題は無いし、日向も文句は言わんじやろう」

これで解決かと思つた時、やはりノックもされずに息子のアスマにより扉が開け放たれた。相当焦っているのか、ホムラとコハルは視界にすら入っていないらしい。そして儂の前まで駆け寄って来た。

「親父！俺にも子供が出来たぞ！」

「でかした！」

思わず立ち上がってしまった。ふと視線を逸らすと二人はニヤニヤしてこつちを見ておつた。しかしこういう親子らしい会話をしたのは久し振りだのう。

「……しかしヒルゼンよ。担当上忍はどうするのじゃ？」

「あつ」

演習場に立つ

俺が下忍の担当上忍か。そう考えながら歩いていると、またここへ来てしまった。ここはミナト先生とリンにオビトとの四人が初めて揃つた第三演習場だ。あの鈴取りの演習の時、俺はチームワークなんざ考えていなかった。俺はチームワークとみせかけて二人を利用しただけだ。

あの時ミナト先生が俺にチームワークの素養が欠けていると判断してくれればとも思つたがそれは違う。あれはミナト先生のせいではない、俺が偽つたからだ。だからこそ俺は担当となる下忍を見極めなければいけない。

しかし三代目から暗部の任を解かれてから何度か下忍を割り当てられたが、未だ俺は合格者を出していない。俺の考えは間違っているのだろうか。こういう時、ヨフネならどうするだろう……いやあいつは参考にならないか。一定の忍びとしての素養があれば、余程酷い性格をしていない限り矯正してしまうだろうし、チームワークだって体に覚え込ますだろう。

あいつは嫌だ面倒くさいと言いながらでも何だつてやってしまう

奴だ。確かにチャクラは少ないかもしれないが、その代わりに術の知識なんかは俺と比べ物にならない。電磁砲だつてコピーして使つてみれば、チャクラを馬鹿みたいに使つてしまう。コツを聞いてもチャクラに圧力をかけるイメージとかさっぱりわけが分からなかった。

次の火影に一番近いのはヨフネだと俺は思っている。チャクラが少ない事により戦闘時間の短さや多数の敵を相手取れないという欠点もある。だがあいつはそれを補う力、猟犬連隊を作り上げてしまった。既に猟犬という名は俺の父“白い牙”の名声をも超えている。あれだけ強い部隊にする事が出来たのだ、火影となれば木の葉はより盤石の体制となるだろう。

俺を推す声があるのも知っているが、下忍一人育てられない俺にはとてもじゃないが務まらないだろう。ヨフネの事を考えていたら自分がどうしようもなくダメなやつに思えてきた。俺がお手本とすべきは木の葉の三忍だろう。大蛇丸は置いておくとしても、ミナト先生に教えた自来也様やシズネの師匠である綱手様はどういう基準で忍を見ていたのだろう。

一度綱手様からも話を聞いてみたい。

報われない旅

「おいシズネ、さつきから何浮かない顔をしてるんだ」

綱手様から心配されてしまった。というのも原因は綱手様なんですけどね！

「いや、こんなデートスポットの温泉地に借金取りから逃げながら女が二人……その事を客観的に見てしまってます……」

「そんな事を言うな！私まで落ち込ませたいのか？ああ?!」
「あひゃ」

酷い、あまりに酷いです。同期の紅はどうとう結婚しちゃうし、三小路が近くなつてきているのだから焦る気持ちを分かつて欲しい。
「綱手様はまだ良いじゃないですか。ダン伯父さんがいたじゃないで

すか、それに比べ私ときたらこの年までまだ付き合った事すらないんですよ!!」

「シズネ興奮するな! 周りからの同情の視線が痛い!」

いけない、いけない。私とした事が紅の白無垢姿を思い出して興奮してしまった。しかし紅がアスマとくっついてくれて良かった。

「まあそう気落ちするな。それにお前の世代には優秀な奴がまだいるじゃないか。カカシやヨフネにあと………:ガイも」

「優秀かもしれませんけど、絶対に選択肢には入らない珍獣が混ざってます!」

「すまなかつたシズネ、だからそう興奮するな。でお前的にはカカシとヨフネどっちが良いんだ?」

綱手様が肘でつついてくる。既に答えは決まっているのだが……:恥ずかしい。

「お、その顔はどっちなに惚れてるな? どっちだ? いや待て当ててやろう……:ずばりカカシだな?!」

「違います! ヨフネです!!」

はっ! しまったつい乗せられて答えてしまった。綱手様はもうニヤニヤが止まらないといった顔をしている。どうやら逃げる事は不可能らしい。

「ほれほれ、さつさと色々白状しな!」

「んーもう! 分かりましたよ。気付いたのは私が綱手様と修行の為に里を出る直前です!」

「それはまた随分タイムリングが悪い時に……」

それは良いのだ別に綱手様のせいというわけではない。情けない話なのであまり話したくなかったんだけど……

「里を出る前にトンボから言われたんです『ヨフネに気持ちを伝えなくて良いの?』って、私はトンボにそう言われるまで好きだって事に気付いていなかったです」

思い返してみれば昔からヨフネが事あるごとに紅の事を褒めてたけど、私は張り合って自分はどうかのかって聞いていた気がする。たぶん思い返してみるとあの頃からヨフネの事が好きだったんだろう。

「おい、こういう場合は普通男が鈍感で気付かないってのが定番だろうが！そもそも本人が気付いてないのに相手が気づくわけないだろう」

「おっしやる通りです」

綱手様の言葉に素直に頷くしかなかった。私が情けないのもそうだけど、当人達が気付いていないのにトンボはなんで気付いたんだろう。

飼い主の居ない小屋

「お、トンボさんじゃないですか。今日はどうしたんです？」

「ヨフネから頼まれていた物の解析結果を持って来たんだよ。ヨフネはいる？」

一週間前にヨフネから頼まれていた物を持って猟犬の施設にやって来たのだが、ヨフネの友達というだけで自分を見た隊員は即座に立ち上がって挨拶してくれる。君らは一体どんな教育受けてんのさ。

「連隊長はさつき出かけましたよ。預かって良い物なら代わりに渡しますよ」

連絡無しで来ちゃったからしょうがないか。それにこの人達なら別に勝手に見ないだろうし、見られた所でどうなる物でもない。素直に預ける事にしよう。

「はい、それじゃお願いね」

「確かに受け取りました」

一々仰々しいんだって！こんな事だから、ここに立ち寄るのは気がひけるんだよ。

「それにしても今日は静かだね。なんかいつも慌ただしいイメージがあるから別の場所みたいだよ」

「最近ようやく連隊の編成と訓練が落ち着いたんですよ。残る部隊は連隊長の所だけです。優秀な下忍なんかは他の大隊長に優先的に

配置してましたから少し遅れてるんです」

「昔から無駄に背負込む性格をしてるからね」

巻き込まれやすいっていうのも勿論あるけど、改めて思い出すとヨフネは昔から自分の手が届く範囲で無理をしている気がする。またその手が届く範囲が広いもんだから余計に苦勞してるんだよね。

「よく愚痴もこぼすけど、半分以上は自ら手を出した事だから、結局なんだかんだ頑張って解決しちゃうんだよね」

「さすが同期の人はよく見てますね。自分達にはあの人が人間じゃないように思えるくらい完璧に見えるんですけど」

「そんな事ないよー。実際恋愛だつて出来てないし」

そう言った所で全員がガタツと音を立てて立ち上がった。なんだと言うのだろうか？

「おい、今日アレ持ってるか？」

「あ、俺持ってるぜ！」

「すまん、頼む」

そう言つて取り出したのは巾着袋だろうか？隊員の一人がそれを開くと甘い匂いがした。砂糖？そうするとどこからともなくコン平が現れた。おそらく緊急連絡用に留守番させている分裂体だろう、普段よりサイズが小さい。

「コン平さん、これをどうぞ！トンボさんが帰るまでどうか屋上で召し上がって下さい」

「コンッー」

コン平は頷くと巾着袋を啜えて走り去っていった。あの様子から見ると中身はどうやら好物の金平糖だな。

「すみません、お待たせ致しました。でその恋愛が上手くいってないとは?!」

どうやらこれが聞きたくてコン平を追いやったのだろう。でも果たしてここで喋つて良いのだろうか、後で自分までヨフネに怒られる気がする。紅をかけた決闘の事とかシズネの事なんかネタはあるんだけどな……ヨフネは怒らせたくない。

それにシズネの事なんてヨフネだつてよく知らないんだから、話し

たらマズイ気がする。というよりもシズネ本人が自分に言われるまで気付いて無いつて事に驚かされたよ。一緒の班にいた自分だから気付けたのかもしれないけど、シズネは気が付くとヨフネを視線で追っていた。目を合わす事すらほとんど無いっていうのにヨフネに気付くって方が酷だよ。

「貴方達そんな所でお客様を囲んで何やってるのかしら？」

「「「姐さん!!!」」」

階段から降りてきたのはタシさんだった。何やら隊員たちは見つかつてしまったとでもいう表情で固まってしまっている。ここは代わりに自分が答えてあげよう。

「みんなにヨフネのれんあつモガッ」

「連隊長の昔話を少し聞かせて頂いていただけです！」

ほとんどの隊員が自分とタシとの間に立ち上って視線を遮り、その際に左隣の隊員に口を塞がれた。

『お願いします！姐さんに本当の事は言わないで下さい！扱かれちゃいますんで！』

小声で叫ぶとは器用な事をする。どうやらタシさんは恐れられているようだ。それにしても流星は猟犬、コンビネーションが抜群だ。とりあえず頷いて口から手を離してもらおう。

「あ、ヨフネに頼まれていた物を届けに来ただけなんでそろそろ帰りますね。あ、ヨフネは今どこに？」

「火影様に呼ばれて出ているわ、おそらく執務室じゃないかしら」

礼を言つて施設から出た後に悲鳴が聞こえたのは気のせいだと思いたい。それにしてもこの時期に三代目に呼ばれるなんてまた面倒事に巻き込まれたかな？

今度お祓いの為に火ノ寺にでも連れて行ってあげよう。

第二部

021. 担当

獵犬連隊の第一から第三大隊の編成が落ち着いたかと思えば、頃合いを見計らったかのように三代目からの呼び出しがあった。残る第四部隊の隊長は俺なのだが、優秀な下忍や中忍を優先して他の隊に回したから中々人材がいなのだ。

ただ幸いな事に獵犬という名前は有名になったから、入隊希望者はそこそこいるだろう。公募でもして試験をしようかなと考えているところだ。その為の許可を三代目から貰いたかったところだし、素直に火影の執務室へと向かった。

「三代目お呼びでしょうか？」

部屋に入るとつい先ほどまで誰かいたのだろう、湯飲みが四つ机に置いてあるままだった。

「獵犬連隊の方もだいぶ落ち着いてようじやの」

「はい、任務を絶え間なく任せられているせいで新隊員の練度も見れるようになりました」

「それは、良かった。任務を回した甲斐があるというものじや」

どうもこの人には皮肉が通じない。信頼されているのだろうが限度というものがある。もう少し減らしてくれないと家庭のある隊員の愚痴が多くなってしまふ。ダエンなんか新婚なのにまだほとんど家に帰っていないのだ。職場環境は良くしておきたい。

「さて今日呼んだのはじやな、中忍以下の隊員が不足しておると聞いて、ちと儂の方から推薦してやろうかと思っただんじや。お主が欲しがっていた秘伝忍術を持つ忍じやぞ」

何を言い出すかと思えば珍しく良い話じやないか。隊に二人しかいない山中一族かな？いや油女一族も捨て難い。現状ムタしかいないからな、攻撃だけでなく相手を攪乱できるあの能力は魅力的だ。

「だが断るー」

「なぜじゃ?!」

「そんな虫のいい話がこれまでなかったからですよ! 本当の目的はなんですか?!」

もう騙されたりはしない。今まで散々甘い言葉で騙され苦勞してきたのだ。今更この程度でホイホイと提案に乗ってたまるか。

「そうか、もうこの手は無理か……致し方あるまい正直に話してやろう」

「初めからそうしてください」

「まあそう言うな、事実お前にとつてもそう悪い話ではない。それどころかお前が成長する為に必要な事じゃ」

俺の成長に必要な事? さっぱり話が見えない。

「担当上忍をやれ」

へ? 担当上忍をやったことはないが、これまでも部下は育ててきている。今更成長に役立つとは思えない。

「そう怪訝そうな顔をするでない、お前を担当上忍へ推す声は随分前からあった。じゃが猟犬も何かと忙しかったから避けておつたのじゃ。じゃがもう中隊長以上の人選が固まった事じゃし、お主も現場に出る回数が減ってきておる。ここらで一度やってみろ」

確かにここ一ヶ月は連隊規模はもとより大隊規模で出撃する事すら少なくなってきた。俺はもっぱら訓練と書類仕事メインと成りつつある。

「それにその歳の上忍なら一度くらいは担当上忍をやるのが通例だ」

「それなら紅だつてやっつけないじゃないですか」

俺達の年代で担当上忍をやっていないのは紅とゲンマに俺ぐらいだろう。しかしわざわざ忙しい忍びから選ばなくても良いじゃないか!

「紅はもちろん考えておつた、しかし……孫ができたのじゃ!」

「マジですか」

「マジじゃ」

結婚してから早一年が経とうとしている。とうとう紅も母親になるのか喜ばしい事だ。

……ちよつと待った!!カカシは相変わらず下忍を落としていると聞くし、ガイは前回から担当上忍となったはずだ。そこへ来て紅が担当上忍になるはずだったという事は……

「ちなみに俺が担当上忍をするのはどんな班でしようか？」

「喜べ！日向宗家の長女にお前の師匠シビの息子、それに犬塚家の長男だ。お前が欲しがっていた人材ばかりじゃろ」

確かに欲しかった人材ばかりではある。だが今問題なのはそこではないのだ！おもつくそ原作組じゃないか！そしてとうとう原作が始まるんだな。そうなるといよいよ獵犬を離れるわけにはいかなかった。

「だが断る！」

「そう嫌がるな。隊はホヘトとシスイ、ゲンマにタシにでも任せれば良からう。お主はもう少し他人に任せるといふ事を覚えろ。自分では気付いていないかもしれないが、知らず知らずの内に自分の意見が絶対正しいと思ひ込んでおる節がある。それを見つめ直す為にも少し獵犬から離れて見る事がお主の成長にも繋がると思つておる」

そういう事だったのか、だから俺の成長につながると三代目は言ったのだらう。トンボにもよく「ヨフネは何でもかんでも自分一人で背負いすぎだ」と言われる。トンボに限らず三代目もよく俺を見てくれているのだらう。それに指摘された自分が正しいという思ひ込みはあると思う。未来を知っている以上、ここでこうしておけばと思う事は多い。自分を信じてくれている獵犬には特に無理を言っているかもしれない。

「師は弟子に修行を与え、そして弟子から学ぶ。そうやって互いに高め合い成長していく間柄こそ本当の師弟関係なのじゃ。今までのお前が築いてきた関係は部下と上司にすぎん」

「……分かりました。やってみます」

それに俺が何でも指示を出してしまうせいか、俺が出撃していない任務では何かと問題も起きている。獵犬の為にも一年程度は他の人に任せてみるのもアリかもしれない。

「そうか、お前が引き受けてくれて助かる。あと二時間後には上忍を

集めて担当を発表する。そして午後には担当となる下忍と顔合わせ
じやから、それまでに準備しておいてくれ」
「……って、いつも急すぎるんだよ！」

急いで猟犬の施設に戻った俺は全員を集めて、担当上忍になる事と
俺がいない間の連隊長をシスイにする事を伝えた。付き合いの長さ
からいえばホヘトに任せるところだが、ホヘトの思考はその長さゆえ
に俺に似すぎている。隊に変化をもたらす為にもシスイに任せる事
にした。

それに日向家からは猟犬に三名が所属しているが全員が中隊長以
上である。バランスを保つためにも日向からは選ぶ事ができなかつ
た。日向は木の葉において政治力が最強なのだ。籠の鳥と言われる
あの呪印にしても、木の葉における日向の発言力を強化している要因
の一つだ。

白眼は写輪眼のような攻撃的な能力は持っていない。だからと
言って弱いかと言われれば決してそんな事はない。たとえば体術がで
きなくとも、あの感知能力は非常に有能だ。それゆえにあの眼が他里
に渡らぬようにする必要がある。最前線で能力を発揮しつつ、敵に奪
われる事がないというのは里からしても非常に都合の良い存在なの
だ。

それらがすべての要因というわけではないのだが、各部隊で活躍の
場を広げる事により日向は木の葉において確固たる地位を築けてい
るのは事実だ。だからこそ日向に取り込まれないよう気を配る必要
があった。

シスイを推薦した事に若干の驚きを見せた隊員達だったが、すぐに
拍手が鳴り響いた。人柄も認められてるし、何よりもシスイは強
い。写輪眼による動体視力の強化で電磁砲の軌道も見えているらし
い。そしてそれに反応できるだけのスピードを手に入れば俺が勝つ
事は不可能となるだろう。

施設をあとにした俺は急いで火影邸へと向かった。そこには上忍
達と教師陣が勢揃いしていた。俺は先に教えてもらったが、ここで担

当上忍と担当となる班が発表され、それから新米下忍が待つ教室へ第一班から順に迎えに行くらしい。

「第七班はたけカカシ」

そして今発表が行われているのだが、七班の担当上忍が発表されるとざわめきが起こった。それもそのはずこの七班は決して軽視できないような面子ではないのだ。イタチの弟に人柱力がいるのだ、しかもそれを二回連続でアカデミー送りにして、下忍を受け持った事がないカカシに任せるというのだから無理も無い。

「第八班うたたねヨフネ」

これまたすごいざわめきが起きた。有名になった猟犬から離れるというのだからこれも仕方がない事かもしれない。

「最後、第十班の担当上忍は猿飛アスマ」

あからさまに同期の有望株と見られる三人が同時に選ばれた事に對して、また少しだけざわついた。ただ面子を見れば猿飛一族と関係の深い御三家の班なので、この人選は当然といえよう。

ちなみに第九班はナルトが生まれる以前から、天災として忌み嫌われてきた九尾を連想させられる為、編成されないのが習わしとなっている。木の葉の宿舍などでは死を連想させられる四号室や九号室はないのが普通である。

午後になり第一班から順に教室へ下忍を迎えに行っているのだが、カカシの姿が見えない。おそらくまた墓参りにでも行っているのだろう。あいつにとつて思い入れのある下忍なのは分かるが遅刻するのは勘弁してほしい。

だが結局カカシが現れなかった為、俺が先に教室に迎えに行く事となった。おそらくナルトは俺を見てさぞ驚く事だろう。タシが時間がある時は面倒を見てやっていたみたいだが、里のナルトを阻害する空気というのは存在している。

みんなに注目されたいとイタズラも繰り返しているが、猟犬の施設にイタズラ書きをされた時には無理やり訓練に参加させて、死にそうになっていた。あれから俺の前では大人しくしている。師匠となる事を想像するだけで吐くのではないかと心配だ。

ちなみにコン平はナルトが苦手だ。というよりもナルトから感じる九尾の気配が怖いのだろう。妖狐の最上位に位置する九尾と最下位に位置するコン平では身分？差がありすぎる。今も腰に下げた竹筒から出て俺の胸ポケットの中で震えている。

教室につき扉を開けると九人の視線が一斉にこちらを向く。その光景は絵でしか見た事がないのだが凄く懐かしい気持ちになった。それと同時にとうとう原作が始まったのだと思うと柄にもなく少し緊張してしまう。

「うげっヨフネの兄ちゃんじゃん」

「ひゃっはー！獵犬の隊長キターー！」

ナルトとキバが俺を見て騒いでいる。ナルトは俺の班に入るのが嫌なのだろうか？それと正反対の反応をしているのがキバだ。そこまで喜ばれると少し恥ずかしいが、表情を出さずに班員を発表する。

「第八班、日向ヒナタ、油女シノ、犬塚キバ。俺が担当上忍のうたたねヨフネだ。ついて来い」

担当上忍が俺で嬉しいのか浮かれているキバと何も話そうとしないヒナタとシノを連れて、まずは獵犬連隊でよく使う演習場へとやって来た。

「俺がお前達の担当上忍になる、うたたねヨフネだ。知っているかもしれないけど獵犬連隊の連隊長だ。お前達が中忍になるまでの間、しっかり扱いてやるから覚悟しろよ。ちなみに好きな事は睡眠で嫌いな事は睡眠の邪魔をする存在。じゃあ右から順番に自己紹介をして」

俺は軽く自己紹介してから、切り株に座っている三人に自己紹介を促した。

「ひ、日向ヒナタです。あの……その、よろしく、お願いします」

「油女シノだ」

「犬塚キバだ！将来は獵犬部隊の連隊長になってみせるぜ！あとこいつは俺の相棒の赤丸だ！」

「ワンッ！」

キャラが分かりやすい自己紹介だ。それにしてもシノはもう

ちよつと喋れよ、名前以外分かんないだろうが。あ、それはヒナタも一緒か。にしても子犬はやっぱ可愛いな、コン平と仲良くしてほしい。

「さて、もう少し話しておきたい所だけど早速最初の演習をしようか。みんな下忍になれたと思ってるかもしれないけど、今はまだ候補生とிட்ட扱いだ。この演習に受からないとなれないから本気で挑むように」

「マジかよ」

良い感じでキバガリアクションしてくれた。俺達の時はまだ平和じゃなかったし、シビさんの考えもあって体験した事はなかったから何をやるべきか結構考えた。鈴取りじゃあ芸がないからな。

「この試験ではチームワークをみる」

そう言つてポーチから電磁砲用の鉄球を一つ取り出し皆に見せた後、俺の周りに浮かべた。

「この鉄球を制限時間は四十五分間に俺から奪ってみせろ。それと今から十五分だけ時間あげるから作戦を立ててもいいぞ。ダメだった場合は全員不合格として、仲良くアカデミーからやり直してもらうからな」

アカデミーに逆戻りという言葉にみんなの目つきが変わった。俺が目の前で目覚まし時計をセットすると素早く離れて打ち合わせを始めた。既に打ち合わせを盗聴する為の結界はコン平を使って貼っている。別に聞かないと避けれないというわけではない、ただこのテストは三人に言った通りチームワークが出来ているかどうか見る為の物だ。誰がどう考えているのか知る必要があつた。よほど酷くない限り合格にするつもりだが、この試験についての報告書は出さないといけないからだ。

「はい、打ち合わせ終了ー。んじや頑張つて俺からこいつを取つてね」
あつという間に打ち合わせの時間は終わり演習が開始となった。

合図とともに全員が一旦距離をとる。こちらから積極的に攻撃を仕掛ける気はあまりないのだが、三人からすればそんな事は分からないから当然だろう。

「いきますー！白眼！」

そう言つて白眼を発動させたヒナタが突っ込んできた。まずは近距離のヒナタで俺の注意を逸らすつもりなのだろう。どうにもアカデミーを出たばかりの生徒達は自分達との実力差を見極める事ができないらしい。この程度で惑わされるようでは上忍などやってられない。まあ経験を積まない限りそれを求めるのは酷かもしれないけど。

今攻撃を仕掛けているヒナタだが体が柔らかいのか、腕の可動範囲が広く意外と多彩な攻撃を仕掛けてくる。しかしその反面足運びが全然ダメでだ。動いていない的には有効かもしれないがそれでは意味がない。肝心なところで攻め切れていない。本当に優しい子なのだろうが、正直この性格は忍に向いていないのかもしれない。うまく俺が性格面でも成長させてやる必要があるな。

「擬獣忍法・四脚の術！くらえ牙通牙！」

そしてヒナタの攻撃が難なく捌かれているのが分かると、キバも術名を叫んでから攻撃をしてきた。もともとスピードがある技とはいえ、下忍にしてはかなりの物である。だがいかんせん攻撃が直線的すぎる。これだとあまりに軌道が読みやすい。

おそらくアカデミーの時ではこれで通用していたのだろうが、これからは頭脳を鍛えないとダメだな。それに何故わざわざ術名や攻撃のタイミングを教えるのだろうか。演出と言われればそれまでなのだが、デメリットが大きすぎる。それに何より恥ずかしくないのだろうか？

そう思っていると足元に蟲が見えた。二人を陽動にして遠距離から鉄球を狙うというオーソドックス戦法だが、まだ組んだことのない相手となるとこれが最善だと判断したのだろうか。判断は間違っていないが、そう簡単に取らせるつもりはない。

二人の攻撃が途絶えた瞬間にシノも蟲で俺の足止めをしつつ、死角から回り込んだ蟲が鉄球を囲もうしていた。本当に初めてとは思えないほど良い連携だ。しかし蟲が鉄球を包み込んだところで俺は鉄球に電気を纏わせた。それにより蟲が落ちていく。

一瞬喜びの表情を浮かべた三人だったが、すぐに絶望へと表情を変えていた。全員が一瞬油断した隙に俺はシノへと近寄り、近接戦闘を仕掛けてみた。

手加減して攻撃したつもりだったが顔面に気持ちよく決まってしまった。攻撃は見えていたようだが身体がついてこないとみえる。おそらくこれまで体術をさほどやってこなかったのだろう。だがこの作戦を考えたのはシノだ。それに蟲の運用も俺に悟られないよう工夫してあったから頭は良いのだろう。

「ほら、もう諦めるのか？ どんどんこい」

三人がその後も制限時間が来るまで諦めずに仕掛け続けた事で、それぞれの課題がよく見えた。そして三人共がバテて攻撃が散漫になってきたところでタイマーが鳴った。

「クソッ！ ヨフネ先生もう一度お願いします！」

「俺はこんなところで終わる事など出来ない。再戦を頼みます」

「あ、あの私からもお願いします」

キバは直情的だが素直だ、シノはおそらくプライドが高いのだろう。そして意外なことにヒナタまでももう一度やってほしいとお願いしてきた。

「二度もやらない、任務に二度目はないからな。お前達は全員合格だ」

「「え？」」

「最初に言っただろう、この試験ではチームワークをみるって。鉄球が取れないと不合格なんて言っていないぞ」

三人はポカンとしている。確かに勘違いさせるようにミスリードはしたが、それも三人の本気を見る為だ。

「確かにそんな事は一言も言っていなかった」

「まったく先生も人が悪いぜ」

「……良かった」

三人はようやく理解したのか安堵している。この空気だと落とす気がなかったなんて言えない。三人にはおめでとうと祝ってやつてから、一旦家に帰した。第八班が合格したとなると集合写真を撮らな

いといけない。風呂に入って汚れを落とさせないと可哀想だ。写真は形として残るのだ、少しくらいは良い格好をさせてやりたい。

俺はというと三代目に合格を報告しに火影邸へと来ていた。どうやら第一から六班までは落ちたらしい。彼らはアカデミーへ戻されたと言っても、下の学年と一緒に授業を受けるわけではない。担当上忍からの報告書に基づいて不足していると思われる事について再度教育を受けるのだ。そしてまた次の機会に下忍となれるよう担当上忍が振り分けられる事となっている。

俺が受け持つ事となった三人はヒナタを除いて、原作では目立つ事のなかった。しかし忍としての能力は十分に高そうだ。獵犬、そしてこの世界の役に立ってもらおう。忍界大戦まではまだまだ時間がある。みっちり強化してやろうじゃないか。

「さあ第八班で写真を撮ろう」

今日は担当となった下忍達の家庭訪問をする事にした。本来であれば担当となる下忍と顔合わせする前に保護者と会うらしいのだが、俺にはそんな余裕はなかったので顔合わせした翌日に同じ班員を連れ添って各家庭を訪問する事にしたのだ。

「なあ先生、どっから行くんだ？」

キバと赤丸が纏わり付くように俺の周りをウロチョロしながら尋ねてきた。懐いてくれるのは嬉しいんだが犬が二匹いるように見えるぞ。お前に尻尾が見えるのは俺の気のせいかな？

「お前達の家庭はそれぞれ名家だけど、まずは最も古い日向家からだ。キバは粗相するんじゃないぞ」

「へへ、任せろってー！」

どうも不安しかないが、今の内に日向家の実状を知っておいてもらうのは悪い事ではない。ヒナタの悩みについて、ナルトが解決してくれるのを待つつもりはない。

「……凄い豪邸だ、自信が無くなる。何故なら俺の実家が物置小屋に見えるからだ」

日向家に到着するとシノがそう漏らした。自分の家にそれなりに自信があったんだろうな。自虐を言うとは思わなかった。まあ思わずそう言ってしまうのも仕方ないくらいの豪邸なのだが。

立ち止まってもいられないので、宗家側の門でヒアシさんに挨拶しに来た事を告げるとしばし待つように言われた。

「あれ連隊長じゃないですか！どうされたのですか？」

すぐに誰か走って来たと思えば、出迎えてくれたのは日向コウだった。連隊規模となつてから猟犬に入つて来たのだが、今では中隊長を任せている期待のホープだ。実直な性格と実力を買われて、猟犬に入隊する前はヒナタの付き人をやっていたらしい。

出迎えに来たコウだが、誰が来たのかまでは教えられていなかったのか驚いている。

「あ、コウさんは猟犬連隊にいるから先生の事知ってるんですよ」
「先生?……担当上忍になるとは聞いていましたが、まさかヒナタ様を担当されるのですか?」

「俺もいきなりで驚いてるんだけど、そのままかなんだよ。ちなみにこの二人は同じ班員の油女シノと犬塚キバだ」

そう言つて二人の背中を押しつつ紹介した。キバはどうやら猟犬の中隊長つて事で緊張しているようだ。俺に会っているんだから今更緊張することもないと思うんだが。

「あの連隊長……くれぐれもヒナタ様を潰してしまわないよう頼みます!」

「おい、俺がいつそんなに厳しくしたよ?」

「なんでもありません!ヒナタ様を宜しくお願い致します!」

猟犬の隊員達には出来ると思つた事しかさせていないつもりなんだが、どうやら厳し過ぎたようで軍隊色が強くなっている気がする。そう考えると、なんだかんだ自分が一番多くを学んだ婆様のやり方を模倣しているのかもしれない。……やっぱり異常だったかな?

「それよりもコウさん……あの、早く案内しないとお父様が……」

「そうでした。ささっどうぞこちらへ!」

ヒナタがコウを促してくれた事でようやく屋敷の中に入れた。屋敷は昔ながらの造りをしており、さらに柔拳の総本山ということもあり道場まで併設されているとの事だ。今まさに稽古中だという事で俺達はその道場へと案内された。

「立てハナビ」

「まだそんな小さいというのに随分激しい訓練をなさっているようですね」

少しだらしない感じで髪を伸ばしている女の子がクナイを片手に全身に痣を作つて床に這いつくばっていた。この子がヒナタの妹であるハナビらしい。確かまだ七歳程度だったはずなのに宗家の跡取りとして凄まじい訓練を積んでいるのだろう。

「そなたもこの年の頃は似たような訓練をしておつたではないか?」

そう言われてみればそうかもしれないが、どうにも女の子という事

を思うと可哀想な気がしてしまう。

「して今日は何やら挨拶があるとか」

俺達が入って来てから一度たりともハナビから目を離さなかったヒアシさんが初めて此方を向いた。この人はなんだかんだ言って、結局はヒナタとハナビの両方を大切に思つての事だったはずだ。しかしそうと分かつていても騙されてしまいそうになる態度だ。

「はい、ヒナタの担当上忍を私がやる事になったのでご挨拶にと。あとこの二人は同じ班員の油女シノと犬塚キバです」

今度は俺が促さなくても二人とも自然に頭を下げた。本能で偉い人だと感じ取つたのだろう。

「それだけか？」

「そうですね……あとヒナタは宗家のご令嬢、下忍とはいえ忍となる以上、死が付きまといます。私の命に代えても守り抜くつもりですが、生き残る為には訓練を積まなくてははいけません。どうやら私はその辺の配慮ができるような性格ではないそうなので、予め断つておこうかと思ひまして」

「五歳下のハナビに負けるような、落ちこぼれは日向にはいらん。何処へなりとも連れて行くがよい」

あまりの言いように何か言いたそうにしているキバを目線で制する。今この場で何か言つたところで解決する問題ではない。とりあえず俺に任せてもらえるとの言質が取れただけで充分だ。

「では日向家よりもこちらを優先して自由に鍛えてもよろしいですか？ 私も柔拳は使えなくはないですし」

「好きにせい、と言いたいところだが柔拳が使えるとは知らなかった。他国から死神と恐れられる天才なだけはある」

「“不遇”という文字を付け忘れてますよ」

木の葉の里内でも名前が知られた俺に付けられた二つ名の一つが“不遇の天才”だ。ヒアシさんは俺が自ら不遇と付けたことには触れず、何か考えているようで顎に手を当てている。

「ふむ……コウ！」

「はい！」

「今からお前の連隊長と組手を行うが良い」

「はい？」

「え？」

どうにも安心させるつもりが余計な事を言ってしまったらしい。無関心を装っていたヒアシさんだったが、今は眼が白く輝いている気がする。

「お主が使う柔拳がいかほどの物か興味がある。今まで見る機会が無かった噂の実力を見せてもらおうか」

この人は他人以上に自分に対しても厳しいが、それ以上に純粹に強くなる事が好きなのだろう。だが宗家としてのプライドが素直に教えを請うという選択肢を選ぶには邪魔なのだ。俺としてもここで受けないという選択肢が無くなってしまった。

「じゃあコウ頼む。俺の柔拳は日向のものとは随分違うからな」

「白眼もないのに経絡系を狙って攻撃するなんて出来た方が怖いです。それで連隊長の柔拳ってあのえぐいやつですよ？大丈夫ですか？」

「無理？」

「無理ですー！」

日向家の使う柔拳とは、白眼と柔拳を併用する事で経絡系に対して効率的にダメージを与える事を基本としている。元々チャクラが多い部類に入る一族とはいえ、戦闘中に終始チャクラを放出しては枯渇するのが目に見えている為、現在の形に落ち着いたのだろう。

俺にはそんな真似が出来るはずもなく、身体強化の剛拳と柔拳を併用する事で何とか戦闘で使えるようにしただけだ。チラツとヒアシさんを見るがコウの意見は華麗にスルーされている。

「しようがない、合図出すからちゃんと避けるよ。良いな？」

「絶対避けますっ！」

コウとそう確認を取ったところで俺はヒアシさんにも確認しないといけない事があった。

「道場壊れる可能性高いんですけど大丈夫ですか？」

「庭を壊された方が手間がかかる。まだここの方が壊れても大丈夫

だ」

「さいですか」

どうも壊れる前提で話しているが、俺の技を見せる以上仕方がない犠牲だな、うん。それにヒアシさんの言う通り綺麗に手入れされた庭の方が取り返しがつかないかもしれない。

ヒアシさんに続いて他の人達は道場の端の方へと移動し、俺達は道場の中央に進んで対峙した。コウは両手を前後に広げる日向家特有の構え、俺は踵を少し浮かして半身とする所謂ボクシングスタイルだ。

「始めっ！」

日向は基本的にはカウンターを得意としているが、今回ばかりは技を見せる必要があるため俺から動かなければ意味がない。左右上下に細かく動きながら接近し、コウの間合いに入るタイミングで脚にチャクラを集中させ一気に飛び込む。

「させません！」

コウも当主の手前、下手な試合をする訳にはいかない。八卦空掌で俺の進行方向に牽制を仕掛けてきた。それを避けると思い左右どちらかに絞る事に対応しようと考えたのだろうかそうはさせない。

パンツ！

俺も左のジャブで飛んできているであろう八卦空掌に向けてチャクラを放ち弾く。外野で白眼を使って見ていたであろう三人は俺がチャクラを飛ばせるとは思っていなかったのか驚いているようだ。その反面、コウは元々分かつてはいただろうが改めて表情が強張らせていた。

そして近寄せまいとするコウは手数を増やす事で、制空権ともいふべき壁を作り出した。だが俺はそれを無視して身体強化した右ストレートを放つ。

「っちー！本当にそのパワーだけは厄介ですね」

コウは身体強化の使用を把握したのか思わずそう言って、俺の拳を飛び退く事で避けた。柔拳使いの弱点の一つとして、純粋なパワー特化型に弱い事が挙げられる。しかし白眼を持つ忍であれば先程のよ

うに察知して避けられてしまう。

「となると今度は弱点その二だ」

俺の言葉にまた外野の三人が身構えるのが分かった。この組手はレクチャアの側面が強いのでしつかり見て貰うためにあえて口する。コウが改めて身構えた所で俺は地面すれすれを滑降するようにコウへと接近する。

コウは当然のように掌底を振り下ろしてくる。でもそれが弱点なんだよっ！

「グあっ！」

振り下ろされた掌底にタイミングを合わせて、左のアッパーでカウンターを決める。日向の柔拳は緻密なチャクラコントロールにより、手数と威力を両立させた拳法だ。それに自信を持つのは当然かもしれないが、同時に弱点にもなり得るのだ。

攻撃の手数を増やすには腰の回転と地面を蹴る脚の力が必要となる。振り下ろすという行為は一見威力も増して有利な事に思えるが、柔拳使いにとっては手数を失う事にもなる。ここでの正解は蹴りだと思うが、自信を持っている為にその選択肢が頭がない。そうして敵の攻撃が読めていればカウンターなど容易い。

その結果、下からのカウンターが顎に綺麗に入ったコウは軽く宙に浮いていた。勿論だが当たる瞬間に身体強化は解いているし手加減もした。しかしこれでは俺の柔拳を見せつける事が出来ない。仕方がないので倒れるコウに追い打ちをかける事にした。

「避けるよー！」

「ちよっ、ちよっと待って下さい隊長お！」

手加減しても顎に入ったせいか立ち上がれないコウでは避ける事など不可能らしい。俺はとっさにコウの顔の横の床に向かって正拳突きを放ち床板が派手に割れる。

そして爆ぜた。

「「凄いい……」」

「なるほど」

姉妹は仲良くハモリ、ヒアシさんはしきりに頷いていた。三人は白

眼があつてまだ理解出来ているかもしれないが、シノとキバに至つてはただ呆然とするだけだ。とりあえず気絶しているコウを道場の隅に寝かせてから説明してやる。

「最後のは拳が床に当たつた瞬間に身体に留めていたチャクラを押し出す事で、拳による外部破壊とチャクラによつて衝撃を浸透させる内部破壊を併せ持った技だ。だから床の下から爆発したような事になつてるんだ。人に対して使用すれば内部から破裂してしまうかもな」

戦闘では腕などを石化したり、水で防御膜を張る忍というのは結構いるのだ。そういった相手に対し内部から破壊する事も考慮して貫通力を追求した結果、柔拳に辿り着きホヘトと考案した技だ。

ただこれまた俺のチャクラでそう何度也使つていたらあつという間に枯渇してしまう。あくまで切り札的な使い方しかできない。それでもヒアシさんは珍しく上機嫌そうな表情でこちらに寄つてきた。「ふむ見事だ。そこまでチャクラ放出が扱えるとはな。ヒナタを預けるには充分だろう」

「こんな感じで日向の物とはかなり違う物となりますが、ヒナタが望めばこういった技についても教えようと思つています」

「……よかろう、どうにでも好きに育てるが良い。全てお主に任せる。才能があるかどうかは保証せんがな」

仲間意識の強いキバがヒアシのあまりの言いように思わず口を開きかけるが手で制した。この人は宗家の当主としてこうしなければならぬだけなのだ。目的は達成したし、何より俺が壊した床が気になつて仕方がない。こういう場合は早めに退散するに限る！

「ご了承頂きありがとうございます。それではまた」

俺はそのまま日向の敷地から逃げるようにして出た。敷地から出るとすぐにキバがヒナタに喰つてかかる。

「ヒナタ！いくら父親つて言つたつて、あんなこと言われて悔しくねえのかよー！」

「でも……事実だから」

やはりまだまだ気弱な性格をしているが、そこは俺が導いてやれば

良いだけだ。ネジに比べれば才能は劣るかもしれないが、彼女自身の素質は決して悪くないと俺は思っている。

「ヒナタ、自分で限界を作るな。お前の限界は俺が測ってやる。とりあえずは俺を信じてついて来い」

「……はい、ありがとうございます」

死ぬ気で努力すればガイのような奴も生まれる世界だ。それでもダメなら猟犬として戦えるようになれば良い。

「キバもシノも心配しないで良いぞ、お前達にだって限界までシゴいてやるから」

「それはまだ良いんだけどさ……なあ先生、修行であの術俺らには使わねえよな?」

「……どうだろうな」

「えっ? ちよつ勘弁してくれよ!」

あんな殺す事しか考えていない技を使うわけが無いのだが、キバ達が怯えているので脅し文句に使えそうだ。黙っておこう。どうやらコン平も同じ意見のようで、竹筒から顔だけ出して赤丸に向かってニヤニヤしていた。

「さて、次に行くのはシノん家だ」

何度か来た事があるが、シノが自信を持つだけあつて裏手に森も持つ広い家だ。

「なんだ俺の家が最後かよ」

「まあそういうな。今から会うシノの父親シビさんは俺の担当上忍だったんだ」

「……親父からそんな話聞いた事がなかった」

まあ元々話すのが得意な人ではなかったからしようがないだろう。むしろ家で俺の事を嬉々として話している方が怖い。

チャイムを鳴らすと出迎えてくれたのは奥さんだった。この人は外嫁なので特にサングラスもしていない至って普通の人だ。いや、シビさんと結婚するぐらいだから、相当気が配れるという意味で普通ではない。

「お久しぶりです。今度は息子さんの担当となりました」

「この子もあの人に似てあまり喋らないから心配してたんだけど、貴方なら上手く扱ってくれそうだね。手の掛かる息子だけどよろしくね」

まさに絵に描いたような良妻ともいうべき人をシビさんはどうやって捕まえたのだろう。今度そこら辺の事を教えてもらいたい。

奥にある居間に通されると既にシビさんが座っていた。何となく座るように勧められた気がしたので、座布団に座ってから挨拶をする。

「どうも今度は俺が先生やる事になりましたんで」

「そうか俺は〴〵何も言わん」

その言い方からすると、どうやら俺の担当上忍だった時は色々と婆様から言われたのだろう。薄々そうなんじゃないかとは思っていたけど……

「だがお前を思つての行動だ」

「はい」

どうもシビさんも俺達が不仲なのを知っているらしい。だがお互いに強情なので先に折れる事が出来ないのだ。

「まあ努力しますよ。とりあえずシノには期待します。猟犬にいるムタもあいかわらず良くやってくれていますしね」

シビさんは俺の言葉に黙って頷いた。シノの担当となるのが俺で良かったかもしれない。俺ならシビさんのように無口らしいから言動を誤解せずに受け取ってやることができる。

「俺の方で教えられる事は全てやりますけど、蟲邪民具の術だけは先に教えてあげて下さい。すっごい便利なんで」

またもやシビさんは黙って頷いた。その後、出されたお茶の方を見た気がしたので一言断つてから飲んだ。奥さんが出してくれたお茶請けにも手を出して、落ち着いた所で家をあとにした。

「今日は機嫌良かったな」

「確かにかなり話していた。何故なら家族でもあそこまで会話しない」

「テメエン所はどんな家族だよ！」

「最後はキバの家だな」

「おっしやー待ってました。ほらこっちだぜ！」

犬塚家は木の葉にある数少ない動物病院のそばに建っている。元は旦那さんがやっていた病院なのだが、ツメさんの尻に敷かれて過ぎて耐えきれなくなつて出て行った今は娘のハナちゃんが代わりにやっているようだ。その病院の前には家に近づいた頃から見えていたが黒丸がこちらを向いて待っていた。

「黒丸久しぶり、元気だったか？」

「お前に潰された、右目以外はな」

「え？黒丸の右眼って先生が?!」

悪かったとは思っているが、いきなりその切り出し方はないんじゃないかな黒丸君。ただこんな態度だが決して嫌われているわけではないだよな。

「昔試験の最中にちよつとな。ほら特製の薫製肉持ってきてやったからそう言うなよ」

「ふん、今回も大目にみてやるか」

そうは言いつつ尻尾の振りすぎで土埃が立ってんだよツンデレめ。俺が薫製を渡すとひつたくるのように啜えて家の中に消えていった。……決して餌で釣っているわけではない。

「なんだよ先生、俺の家の事も知ってんのかよ」

「ツメさんは初めての部下だしな。それにお前の姉さんが赤ん坊の頃抱っこしたぞ」

「そうなのか?!」

これまで意識した事はなかったが、ここまでこいつらの家族と関係があるとなると何か運命的なものを感じざるを得ない。そう思っていると黒丸が知らせてくれたのだろう、ツメさんが玄関を開けて出迎えてくれた。

「まさか隊長がうちの子の先生をやってくれるとはね」

「今更隊長はやめてください。なぜか自分と関わりのある家の子達は

かりで、やりにくさを無くす為にも班員を連れてこうやって家庭訪問
しています」

そういう意味ではカカシは楽だろうな、訪問する家庭はサクラの家
ぐらいだ。ナルトはともかく、サスケもあの事件以降は三代目の保護
下ではあるが一人で暮らしている。一族のみならず里の中には虐殺
犯であるイタチの弟を引き取ろうという者がいなかったのだ。ちな
みにタシはたまにナルトの面倒を見ている関係でカカシとは一応火
影室であつたようだ。

「あ、そう言えばまた薫製肉を持ってきてくれたみたいだね」

「基本常備してあるんで大丈夫ですよ。黒丸も可愛いし」

黒丸と会うと分かっている時は持つておくようにしている。一回
忘れた時の黒丸の落ち込みみようも可愛かったが。

「黒丸の事を可愛いって言えるのは、先生ぐらいだよ！そう言えば黒
丸の右目は先生がやったのか？」

「コラー！キバ、あんた先生になんて口きいてんだい！」

間違はなく血を受け継いでますよ、と言えるほど俺は強くはない。
それに訓練していく内にそこらへんは自然に改善されていくような
ので心配はしていない。

「こいつが何かやらかしたら遠慮なくやっておくれ！この子は犬と同
じで体に教え込まないと駄目だからね」

わかりやすい教育方針だ。この世界にモンスターペアレントがい
るとは思えないが予めそう言ってもらえると安心できる。

「キバ！せっかく憧れの忍が先生になったんだ、しっかり教えてもら
いな。あんたが想像するよりずっと苦労してるんだから。ねえ不遇
の天才さん？」

「さっきヒナタの家でも言ってたけど、不遇の天才ってなんだ？」

やっぱり気になるよな。でも今から生徒になるって子に弱点をあ
まり教えて欲しくはないんですけど……

「ヨフネはね忍術、幻術、体術はもちろん医療忍術や結界術、封印術ま
で使える才能があるんだよ」

「凄えな、流石は猟犬の隊長！」

キバの尊敬の視線が凄くて居た堪れなくなる。こうなったら自分で言うか。

「だけど俺はその多くを使用出来ないんだ」

「どういう事だよ、才能があるなら努力すれば使えるだろ？チャクラがあれば」

「そう、俺はそのチャクラが少ないんだ」

「なるほど……だから不遇の天才なのか」

シノが思わず呟く。普段無口な癖にこういう時だけ素早く反応しやがって。

「だから普段使う術は消費が少ない術ばかりだ。だから俺も獣人分身は使えるぞ」

「先生マジかよ?!」

獣人分身は犬塚家の忍犬やコン平みたいにチャクラを持っている生き物がチャクラを練って、術者が代わりに印を結びチャクラをコントロールしてやれば自身のチャクラを消費する事がない。俺との相性はもちろん、コン平との相性も抜群だ。コン平もチャクラ量が多いというわけではないが、分裂にチャクラは使わないらしく擬似多重影分身を使う事ができる。

「それぞれの課題もある程度検討がついている。お前達に教えてやらないといけない事はかなりある。今から半年間は任務はそこそこにシゴいてやるから頑張れよ」

「半年……この子らがルーキーのタイミングで中忍試験を受けさせるつもりかい？」

ツメさんは懐疑的な目でこちらを見ているが、俺はこいつらは中忍試験を受けられるだけの実力がある事は知っている。逆に俺のせいで受けさせてやれないという事態はさげたい。

「まあ最近はずキーで受験する班はいなかったみたいですが、今年俺にカカシにアスマが担当上忍です。それくらいの気持ちでやらないとこいつらもライバルに置いていかれてしまうんでね」

「そういう事かい、こりゃ優秀な年代になりそうだね」

三人は何の事か理解できていないようだが、まだ知る必要はない。

浮かれても焦っても良い事はない。

その後も少しツメさんと話してから犬塚家もあとにした。半年後は中忍試験……つまり木の葉崩しが起こるという事でもある。

どうやら俺に安息の時間はないようだ。

「なあ先生、先生の家にも行ってみたいんだけど」

「確かに……興味がある。何故なら俺達は先生の事をあまりに知らなすぎるからだ」

「お、シノと珍しく意見があうとはな。ヒナタも行ってみたいだろう？」

「行ってみたいけど、でも駄目だよ。迷惑だよ」

「えー、先生良いだろう」

「俺の両親は既に死んでるし、実家にいるのは木の葉の里の相談役をしている婆様だけだぞ」

「二「遠慮させて頂きます」二」

本来であれば家庭訪問した日から早速特訓を始めたかったのだが、中忍試験を受ける為には八件の任務を達成している事が最低条件である。その為には一週間以上かかるような長期任務は極力避けることが肝心だ。

そこで俺はシビ先生に倣って猫探しから始まり失踪人や犯人の探索といった班の能力を存分に発揮できる任務を中心に行う事にした。そして結果として僅か二週間で既に七件の任務を達成し、今は目安である八件目の任務中だ。

依頼内容は最近になって里の南側を中心に活動しているらしい盗賊の捕縛だ。単独犯のようだが、その犯行からして抜け忍の可能性もあるらしい。しかし犯行内容は民間の個人から食料や金品の強奪する程度で大した凶悪性もない為、ランクDの任務に設定されている。俺達は被害者の所へ行き、そこで感知できた匂いを元に森の中を追尾しているとこらだ。任務中は基本的に俺は口出しをせずに行きするだけとしている。また班のリーダー役に関しては任務内容を加味して、それぞれに任せるようにしている。今回はキバがリーダー役だ。

「この先は犯人の匂いだらけだぜ。正面の方向に一人が移動してるけど、こりや速度からして忍だな。ヒナタ頼む！」

「任せてキバ君……白眼！」

任せたおかげか全てを言わなくてもお互いに意思疎通できる様になってきている。三人とも能力が高いのは分かっていたが、それぞれに考えて行動するようにして正解だったようだ。

「見つけた。敵は情報通り一人みたい」

「さすがヒナタだぜ。シノは敵の周りを念の為に調べてみてくれ」

「了解した」

それと意外だったのはキバは人を使うのが上手いという事だ。まだガキ大将という感じではあるものの責任を自覚すれば独断専行を

する事もなく仲間に気を使っている。

「……これは少々、厄介な相手かもしれない」

「シノもそう思うか？ 赤丸は匂いで相手の強さがある程度分かるんだけどよ、どうやら俺達より強いらしいぜ」

「私達がこのまま行つて大丈夫なの？」

相手との力量を見極めるには経験が物を言うのだが、既にその特殊技能をもって見極められているようだ。そしてキバ達の言う通り敵の力量は個々で比べると全く齒が立ちそうもない。例えスリーマンセルで挑んだとしても難しいだろう。

「……これは悔しいけど無理しない程度に追跡して、アジトを突き止めたら退却だな」

「そもいかないみたい！ 気付かれたよ！」

三人が初めて意見を求めて俺の方を向いた。敵はおそらく木の葉でいうとそれなりに経験を積んだ中忍レベルと言ったところだろう。「お前達三人でやれる所までやってみろ。危なくなったら助けてやる」

キバの判断は正しかったが少し時間をかけ過ぎだ。戦闘は避けられないが安全に格上の敵と戦える機会なんて滅多にない。敵には三人の練習相手となつてもらおう。

「ヨシ、いつも通りに行こうぜ！」

「が、頑張ろう！」

「背後は任せておけ」

いつも通りにヒナタ、キバ、シノの順に隊列を組んで向かつて行った。俺は気配を消して少し離れた側面から見守る事にする。

「追手が来たかと思えばガキ三人かよ」

「俺らをなめてたら怪我するぜ！」

「ほう威勢が良いな。かかつて来いよガキい！」

その言葉をきっかけに先ずはヒナタが敵に肉薄する。思い切りが良くなってきているが、まだまだ足運びが拙い。そのせいか敵に接近しきれない。

「白い眼にその構え……日向を相手に誰が近付くかよ」

日向は有名になりすぎた為か迂闊に近寄らせてくれる忍は少なくなっている。八卦空掌が使えれば中距離の攻撃が可能だが今のヒナタでは距離を取られてはどうしようもない。しかしヒナタが敵の注意を引きつけている間にキバが牙通牙で攻撃を仕掛けた。

「防がれたか……」

「でも両手が塞がれば！」

キバの攻撃は避けられ、さらに追撃していたヒナタの攻撃も防がれる。するとそこにシノが蟲で遠距離攻撃を仕掛けようとしていた。コンビネーションとしては悪くない、だが……

「なるほど、貴様達が囷で奴が本命か。だが遅い！」

敵の言う通りまだまだ三人の攻撃はあまりに遅い。敵は二人の攻撃を捌いてから火遁で蟲を焼き払ってしまった。そして一気にシノへと接近されてしまう。中忍レベルの敵では体術の苦手なシノは手も足も出ない。

「弱い、弱すぎる。所詮蟲使いなどこの程度よ」

敵は止めを刺すことなく離脱しようとしていた。最初から殺意がなかったから手を出さなかったのだが逃がして任務失敗とするつもりも無い。

「驕りすぎだぞ抜け忍」

そう言つて敵の目の前に飛び降り足止めをする。俺の隠遁にここまで接近されるまで気付かないようではまだまだ甘い。その上偉そうに捨て台詞まで吐くとは。

「グレーのベストに二本のラインが記された腕章……貴様つ木の葉の死神か！」

「ほんと有名になっちゃったな」

「クソっついてねえ！」

逃げ出そうとするがクナイを当て投げして死角から攻撃をする事で足止めをし、すぐに詰め寄る。

「眠ってる」

そう言つて鳩尾を思い切り殴つて気絶させた。後で尋問してアジトを聞き出して奪われた金品を再奪取しなければならぬ。殺して

しまつてはその目的を果たせない。
「さて任務完了だ。帰つたら反省会だな」

盗賊を里に引き渡すと滝隠れの抜け忍ということが分かった。尋問には協力的との事ですぐに金品も被害者の元へ返される事だろう。そして任務が終わつた次の日、俺達は大きな荷物を抱えて朝早くから里の南にある温泉地にやってきた。

「これで目安としていた八件の任務が終了した。喜んで良いぞ、これからは修行漬けの毎日だ」

修行と聞いて三人とも力強く頷いた。よほど抜け忍にやられたのが悔しかったのだろう。

「それぞれ自分の課題はなんだと思う？」

「俺はバリエーションの少なさだな。牙通牙以外の術が少なすぎる」

「俺は体術だ。何故なら蟲の操作中は特に身動きが取れないからだ」

「わ、私は攻撃範囲かな？」

三人とも今までの事を考えながらか、一生懸命答えてくれる。素直な良い子達だ。だけど……

「全員ハズレだ。お前達はそれ以前に基礎があまりにも足りない。特に体力！今のままでは長時間の戦闘は行えない。その為には体力だけじゃなくてチャクラコントロールについても修行する必要があるぞ」

自分の必殺技を持ちたいという気持ちは痛いほど分かる。欠点を無くしたいというのも。だけど今の体力では修行の効率も悪い。おかしな話かもしれないが、修行の為に修行する必要がある。

「よつてー！これから三ヶ月は体力作りを中心にチャクラコントロールについても行う。まずは体力作りからだ」

露骨に嫌そうな顔をするキバは放つておいて説明する事にした。ただ俺は無意味に走らせる気はない。

「まず持久力といつても大きく分けて二通りある。まずは持久走のように体全体の筋肉を使った運動を長く続けるために必要な全身持久力。腕立て伏せや腹筋のように、体の一部の筋肉を使った運動を長く

続けるための筋持久力の二つだ」

この世界ではまだ前時代的なトレイニング、つまりは過度なトレーニングを故障するリスクと引き換えに根性で乗り切るといった修行方法が主流だ。そんな中で俺は猟犬に効率的な修行を導入し成果を出す事が出来た。特に若い内から無理をさせても仕方がない為、その経験を三人にも実践するつもりだ。

「ちなみに全身持久力を鍛える方法にも二通りある。今からやるのはインターバルトレーニングだ」

おそらく聞いた事がないであろうトレイニングに三人が戸惑っている。その隙にコン平は小さく分裂して三人の首元に纏わりついた。「三人にはコン平を乗せたまま全力でダッシュしてもらおう。まずは赤い布を巻き付けたあの木まで走ってみろ……スタート！」

目標の木までは約300mだ。三人はもちろん難なく走りきるが、コン平は尻尾をペシペシと振った。それを見て今度は走って行ったのとは反対側にある木に黄色の布を巻く。

「ヨシ、次はもう少し距離を伸ばすぞ。ここまでダッシュだ……スタート！」

次も難なく走りきるが、今度はコン平がコクコクと頷いている。流石は卵とはいえ忍だ、約400mが適正らしい。コン平には実は脈拍を測ってもらっていたのだ。インターバルトレーニングをするにあたって適正な負荷は毎分180拍程度なのだ。そして少しするとキバに乗ったコン平が鳴いた。

「今から俺は合図を出さない。コン平が鳴いた奴から走るんだ！」

「よくわかんねえけど了解だぜ！」

そう言っただけでまずキバが走り出し、次いでヒナタ、シノの順で走り出す。休憩する時間も心拍数で決めていて、120拍になった者から走らせるようにコン平に教えている。最初は余裕そうな三人だったが、二十本を越えたあたりから疲れが見え始めた。

「つヨフネ先生……これいつまでやるんだよ」

「俺が良いと言うまでだ、ほら合図出てるぞ！走れ！」

「クソーー！」

そうしていると最初に座り込んでしまったのはヒナタだった。

「ヒナタ！お前の忍道はなんだ?!」

「ハアハア……まっすぐ、まっすぐ自分の言葉は曲げない事です！」

「強くなると俺に言っただろう！もう曲げんのか?!お前はその程度か?!」

「違います！まだ走れます！」

「なら座ってないで立て！そして走れ！」

「ハイ!!」

「シノ！お前は出来る奴だと思ってたのに残念だ。期待外れもいい所だな。こんな事も出来ないのか?!」

「俺は……まだやれる。何故なら」

「ならウダウダ言っていないで走れや！」

「もう限界だ……」

「キバ！限界を自分で作ってどうする！限界は俺が決めてやるからまだ走れ！」

「そ、そんな事言ったつてよ……」

「なんだナルトにこの修行をさせた時はお前よりも頑張ってたぞ！ナルトに負けて良いのか？負け犬とでも呼ばれたいのか？そんなんじゃないや一緒猟犬に入るなんて無理だ！」

「……俺は、俺はナルトには負けねえ！」

そうして発破をかけた続けるがやがては全員が倒れ込んでしまった。

「これが『今』のお前達の限界だ。半年もすれば驚くほど体力が付くから安心しろ。だがまだ気は抜くなよ、次はさつき言った筋持久力を鍛えるために筋トレをするぞ」

これほど人というのは絶望出来るのかと思える表情を三人は見せるが構ってはやれない。

「最初の頃は脚はパンパンだろうから上半身の筋トレを中心にやる。まずは懸垂を百回だ」

三人が走っている間、俺は発破をかけたつても懸垂用の台を作っていたのだ。

「ホラさっさとやれよ」

「……はい」

ガイの様に千回や一万回なんてのは普通の人では続けられない。でもそうやって故障覚悟で自分を追い込めるような奴じゃないと八門遁甲なんてマスターできないのかもしれないが。

「次は腹筋だ。腹筋といっても普通にするだけじゃないぞ。腹筋は縦と斜めの筋肉で出来ているんだ。普通の腹筋を百回、その後に斜めに腹筋をするんだ。上体を起こしてから左右に振るんじゃないぞ。最初から斜めに上体を起こすんだ！」

斜め上体起こしも左右各百回やらせる。中学生くらいの子にやるせるのは前世の感覚でいえばオーバーワークな気もするが、意図せずともチャクラで身体強化がなされているこの世界の忍としては大した事はない。

「よし最後だ。まずはこのダンベルを持って」

そうやって俺は2キロのダンベルを二つずつ渡した。

「それを持ってまずはアキレス腱を伸ばすように右足を前にして足を開け。腕は身体に引っ付けないようにして、肘を九十度になるように状態を維持しろ。そしてその状態でゆっくりと左足が前になるように身体を回転させるんだ」

地味にキツイが身体の軸を安定させる事とスムーズな体重移動、腰の回転を意識付ける事が目的だ。それを百往復させる。

「今の筋トレを残り二セットやれ」

これ続ける事で上半身の使い方も改善されると俺は思っている。継続は力なり。三人が筋トレを終わらせた所で一時間の昼食休憩とした。

そして午後はまずチャクラコントロールの修行だ。修行の内容はまず手を使わずに木登りをさせる事にした。チャクラによる吸着はこれから戦っていくにあたって必須技能だ。これは何も移動に限った話ではなく、それぞれで応用法を考えれば武器とする事も出来ると考えている。それにこの先、術を覚えていく上で必要な量に応じてチャクラを練るといふ技術は重要となってくる。

注意すべきはやはりオーバーワークだ。経絡系にダメージが残ら

ない程度に訓練させなければならない。ナルトやサスケといった例外は別にしても経絡系のダメージは治りにくいのだ。

そんな心配とは裏腹にヒナタは柔拳、キバは四脚の術といったチャクラコントロールの技術が必要な術を覚えているせいか、一目目にして木登りはマスターした。シノは蟲に体内のチャクラを与えているせいか苦勞しているようだ。

定期的に三人の状態を確認しつつこれ以上は無理だと判断した所で少し休憩した後、今度はハンドシグナルや状況判断などについての座学を行う。獵犬に入れる以上は避ける事が出来ない必須技能だ。

座学の次はまた持久力アップのトレーニングをする。今度はインターバル方式ではなく純粋な持久走だ。とはいってもまたコン平に頼んで心拍数を測ってもらいながらなのだが。大体120から150拍程度の負荷をかけながら自分のペースで距離を重視するのではなく長時間走らせる事が重要だ。

その後クールダウンをさせ、ストレッチを入念に行わせる。明日からはストレッチ、インターバル、筋トレ、昼食、チャクラコントロール、座学、持久走、ストレッチといったローテーションで主義を行うつもりだ。

ただ誤算だったのは夜にヘトヘトとなって温泉に浸かったシノだ。すぐ湯当たりしてしまうのか、蟲のコントロールが甘くなるのか体内から蟲が溢れ出て湯が黒くなってしまってしまうのだ。これでは何のために風呂に入っているのか分からない。

そうして二週間が経つ頃には全員が水面に立つての組手が出来るようになった為、残りの期間はチャクラコントロールの修行から体術の修行に変更する事にした。

「お前達の体術の欠点だけど、まずヒナタは足運びが致命的にダメだ。攻撃する事に躊躇していないか？」

「……はい」

「お前は優しい性格だからなすぐに治すことは難しいかもしれない。だがなお前が護りたいのは敵か？それとも仲間か？」

「もちろん仲間です」

「前衛というのは敵の足止めが一番のメインだ。倒す力ではなく、味方や自分の信念を護るためにその力使わないでどうする。必ずしもお前が止めを刺す必要はない。味方へ攻撃させない。その事を意識してみろ」

「はい」

「次はキバ、お前は馬鹿だ」

「は？」

「スピードに自信があるせいか手数で攻めることばかりで周りが見えていない。正面からいくら早い攻撃をしても、眼が良い相手なら勝てないぞ。敵が何を狙っているのか、地理は活かせないのかそういう事を考えてもつと頭を使った攻撃を心掛ける」

「はい！」

「最後にシノ、お前は今まで蟲に頼りすぎたな。頭も良いんだこれから体術を一から叩き込んでやる」

「分かった」

「一番体術が駄目なのはお前だぞ」

「……分かってる」

「センスが無いかもしれない」

「それも覚悟の上だ」

「やるんだな？」

「はい」

こうしてチャクラコントロールよりも全身に疲労が来る体術に変更した事で修行はよりハードなものになった。しかし三カ月が経つ頃には体力がついてきて倒れこむ事も無くなり、その成果は体術にも現れている。こうしてベースがある程度できた段階で修行合宿は終わりを迎えた。

里に戻った俺達は山賊の討伐などの比較的簡単な戦闘任務をこなしながら連携の確認を行っていた。もちろん体力作りは継続しているが、そろそろ新しい忍術についても取り組んでも良い頃だろう。

「今日からお前達の技を考えて行く」

「ひゃっほーい！俺はどんな技にするすか？」

戦闘スタイルについてはずっと考えていたので候補はいくつかあるが、まずは其々の性質変化を把握しなければより最適な選択は出来なかった。キバは必殺技を覚えられるのかとワクワクしているが、まずは説明からだ。

「チャクラの性質変化は火水土雷風の五つに分けられていて、これを『五大性質変化』と呼ぶ。ほとんどの忍がそのどれかの性質に当てはまるチャクラを持っているんだが、一人一つというわけではなくて上忍クラスの忍なら二つ以上持っているのが普通だな。ちなみに俺は雷と風だ」

三人とも性質変化については知っているようで素直に頷いていた。やはりナルトが特別に馬鹿なのかもしれない。

「それで自分のチャクラがどの性質に属するかは、この感応紙にチャクラを流し込んでその変化によって知ることが出来る。まずは三人ともやってみろ」

三人に感応紙を渡し試させるとシノの紙は燃え、キバの紙はボロボロに崩れた。そしてヒナタの紙は皺が寄り燃えた。

「全員バラバラだな。紙が燃えれば火、崩れたら土、皺が寄れば雷の性質変化だ。これを踏まえた上で其々の技や術を考えるぞ」

ヒナタは日向家に多い火ではないかと当たりをつけていたが、まさか俺と同じで最初から得意な性質を二つ持っているとは思わなかった。雷は火よりも接近戦と相性も良いので幸いかもしれない。

シノは蟲と火の相性があまり良くないように思う。少し時間がかかるが他にも適性があるか調べてみる必要があるな。キバも意外な事に土の性質なのだが、俺がかつて考えていたロマン溢れる術を使えるようになるかもしれない。

「全員に言える事だが今をベースに考えるぞ。ヒナタはまず体術の向上が第一目的だ。その上で八卦空掌を習得して中距離攻撃出来るようになって貰おうと思っている。性質変化はその後だ」

「はい、分かりました。先生を信頼してるんでそれで大丈夫です」

嬉しい事を言ってくれる。体術では点穴が見える事を利用して、擬

似八門遁甲を覚えさせようと思っている。チャクラを急激に使用するので長時間の戦闘には耐えられないかもしれないが切り札とはなるはずだ。それに戦闘中に繊細なチャクラコントロールが必要な身体強化についてもヒナタなら可能かもしれない。

「次にシノの火遁だが一般的に蟲との相性が良いとは言えない。シビさんから油女家で把握している蟲の一覧を今度見せてもらってから考えよう。ただ俺は火遁や蟲については教えられない……そこでまずは幻術を覚えてみないか？」

「なんで幻術なんです？」

「まず第一に他の二人には適性があまりなさそうという事、班にバランスを持たせるには誰かが習得した方が良い。第二にお前の体術を向上できるかもしれないからだ」

「なぜ幻術を覚える事で体術が向上するのです？」

「いいか、まず幻術とは相手の五感にチャクラを乗せた刺激を送る事で作用する。一般的にはその刺激が強いほど強力な幻術にかける事が出来るとされているが、弱い幻術でも要は使い方の問題なんだ。お前の場合は蟲の羽音にチャクラを乗せてみたらどうだ？ 蟲が大量に近づけばどうせ音がするわけだし大したデメリットはない」

「しかしそれでどんな幻術をかけると言うんです。幻術の理論から言えば大した術は使えない」

「そうだが例えばお前が敵を蹴るとする、その時に実際の攻撃よりもほんの少し遅いビジョンを見せたらどうなる？」

「なるほど、そうする事で敵の裏をかくのか」

「そうだ、戦闘中にかなり考えながら使わないといけないが、頭の良いお前なら出来るはずだ」

「了解した。異存はない」

使い方はかなり難しいかもしれないが、攻撃の速度を自由に操る事が出来ればかなり強くなる。幻術にかけるのは一秒以下で良いのだ、気付いて解く時間もない。完成すればかなり厄介だろう。

「最後にキバ、お前の戦闘スタイルにぴったりの土遁に心当たりがある」

「流石は先生！」

「ただ俺は土遁が使えないから術を直接教えてやれない」

「どうするんすか？」

「とりあえずは性質変化の修行を中心にやるぞ。その間に誰か先生を見つけておいてやる」

「了解だぜ！」

原作では見せ場の少なかつた八班だが着実に実力をつけ始めていた。

「ヒナタ様お帰りなさいませ。合宿はどうでした？」

「コウさんの言っていた先生の二つ名の意味がよく分かりました」

「ああ、効率的ドSですね」

「コン！」

「コココココン平さん!？」

「ああ訓練で乗せたままでした……っついていけない！」

「この金平糖を差し上げますので、何卒ご容赦下さい！」

「……コン！」

多くの忍にとって技の修行は体力や筋力と違い、その努力が報われるとは限らない。俺だってそうだ。しかし八班のメンバーはゆっくりではあるが、着実に成長していた。

ヒナタは水面歩行の修行でコツを掴んだのか、1m程度ならチャクラを放出する事が出来るようになった。点穴を突いてからの活動時間もおおよそ把握出来たし、下忍相手なら間違いなく活躍出来るだろう。そろそろ雷遁の修行に入る頃かもしれない。

シノは鈴の音を使った初歩的な幻術を既に習得した。これを蟲の羽音に変え、尚且つ戦闘中に使えるようになるかは本人の努力次第だ。そしてシビさんに頼んで見せてもらった蟲の一覧には火遁にお逃え向きの蟲がいた。今はその蟲の繁殖も合わせてさせている。

最後にキバだが土の性質変化の修行で葉をボロボロにしようと頑張っている。当初は手こずっていたが、トンボからチャクラを砂の粒子のようにするイメージするというアドバイスを聞くと一気に進歩していた。その様子を見るとナルトの多重影分身がいかにチートなのか改めて思い知らされる。

そうやって修行に打ち込ませている毎日だが、里もそう簡単には任務を休ませてはくれない。前回はハイペースで任務をする代わりに無理を言っただけで休んだのだ。合間を縫って任務をしなければならぬ。そのため俺は一人で任務を受けに来た。

「こんなふざけたチビがおるとは超不安じゃ」

「……コロス！」

「ここら、今から護衛する人を殺してどうする」

「なら、ならせめて一発だけでも殴ってやらなきゃ気がすまないってばよー！」

部屋に入ろうとすると何やら中が騒がしい。聞こえてきた内容だけで今からどんな事が起こるのか理解してしまった。溜息を吐きながら俺は扉を開けた。

「ナルト何騒いでやがる。また俺が扱いてやろうか？あ？」

「げつヨフネの兄ちゃん!?……ごめんってばよ！」

予想通り中には七班と橋造りの名人タズナがいた。俺が騒いでいたナルトに声をかけると途端に大人しくなる。

「いやあヨフネ助かったよ」

そう言つてカカシが頭を搔きながら礼を言ってくる。もう少しぐらい躑けても良いと思うぞ。

「なら今度俺の班の下忍達に術でも教えてやってくれ」

「まあそれぐらいなら」

これでシノとキバの術の講師を確保できた。騒がしいまま七班は部屋から出て行ったが、これから任務に行くつてのに班の雰囲気があるんで大丈夫なのか？分かつてても不安にさせてくれる。

三代目やイルカも苦笑いしながら見送っていた。しかしこうなると俺も行きたい任務があった。

「あの俺達の次の任務なんですけど少しお願いが……」

三代目は特に怪しむ事なくそのお願いを聞き入れてくれた。無事希望する条件の任務を受け俺は部屋を出た。

「先生……俺達は国外の任務とかやらないんすか？」

任務を持つて班の元に行くと言想通りキバが駄々を捏ね始めた。おそらく先ほどナルトからでも波の国へ行くと聞いたのだろう。

「実はな俺達も波の国への物資運搬任務を受けて来たぞ。七班と会う事もあるかもしれないな」

ヒナタが真つ先に小さくガッツポーズをする。ナルト愛が凄い。ただナルトとすごせる時間は少ないぞ。

「任務の内容は火の国から波の国まで建材の積み下ろしと運搬だ」

俺達の依頼主は建材の注文を受けた業者だ。簡単なお手伝い系の任務に設定してあるのは波の国の者がガトーが暗躍しているという情報を隠しているからだろう。護衛については依頼内容に含まれていなかった。

とは言つても再不斬はカカシが引き受けてくれるはずだから、あつたとしてもこちらはガトー率いるチンピラ軍団を駆除するだけだろ

う。再不斬や白は好きなキャラだったし仲間に加えたいが、霧隠れの事を考えるとそれは難しいのが実情だ。

既に霧隠れでのクーデターが成功しているのかは分からないが、他里の抜け忍を殺すのではなく仲間に引き入れるというのはマズい。現在里でどんな扱いなのかは関係なく、里抜けの原因に木の葉が絡んでいると思われるのは碌な事にならない。

「まずは火の国で資材を調達している人達と会ってから陸路と海路を使って運ぶことになる。物資がある分、到着は七班から一週間ぐらい遅れるだろうな。一時間後に荷物を揃えて正門に集合だ」

今回の任務は八班の担当になったからこそ受ける事が出来た。猟犬にいてはこの程度の任務に就く事など到底叶わない。そして俺の目的は再不斬と白の遺体処理、そして断刀「首切り包丁」の入手だ。再不斬と白は忍界大戦において、もし穢土転生されれば脅威となりうる。打てる手は全て打っておきたい。それに俺の身体強化に耐える事の出来る刀を手に入れる事が出来る最大のチャンスを見逃すような事はしたくなかった。

俺達の任務は特に妨害に会う事なく進んでいる。全員のんびりとしているが、訓練の一環と称して三人には警護もやらせていた。一週間ずっと警戒し続けるというのは神経を擦り減らすのでそれなりに大変だ。そういう意味では良い経験になったかもしれない。

ただ普段の体力づくりの修行を中断するのは勿体無いので、海路では基本的に海の上を走らせる事にした。

「……あんたは鬼か？」

「いえいえ、忍ならこのくらい何ともないですよ。なあみんな？」

「「……はい」」

「ほらね？」

「まあ肝心な時に働いてくれるなら俺らはかまわんよ」

そうこうしていると出発から予定通り一週間で波の国へと入ったのだが、建設予定の橋に近づいた頃、不自然に濃霧が発生し始めた。先程までは風もあつたというのに止んでしまっている。

「お前ら全員船に上がれ」

「どうしたってんだよ。ヨフネさん?」

「皆さんは船室に籠っていて下さい。この霧はおそらく忍術です。目的地で戦闘が行われている可能性が高いです」

「何だって?!」

ここまで一緒にやって来た依頼人達はどうしたら良いか分からず顔を青くしている。一般人にとって忍の戦闘とは災害のようなものだ。俺達はともかく依頼人達はたまったものではない。

「ヒナタ、霧の中はどうなっている?」

「え?!サ、サスケ君が倒れています。不自然にチャクラが止まっているので、たぶん仮死状態です。他の人達は無事です。それと……ナルト君凄いチャクラ」

ヒナタに言われなくてもこの空気が震えるようなチャクラは既に感じていた。漏れ出すチャクラでこれだけの威圧感を放っているのだ。九尾モードになったナルトの凄まじさはどれだけなのだろう。

「まずはこの霧を晴らすか」

そう言っただけは水面に五角形を描くようにコン平を配置し結界を張り、雷刀を両手に取った。

「三人とも水から離れているよ……」

三人が水から離れたのを確認して、俺は雷刀を結界の中心の水面につけて放電させた。電気分解された水は気体となるが、それを結界術で空中に分離しないよう留める。

「シノは出せる範囲で火葬蟲を出して、橋の上に粘液を出させてくれ」
「承知した」

火葬蟲とは今シノが繁殖させている最中の蟲である。この蟲は非常に高温で尚且つ長時間燃える粘液を尻から出す特性を持っている。シノが火遁を覚えれば術の威力を高めてくれる事だろう。俺は風遁を使い電気分解した気体を球状にし、中央に起爆札を浮かべれば準備完了である。

「カカシーー!!土遁でも何でも良いから全員を守れっ!!良いな!?分かったら右手挙げる!」

俺らしくないが叫んで霧の中にいるカカシに知らせる。狛犬なら笛の音でも使つて敵に知られる事なく伝える事が出来るのに……

「ヒナタどうだ?」

「カカシ先生が手を挙げました!」

「よし、なら今から“これ”を飛ばすから敵との間まで誘導してくれ」
「はい」

俺は浮かべた風の球を指差してヒナタにそう伝える。そして一気に霧の中へ球を飛び込ませた。

「先生、そこです!」

——風遁・風玉爆鳴気!

ヒナタの合図で起爆札を起爆させた途端、突風と爆音が鳴り響く。

爆鳴気とは可燃性の気体を酸素と適正な割合で混合したものに点火すると起こる、爆発的な燃焼反応の事だ。水素の場合は酸素と2:1で混合するのが適正な配合となる。さっき俺が水を電気分解したのはこの為だ。この気体に点火すると轟音を発して爆発し、化合して水蒸気を生成し、多量の熱を発生させる。

そして爆発により霧は晴れた。カカシは土流壁で爆発からタズナさんとサクラの身を守っていた。ナルトは何とか無事だが、サスケは倒れたままだ。

「カカシやれ!」

「俺も舐められたもんだぜ。確かに霧は晴れたが、あれだけ大声で叫ばれちゃ対処の取り用なんていくらでもある」

爆発を凌いだ再不斬が橋の上から俺を見下してやがる。そもそもこの術で仕留めようなんざ思つてないんだよ。

「霧が晴れたなら、また霧を作れば良いだけだ。水遁・霧隠れの術」

そう言つて再不斬はカカシが飛び出すより先に術を発動させるがすぐに霧は消えてしまった。

「なに?!」

今は風が強く吹いている。それに橋の上の温度はシノの火葬蟲の粘液が未だ高温で燃えており温度も高くなっている。そんな状態で霧が発生出来るわけがない。

水遁は結界忍術と合わさった術が多く、霧隠れの術も範囲内の風を止めてその上で霧を継続して発生させる技だ。内部で少々風を起こしたところで霧を晴らす事なんて出来ないが、先程のように一気に拡散させてしまえばその限りではない。

「お前の未来は死だ……雷切り！」

カカシも敵の動揺を見逃さず、雷切りを再不斬に突き立てようとした。しかし……

「……俺は本当に良い拾い物をした。最後にこんなチャンスを与えるなんてな！」

白がカカシの前に飛び出し雷切りを身をもって受け止めたのだ。再不斬は白ごと切ろうと断刀を振るうがカカシは白を抱えたまま避けた。

「先生、橋の下に船があるみたいだぜ！かなりの人が橋に登ってやがる」

橋の戦いが進行する中、キバがガトー達の乗った船を見つけた。霧が晴れた今、この船が襲われる可能性もある。

「三人は船に残れ」

「でもよ！ナルト達がピンチなんだぜ!？」

「忘れるな！忍にとつて任務は絶対だ。それにカカシ達を見捨てるつもりはない。俺が行って来る。だから三人は残れ」

三人は不承不承といった具合に頷いた。それにあの場に三人が行った所で何も変わりはない。俺は船を飛び降り、橋の支柱を伝って登った。

「今のお前じゃ俺には勝てない」

俺が橋の上に着いた頃にはカカシが再不斬を圧倒し宣言していた。この戦いはどうやら決着が付きそうだ。俺はサスケに覆いかぶさって泣いているサクラの元へと駆け寄って声をかけてやる。

「サスケは死んじやいないぞ」

「え？なんで？ヨフネ先生？……でもサスケ君は」

「大丈夫、仮死状態になってるだけだ。治療するからどいてろ」

サスケを診ると確かに一見死んでいるように見える。しかし身体

中に刺さっている千本は的確にツボをついている。あの歳にしてはかなりの腕だ。まずは首に刺さった千本を抜いて掌仙術で手当てをする。その後次々と千本を抜いたところでサスケが目を覚ました。

「……サクラ？」

「サスケ君！良かった……」

とりあえずこれで全員の無事が確定した。背後を振り返れば再不斬は背中から刀や槍を生やして倒れ込んでいた。目当ての断刀「首切り包丁」はカカシの近くに転がっているから、やはりクナイを啜えて単身突っ込んで行ったのだろう。

「ナルトー！サスケ君は無事よ！ちゃんと生きてるわ!!」

サクラがナルトに向かって無事を知らせる。カカシも安堵の表情を浮かべている。とりあえずタズナさんとサクラ、それに二人に支えられたサスケを橋の反対側に下げさせ、俺はカカシの側へ行く。

「サスケは治療しといたからな」

「助かったよ。礼を言う」

やっぱりカカシは変わったようだ。暗部の時はあれだけ殺伐としていたというのに、先生の心構えを持った忍になっている。カカシはふと気付いたように俺に問いかける。

「それより、なんでお前がここにいるのさ？」

「そりゃ任務に」

「おいおいおい、テメエら安心して過ぎ」

「糞忍者どもが、なに人の金蔓殺してくれてんだよ？」

「こうなりや町でも襲って金目の物、全部いただいて行くしかねえな！」

カカシとの話を遮るようにガトーを殺されたチンピラ達が集団で俺達を嘲る。どうやら度し難い馬鹿らしい。忍相手にたかだか五十人が勝てるわけないだろう。

「はあ……カカシ、お前は休んでろ。どうせ写輪眼の使い過ぎで動けねえだろ？」

「そういうヨフネはどうなんだ？あんな派手なお前らしくない術使ったってのに大丈夫なのか？」

「うっせーよ！大きなお世話だ。俺らしく低燃費な術だから心配すんな」

風玉爆鳴気はその見た目に反してかなり低燃費だ。一番チャクラを使うのは電気分解する時だが、雷刀があればかなり抑える事が出来る。

「ただあそこにある断刀は貰うぞ」

「……まあ確かにお前の為にあるような刀だよな」

今にもこつちに向かつて来ようとするチンピラに対し、俺は断刀“首切り包丁”を拾い上げ一人で突っ込んで行く。

断刀“首切り包丁”は人の血を吸う事で刃こぼれ所か刀自体を直すこの妖刀だ。風のチャクラを流せば、滑らかに浸透して行くのを感じる。こいつなら何だつて斬れそうだ。

ゴオツ

凄まじい音を立てつつ、四方から飛び掛かって来る敵を思いっきり横に薙ぎ払った。

その射程を活かし瞬時に十人近い敵の上半身が裂ける。悪党に遠慮してやる事は無い。俺は返す刀で更に踏み込んでもう一閃する。素晴らしい。これだけ本気で振るっても壊れないとは。それに血を吸う度にチャクラの通りが良くなっていく気がする。そのまま俺は踏み込み続けた。

「死神……」

いつの間にか駆け付けていた住民の声が聞こえ、ふと自分の周りを見渡せば敵は全て斬殺体となってしまう。これでは客観的にどっちが悪役か分からない。

本来なら歓声で終わるはずの場面が何とも微妙な空気で終わってしまった。

カカシがまた一週間動けないというので、俺が下忍六人の面倒を見つつ見回りをする事になった。ガトーが死んで残った奴らが暴れるのが目に見えていたからだ。しかし俺がいる事を聞きつけたのか正

式に波の国から残党狩りを命じられた。既に忍はいないのでただのCランク任務だ。どうにも上手く使われているような気がしてならないが、断刀が手に入ったので大目に見る事にした。

ナルト達と一緒に行動してみると連携は思ったほど悪くない。なんだかんだでサスケは二人をフォローしているし、ナルトが空回りしても憎まれ口を叩いてはいるが本気で怒る事はない。ナルトは良い所が無いように見えて人がやりたがらない事も率先してやっている。目立つ事はそれ以上に率先してやろうとするが。サクラは暴走気味の二人の抑え役にもなっているし、知識は非常に豊富だ。

ただ鼯肩と言われるかもしれないが、チームとしての戦力は八班が勝つと思う。成長のスピードが異常なだけで現時点では負けていない。これからもつと鍛えてやらないとな。

カカシからは知っている土遁を話させた。その中には俺が考えていた忍術のヒントとなる岩柱槍がんちゆうそうと拳岩けんがんの術があった。

「キバ術の見当がついたぞ」

「それって先生が前に言ってたやつすね！」

キバは自分だけ成長を感じられていなかったからか、すごい勢いで食いついてきた。

「そうだいいか、まず拳岩の術というのがあつた。これは拳を岩で覆う技で攻撃範囲の拡大やダメージの増加を見込める。しかしお前は四脚の術で強化した爪を活かす格闘技だ。となれば何も拳にこだわる必要はない。巨大な鉤爪付きの手を再現すれば良いじゃないか」

ちなみに片手だけ鉤爪にしようかと考えたのだが、流石にバランスが悪すぎるので止めておいた。

「ただそれだと威力に欠けるだろ？そこで使うのが岩柱槍という術だ。これは名前の通り岩の槍で敵を串刺しにする技なんだが、さっき言つた掌からこの槍が出てきたらどうなる？基本は巨大な爪で敵を切り裂き、搦んだ相手に対しては岩柱槍で貫く」

色々説明したが所謂パイルバンカーである。決定打が少ないからピッタリだと力説したつもりだが、ただ単に俺のロマンという本音は伏せておこう。

「……先生、それマジで言ってるのかよ？」

いかんどうやら巫山戯すぎたらしい。いつにも増して真剣なトーンだ。

「先生、俺がそんな凄え技を覚えても良いのかよ！」

安心した。やはりロマンの分かる同志だったようだ。他にも地中を匂い頼りに移動して攻撃をする“追牙の術”や身体を硬くする“硬化の術”、土遁の定番の防御方法である“土流壁”など汎用性の高そうな術に絞ってカカシに指導させようと思う。一時はどうなる事かと思つたキバだが、解決の糸口が見えてきた。

シノにはカカシに火の性質変化のアドバイスをさせてから性質変化に取り組ませる事にした。ヒナタは俺が雷の性質変化を教えたのだが、どうにも苦戦しそうである。

カカシは下忍の頃から自分の力で修行してきたからか、ナルト達にはあまり修行をつけていないようだ。俺達が修行している間、個人個人で自主トレをしていた。俺が口を出す事では無いが、それで良いのかとも思ってしまう。

カカシが回復してからも俺達は少しの間、波の国へ留まった。カカシにキバの術やシノの火遁についてしっかりと教えさせるチャンスだったからだ。

カカシ達はタズナさんの護衛任務の為、橋の完成までは留まらなければならぬが、あと一カ月はかかるだろうから俺達は付き合っに入ってられない。それに島民達の俺を怖がる視線にウンザリしていた。

帰りはほぼ陸路の為、三人は先にインターバルさせながら帰らせました。俺はその間に遺体を焼き尽くし、遺灰を海に撒かなければならなかった。

「忍は道具としてあるべき……か」

死ぬ気など無いが遺灰を撒いていると、ふと自分の人生を考えさせられた。そろそろ中忍試験が始まる。俺は俺が俺である為に目的を果たさなければならぬ。

「三代目は必ず守ってみせる」

カカシ達より一足早く里へ戻った俺達は普段通りの任務に就いていた。里への帰り道、三人のモチベーションを上げる為にも中忍試験へ推薦する事を既に告げてある。中忍試験を受けるにあたって最も必要なのはコンビネーションである。おそらく大丈夫だとは思っているが、合格の可能性を少しでも上げる為に三人のみで任務を行わせている。任務内容は吟味しているし、危機察知能力の高いコン平も付けているので死ぬ事は無いはずだ。

そして俺はその間に中忍試験中の警備の打ち合わせをしなければならなかった。中忍試験自体は半年に一回だが、合同で行われるのは年一回であり、この時は里をあげてのお祭りとなる。更に今回初参加となる音隠れの里はまだまだ情報が少ない為、より一層の注意が必要だと説いて猟犬がその任にあたる事が出来た。

その結果、死亡者が出る二次試験では猟犬が試験官を務める事となった。担当するのは連隊規模となる時に中隊長となったアッコで、彼女の隊を率いて試験官として警戒にあたる事となっている。ホへとゲンマは部隊の大多数を率いて里周辺の警戒をする事になっている。それに俺とシスイに加え、タシとサンタという選抜したフォーマンセルが最終試験時の要人警護を行う予定だ。

この警備計画がまとまり久しぶりに担当下忍の三人と修行をしていると、里の上空を緊急招集を報せる鳶が旋回した。

「お前らあと一週間で中忍試験だ。俺は今から三代目の所へ行つて推薦してくる」

「とうとう……ですね」

「なに、俺らなら楽勝だぜ！」

「そうだな、何故なら俺達はどの下忍よりも厳しい修行をしてきたからだ。間違いない」

俺達の世代は戦争に駆り出されており、こいつらよりも濃密な経験を積んでいたが、今の世代ではこいつらが間違いない最も修行してい

るだろう。二次試験で落ちるような事があれば考え直さないとけないな色々。と考えた途端キバ達の顔つきが変わった。

「絶対、絶対受かるぞ！」

「うんそうだね……私達の平和の為に」

「俺らはやれる。間違いなくやれる。大丈夫だ。辛くなったら修行を思い出せ。あれより辛い事なんてない」

妙に気合を入れ始めた三人を尻目に俺は火影の執務室へと向かった。部屋には三代目は勿論、下忍を受け持っている担当上忍に上役達、それにアカデミーの教員が集められていた。

「招集をかけたのは他でもない、この顔ぶれを見れば分かると思うが」
顔ぶれを見るまでもなく、この時期なんだからみんな把握しているでしょ。

「もうそんな時期ですかねえ」

「もう他国には報告済みなんですよね？見かけない顔をちらほら見かけましたから」

おい、カカシ何呑気な事言ってるんだよ。アスマも物知り顔で偉そうに言ってるじゃねえよ。他国の忍を見てようやく思い出したんじゃないのか？

「でいつなんです？」

「今より一週間後だ」

「そりやまた急な事で」

三代目が宣言するともうそんな時期かと驚く声が他の担当上忍からも聞こえる。いくら実力がある奴なら勝手に上に上がっていくとはいえ、下忍を受け持つ身なら皆それくらい把握してあげておいてやれよ。

「それでは正式に発表する。今より七日後をもって合同中忍選抜試験を始める」

いよいよ始まる。俺が最もワクワクして読んでいた中忍試験編が。ただ今はここで死者を減らすのが俺の役目でもある。

「さて中忍試験を開始するにあたって、まず新人の下忍を担当している者、前へ」

何故かやたらと背後から注目を集めている事にため息をつきながらカカシに俺、アスマが前へ出る。

「カカシにヨフネにアスマ。どうだ、お前達の手の者に押し下忍はおろかな？言うまでもない事だが、形式上任務を八つ以上こなしている下忍ならばお前達の意向で試験に推薦できる。まあ通例その倍以上の任務をこなしているのが相応じゃがの」

当然ルーキーにはまだまだ早い、と無言のプレッシャーをまたしても背後から感じる。おそらくこの世界において最も良い人と評されていたあの人がらだろう。

「それではカカシから」

「カカシ率いる第七班、うちはサスケ、うずまきナルト、春野サクラ以上三名、はたけカカシの名をもって中忍試験受験に推薦致します」

「「えっ?!」」

部屋全体が驚きの声に包まれる。だがここで驚いていたらまたないぞ。

「ヨフネ率いる第八班、日向ヒナタ、油女シノ、犬塚キバ以上三名、うたたねヨフネの名をもって左に同じ」

「「まあここはそうだろ」」

おい。これは信頼ととって良いんだよな？

「アスマ率いる第十班、山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ以上三名、猿飛アスマの名をもって左に同じ」

「三人とも推薦した?!」

「中忍試験にルーキーが出るなんて……」

「五年ぶりじゃないか?」

俺が推薦するのは織り込み済みだって言うのか?こりゃあいつらますます惨めな姿を見せられないな。

「ちよつと待つて下さい!」

「なんじゃイルカ?」

「火影様、一言言わせて下さい。差し出がましいようですが、先ほど名を挙げられた九名は私の担当でした。確かに皆、才能のある生徒でしたがまだ早過ぎます。もっと場数を踏ませてから受験させるべきで

す」

イルカが生徒思いなのは分かるが、自分の指導が不十分だと言われたようで少し腹が立つ。カカシも少しカチンときたのか珍しく率先して反論する。

「私が中忍になったのはナルトよりも六つも年下の時です」

「ナルトは貴方とは違う!! 貴方はあの子達を潰すつもりですか!!」

しかしカカシの反論はイルカに一刀両断されてしまった。確かに戦時中だった俺達と比べれば経験もレベルも落ちるのは事実だ。しょうがない俺がフォローしてあげよう。

「イルカ先生は俺達の指導が物足りないと? 俺達に見る目がないと? 経験が足りない? 俺の班は通例の十六件の任務をこなしてますよ? 何が問題なんですか? 貴方こそ個人的感情に流されていないと言えますか?」

「……こらヨフネ、そう凄むでない」

三代目に窘められてしまった。どうも断刀を持ってから凄むと今まで以上に恐れられている気がする。やっぱなんかオーラ出しているのかな? 俺はそこまで怒ってないよー無害だよーと微笑むと余計に怖がられた。解せぬ。

「まあまあヨフネ、お前の気持ちは当然としてもイルカ先生の言いたい事も分かる。だがイルカ先生、口出し無用! もうあいつらは貴方の生徒ではない、私の部下です」

イルカ先生もそろそろ子離れしないとね。教員なんだし早く結婚でもして落ち着いちゃいなよ。

一悶着あったが、推薦してからの一週間は新術の調整と体調を整えさせる事に専念させた。今さら焦って修行した所で大した効果はない。既に三人は性質変化を拙いが習得する事が出来ている為、実戦での使い所を考えるだけで良かった。術を昇華させるのは予選を潜り抜けてからでも遅くはない。ただキバに関して早くから性質変化の修行をしていたおかげで例の術がとりあえず使える状態にまでなっていた。

三人が受験会場に到達したのを見届け、俺は久しぶりにカカシとアスマと一緒に試験結果を待つ事にした。分煙なんて文化はこの世界にはまだないが、アカデミーの教職員用に灰皿が設置してある部屋を選ぶ。紅が妊娠してアスマが禁煙中と知ってだが。そわそわしているアスマを尻目にカカシが寛ぎながら呟く。

「ま、でもしかし部下がいなくなってみると暇なもんだね」

「なあにすぐに忙しくなるに決まっているさ」

「なんでさ？」

だからアスマは一々そうもつたいぶるなよ。この面子で格好つけでも忘れられない醜態を晒してるんだぞ？

「今年の第一の試験官はあのイビキだからだよ」

「こりや第一の試験も危ないかな。よりにもよってあのサディストか」

「ヨフネの班は大丈夫だろうけどな」

カカシとアスマが目を合わせて頷いた。お、やっぱり信用されてるな俺。

「担当上忍がドSだからな」

「おいこら、どこがだ！」

「この場所を選んでる事だってそうだろうが!!!」

「まあそうイライラすんなよ。ほら一本やるから吸つとけって」

「ああ、ありがとう……って違うわ！誘惑すんな！」

「いや、俺そっちの趣味はないんで」

「俺もないわボケ！」

あの決闘騒ぎから一時は険悪だった俺とアスマだが、紅と正式に付き合いだしてから諭されたのか、後日もう一度ちゃんと謝りに来ている。あれからもう三年が経つ、さすがにもうわだかまりなくイジリ倒している。

「ってかお前ってタバコ吸ってたのか？」

「いや嫌がらせの為にわざわざ買って来てやっただけだぞ」

「ドSめ！」

アスマは何事においても特徴がないんだ。イジられている時が一

番輝いているぞ。

アスマをイジって待っているとガラスが破られる音が聞こえて来た。どうやら一次試験が終わったようだ。しかしアンコめ、上司がないからって久しぶりに派手にやっているようだ。弁償代はキツチり給料から引かしてもらおう。

騒がしさが過ぎ去った後、それぞれが担当している下忍達が無事合格したとイビキから伝えられた。これで各担当上忍は五日後まで試験結果を待つ他ない。

ただ俺は厄介事が始まる事を知っている為、どうせならと近くで待つ事にした。二次試験会場の「死の森」へ受検者達が入って行ったのを見計らって、団子を食べながらお汁粉を飲むアンコの元へと近寄った。

「お祭り気分は終了だ。窓の修理代にその飲食代、今回の任務経費とは別に引いとくからな」

「げエー！」

無心で団子を食べていたアンコの手が止まった。そもそもお菓子代を経費で落とそうとするなよ。アンコのテンションが急降下する中、一次試験で試験官をやっていた忍が瞬身の術で煙と共に現れた。「ヨフネさん、アンコさん、三体の死体が出ました！すぐに来て貰えますか？どうも妙なんです」

切羽詰まった様子忍にそう告げられ俺達は急いでその現場である林へと向かった。そしてそこにあつたのは顔を盗まれた草隠れの忍三体の遺体だった。

「アンコ、お前も心当たりがあるよな？」

分かっているも聞かなくちゃならない。しかし聞き方がマズかったのか、現場に残っていたイズモとコテツがアンコを怪訝そうに見る。

「はい……大蛇丸です。間違いありません」

しかしアンコは周りのそんな様子など気にも止めず、首元にある呪印を抑えながらそう言った。やはりあの変態は木の葉にやって来た

ようだ。

「急いで火影様にこの事を伝えて！あとこの遺体は別の場所に移しておいてちょうだい。私は死の森に向かう！」

俺はそう言っただけで飛び出して行くとしたアッコの腕を掴み引き止めた。

「なに一人で行くとうしてんだ」

「でもあいつは……大蛇丸は私が食い止めなきゃ！」

アッコは下忍になってからずっと大蛇丸の部下をやっていたせいで長い間里の監視対象にされていた。心無い言葉をかけられた事もあった。そして使い捨てにされたという思いも合わさり居ても立っても居られないのだろう。

「だけどお前一人で行っても大蛇丸はやれないだろうが。何の為に前前の隊が試験官をしている。何の為に獵犬として訓練をしてきた。冷静になれ」

支援を目的とした第四小隊は既に死の森の中央にある塔で待機しているが、他の三小隊はまだ森へは入っていない。今の獵犬の力を測るにはちょうど良い相手だ。

「すみません。すぐに隊員を集めます！」

すぐに信号弾を打ち上げたアッコと共に正面入口へと向かい待機していると隊員達が集まって来た。今回の事を予想してアッコの隊にうちは一族の若手は配属していない。死者を出すつもりはないが万が一という事もある。

「草隠れの受検者が試験外で殺された。犯人は木の葉の伝説の三忍の一人……大蛇丸の可能性が高い」

流石に隊員達の間にとよめき起こる。人望が無かったとはいえ火影候補にもなった忍だ、不安もあるだろう。だが俺は今回の接触で大蛇丸が殺せるとは思っていない。あくまで今の獵犬と大蛇丸の力の差を測り、そこから対策を練る事が出来れば良いと思っただけ。

「無理はしなくていい。あくまで奴の狙いを知る事が最優先だ」

そもそも木の葉崩しはこの時点で予期できるはずなのだ。アッコに大蛇丸を尊敬する気持ちが残っており、その言葉を鵜呑みにした情

報が三代目に伝わった事が悲劇の始まりなのだ。もつとも大蛇丸はそこまで計算しての発言なのかもしれない。

「隊列はアンコを先頭にする。大蛇丸の追跡に関しては最も優れているからな。他の感知タイプは周囲の警戒に全力を注げ」

その他の隊員については攻撃可能距離に応じて隊列を組ませる。第四小隊の小隊長であるアンコと俺を含む十四名で森を疾走し追跡を始める。死の森とは言うものの、流石に俺達なら苦勞せずとも進む事が可能だ。ただチャクラを惑わす植物等も多く自生しており、アンコの呪印が無ければもつと時間はかかったかもしれない。とは言っても既に森は暗闇に支配され始めている。

「前方500m、木の幹に同化して休憩しているようです」

そう言われて目を凝らせば確かに木の幹に同化している大蛇丸がいた。逆立ちの状態で。不気味ではあるが何の意味があるのかさっぱり分からない。

「電磁砲を合図に突撃しろ。感知タイプは常に奴ではなく周囲を警戒するんだ。見失ってしまえばこちらが奇襲される」

全員が黙って頷く。それを確認して俺は腰にさしている雷刀を抜いてカウントダウンを始める。

「……5. 4. 3. 2. 1. 開始だ」

――雷遁・超電磁砲

暗くなり始めた森を一筋の光が走り、弾は瞬時に大蛇丸を貫いた。しかし大蛇丸の体は泥に代わりドロドロに崩れた。第一小隊は大蛇丸を見失ってしまう。

(下かつ！)

しかし感知タイプのシグナルで大蛇丸が実際には俺の目の前にある太い木の枝に移動していた事が分かり、雷刀を納め今度は断刀を手を取った。そしてただ思い切り振り下ろす。断刀は普通の木の幹よりも太い枝を切り落とし地面を抉る。

大蛇丸はこれも躲し俺に舌を伸ばし攻撃してくる。しかしアンコを含めた第二小隊が舌を弾き、尚且つ大蛇丸へと忍具で攻撃する。

大蛇丸はそれを飛び上がる事で避けてから印を結んだ。

「風遁・大突破！」

(土遁・土流壁！)

第三小隊の二人が同時に壁を作り出し俺達を風遁から守ってくれる。そして一旦距離が離れる。

「師匠に対して随分な挨拶じゃない、アンコ」

受験票で見た顔写真の顔をメリメリと剥いだ大蛇丸がようやく素顔を見せた。どこまでも不気味な人である。

「あんたは……全てをあんたに教わった私がここで殺す！」

激昂しやすいアンコのチャクラが大蛇丸を見た途端、急激に高まっていく。そんなアンコの肩に手を置いて押しとどめて、今度は俺が質問をする。

「お前はS級の指名手配犯だ。見つけ次第、俺達はあると殺し合わなきゃいけないんでね。でも分からないのは今まで尻尾すら掴ませなかったあんたが、何故このタイミングで木の葉に現れたのかわかって事だ」

そう言つて頭を掻くフリをしながら、第三小隊に対しいつでも攻撃出来るように指示を出す。

「ふふふ、そうね。ちよつと欲しい物があつてね、唾を付けに来たのよ。ついさつきアンコ、貴女と同じ物をその子にあげてきたわ」

「誰だか知らないけど、間違いなく死ぬわよ、その子」

やはり既に七班とは接触したようだ。今頃はサクラが一人で二人を看病しているのだろう。

「目的を果たしたなら里から出て行ってもらおうか。あんたが目星を付けた下忍なら血継限界を持った優秀な下忍……日向ネジは優秀だが鳥の籠の呪印がある。となると残りはうちはサスケぐらいだろう」俺がこう言つても大蛇丸は相変わらず気持ち悪い笑みを浮かべたままである。しかしそれに構うことなく続ける。

「うちはサスケはこちらで拘束し、中忍試験もここで中止とさせてもらおうか」

「あら、それは困るわ」

俺がそこまで言うとうとうやく大蛇丸も口を開いた。

「今回の中忍試験には私が作り上げた音隠れの里もお世話になっているの。楽しみを奪うような事をすれば木の葉は終わりだと思いなさい」

既に木の葉崩しを計画しているくせにぬけぬけとよく言う。しかしこれで目的がサスケだけでない事をはっきりさせる事が出来た。奴が部下を思っただこまでする筈は無いのだから。とりあえず聞きたい事が聞けたので、第三小隊に対し合図を出す。

――風火龍演雷！

火遁・龍火の術を風遁、それに雷遁を合わせた混合忍術だ。通常複数人でやる場合には相手に合わせるだけの技量と連携が必要となり、三種類以上の性質変化を合わせるとその難しさから机上の空論と呼ばれるほどである。これを可能としたのは日々の鍛錬の賜物である。

「猟犬の噂は聞いていたけど、これほどの物とはね……」

避ける事が叶わない程の広範囲に影響があり俺ならば間違いなく死ぬ術だが、龍が当たった跡から大蛇丸は姿を現した。どうやら口寄せした大蛇に隠れてやり過ぎたようだ。しかし流石に無傷とはいかなかったようだ。

「貴様は……貴様は誰だ?!」

大蛇丸の顔が更に剥がれ、少女の様な顔が見えているのだ。アンコは首元から感じるチャクラの気配と目の前の人物が一致せず戸惑いの声をあげる。

「あら貴女がよく知っている大蛇丸よ。酷いわねアンコ、忘れちゃったのかしら」

「まさか体を乗り換え……あの術、不屍転生の術を完成させたのか?!」

驚いているアンコには悪いが攻撃の手を緩める必要はない。俺は断刀を構えて大蛇丸へと肉薄し斬りつける。

「死神はせっかちなようね」

斬りつけた大蛇丸は泥分身だったようで、すぐに形を崩していった。流石に分身の術スピードは早いけど、こちらとてその程度は予測済みである。

——電磁砲三連！

感知タイプから指示された三箇所に対し、すぐさま風遁を纏わせた電磁砲を放つ。二つはドロドロとなったが、一体は肩から血を流した。それを見て第一小隊が攻撃を仕掛ける。

「どうやら甘く見ていたのは私の方だったみたいね。やりにくいっただらないわね」

そう言う大蛇丸のチャクラが練られるのを感じた一人が一旦離れるように指示を出す。そして大蛇丸の水遁から守るように第三小隊が土流壁をまた作り出した。

術が衝突し終わると同時に、今度は第二小隊が背後から奇襲を仕掛ける。術の発動までが早くとも印を結ぶ隙さえ与えなければ良いだけである。その奇襲は防がれたが、間を空けないようにすかさず遠距離攻撃も仕掛ける。

「優秀な指揮官によく訓練された部下。決して深追いはせずに間断ない攻撃を仕掛ける。理想的な軍隊ね」

「そりやどうも。どうせならそのまま死んでくれませんか？」

「随分と偉そうになったわね。昔は私から逃げ回っていたっていうのに」

それでも決定打とはならず、こうして距離をとられてしまった。中忍主体のこのメンバーだと負けない戦いは出来ても勝つ事は難しそうである。だが絶対に倒せない相手でもない。

「相変わらず一人なら逃げてますよ。でも今は仲間がいるんでね」

俺は大技に対しての防御方法をほとんど持っていない。仲間がいるからこそ自ら戦う事が出来る。だがここは大蛇丸を見逃すしかないさそうだ。

狙いは原作と変わらずサスケという事は分かった。おそらく抜け忍でリスクの少ないイタチを狙ったが返り討ちにでもあったのだろう。そのイタチを上回るには弟であるサスケの体に乗換える事にしたといったところか。

「これ以上長引くとますます不利になるわね。ここは一旦退かせてもらおうよ」

やはり悔しいが最低限の目的は達成したので、全員に動かないように指示する。だが納得出来ない者もいた。

「こいつを今ここで殺さなくては木の葉にとって災いとなります！私が命に代えても仕留めてみせる！」

アンコは今にも飛び出さんとする勢いだ。

「アンコ、貴女は邪魔よ」

そう言つて大蛇丸は片手で印を結ぶ。そうするとアンコがいきなり首筋を抑えて蹲つてしまう。

「アンコ隊長！」

「さてくれぐれも邪魔はしないでちようだいね」

そう言つると大蛇丸は姿を消した。

「一先ずゴール地点の塔へと向かうぞ。第二小隊はこの事を三代目に早く伝えるんだ」

「はっ！」

「なに大蛇丸じゃと!？」

ゴール地点となつている塔で俺達は、大蛇丸と会う事になった経緯を説明した。思わず声をあげた三代目だけでなく、集まった猟犬の隊員達が驚くのもしょうがない。大蛇丸が現れた時点で里には厳戒体制がひかれる事になっているからだ。

「しかし何故このタイミングで現れたのでしょうか？」

「目的はうちはサスケだ」

現場にいなかった忍の疑問に対し簡潔に答えてやる。

「大蛇丸は不老不死の研究をついに完成させたようです。アニコが言うには不屍転生という術らしく、簡単に言えば他人の身体に乗り換える術のようです」

「なんと……」

常人ではとても思いつかない発想なのは間違いない。聞いている忍達も啞然としている。

「多分ですけど、その新たな器としてうちはサスケを狙ったんだと思います。国内から出る機会の少ない下忍を狙うには絶好のタイミングですからね」

中忍試験の時期は警備が強化されているようで、実は最も手薄になつている。他里の人間も許可証さえ持っていれば簡単かつ合法的に入る事が出来るのだから致し方ない。

「もう一つ重要な事があります。音隠れの里長は大蛇丸のようです」

「火影様、すぐに中忍試験を中止にしましょう！」

俺の発言を聞いてお付きの暗部が進言する。だがそれは少し待つてもらおう。

「大蛇丸は試験を中止にすればすぐに木の葉に牙を剥くと宣言して消えて行った。サスケは暗部に見張らせて、警備の強化と音の背後関係を探るのが先だ」

俺としてはここで木の葉崩しが中断されてしまえば、いつ来るかも

分からない襲撃を警戒し続けないといけないため、それは避けたい。「うむヨフネの言う通り、今まで何処におるとも分からなかった大蛇丸が現れたのじゃ、ある意味好機であろう」

「火影様がそう仰るのであれば……」

「うちはサスケの警備と音の監視は元は儂の直轄暗部にいた忍にやらせよう」

ダンゾウが幽閉された事により根は解体され、全ての暗部は火影の元へ一括されている。ただ以前とやり方が変わったかは定かではないが、身寄りの無い子供を中心に暗部のエリート教育は継続されている。ちなみに猟犬を使って調べて見たがサイの存在は確認済みだ。あとは引き抜くタイミングだけなんだが、中々機会がなく現状ではなんの手も打てていない。

「二次試験が終了するまでの五日間、暗部は音の受験者とその上忍の身元調査を任せる」

「はっー」

その後も幾つか打ち合わせをし、そろそろ解散かという頃に二次試験官の一人がおずおずと手を挙げた。

「あの、一つだけ宜しいですか。実は既に二班ほど合格者が出ています」

「ほう」

「確か最速合格が七時間だったわよね？なら既に合格者が出て不思議ではないでしょう」

アニコは流石に自分が試験官をやっているからか細かい記録まで覚えていたようだ。

「はい、でも今回はそれを大きく上回っています。まずは一班目、ヨフネ隊長の担当下忍三人です。時間は……およそ一時間です」

間違いない合格するとは思っていたが、まさかそこまでやれるとは思ってもみなかった。映像を見る限り、相当飛ばしたのかかなり汚れてしまっている。

「次は約一時間半で砂の班が合格しているんですが、彼をよく見て下さい」

「無傷だと……」

我愛羅はやはり無傷で切り抜けたようだ。時間にしたって彼等が寄り道せずに本気で挑めば、俺の班よりも早かっただろう。

「ま、でも上出来かな」

「お主はハードルが高すぎるの」

俺達が警戒を強めつつ調査を行っていると五日はあつという間だったが、その間には原作通りに多くの通過者が出ていた。そのため、アンの進行で、集められた合格者に今から説明が行われる。

「まずは、2次試験の通過おめでとう。これから火影様よりお話しがある。各自、心して聞くように！では火影様お願いします」
「うむ」

三代目は鷹揚に頷くと、この中忍試験の目的について説明を始めた。その目的に対して、受験者からは、始め困惑の表情が出ていたが、内容を説明していくうちに理解できたのか、表情を変えていく。

「これは己の夢と里の威信を懸けた、命懸けの戦いなのだ」

「納得いったってばよ」

「何だっついい。それより早くその命懸けの試験ってヤツの内容を聞かせろ」

「……ふむ、では3次試験について説明しよう」

三代目がそこまで言ったところで、ハヤテが上忍達の並ぶ列から前に出た。

「ここからは審判を仰せつかった、この月光ハヤテから、説明を行わせていただきます」

火影が頷くのを確認してから、ハヤテはアンのボードを受け取り、受験者たちへと振り返ると、全員を見回したうえで説明を始める。「えー皆さんには3次試験の前にやってもらいたいことがあるんですね。1次試験と2次試験が甘かったせい、少々人数が残り過ぎてしまいました。中忍試験規定に則り、3次試験の本選出場をかけた予選を行います」

「予選ってどういうことだったばよ！」

「先ほど火影様のお話にもあったように本選には、各国の大名を始めとした多くのゲストの方が来られます。そのため、見苦しい試合を見せるわけにはいきませんので、これからすぐに予選を行います。体調のすぐれない方、他にもやめておきたいと思う方は今すぐ申し出てください」

「そんな奴いるわけねーだろ」

「……いませんか？」

受験生がハヤテの言葉に対して声を上げるが、ハヤテは気にせず、辞退者の確認を行う。そんな中、一人の忍が手を挙げた、カブトである。

「あの、僕はやめときます」

「……!!」

「えっ!?カブトさん……?」

知っている俺からすれば白々しい限りだが、木の葉の受験生達は衝撃を受けているようだ。しばしの静寂の後、ハヤテは咳き込みながら進めていく。

「えー木の葉の薬師カブトくんですね。はい、下がっていいですよ」

ハヤテはボードへと書き込むと、思い出したように説明を付け加える。

「すみません、言い忘れていましたが、ここからは個人戦です。1人がやめたからと言ってチームに影響は出ませんので、自分自身の判断で自由に申し出てください。他に辞退者はいませんか？」

ハヤテが待っている間、呪印が反応したサスケに対して辞退させるよう進言したアノコだったが、三代目がいざとなったら止めに入ると条件をつけたことで静かに返事を返し了承した。

「では、これより始めます。この3次試験は一对一の個人戦、つまり実戦形式の対戦となります。丁度20名となったので、合計10回戦行い、その勝者が中忍試験の本選に進出できます。ルールは一切無しです。どちらか一方が死ぬか倒れるか、あるいは負けを認めるまで闘ってもらいます。死にたくなければすぐに負けを認めてくださいね」

ハヤテの言葉に、ナルトたちは息を呑み真剣な表情で聞き入っている。ハヤテは意外と役者だな。

「ただし、勝負がはつきりついたと判断した場合などは、無暗に死体を増やしたくないので、止めに入ったりなんかします。説明は以上です」

ハヤテの言葉で、俺達の背後にある壁の一部が動きだし、そこに電光掲示板が現れた。

「この電光掲示板に対戦者の名前が表示されます。名前が表示された方はそのままここに留まり、それ以外の方は上に移動してください。ではさっそくですが、1回戦の対戦者を発表しますね」

ハヤテが言い終えて少ししてから電光掲示板に文字が映し出される。

『ウチハ・サスケ VS アカドウ・ヨロイ』

「では、掲示板に示された2名はそのまま留まり、他の方は移動してください」

ハヤテに促され、ようやく俺はバルコニー部分へと上がりようやく大蛇丸から離れられた。もう正体がバレていると知っているからなのか、元々の姿と大差ない変化の術で堂々と担当上忍の列へと並んでやがった。

ちなみに今サスケと対峙しているのは音のスパイでもある忍だ。口から下を布で覆い、さらには目に貼り付けるようなサングラスをしており見るからに怪しい。確かあいつはチャクラを相手の吸い取る事が出来る体質だったはずだ。羨ましい。

「それでは第一試合、うちはサスケ対赤胴ヨロイの試合を始めます」

ハヤテが合図を出した途端にサスケは首筋を押さえる。感情の高ぶりと共にチャクラを無意識に練ってしまい呪印が反応したのだろう。しかし、この結果が分かっている試合よりも気になる事があった。

サスケはイタチの凶行を直接目にした訳ではないし、一族も全滅はしていないので、おそらくだが原作よりはイタチを憎んではないと思っている。そのサスケを誘う為に大蛇丸は果たしてなんと言った

のだろうか。

手を組んで心配しているサクラのもとへ近寄った。

「そう心配するな。大蛇丸がかけた術はすぐに死ぬような物じゃない」

「ヨフネ先生知ってたんですか?!」

「まあ色々ね。そこで大事な事なんだけど大蛇丸はサスケになんて言ってた?」

何の事やらさっぱり分かっていないナルトは放っておいて、安堵の表情を見せたサクラに俺は肝心の質問を投げかけた。

「少し離れていたんで全部が聞き取れたわけではないんですけど『貴方はイタチよりも弱い』とか何とか。あ、あとは痣の事を私の所へ来る為のプレゼントとか言ってたような」

どうやら大蛇丸は大した事は言っていなかったようだ。大蛇丸はあの事件の真相など知る由もないだろう。

「あの……ヨフネ先生?」

「ん?ああ、すまない少し考えてただけだ」

「ところでイタチって誰なんです?」

「うーん、その質問は俺が答えるわけにはいかないかな。サスケ本人かカカシにでも聞くんだな」

当然気になるだろうがプライベートな事だし、何より面倒だから隣にいたカカシに丸投げしてやる事にした。サクラはやられたという顔をしているカカシの方へとキツと視線を向ける。

「まあなんだ、また今度な」

「……もう、分かりましたよ。あ、そういえばナルトも大蛇丸に何かされたんだと思います。あれだけタフなのに簡単に気絶しちゃったから」

「何だと?!」

俺はそういや五行封印されてたんだったな程度にしか思わなかったが、カカシの方はかなり驚いている。それもそのはずで人柱力に変な事をされてたら、下手をすれば里が壊滅してしまう。ましてや相手はあの大蛇丸だ。放置しておくには危険過ぎると考えたのだろう、カ

カシは少し離れた所まで俺を引っ張った。

「サスケの試合が終わったら俺は呪印を封印するから、お前はナルトを調べて見てくれ」

「短時間で何か出来るとも思えないけどな」

「お前らしくもない。何をそんな悠長な事を言ってるんだ。何か起こってからだと遅い。この場で火影様の次に術に詳しいのはお前だろ」

「……分かったよ。調べてみる」

そう答えると、丁度サスケがヨロイを蹴りあげていたところだった。上空へと蹴り上げられたヨロイに対して、連続で蹴りを放つていく。最初の蹴りは防がれたが、続く蹴りに反応できず顔面に喰らい、そこへサスケが追撃で腹部へと殴ることで地面への落下速度を加速させ、地面へと到着すると同時に、地面と挟むようにして胸へと蹴りを放った。

しかし、蹴りを放った後のことを考えていなかったのだろう。サスケも攻撃後に蹴りの反動で、その場から弾け飛ばされていたが、息を荒くしながらも、ゆっくりと立ち上がり、ハヤテによって勝利者宣言が成される。

カカシは終わるや否やサスケの元へと移動していた。俺は大蛇丸が現れる前にさっさと解印をしておもう。

「ナルト、ちよっとお前も一緒に来い」

「何だつてばよ？俺つてば試合まだなんだぞ」

「第二試合はザク・アブミ対油女シノです。両者は降りて来て下さい」
タイミング良くハヤテが次の対戦を全員に伝える。ザクとか言う下忍は両手からチャクラで空気を作り出すという、これまた便利な術を持っていたはずだ。それでもシノには悪いが、試合は見なくても余裕で勝てるだろう。

「お前の試合じゃないから良いだろ。すぐに終わらせるさ」

「分かったつてばよ」

ナルトを納得させ、試験会場から少し離れた一室に連れて行く。既

にカカシはサスケを座らせて術式の構築を初めていた。

「なあヨフネの兄ちゃん、何だつてサスケもいるんだつてばよ？」

「お前も大蛇丸に会ったんだろう？サスケは奴に術を掛けられたからカカシが術を封印しようとしてんのさ」

「え!!あの蛇野郎か？」

「まあちよつとややこしい奴だな、お前もあいつに何かされてないか見てやるために連れて来たんだ。とりあえず上着を脱いで全力でチャクラを練ってみろ」

「何か分かんないけど分かったつてばよ」

ナルトがチャクラを練ると八卦封印とそれを覆う様に五行封印も浮き上がって来た。八卦封印は四象封印を二重にかけた非常に強力な封印だが、ナルトの成長に合わせて引き出す事の出来る九尾のチャクラも増加するように組まれているようだ。しかし、偶数の封印式の上から奇数の五行封印をしているため、本来ならチャクラを思い通りに練れないはずだ。元々多くのチャクラを持っているナルトだからこそ、なんとか戦えているのだろう。やっぱり腹が立つな。

「あーあ、お前……このままじゃ死ぬぞ？」

「な、ナンダッテリーー！」

「まあ、幸い俺なら助けてやることもできるがな」

「先にそれを言ってくれつてばよ。ヨフネの兄ちゃん早く助けてくれつてばよ!!」

「分かった分かった。そのままリラックスして全力でチャクラを練つてろよ」

ナルトはさきほどよりも必死にチャクラを練り始めた。俺は五指にチャクラを込め、それを何の警戒もしていないナルトの腹へ打ち込んだ。

「……五行解印！」

「ゴホッ！……な、何すんだつてばよ！」

衝撃で思わず身体をくの字に曲げたナルトが恨めしそうな顔で文句を言ってきた。

「まあまあ、大蛇丸の術を解いてやっただけだつて」

「でも何にも変わって無いってばよ？」

チャクラが練りにくくなつてたのに、その鈍感さが凄いや。

「ま、とりあえず治してやったから会場に戻って休んでろ。いつ呼ばれるかも分かんないぞ」

「うー、大人は勝手だつてばよ」

そう言いつつ上着を拾ったナルトはさすがにごごと会場へと戻って行った。そしてどうやらカカシも準備が整ったようだ。

ー封邪法印!!

床に描かれた文字が生き物のように床を這い、肩にある呪印へと集まって行く。かなりの苦痛が伴うはずだが、サスケは身動きせず耐えている。

しかし、封印が呪印を取り囲んだ瞬間、サスケは床へと倒れ込んでしまった。そして、封印に集中していたカカシは気付かなかったようだが、招かれざる客が現れてしまった。

「あら二人ともそんな術が使えるようになったなんて、成長したわね」

「あんた！」

「お久しぶりね、カカシ君」

「……大蛇丸」

声をかけられてから気付いたカカシが咄嗟にサスケを守るように

大蛇丸の前に立ち塞がった。

「君達に用はないのよ。あるのはその後ろの子」

「なぜサスケを付け狙う」

「君は良いわよね、もう手に入れたんだから」

「なに？」

「昔は持つてなかったじゃない、それ。その左目の写輪眼」

大蛇丸の目的はやはり写輪眼か。しかし、なんだつてサスケのに拘るんだ？この世界ではほかに生き残りがいるというのに。

「私は欲しいのよ。優秀なうちの力がね」

何も言っていないのにご丁寧に教えてくれた。なんだつて悪役はこうもおしやべりなのか。せっかくなんで追求させてもらうけどな。

「なるほど……お前の新たな器に耐えられるだけの優秀なうちを求

「どういうことだ?」

「全く、今までは俺が言ったって聞かなかったくせに……写輪眼にはその上があるんだ。お前なら使えるだろ。今度シスイにでも教えてもらえ」

それから、下忍たちに気取られないようにカカシと二人で会場に戻ると既にシノの第二試合は終わっていた。シノは俺が今戻ってきたのを見て不機嫌そうだった。

「すまんすまん、でも勝ったんだろ? 信頼の証だよ」

「無傷で勝った」

「そうか」

「一撃も喰らわなかった」

「……そうか」

「幻術も成功した」

「褒めて欲しいのか?」

「……別にそういうわけではない」

シノは顔を背けながらそう言うが……男のツンデレなんて誰が得するんだよ。

戻ってきてからも、何事もなかったかのように試合は続いた。第三試合は剣ミスミ対カンクロウとなった。ミスミとかいうやつは、関節を自由に外して軟体化できるといふ術を使うが、あまりにも活用方法がない。結果として、カンクロウのカラクリにあっけなくやられてしまった。

第四試合は春野サクラ対山中いのとくノ一同士の戦いとなった。お互いに根性は見せたが、決定的な術を持たない二人の試合は、酷い泥試合となった。山中一族は他人の援護があつて初めて活躍できる技が多い。同時にノックダウンしたが、あまりにも見所のない試合となった。

第五試合はテンテン対テマリとまたしてもくノ一同士の戦いになった。しかし、二人とも前の試合に比べるとかなりの使い手である。テンテンは時空間忍術の才能はあるが相性が最悪だ。やはり砂の三人は下忍の中で圧倒的に強いようだ。

第六試合は奈良シカマル対キンとなった。シカマルは頭脳プレイによって、敵を倒したが贅沢を言えばもつと決断を早くすべきだ。だが下忍という点を加味すれば猟犬として頑張ってもらいたい人材だ。

そして、次の戦いが電光掲示板に表示される。

『イヌヅカ・キバ VS ウズマキ・ナルト』

「うっひよおおラツキー！」

「こら油断するなよ」

「はいはい、分かっていますよ」

格下と見ているナルトとの組み合わせが発表されると、キバが思わず喜びの声を上げた。原作では負けてしまうし、念を押しておこう。

「もう一度言う、油断するな」

「お、おう」

俺の圧力に負けるように返事をする、キバは赤丸と共に飛び降りていった。

「おいキバ！子犬なんかここに連れてくんない！試合の邪魔だつてばよ！」

「バカヤロー、赤丸も一緒にやんだよ」

それを聞いたナルトが審判に抗議するが、動物や虫は忍具と同じ扱いであるため、当然抗議は認められなかった。

「それでは第七試合、始め！」

試合開始早々、キバと赤丸は獣人分身を行い、さらに煙玉を使って匂いを頼りに攻撃を仕掛けた。そのため、ナルトは煙の中で防戦一方である。自分に有利な条件を整える、俺が叩き込んだ鉄則の一つだ。

しかし、成長したのはキバだけでは無いらしい。

煙が晴れるとキバが三人になって現れた。隙を突こうとナルトが変化したのだ。だが、そんなことで騙される俺の部下ではない。キバ

は匂いで判別して、すぐに殴り飛ばした。

それ以上にナルトも考えたようだ。殴り飛ばされた瞬間に赤丸に変化することで混乱させるつもりらしい。

「騙されるかよ、馬鹿」

キバはそう言うのと立っているもう一人のキバに対してハンドサインを出した。

——目標 ヲ 追撃 セヨ

すると二人が同時に倒れている赤丸に対して攻撃を仕掛ける。もし、立っているのがナルトであれば出遅れてしまうだろう。その時は引き返して隣にいる敵に仕掛けるだけだ。もし倒れている赤丸がナルトであった場合、遠慮することなく攻撃すれば良いだけである。

「うえ?!ちよ、ちよつと待っててばよ!」

やはり倒れていたのはナルトであった。躊躇なく迫り来るキバと赤丸に驚いたのか、変化を解いて攻撃を回避する。しかし、初撃を避けられたからといって逃がすキバではない。赤丸とのコンビネーションで徐々に追い詰めていく。

すると覚悟を決めたのか逃げていたナルトがキバ達に向かいあつた。

「ここで負けるわけにはいかねえってばよ!」

そう言つて影分身の印を結んだナルトから九尾チャクラが漏れ出し始める。

「何をやってたってお前の負けだナルト!」

そう言つてキバが殴りかかるも、ナルトもただでは転ばない。殴られながらもキバの腹部を蹴り飛ばした。キバは攻撃を予測したのだろう、蹴られながらも自分で後ろに飛んで威力を殺しているが、その顔には中々倒せないナルトへの苛立ちが現れていた。

ナルトは何とも泥臭く、九尾の再生力と内包する膨大なチャクラによる体力を活かした戦いをしている。そして戦いの中でさらに九尾のチャクラが溢れ出し始め、腰に下げた竹筒の中でコン平が震えるのがわかった。

「くうーん」

「赤丸分かってるよ。急になんか匂いが変わりやがった」

キバと赤丸も何か感じる物があつたのだろう、顔つきがさらに険しくなる。

「確かにお前は成長したかもしれない。だけどな、俺だって、俺だって毎日死ぬ思いしながら成長させられてんだよ!」

おいなんてこと言うんだ、周りの担当上忍からの視線が痛い。

そんな俺の心境は知らないキバが印を結ぶと岩が両腕に纏わり付くように現れ、次第に凶悪な手を形成していった。その手は巨大なだけでなく爪が異様に発達し、手の甲からこれまた50センチにもなる巨大な角を生やしている。

俺との修行でキバが習得した新たな術

——土遁・爪突爪!

「な、なんだってばよ、それ」

「これが俺の修行成果だ。行くぜ、せめて死ぬなよ」

キバはそう言うと言と形成された腕で地面を叩くことで、その勢いを利出しナルトへと回転しながら突っ込んで行った。

「つくそ!」

キバの振るった腕を必死に避けようとしたナルトだが角の部分に当たってしまう。四脚の術で四肢にチャクラを集中させているキバの攻撃力はさらに高くなっており、結果ナルトは壁に打ち付けられた。

「へっ俺を舐めるからだ」

そう言つて得意げにするキバの様子に感化されたのか、試験官であるハヤテがナルトへと近付く。

「まだ、やれますか?」

「もう無理だつて。ただでさえポロポロだつたんだぜ?」

「勝手に決めんなつてばよ。俺は……ぜつてえ諦めねえ。ここで負けてたら火影になんてなれるもんか。一度口にした事は絶対に曲げない。それが俺の忍道だ!」

そう叫びながら、ナルトは再び立ち上がった。

俺はその姿を見ながら、かつて見たボクシングの漫画を思い出す。

「何だいヨフネさんよ」

「ひよつとして俺つてば解印でナルトを手助けしちやった？」

「ありがとね」

ナルトとの試合で傷ついたキバが、足元のおぼつかない状態でなんとか自力で2階に上がろうとしていた。

——しようがないから、肩を貸してやるか。

ナルトの最後の一撃には無意識だと思いがチャクラがしっかりと乗っていた。あれを喰らったならダメージは相当深いはずだが、キバも修行で少しは打たれ強くなったということかな？

そう思いながら俺が近づくとキバは怯んだ様子を見せた。

——おいおい、いくらなんでもこんな状態のやつには俺だって優しくするっての

そんな思いとは裏腹にキバは覚悟を決めた顔で俺に言い放つ。

「先生の言いたいことはわかってる」

「？」

「俺はまだまだ弱い」

「？」

「訓練を増やすっていうんだろう？望むところだぜ。俺はまだまだ強くなりたくない」

「……わかった。俺が強くしてやる」

慰めてやろうとは思っていたが、自分からやりたいというならそうしてあげよう、うん。それにキバにナルトを助けたことなんてバレないだろうし。

俺が気持ち丁寧に肩を貸して2階まで連れて行くと、ヒナタとシノが駆け寄って来た。

「キバくん……」

「へっ……ヒナタは人の心配よりそろそろ自分の心配しろよ。残るは……お前とチョウジ、ネジ、リー、音の一人に砂のヤローのたった6人だ。いいかヒナタ……」

「なに、キバくん？」

「お前も気づいてるだろうけど、あの砂の眉無しはヤバイ。匂いが違

い過ぎる。あいつと当たった時は……棄権しろ」

キバ達は我愛羅を見ていないはずだが、その異常さには気付けたようだ。

「それ以外のやつなら、お前だったら勝てるさ。純粹な試合形式なら俺らの班で……いや下忍の中でお前は間違いなくトップクラスだからな」

「お前こそ負けて偉そうに人の心配してんじやないよ」

「う……先生そりやないぜ」

項垂れるキバを見て少し場が和み、俺がキバの応急手当を済ませたところで次の対戦が発表される。

『第八試合 日向ヒナタ VS 日向ネジ』

これを見た火影を含め木の葉の上忍達は「皮肉な組み合わせ」と思ったに違いない。天才と呼ばれる日向の分家の子、片や落ちこぼれと思われる日向の本家の子の戦い。勝敗まで予想できてしまうから仕方ないのかもしれない。

だが、俺からすればヒナタを精神的に成長させられるチャンスだ。ここで勝って自信をつけさせてもらおう。

「ヒナタ、分かっていると思うけど負けることは許さないぞ」

「……はい」

流星に動揺を隠せないって感じだな。こちらを下に見ているネジなら、余裕で倒せるだろうに。

「ハッハッハ！まさか本気でネジに勝てると思っているのか、ヨフネよ」

「黙れ珍獣」

俺たちのやりとりを見ていたのだろう、ガイがウザいほど胸を張りながら割り込んで来やがった。その無駄に暑苦しい胸板を見せてくんな。

「む、いつも以上に辛辣だな」

「ネジが天才だからだとか言い出したら張り飛ばすぞ。才能の優劣なんて所詮人が決めることに過ぎない。それを覆せるのが努力だろう

が

「そう！だからこそ、この俺と熱い修行を繰り広げてきたネジの勝利に揺らぎなどない！」

良くも悪くも変わらんないつは。だが、ここは利用させてもらおう。

「なるほどね。ということはヒナタが負けたら修行が足りないってことかな？」

「う、うむ！そういうことになる！……のか？」

「分かったな、ヒナタ？」

「はいい！」

「よし行け！」

ヒナタは逃げるように会場へと降りて行った。よし、これで少しはやる気になっただろう。

「あのヒナタの様子……お前はどんな修行をさせていたんだ？」

どんな修行と言われても困る。基礎体力の強化と術の修行だから特別なことはしていない……はずだ。

「そうだな。適切な運動と」

「適切？生きているのが不思議だったんだが？」

「何回呼吸が止まったんだろうな……」

「効率的な修行法に」

「確かに効率が良いだろうぜ」

「ああ24時間が修行だったのだから」

「ある程度の緊張感」

「ある程度？常に死と隣り合わせなの？」

「人って頑丈だったんだな」

「そして栄養価の高い食事」

「栄養価と引き換えに味、食感、匂い全てを犠牲にしていたがな」

「あの料理は調理じゃなくて調合のレベルだよな」

……シノとキバ、黙ってくれ。

会場では、既に両者が対峙していた。

「まさか貴方とやり合うことになるとはね……ヒナタ様」

「……ネジ兄さん」

「試合を始める前にヒナタ様に忠告しておく。貴方は忍びに向いていない。棄権しろ！」

ネジがいきなり本家に対する不遜な物言いをするものだから、思わず木の葉の上忍はざわめいた。

「貴方は優しすぎる。調和を望み、葛藤を避け他人の考えに合わせることに抵抗がない。おそらくこの中忍試験だって他の二人に押し切られたんだろう」

ヒナタは言葉を受け止めないように目を閉じ、落ち着いて聞いていた。しかし、黙って聞いていられない奴が2階にいた。キバだ。

「なに好き勝手言っちゃがんだ！そこにいるのはもうお前が知ってるヒナタじゃねえぞ！ヒナタも何か言い返せ！」

「外野は黙ってる！」

「……キバ君ありがとう。ネジ兄さん……確かに私は流されるままに生きてきた。でもそんな自分を変えたくて私は自分からこの試験を望んだんです！」

目を閉じていたヒナタがネジを睨み返すように宣言した。しかし、どうやらネジには届かないようだ。

「ヒナタ様……貴方はやはり宗家の甘ちゃんだ。人は決して変わることもできない。落ちこぼれは所詮落ちこぼれだ……その性格も力も変わりはない。人は平等ではない。生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な身体を持つ者。生まれも育ちも才能も、人間はみんな違っていい」

「……この皇帝だお前。」

「変えようのない要素によって人は差別し差別され、分相応にその中で苦しみ生きる。俺が分家で、貴方が宗家の人間であることは変えようがないように！ただ生まれが違うだけで、分家というだけで忌々しい呪印を刻まれたというのに！貴方は恵まれた環境に甘えのうのと生きている。貴方には……貴様にだけは簡単に自分を変えること

ができるだなんてことを言う資格はない！」

一部同意できるところはあるけどさ……ネジ、話が長いって。どんだけ溜まってたんだよ？この世界では俺がヒナタの誘拐を事前に阻止したから、ネジの父親であるヒザシさんは生きてるっていうのに。

だからこそ、それほど激しい憎しみは抱えていないと思っていたんだけど、どうやら日向の宗家と分家の対立はそれほど根深いものがあるようだ。

ネジの場合は父親の死がその感情を増幅させたのだろうが、呪印が刻まれている以上、割り切れる問題ではないのだろう。

「ヒナタ様、いくらヨフネ様のところで学んだところで……自分を変えらるなんてこと絶対に出来」

「出来る!!」

ここまで我慢していたんだろうが、ナルトが唐突にキレた。同じように、しがらみの中で生きていくしかなかったナルトとこうも対照的になるのは面白いな。

「天才だかなんだか知らねえが、お前が人のこと勝手に決めつけんなバーーーーーカ！そんな奴やってやれヒナタ！」

「ナルト君……」

「ヒナタ！キバの言う通りちよつとは言い返せつてばよ！見てるこつちが腹立つぞ！」

ナルトの言葉を聞いて決心したようだ。今は真っ直ぐにネジを見据えている。

「ヒナタ様、俺は別に貴方が悪いと言っているんじゃない。もう苦しむ必要はないから棄権して楽になれと言っているんだ。貴方は決して俺には勝てない」

「苦しむ？それは違うわ、ネジ兄さん。だって私には見えるもの。私なんかよりずっと日向という籠の中で迷い苦しんでいるのは貴方の方。確かに私とネジ兄さんは違う。私が使う術もすでに日向のものとも違います。だから油断しないでください。死んでしまうので」

「……いいだろう」

そして二人は同じ構えをとり、空気を読んでいたハヤテが合図を出す。

始めっ！

――八門遁甲の第一門 開

日向の柔拳は強いが、ヒナタの性格を考えれば相性が悪い。その戦い方とは、白眼によってチャクラの流れを見ることができると、恐ろしくうまい防御を活かすのが第一だ。そこから相手の攻撃をいなしつつ、カウンターの機会を狙うというのが基本的な戦い方だ。

一見すると相性が良いように見えるかもしれないが、訓練をつけてみてそれが間違いだと気づかされた。相手の攻撃を捌くにつれ、手数が増えれば増えるほど考える時間が生まれ、優柔不断なヒナタには迷いが生まれてしまう。

ならばどうするか、俺が出した答えは単純、柔拳と剛拳を合わせた一撃必殺による戦闘だ。

試合開始と同時にヒナタは一足飛びでネジに迫り、その拳を振るつた。

ネジはヒナタの拳を日向流体術の基本通りにいなそうとする。しかし、ヒナタは八門遁甲の第一門だけだが解放した状態で、さらにチャクラによる身体強化を行っている。いなそうとした手を無視して、ヒナタの掌底が振り下ろされる。その一撃は確実にネジに直撃し大地をも砕いた。

そして叩きつけた瞬間にヒナタの拳からチャクラが放たれ、ネジの経絡系にダメージを残す。ヒナタの家庭訪問をした際に俺が見せた技の改良だ。身体強化にはまだまだ改善の余地はあるが、俺よりチャクラ量のある白眼使いがこの技を使うことでより効率的に、そしてえげつない攻撃へと変貌をとげた。

「勝者、日向ヒナタ！医療班早く！」

会場が静まり返る中、ハヤテが勝者を宣言し、医療班を手配しつつ、なぜか俺に非難の視線を浴びせる。

解せぬ。

俺の教え通り、『相手が自分と同等以上の実力を持っている時は最

初から全力を持ってこれを叩く』を実践した結果だが、次は厳しいだろうな。

会場が慌ただしくなる中、後ろからガイに左肩を掴まれた。

「全くお前は何ちゅー技を教えるんだ。それにあれは八門遁甲を使つたな」

そして反対側からカカシに肩を掴まれる。

「君はもうちよつと限度つてもんを覚えなさいな」

「待てよ。みんな揃いも揃って顔が怖いぞ」

「下忍に教えていい技じゃないでしょ」

「そうだぞ。いくら生徒が可愛いと言ってもやすやすとあんな技を教えて、甘いな弟子よ」

「なに言つてやがる。甘いのはお前らだ」

そう言つて俺は二人に向き合う。

「俺たちは忍だ。生徒たちもな。敵に殺されるくらいなら危険な技だつて教える」

「だが、もし生徒たちが暴走したらどうするんだ」

「俺の生徒が俺の意思に反して暴走すると……思うか？」

「それはないな」

納得してくれたようであり。

「だが八門遁甲を第一門とはいえ使えるとはね。どんな無茶をさせたんだ？」

「ヒナタは白眼を持っているんだ、俺が使うところをじっくり見せてあげた後、コツを教えれば使えるようになったぞ」

まあこればかりは素質の問題だけだな。自分でリミッターを外すなんて死を覚悟せざるをえない状況に追い込むか、どこか壊れている奴じゃないとできないだろう。ただ、これ以上は俺では教えることがないが。

「それにお前の生徒……りー君も使えるんだろう？昔のお前そっくりじゃないか」

「……まあな」

その時、ヒナタが2階へと上がって来た。

「ヒナタ良くやった」

「あ、ありがとうございます……」

浮かない顔をしている。ネジが心配なのだろう

「お前のことだ急所は避けたんだろ？」

「……はい。すみません。」

「いや、いいさ。さすがに身内を殺せなんてことは俺でも言わん」

そう言っって頭を撫でてやる。

「おい、シノ。なにさりげなく寄ってきてやがる」

「……お前も撫でて欲しいのか？」

「別にそういうつもりはない、何故ならば……」

「そっかまさかのツンデレかと思っただぜ」

「たまには最後まで話を聞いて欲しい」

第九試合は我愛羅対ロック・リーとなった。リーが八門遁甲を開いたものの、こちらも原作通りの結果となってしまう。再起不能に近いような怪我を負う前に止めてしまいたかったが、ガイがそれを許さなかった。

「お前はよく俺にあんなこと言えたな」

「まったくだな。だが、男にはやれねばならんことがあるんだ。俺もあいつも後悔などせん」

「わかったよ。タシには話通しておくから、早く医療室に運んでしまえ」

「……すまん、恩にきる」

そして、最終試合の第十試合は秋道チョウジ対ドス・キヌタとなったが、ヒナタとネジの試合並みに短かった。簡潔に言うなら焼肉に釣られたデブが一撃で沈んだ、以上。今までの対決に比べるとあっけなさすぎて、試合についての感想は特に浮かばなかった。

でも、ドスは改めて見ると良い能力を持っていた。応用がかなり効くし、木の葉にはいない探知タイプで戦闘もこなせそうだ。確か、大蛇丸に対して憎悪を抱いていたはずだし、我愛羅にむぎむぎ殺させる

